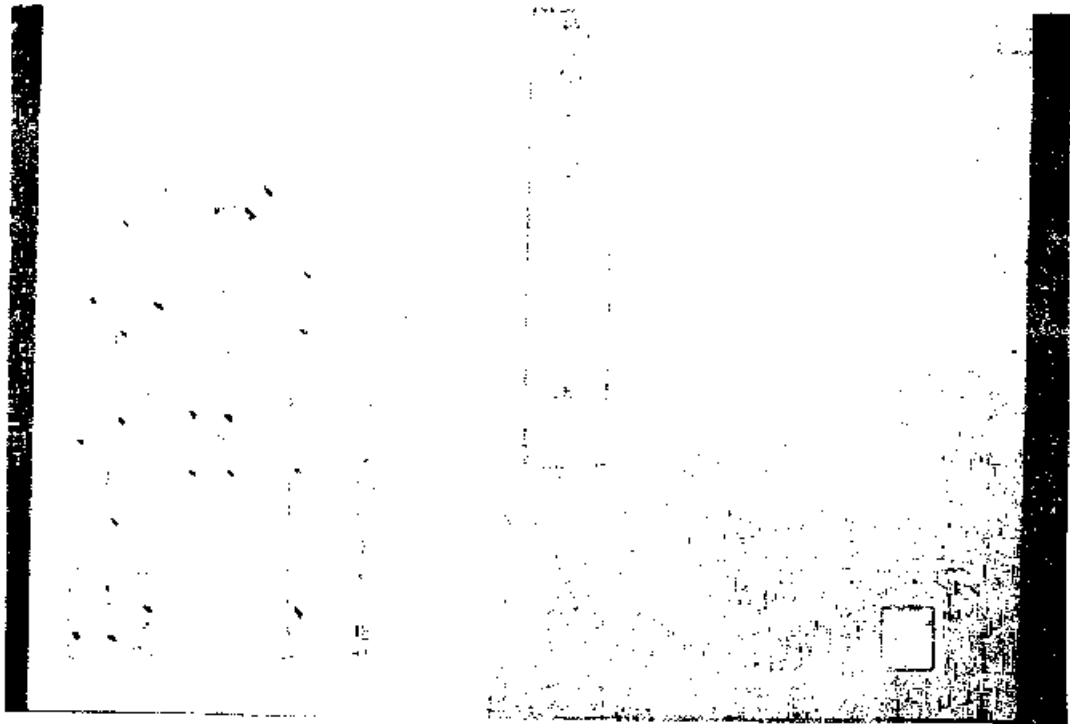


鹿兒島県史料集(Ⅻ)

管窺愚考・雲遊雜記傳

鹿兒島県史料集(Ⅵ)

管窺愚考・雲遊雜記傳



荆北無修 舉 黃明公任修理本夫

殿下躬新納水元書使陳忠三

公來麻萬丁造 黃明公理待神寓

結子公特 聖本則而任 黃明公與之

如勤公 善執公 公乃于 善無任

之公 善 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃

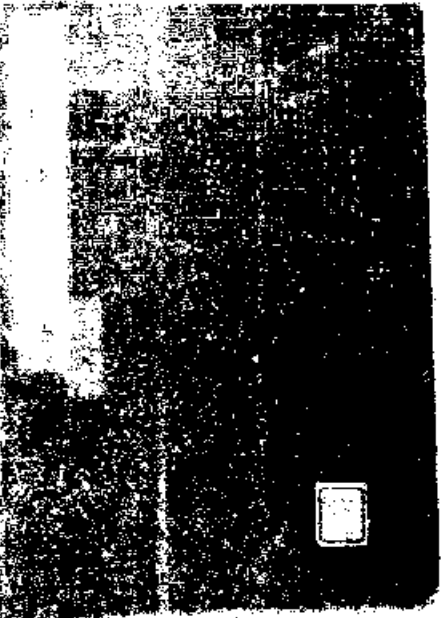
公乃 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃

公乃 公乃 公乃 公乃



## 刊行のことば

鹿児島県史料第十一集として、ここに「管領忠考・雲遊雜記伝」を刊行いたします。これにちまて、別冊を含めて第十二冊目の刊行になるわけですが、いずれも県史料刊行委員の方々の並々なうぬご努力の賜にほかなりません。

本集は、鹿児島大学教授五塚克夫先生の手によって編集、校訂・校閲が進められ、刊行のはこびになったものであります。

なお、本集の刊行にあたっては、資料の利用について御便宜を与えてくださいました鹿児島大学図書館はじめ、各位に敬意を表しますとともに、先生のお骨折りに対し、感謝の意を捧げたいと思ひます。

県史料の編集・刊行の事業は、県立図書館の重要事業の一つとして進められているもので、資料の保存ならびに研究者の利用に資しようとするものであります。また地方史研究をさかんにするための一助にもという願ひがこめられているものであります。

苦難がたのご研究に資しでもお役に立てば幸甚に存じます。

昭和四十六年三月

鹿児島県立図書館長

新納教義

解題

鹿尾島真史集題として伊地知季安の著作に代表的なもの、とくに中世關係のもの二点をえらび刊行することとした。一は管窺愚考、二は雲遊雜記である。共にその名を知られた好書ながら未刊であること、それの時を同じくして眞摯新史料編纂所の三により彼とその子季通二代にわたり苦心編纂した老大な體裁本史料「薩藩日記雜録」(追録)がいよいよ刊行される折でもありこれまたとりあげざるにふさわしいと判断したものである。

前者は天保五年稿、後者は文政九年稿である。季安は文化五年、二十七才で秩父崩れの覚悟に迫座、翌六年から八年まで島界島に疎局、九年帰郷後も十三年まで自宅謹慎の身であった。同年禁錮を許されたのちも仕途につくことはかなわず、弘化四年、六十六才に至ってようやく彼の學才が賞われ、役につくことを得たのである。雲遊雜記は管窺愚考とも四十五才、五十二才の作で不遇の間にあって悪条件を克服しつつ成稿したものである。

季安の面目の一は在野精神にあるといえる。成程彼は後年官に復し記録奉行等の通職につくが、彼が鋭意史料を蒐集し、且つ文獻を精読して精緻な考証と鋭い着想を示したのは不遇な在野期間においてであった。文獻考證の便宜をえていた藩史局者に決してまけないという自負が多く、刊約があればあるだけ季安をさらに強硬にしたともいえる。雲遊雜記伝の自序「管窺愚考の言序共に在野期間中のその刻苦精勵より奮発ぶりをうかがうに足るであろう。逆風に挫けずかえってそれがプラスに作用してゐるのは注目すべきである。しかしその間彼に支援を惜まなかつた新納伯剛、新納久仰等多くのよき理解者のいたことも忘れてはならない。

彼のこの期間中の作品六十余点は天保十四年、一語して藩命によつて提出を命ぜられ、彼の劣進は察せられざるに終るかと思われた。彼の自負の筆勢がはばかれたが故であるとする説もある。しかし彼の綿密な考証の成果は、当然みる人の目をうばわずにはおかない。藩主も世子百彬

も管窺愚考等の作品を賞賞、内々美濃紙を与えて洋書を命じたりした。彼が晩年記録奉行といふこともふさわしい役に就任したのも百彬がその力量を高く評価したからである。彼の履歷と業績については別に「鹿尾島真史集」薩藩日記雜録追録の解題「伊地知季安・季通と薩藩日記雜録」でふれ、以前にも「鹿大史学」一六号、伊地知季安「先年差山置候者込物紙御手許御用又被下付留候一件書留」でも記したので重ねてのべることをさげ、管窺愚考が百彬によつて認められるに至る事情を季安自身の日記によつて六すこととしよう。弘化三年七月から四年三月までのごく短い百彬の鹿尾島滞在期間中のことである。

(引用に際して本文には島津家口殿六を飯日長送書が書留した九州大学図書館蔵本に「つ」をとおとわりしておく。所在履歷等については御亦敷の書いた九州大学助教川添四二五に深く感謝の意を表する。)

伊地知季安

「伊地知季安」のはじめの数日分をひく。

「弘化四年丁未二月三日今日者新納家より必太右衛門殿等被參候付可參旨御使被下候間、大層比より打立參拜、中次左衛門殿所へ立寄、此中内渡後被裝成被下候先年從、中将様治宮様仕付置美濃紙迄被下置料紙三書并同管窺愚考四冊無担理申取持珍羅山候処、忠元登社御祭日之山二町新納被門殿、左外藤太右衛門殿、八郎太殿、右外藤太右衛門候へ、右之四冊者秘し置、其夜九ツ時分ニ候哉、同伴能見候節持歸り置候事、二月四日

今日四ツ後奥医師青山道策者拙宅江被參、昨夜者御本丸泊ニ而、少受様御前ニ河前候処、其方ハ伊地知か著述之鳴津御主考致一覽候哉、是ハ如何有之歟と、御尋被遊候間、彼もの撰集仕候者何篇精密ニ御座候、夫沙へ其身之為ニハ刻而告ニ、罷候候と申上候得ハ誰ぞ考候哉ニ御意御座候間、筆社殿功記之事おもひ出候ま、今宵ハ是は御誦ませ可被遊候間中上候処、夫ハ何方ニ有之哉、御尋候間、太守様御覽為被遊本女二方三御格被遊候座候申上、直ニ女中兼江中候得者、即被示上、御覽被遊、紙敷相座ニ有之候間、篤与、御覽可被遊、先如本致格謹言候得与之、御意有之、奥向之書ハ不洩御法候得、右通、御前より御沙汰被為在候上は旁伺安く御冥加之事候間、極内分爲知候与之申被中聞候て畏入次第ニ候哉云々云々即、登社之祭ニ而拙宅も被科掛、且御正考成前夜加被裝候

已後初而持帰候旨及答話候延、夫ハ幸之至何卒秘密ニ致借度、左候ハ  
ハ右次第、御意など、被為在候時分御前止來候間、是非と承候間難止  
候付、去ル寅年拙夫著述物大日附兼御覽被度差出候やう被仰付候御體  
体差出為申事候得共、此四冊ハ其時分ハ冊子方茂未仕力ニ而殘置候得共  
近比冊子方いたし了孫へ殘置合ニ而右近先度被差仕候而前宵返り至極  
之秘本候得共、右之意味御得心被成、御覽事候と堅誓候上極内公差遣  
直ニ持歸り可申候事、

臣十六日 雨

今日青山氏江取返し度參候延、今日冊紙未讀取、誠ニ感心御而一覽い  
じし度候間、何卒借置候やう無極承候ま、著述物差出候節是立之冊數  
書付留置ニ此外ハ無之向ニ酒申出候上之秘本御座候間、能く御勘弁被成  
給度、分而中達候へハ其品立之扣も借與と致候ニ付、心得にも可相成と  
留置罷候也、

同十七日 雨 同十八日

今日四ツ後道策者被參、昨日ハ磯館ニ參上候延、同も參候ニ付、御舟  
より頼東ニ御出被遊折柄ニ而女中舟江被召乗せ清川候を無度度又降出矣  
付、御掃殿有之、被為石候間、露出此臥之、御沙汰被遊候御座秘本御  
覽候、是ハ疾御覽被遊候半与申上候得ハ、否先半、白將様より委敷、御  
咄御出被遊、未、御覽不被遊候間、必見せ候やうに与之、御沙汰ゆへ直  
ニ罷下り、持出四冊を著述物呈立之江も指添差上候得者、直ニ御取御誌  
被遊、大鐘時分より夜四ツ時分まで上中式冊程御誌被遊、是ハ不容易  
取仕立ニ候、序文ニ有之候新納跡太右衛門事者当分何勤敷と被為尋候間  
先年於大坂種分精勤も為仕者御座候得共、朝倉孫十郎など同様退役、其  
後再勤ニ而當分御使番高率行動ニ御座候旨申上候得者、小十郎作者何勤  
敷と御尋被遊候間、<sup>季通</sup>宮十郎と中當分御作事方下目付相勤能仕候旨為被申  
上申、然者先年小十郎津庵陣立之一件ニ付御前江伊集院繼繼何やう不三  
候而不都合為相成山ニ而山口不及なとまで実兄松山隆阿強論ニ付致心配  
矣と御笑為被遊由、其席江御小納戸駕頭才之丞衣松殿村井東養被詰居候  
山、左候而右之四冊等、御机ニ茂不被召置、御机女中お須磨とのへ致格

護置候やうにと、御意被遊、奥へ被持入候由被相咄、症ニ冥加至極、殊  
更ニ無道も御尋被下候儀、何共難有次第恐入事ニ御座候、然共表向と格別  
相替申身振御座候間、猶又万事宜致奉願旨申置候也、

二月廿一日

今朝新孫次老へ見舞、右之密事相咄、就而者形行種子島六郎殿まで申  
置候而者可有如何哉、此方より相巧為差出向共相聞得候而者心外之至  
候と及内談候延、大之事候、弥太殿可被申入只茂安事と承り候得共、彼  
方は算本日孫次郎殿と從夫兄弟此中も雪江戸詰之事ニ付、致面談候事御  
座候旨咄候得ハ於其義者直申置可然与内談罷候、左候延九ツ過ニも御  
座候半、弥太殿私毛へ被參、只今淨光寺運歌ニ由候得者、昨十日淨光  
寺江、少將様就、御免候前、御仏讀被遊、相良甚大夫長是殿御先香ニ  
而被為承知候事承候間、為御知申度參候身之事ニ候、敢ハ、御位御機御  
拜礼被為済御座之江江被為、入候間、甚大夫殿弱出先規之通仕持可召出  
哉と申上候へハ、可差出与之、御意ニ而勿論矣者香も被罷出后候而、御  
目見被仰付、御茶并御菓子等進上被相濟、御供目付々御儀揃も宜候間、幸  
何共候やう被申出候付、甚大夫殿より御共御座候旨被申上候得者御  
御暫待候へ、其方足与、御意有之、御座申上候遊候得者、今少、御  
膝近被為為、其方ハ村地知小十郎著候鳴津庄者疾ニ候半、是ハ如  
何可有之候哉と、御尋被遊候間、成程先年一見為仕有之、彼者全縣多  
年舊居仕候ものにて日本書紀初として諸基父ハ勿論、其外詞中諸臣記系  
圖文書諸卿迄も借集、大抵ハ見解も罷在候ものニ御座候間、起筆候もの  
ハ段々事証有之、当分も博識之者多く御座候間、左様之ものは何やら可  
申哉、私昧々中々、精密と見受申やう御座候と申上候得者、其方共も左  
様可存、頭分力有之、大抵一冊誘候得者相知るものニ候、猶又可被為請  
と、御意有之由、只今連清三而相良氏より被為以、誠ニ其身の為ニ者  
御赦免日前と被申候間、道策為中通孫無疑事と被申間、重疊難有次第、  
門共恐入事ニ御座候、右ニ付今夜相良氏ハ見舞直咄承候延、何ぞ右ニ相  
替候事も無之、伴右御咄之内にて其身見立候事も有之哉と被尋候間、若  
述仕程之ものハ借証洩候而書立申儀ハ何分ニ其其臣ニ頼向を立并付候  
明白ニ御座候、又不審ニ疑候事など申置方ニ并多付候類ハ彼者ニ限ら

す、撰者多くは其進御座候旨為秘申上申、或程と、御意御座候旨、何分ニ成色と与差障多きものにて当分も至極相候、余程の用事等無之候得ハ世間も不仕と為申上段、細々承候間、今朝亦太老へ申談候六郎殿迄申置申も及内談候処、随分可枝宜と被仰候へ、娘方へ四ツ過る參候而、宿候也、

同廿二日

今朝六田孫九郎同伴にて種子嶋家江參、六郎殿回公候處、孫九郎殿下付之内隨分油断ハ不致との事共細と被仰候、就夫些盛事午恐申上度事御座候旨申上候得者、中之間へ被為呼候付、右の形行駕与申上、誠ニ疑有儀ハ無申迄茂事候得共、何分ニ表表向之身振ニ不相当之事候而別而恐惶之至御座候間、万々御天都合無之やう奉頼上旨申候へハ少も不及御懸念ニ別而御勤弁被為在候御方と候間、委細承置と之、以詞御座候、

同十四日 唐

今日道後老被參、昨廿三日、大中様江參詣、門外迄相候折、磯御年寄御側女中達船々參詣之由ニ而行進候ま、方丈江元人成行爲知候へハ生持出現、彼是都合宜敷被罷居、道ニ共船より元被參ニ言被誘候ゆへ罷出候處、即被為台候付、拜謁被仕候得者、先日甚太夫ニ茂御尋被遊候得者随分宜敷と為申与之、御意被為在、左候而右之内重而御言付御尋可被為在、台記・百練抄・玉海など申旧記ハはや、御子ニ被為人御座候事とも御意ニ而往ハ御見さ可被遊、古今歌ハ誰人之為言もの敷と被為尋候山など被馳候間、古今歌ハ大嶋山羽守忠泰書置、原本ハ子孫盛太夫方ニ御座候旨申置候、今日老愛石録日に候間、如石流父ニ被參法被有之、青口ハ被相候、

三月五日 晚小雨

今日八幡花火有之段、箱四郎同伴黒田氏ニ參候、道後も夕霧江被為石、於御前拜見為被仰付申、其節も御正考中志、御持出、得佛公御蓮生之件ニ東鑑・武家系圖・酒与安國寺山伏・山田聖來自記、其外之引言有之、比企尼等之事ハ何に出候哉可相尋旨為被仰付申、今夕花火見とし、児玉家姉さまお榮哉・本井仲右衛門殿家内・上原輪省老等被參、拙夫老人ハ泊候也、

同六日

今般舟也、

同七日 夜雨風雷雨

今日平八妻おいつとの同伴、岩山氏へ參候得共、今和泉老君御難症ニ付、玄伯留王にて御子一齊へ頼候て奉被置候也、

同八日 漸露

今日九ツ半過、太守様御若城、少將様ニ度前以上り磯々被為、入御機嫌能四方山之御對話被為在、松壽院様・山城様・躰正様御登城、今夕拙大早泊ニ而大遅より出勤、夜入前山城様などハ御下見ニ而、少將様ハ六ツ退如儀、御出被遊候也、

三月九日

今日、番手小番江代合焼宅、岡泊川上九戸殿、後醍醐宮兵衛殿也、今日道策老被參、去ル五日磯花火ニ付被為、出前文御尋之事御坐候得共、御下問取込不得達候而昨日ハ、御若城ニ付罷出候處、御都合を以、少將様些被為下、先日之一条者尋候被被蒙、御沙汰候間、余取込未致思不將仕笑言御断申上候得者、早く尋候得と又、御意被為在候付、何卒写具との事承候ま、求進へ有之事ニ候旨申置候、

同十日

今日左の道三付可山氏迄遊也、

東鑑治承五年 五月 十月十七日

菅中云々此企内郎能員為御母夫奉御願物、此事難有若干御家人員員成母

手比、当初為武衛乳母而承元年御遠行于豆州之持存志御余以武藏國比企那為請所相只天掃部允下向至治承四年秋廿仁之間奉訪相世途、当于御繁榮之期於事就被御被奉公、件尼以想藝員為猶ニ依奉申如比云云、

本朝武家系圖諸氏部

遠宗

比企掃部允

頼朝卿御互相座時朝夕進セシ人也、



能員

比企藤四郎新判官

北条時政殺能員

朝宗

比企藤内

女房者御台所ノ召遣越後局

時員

比企弥四郎与一兵衛尉

宗員

比企四郎

女子

箕原十郎左二門親重妻

女子

中山五郎為重妻

女子

槽臣藤太兵衛有妻

女子

頼家将軍若狭局一幡君之母也、

右の通東鑑にありて掃部允遠宗が系伝にも頼朝公伊豆におはしましける時き朝夕を造りせし人と云へれハをも、掃部允が妻をの以前、頼朝公の御乳母にて永曆元年、頼朝公伊豆に相違行の時き忠節を存るの余り武蔵の比企郡を水損下損の差別なく年致の當村は納むへまとの體合邊所にして夫掃部允を相具し彼方に下向し居て治承四年の秋まで廿年の間夫婦の働きをもて朝夕を造らせけるに、頼朝公も御成長まし、つる鎌倉を頼りかせ給ひけり、然あるに其ころハ掃部允もはや物故にて其妻は比企尼と号らへ居たるともゆ、頼朝公をそれ不便にや思召しけん、むかし彼等廿年の間朝夕に奉公せし事とも忠節をハ酬はれんか為め彼尼の縁義員を召出され、尼の孫子と仰付られしと見得たり、左あるに、よて同五年頼朝公の御台所、皆公を御産所にまませられ、その十月十七日はしめて

御管中に 若公と出給へる時き尼の吉例にや猶子能員が妻をまた 若公の御乳母に登け申さるかゆへ能員は其夫なれハ御家人多き中にて特にわけて遺上まで仰付られし事をバ右やう載せられつらんと愚考の恐れも深けれと博古の人にも訂たきばかりにかき置たり、

右の外東鑑に、得伝公の能員縁と申御事はあれとも比企系図などに丹後局を渡しぬれハ何の御属とも知れかたし、さるれと御國にて世に行はる、御系図またハ取原日記御当家山家山家などは能員縁とあり、然はあれどまた聖業の能員縁とかけるもあり、本来に或は能員を局の弟と書もあり、又安重寺戸次・古今殿などは能員の弟ともへ孰か誤るハ疑なしさありて能員は掃部允の直子にあらず、其妻比企尼の既にて嫡母の猶子と為りたること右やう東鑑に事証あれハ大かた丹後局も比企尼の女にて父母に随ひ廿年ばかり豆州に奉公し居て幸を得給ふならん、さあれハ能員の養妹なるへきを御國の旧記は養の字を失ひ只妹とのみ伝きつらん、かにかく縣鳥にて、得伝公を孕ませるに應て比企尼夫婦の事と考考すれハ俱に欠しく奉公せられての事ならんと考當る事ともなり、

右の事近年一切禁絶在候へ共極、内分任御忌如此御座候、御一覽即御火中可被下候、以上、  
右之通東鑑者へ遣置候也、  
同十三日 晴

今日四ツ前より道策者被參、昨日磯へ罷上り御都合を以右為被遣置取鑑之被書等、御旨ニ奉備、高野候処、篤与、御覽被遣、養妹に候半との説尤成考と別而御機難能御都合にて此中被差上臣候者述物之品立書付も御、け被遊候由、其被小十郎俣不相齊教奇ニ而心持難在ものニ御座候間美濃紙式三束も御覽被置候ハ、此品立之内書取させ差上申筋に取計可仕向ニ被申上候向、然者、御意ニ其儀者御生之候村へ可被付付置、少將様御立後女中立之場分相被可然向、御沙汰被差在候与之趣被以懸入懸有次第御座候、品立之留書并無存掛成候、御内意被為濟日數計四五日茂御前江被留置候を昨夕被相下候止にて今日拜受仕候、尤先年、中將様為被成下美濃紙へ淨写為仕前件ニ茂申置候願者四冊者比節御持せ登之書ニ御座候田職に作志、御遺託之一箇頓与今被無存掛成都合ニ而、少

將様御用ニ相成木望之至御座候、謁所大夫も去ノ八日御下着工前後ハ不相知御咄合候為在候哉、笑在御門など、あしくハ不申と、御意御座候由も被相成、重層難有仕奉事候、

同十四日

少将様今日ハ八ツ前迄、御本丸江、御帰殿大蓮池磯之邊、御歸り被遊候由、高十郎軍共十一日園分内村江内藏様御家内御湯治見舞ニ罷越夕方御同様御宅候調、直ニ列立新納家へ參候、四ツ時分歸候也、

同十五日

今日六ツ半御供捕ニ而罷留より、少将様御踏籠、御馬口計ニテ五ツ時如御本丸、御帰殿四ツ時御立被遊候山拙者軍大橋へ罷出參拜候、四ツ後も素摘なり、

同十八日

今日道策老儀へ被罷出候得者、御年寄河村殿共外女中達去ル十四日ハ決而道策可參善と、少将様御持被遊候へとも御参り不被成、晩迄、御本丸より、御滞り被遊候而道策今日ハ御殿ニ其隙時ニ被爲見候而道策候半と、御意被爲在候由、右ニ付被仰付置候美濃紙三束被相渡候付、被迄まで持歸り被置候間取に遣候やう被申間、難有承知之仕、即下人太郎召列、青山家へ差遣、直ニ致取候儀、元高十郎江寫方爲致追々差上管ニ候、種々御内密之事也、若誠寛水車敷なる冊数多候而及不足候ハ、又可被召下ケ与之事ニ御座候よし、是ニ有難仕合御座候、

同日

今七ツ後儀永去へ見舞候也、此間ハ一刻罷出度申存、去ル十四日ハ不揃揃ニ而不能其儀候記ハ十三日、少将様御附御小姓若上止太郎殿候旨として被參、称名盛志と忠元殿功拜家防人概被相返候由、忠元殿功云々ハ大奥女中方へ御格被之本を於御上御座候方被仰付、御持登り被遊候付、此本ハ先被相返与之申ニ御座候由、其席に伊地知殿御名前に罷御聞取被爲入、御意ニ茂油断ハなる御調ニ被珍敷もの罷在と御意被御座候向ニ右御小姓被申与之物由孫四郎殿へ被相成候由、誠ニ難有懸入欲御座候、夫より娘も所又ハ新納家などへ見舞掃老儀得者、留止江道策老儀參、今日者儀之御使女白長外御新納御年寄河村殿など明廿三日山立ニ付眼

乞として参拜被仕、元日御下ケ被成候美濃紙御写物出来次第老儀やう可仕管に口合置為申との趣拙者へ中蔵與与高十郎へ為被申置殿致伝承候事、

以てその面目をうかがうに足るう。

さて次に公史料に載録した玉皇文庫六を口紙紙紹介しておこう。

### 管 籍 考

管籍愚考は一名島津御世考といひ、島津氏の名のおとりとなつた島津莊の由来と初代忠久の一代記を中心にして種々史料をあけて考証したもので上中下三冊の外典史料を列挙した附録一冊とからなる。諸本の中、旧島津家袖ヶ崎文庫蔵本（現東京大学史料編纂所蔵本）が自筆本である。同本は表紙にそれぞれ管籍愚考卷之上・中・下と銘稱とあり、奥書には

それぞれ一冊御於天保壬辰十月、脱稿乎癸卯三月二十日、共四冊、伊地知家藏一冊、起則於天保壬辰之冬、脱稿乎癸卯三月廿一日、共四冊、伊地知家藏一冊、共四冊、伊地知氏藏」とある。是立御世考本は一冊に合冊

されでいるが内容は余く島津本と等しい。「鹿兒島県庁蔵」の用紙を居

い「鹿兒島県庁蔵之口」が押捺してあり、県庁正統本であることは明

るが、明治初年島津本（自筆本）を善写したものであるが、（島津本は

書入、張紙が多く季安の治辞の際の注意指示等も少なくない。県本は

それらがそれによつて文中に挿入された後の形をしめしている。玉皇文

庫本（旧島津家米蔵本、現鹿兒島大学図書蔵本）は同じく上・中・下

・附録の四冊からなるが、内容は島津本とかなりの相違がある。別に京

大史料編纂所々蔵「口典類聚」十七に管籍愚考上下があるがその内容は

玉皇本と同じである。（純仁文であること、天皇の代敷の省略筆形式而

で若干の相違あり）これは末尾に「御瀆字三頁藤金作写 一級与字生

小野権之丞校」とあり、また「修史局印」があるから、玉皇本またはそ

れと同種の本が明治初年善写したものであろう。そして同本及び玉皇

本の天尾の附録の綴のはじめに「此は、洋書せぬ人の文なれども、英

覽に備奉りし稿にも載たれば、本の如く置くなり」とあり、県本にこ

の文を欠いているから県本一島津本一英覽に備奉りし稿本で、別に尋

常

常

常

常

常

常

常

常

常

書本Ⅱ玉里本Ⅱ旧典類聚本ということになる。前引の日記等からみて前者が香彬らの閲覧した本で後者がその後補訂浄書し繰出した本といえよう。玉里本の成立は明らかでないが、至るところに註を加え句読点を付し精語の名残りをとどめているそれは明らかに島津久光の筆であり、雅号「玩古道人」の称を用いているところから加筆に關していえば明治以降のものといえよう。ただ玉里本そのものの筆写はいつか不明で、第二次自筆本が他にあってそれを写したものが、或は提出本そのものなのか明らかでない。内容の比較検討、玉里本の筆蹟検討等による今後の究明を待ちたい。今回刊行に際しては種々の都合によりこの第二次原本に近いと考えられる玉里本によることとし、第一次原本たる島津本については玉里本ととくに相違点の多い巻三、附録等の中、一部を末尾に掲げて比較の便をはかるに止めた。なお各巻々首の撰者名は島津本では「薩府 藩廳 平季安」、玉里本では「薩府 伊地知季安」と変化しており成立年代の前後を示している。

#### 雲遊雜記伝

雲遊雜記伝は文明六年口前・大隅・薩摩三州を行脚した他阿僧が見聞した三州の領主名を一家衆、國衆、内衆の如く分類して書上げた史料(季安の「旧記觀苑」に「文明中行脚僧雜記」、「文明六年三州家衆記」とあり)是八月行脚シテ聞ソル歴々ヲ記モノト見ユ、河野郷右衛門知覽ノ古寺ニテ見出ト云、元禄初ノコト」として記されているが、序文にもあるように旧来の名稱はなかつたのである。(に)に校訂を加え、詳細な註記を施したものである。管編愚考と同じく天保十四行一括括記に提出している。末尾の記載でも明らかのように上・中二冊で止まり、國衆の終り土持の前までで筆は擱かれている。ついに完結をみなかつたことは惜しまれるが、二冊分の考証でも史料価値は高い。島津忠昌が三州守護就任の時期であり、これから三州諸家衆の連合離反が活発になり、やがて島津氏の三州統一が窺えようという頃の各地方所左の家衆の系譜を承知しえよう。玉里文庫本は上・中二冊共題簽は季安自筆かと思われ、浄書提出の原本かと推測される。

(五) 味 克 夫

#### 例

#### 言

- 一、本史料集には鹿児島大学図書館所蔵、玉里文庫本(イ)管編愚考並びに(ロ)雲遊雜記伝を載録した。
- 二、(イ)については鹿児島県立図書館本との主たる相違箇所を同本によって末尾に記した。
- 三、底本に本来句読点はなく送り仮名があるが、便宜上前者を付し、後者を省略した。但し(ロ)については原則として島津久光の付した諸点をそのまま付し特に支障のない限り誤謬と思われるものも訂正しなかつた。(イ)については私見によって付した。
- 四、頭註はすべて、傍註は適宜、番号を付して後に一括記載した。
- 五、誤字と思われるものについては若干正字に改めたものがあるが、当字・俗字はつとめてそのままの形に止め、一々正字に訂正はしなかつた。
- 六、印刷の都合上、漢字については当用漢字に改めたものが少なくない。又変体仮名もすべて通用名の平仮名に改めた。花押も省略せざるをえなかつた。
- 七、誤謬、欠脱等については右傍に括弧を以て私見を記し、不明箇所は□、難読箇所は■を以てあらわし、或は右傍に(ママ)の如く記載した。
- 八、消字については左に傍線を記し、右傍に訂正の字句を記した。
- 九、朱字は括弧「」で示した。
- 一〇、本史料の作成に当り鹿児島大学図書館の他、東京大学史料編纂所、鹿児島県立図書館、鹿児島県立総合資料館等から閲覧調査の便宜をあたえられた。記して謝意を表す。
- 一一、本史料の編集、校訂を担当したのは鹿児島大学五味克夫である。

管  
窺  
愚  
考  
上

# 管窺愚考 上

## 管窺愚考叙

於乎赫矣我島津氏之隆盛也 維昔

皇家分支子、以十歲

(親力)

王室、錫以源姓、子孫繁殖、威嚴以張、以禦却寇賊、社稷、哉武之德也  
維德累積、爰暨錄台、霸業大成、以行令天下、於是聯合學子為宗藩、封  
以薩州日三州、稱之島津氏、是綏

高祖得仙公所創業也、爾來六百有餘歲、賢主相繼、封疆益大、武威仁德  
昭々突々者、天下何人不仰焉、而其稱序之權輿、固有由矣、雖然秘府之  
書、因機所係、苟非其人、不得與觀焉、流俗之云、誕妄附會、二偽無弁  
焉、是以若宿儒荒井氏、猶妄意疑回系、其涉虛譜之撰、頑弘無稽之說、  
水府之日本史亦爾、是則史家所病、而今有子靜氏者出、大闢先世幽思之  
說、以為柔哲之正議、豈不愉快乎、蓋子靜於學、亡論精熟因博、而史學  
其所最長、是以我  
國家紀載典籍、無不攷究焉、苟僅其愚微晦沒者、深者遠矣、不究其原不  
指也、故所撰述、議論弁駁、先竟夫免之說、悉論定焉、讀者無問然、俾

矣業也、近為肝屬氏探家譜、其搜索探討之際、適得島津之稱所首基、隨  
而研究之、

高祖施國、國姓之所起、大得其說、不習於疑之疑、雖然子靜以往年坐事  
禁錮、今雖禁錮、猶畏其言、不欲顯然論次之、附之肝氏譜中、以其曰  
日之考索、余之宗家久仰贊、有好古之癖、每子靜善、是以得其稿、與余  
校審之、余慨然告子靜曰、夫名者實之資也、是以孔子欲正之、況我  
國家、赫々威嚴、衆民所具胆、而其稱呼之原由、儼然無弁知焉可耶、  
而此書一出、衆首始披、瞭然見其明、與千古之一大快、宜公之于世、  
以備國史之考據也、而沒之肝氏譜中、豈不惜乎、且夫肝氏、雖古之名家  
也、其先割與封域、抗衡于國家者、非一世也屬之其譜中、以見其志、雖  
出了之謙讓也

先公之靈、恐有所不安焉、奈之何其忍為之、子靜雖然曰、噫吾豈不之思  
一耳獲罪於

國家、畏敬懷伏、尚恐加其罪責、惟吾癖性之所得、積年考索之勞、纏混  
滅之故紙中、是以託之肝譜中、以欲與一二同志所尋耳矣、而公然擬錄於  
大史、不顧忌憚者、非吾志也、而何為行之于世、以累吾余罪乎、余雖然  
曰、至矣哉、子之恭謹也、吾豈問然于此、雖然、物不得而全者、舍其小  
者輕者、從其大者重者、所謂春秋者、天子之事進、孔子公得振三、蓋前  
之不以為濶濶也、史記者、万世之龜鑑也、司馬子長以刀劍之余、纂輯之  
不以為不恭也、今子獲罪於

國家、固連累之余波、非存情錄所重也、深憐已施、  
國家之優待亦可知也、而懷匹天之小諒、以應万世之火業、恐非志士之所  
為歟、而此撰也、雖以子之談博、躬親官途、事屬紛擾、豈得成此大業、  
或則

先公之靈、欲光其赫々之威嚴、續之來世、託之禁錮幽謫之士、以成其業、  
亦不可知也、何必區區秘之、埋沒  
國家之盛事、子靜猶不肯、然聊錄其考、名管窺愚考、以蔽巾箱、供同志  
之披覽、余再謀之久此若、殆索其說、以公于世、庶有志於國史者、佞之  
以為信文獻可以足徵耳矣、恭惟我  
日東姑舍焉、夫國家之大國焉、晉處於三卿、魯衛雖存、困於則

小、其宮治革盛衰、孰若我  
謝家明感無疆、易曰、自天祐之、吉無不利、我  
國家之謂也、而其基本得此書、以昭々乎末世者、子靜之功、其何如哉、  
於是書之為端、子靜、伊地知氏、名季安、字廷好學、曾自愛焚削、不出  
一室、隣里無知其間、其為人可知耳矣、  
天保甲午春三月、清水新納時升出剛撰

管窺隱考序

大聖王雖明、傳采撷其、故其得在明矣、若良史之於筆削、亦其如斯乎、  
竊問、我 曆史乘、多致滲透簡弱策、馳騁古今、探豹素野、雖所遺漏、  
龍彬彬成其文焉、而藏祕府、自非史職、不得遍讀之也、是以學士大夫、  
生長乎 齋、識稱精博、亦於藩史、則寥寥乎口焉已、故如荒井氏、心  
拘非毀、猥擬我史、義難淺近、猶於弁斥、苟齒十列者、孰能遺漏焉乎、  
余性頗迂、好讀書、年二十七、被坐半席、而絕世交、省愆內訟者、二  
十六年于茲矣、其益就閑也、雅愛古編、凡於所問、苟有路假、極力搜求  
俾歸殺青、以移帳中、時與之娛、以忘其憂、然世人或問余如曩以  
為余能言古事、動叩茅廬、請為講乘、余雖非其人、僻質坐因亦以底言聞  
識、未嘗不為之踞蹠材也、其諸稱而家史裁者、太率致十百篇、五倍於氏  
譜、主人頗寬、屢給紙筆、所獲群籍、亦至曝示、於是乎、所嘗疑者、渙  
然冰釋、怡然通順、則有合於膠漆、如島津御在所以稱與之類、是也、乃  
料撰述、註之伴譜、以新新納久仰君、實諸其族人伯剛、及相良翁等、  
管居史、伯剛精學、皆時名士也、翁稱之、伯剛亦左袒焉、乃為之評云  
引証正備、議論精實、古人備考亦所未至、悉究明之、其 國史第一之考  
証、亦亦庶諸祕府、必為來世之按製焉、而今只乎伴氏譜、雖本因撰其譜  
所得說也、  
國姓之所由來、不可沒他家譜中、況伴氏世之禮  
國家、而以此大公論、具其譜中、似遺憾焉、今如其有伴氏者、存而可

也、其體之、別撰島津考一篇、供國史之備考、如何、余對之曰、如  
下評、則我藩自古史官存焉、而實語余、余遺廢感、妻饑之寒、情不忍  
棄、為人操譜、聊有所見、故註詞籍、以俟後來有太史氏幸顧而正焉、  
願分所宜也、若細考之、雖著短篇、非能所舉、豈敢當乎、伯剛曰、匪則  
然矣、子不聞乎、若夫遷史、逢難敘述、今子潛思、既有所見、而然於胸  
不畢其說、恨子所見、復徒沈沒、卒無集太史氏、久仰君亦勸曰、公族嘗  
行、辱緒勞商、而隱乎

素國所由出、則於心未安、願子詳述、吾等之幸也、於是乎、季安不能回  
辭、乃忘艱管、遂探帳中、研核衆說、粗叙異同、起於王辰十月、脫稿  
於癸巳三月、分為三卷、但詳御在、述之詳略、必有附涉於

大祖事、而妄致吾嘆、以資紀信、寔有忌諱、雖所恐、雖難為說、不得  
已而敢及之、不說則已、說又思辨、故編年月、以分遠近、聚之遺事、述  
融際見、姑備遺忘、不以授火、則有待乎清就博識、更非愚感而已、恐世  
之君子、不解愚意、而謂季安有易藩之口說、故諸秘本所撰記者、別為  
一卷、亦能其後、然於題名、不敢竊借曰島津莊考、題曰管窺隱考、是無  
伯矣、本章奔陷器、雜取什一於什佰故也、抑藩之史乘、深藏祕府、非季  
安幸在時、而所得編、則不知其說合管完念、何足以塞君等責、庶幾幸  
邇來世不致芻蕘、卒有采益明焉、  
天保四年癸巳四月穀旦

本府 伊地知季安子靜謹序

管窺隱考卷之上

隱府 伊地知季安 謹撰

本藩公案、世以島津為因姓、蓋島津者、故日向地名、而自上古、謂之島  
津御在、則方壽中、平季基、自謂其所繫而、為字治、  
而嗣

伊勢宮、以準其神領故也、  
白上卷元年、迄天  
保四年、八百十年、按實白問答、凡莊區昔私邑

而今俗所謂知行所也、故稅欲薄而無其於國衙、是以、日隅薩之俗暴而伯者、皆殿耕於數下之君、地從耕長、匪官蜜食乎我三州、延及七道、其流弊、則遂至隆寬德、遺書國務、於是

一、後三帝立、延久元年、詔正券契、禁新立莊、然如舊、俗尚開墾立券特著、而非制限、以促六世、至延通公時、殆并三州、當是時也、天下兵權多歸

右宰相、賴朝、乃以我

得公為御莊總地頭、下文御莊、為薩州日之總稱、故追

公就封於島津、遂以氏焉、治在後章、原大薩摩百三州、其在神世、謂之建日別、或曰熊鷹國、或省熊子、惟曰鷹國、則

一、景行前十二年、書熊鷹國、或書鷹國、古事記、書熊鷹國、造木紀、書作人同打初小、初小亦鷹、蓋皆此也、然謂熊鷹、語說不同、神代紀

敘、為薩摩國、神皇正統記、為日向國、大八州圖說、而分其地、熊鷹薩摩、熊鷹大隅、而本居氏、則日向向半日向許地、併之薩摩、總為熊鷹

而日半地、時最肥云、於是乎併之熊鷹及與子、以為國曰、古事記所謂筑紫嶋有而四云、是也、於薩摩國、恐非、曰辺幅広、所自古俗亦有異同耳

十七年、今日始有

帝幸三湯、今日始有相地形勢、有向於日語、始得日向名、明年、帝幸次

人火谷口火酒、而

一、成務帝時、詔定因那、然如變及因薩、尚諱日向、則神代卷、言日向

今隴州有那多阿、隴州有那多阿

亦薩州郡名也、之類可併知也、又火開降命六世孫曰薩摩若、據考

亦有其族名也、之類可併知也、又火開降命六世孫曰薩摩若、據考

事見姓云錄、所謂同多御手、阿多事人、大有事人、日下部等、其屬類

此、

一、應神帝時、以豐兩別之三世孫老男、為日向皇造、時薩摩等、流猶屬

焉、本紀、又

三、允恭帝時、清原田部等來薩摩國、伐事人以平之、尾姓氏錄、掘此、

當時薩摩、雖似建國、恐追書誤、御三州人、強猛勇悍、依神古雲、執弓

獵山、垂輪釣海、其疾如飛、其猛如熊、因稱建日別、或稱事人國、

或世為貴、稱熊鷹國、或土記所謂、日向、大隅、薩摩、俗皆事人、猛烈

如軍云、是也、或曰、後世為言云、又其製字、和紀註、則為山熊鷹重之義、

凡三州地、層層疊疊、迹繞斷絕、竟有難於其調者、則亦相連焉、其稱

薩摩、按冠辭考等云、薩之為言、幸也、訓曰倭伎、或曰佐知、而倭與知

則積音通、且知與部、亦五音通、則安房屋上記有之、漁獵之幸、自鳥

萬獲所謂、薩摩、薩人、薩弓、薩矢、義與此同、又白尾氏云、摩之為言

鹿也、訓曰志麻、約志為摩、例最不少、故概立鳥、謂之薩摩、本出乎神

代山幸海幸之述、此說得之、其下總國有郡名搜摩、後稱搜麻、書格

馬例、見國略、而我藩、中古猶言薩州方薩摩郡、或薩州任人處景、

身入來薩摩、為保、之類、是也、今按書、海中名山可成止日島、又水

中可居日洲、後謂並為志麻、故神代卷者、曰洲者古事記多作鳴字、則約

辨為摩、可亦謂也、於是乎、今尚名地名薩摩山、在薩

空口語、在布、薩摩渡、在布、等、皆非由水口、並由搜摩、以得其名、南島人、

今謂村落曰島、亦可類知也、又或說云、熊鷹、事人之世稱、而美非國名、

未是國時、假為國名、故德方城、稱如州名、則

一、孝德帝時、道有乘率大隅阿多事人等、搜察秦族、亦見姓氏錄、或

一、安閑帝紀二年、五月、五月、書置河野國祖殖屯食、或

一、天武帝紀、書大隅事人与阿多事人、相接於、朝延、或

一、持統帝紀、書高陽事人大隅阿多事人等三百二十七人有差、或達沙門

於大隅与河多、以信仙教之類、其並稱大隅阿多、今猶並稱大隅薩摩、

可併稱也、然當時其所謂薩摩、大隅、河多等、尚未建國、皆隸日向、何

以証之、

一、文武帝紀、大正二年四月、書筑紫七司、掘是以數令九築、則二國不

足、可以知焉、然按統紀、是歲薩摩多檣叛、朝廷乃發兵征討、八月丙申、

遂校口置吏、前此、薩摩多微等、尚日向國都、而無國司、地不非他、勤  
逆 朝化、以故、國吏於薩摩與多微、須率歸家以領國、而其緣成則送  
成刃卒、而噶更此也、噶更字、本出史漢語、蓋以諸斯、而噶更因而等、  
乃有所議、請細要險、管我以成焉、於是、十月丁酉、詔許之、其意或成  
則則唱更事耳、所謂國司亦前此、丁酉至丙申、 而後八年、元朝一、  
香薩摩多微西國司、即即是也、但就紀註於其唱更司等下、為今薩摩國、  
然拾芥抄改名部、則魏兵許、遂以唱更為薩摩之名、近木居氏亦從之、且  
演歌曰、噶薩摩人、一更、番直、朝廷、史記正義所謂、唱更與此同、  
則錄事人亦換唱更、我亡屈氏亦從其說、與善其事、本作日佐、仁德帝時、改  
日佐為官云、此所謂唱更、登司誤誤、其備舉類、又職員令華人曰噶摩司、華人本  
日人、而本云云、又神代一帶、華人等、至今不離、今季安、越國司等所請言、  
舉官職之榜、代狀而奉事者云、其奈狀音、語延等式、今季安、越國司等所請言、  
以推其義、蓋唱更庚卒、及國司等、上言所請薩、所謂唱更、恐非國司而  
後改為薩摩也、則魏朝二年、唐薩摩多微回國司、則如國司、以薩摩為其名  
者、似有昭証矣、但其定之、越新巨宮澤國、昔三州同名日向、或記、和  
銅元年立薩摩、云、則在乎大宝三年置吏以後、迄和銅二年、貞和 之間若明  
矣、而所謂或記云、亦有所來、可以知也、自其、河多誠薩摩為郡名、而大  
隅尚歸日向、亦為郡名、何以知之、則和銅六年、對日向國行坏、贈於、大  
隅、給權四郡、給置大隅、而後四坏、靈龜二年、吉薩摩大隅二國、又經  
七年、養老七年、書日向大隅薩摩三國之類、足其明証也、後三十四年、孝  
元年、尚言西海道七國、則非九州之類、豈有為而言耳、又多嶺國、自大宝  
二年、後百二十余年、至天長元年十月丙子、存類大隅國、詳見文抄及後紀、其為  
地也、同體靈氣、自神占時、所謂瘡穴空國、言不汚地、觀、仲哀帝八、而  
田野未闢、如隳薩民、建國以來、未曾班口、其所有田、悉是墾田、相承  
為佃、不願改動、乃入宰府奏於、朝廷、若從班授、恐多阻訴、隨口不動  
各令自便焉、事見

聖武帝紀天平二年、三月

後二十六年、大隅浮浪九百三十余人、雄略

大隅阿多事人等、蓋詔、薄於西氏、一萬八千六百七人、遂養在蘇我、以  
納朝貢、事見姓氏錄、則今桑原郡、蓋于斯始、可此之浮浪、亦其類也、請建楚刈

村以為郡家、有、詔許之、見

聖武帝紀天平勝寧七年、五月 其後又四十六年、收大隅薩摩兩國百

姓鑿田、以授口分、見

聖武帝紀延曆十九年、十一月 其稍歸地、以養郡邑、如此類也、自

是後、剩百廿七、為延長五年、

聖武帝紀延曆十九年、十一月 其稍歸地、以養郡邑、如此類也、自

定製黑於大隅薩摩日向等、而於日向、則曰夏井、日向、美禰、去

飛、兒湯、當磨、玉滋、麻救、武重、柳口、雲州候、野後、夷守、真祈、

水侯、鴨津、各五疋之類、此也、所謂鴨津、見乎古書、蓋于斯始、自延

年、延喜成、而後天、歲次、

保四年、九百七年也、而後五年、為乃七年、丙寅、

辭、後一條帝年曾也、追至其時、尚會會天、之風、若夫水侯、鴨津、

亦多荒蕪、而未及為人、於是之時、宇治日白頰通公、拱政下

帝、而時之政統、無事經議、由由此公、威權振、則野收屯、謂宇治殿

或呼一所、凡百官制、則、事、事、見、事、

統古事等、凡大臣以下、諸公卿、參議、 則多所給官、而各請任之、如大

宰大少監、亦此也、事見原抄、子時有姓平、名曰季基者、乃為大監、

居任於宰府、延曆二十五年五月、賜加太宰府、 因稱平大監、蓋賴通公所請而

任焉、

按大系國、賴通公、則御堂道長公時、而近衛基道公之六世祖也、寬仁元

年三月、撰政、三年三月、開白、後此八年、為乃壽三年、而道長、覺

于乃壽四年、歷事 一條 三条 後一條三朝、(5) 權柄內外、政在父子兄弟

之間者三十余年、子房繁多、榮貴最盛、公卿六人、女子立后者三人、

其餘為妃嬪、遂至相家不斷、宮嬪亦與齊門、著、 榮華富貴四十卷、使

識者如目見其富貴也、而道長病後、賴通相繼專權、治曆二年、請、後

冷泉帝、平宇治並等、賴通年既七十、橋山莊于此地、世稱宇治開白、

朝政無大小、取決于此、亦見國史略、則處原氏所世、島津御莊官等



上流所謂字治朝白家、當此公者胡矣、

而如三州、則幸府所管領也、白河府都督大五、於延平、万壽中、季基及

其弟平判官良宗等、巡警力、而括原野、各相七地所宜、季基

乃拓碑於日之三保、得鑿田若干頃、而鑿館於其地、耳今梅北、邑、而日

之、良宗亦開流於隅之始良、亦自家焉、既而季基乃以其所開鑿田、皆請

賴運公、受之奉契、永為其莊園、王國家多自開鑿事、見、於是、以下置莊園

於島津、蓋乃使官山氏祖等、悉心別當、掌其莊園、記見、因謂其莊曰島津

莊、其在島津、則置字、蓋已記得、因古系、

恩管抄、統古事、大系因、國史略、

按建久八年、日向國圖白長、則延壽式所謂、其新、水保、島津等、能

置野舍、皆各地名、而並在諸原野、則曰三保、元七百町、嶋津院二百町、

長院三百廿町之類、此也、長升、疑今為村、在柏杵郡、川邊未詳、

或在隨後、疑蓋秀雲、刈田、在宮崎郡、因田帳、作如江田八十町、美

禰、今在土原領、有口美禰菓師者、云飛、疑今去川、在諸原野、高田郡、

蓋皆地名也、見島津、郡名、當島津、疑今去方、在兒湯郡、為二町云、

田室一說上關二字、因田帳、疑今去吉田三十町者、疑今之、教殊亦

同郡、戰後野八十町者、疑元之、教武、諸原野、教武二鄉百六十町、教二

院九十町者、亦似之、垂柳、疑今教武、然雲州、則柳字下四兩一

字、故又一說、疑垂字連下式字、以為式、因田帳、疑今小林郡、

十町者、蓋當之云、未知孰是、既後、疑今野元、疑今小林郡、

而後、野尻、小林、並在諸原野、且小林、則有教武、又稱柳字、

現、亦其遺証也、按統紀、和朝六年、五月、凡古之名郡、上野等、必

執所由、取其自古、因田帳、而為、疑蓋武、則作真、去川

字、作去飛、蓋古義也、釋諸社、疑今去、疑今去、疑今去、疑今去、

其一片、飛去、在官崎郡、大島崎、而其二片、今尚存、在諸原野、

高城、疑今村、皆上人、疑今村、而今去川、則當去飛、由是、疑今

取其真、或曰真、或曰真、或曰真、或曰真、或曰真、或曰真、或曰真、

諸今高瀬川有水派、而今、軍城南、疑今村、古係三保、事見、事見、

今都城、則往占岬為霧海、或名都島、而到三、謂高瀬川、尚呼水海、

皆採口碑云、荒鷄之世、洪水逆行、沼澤於原野、廣遠漫花、如水海然、

則書紀說、

皇孫天降事、云立於浮津在平地、亦此也、迨季基等周視原野、謂此

地之時、蓋掘地而注諸水路、如今高瀬川、然後水由地中行、斯可得而

居、亦足概知焉、而島津院三百町、蓋其地、多在島津、因得其名、取

諸降曰島津、其概鳥字、蓋本乎所謂浮津、而開門字、則所出入、而身

戶進、或較為津、天津與門、和漢相通、則古事記泊舟津港、書某水門

或三聚記、河津名管門之類、此也、是以或書島津、或書原戶、皆有上

下山入之義、乃聚、人勝赴發緊道、所作歌、有島門句、亦与此同、可併

考也、但羽田帳、院本作波、因田實好云、波破草體微茫難辨、疑云寫

誤、此說得之、今按字書、有垣者曰院、又稱官廳亦曰院云、蓋以官

廳必有垣牆故也、又按統紀、延曆十年、二月、令於諸國、新造倉庫、

各去其間、平十丈、曰、諸國倉庫、住近相接、一倉失火、合院燒燬、

於是改集、延元寬狹、置官署之、又按後紀、十四年、四月、白告諸

國、新造倉院、宜須每院設院一院、曰、諸國建部、多置一處、百始之

居、僻遠去郡、跋涉山川、有以納貢、只會每近接、有失火災、故令改

之、今年相視、輸納新院、但其郡家、於同動物、依口莫動、新造新院

置倉之法、依十年制、又其九月、辛亥、更令諸國、建正倉院、曰、諸國

每鄉、建倉院、遠尋此事、頗非極便、今須彼此相接、此近之鄉、於其

中央、同置一院、村邑遙此、納隔之、完無地使、每鄉置之、余依前

制、掘此觀之、我藩、大曰院者、如水保、島津等、亦皆置此、此可以

知也、而諸倉院、必置官吏、令各治之、所謂某院司者、此也、故郡正

者必分院司、而白郡家言之、猶同郡司、蓋其夷一也、何以言之、則如

生院院、安元元年、八月、府牒、元光之先、世稱郡司、知行郡務云、而建

久八年、因田帳、則書院司元治、又文永二年、十二月、下知狀、書生院郡

司、而元亨元年、十月、下知狀、則載三保院司、此類尚多、可概知也、

不稱武帝延曆十四年也。而建康家，莫詳其始在何年。然據延喜式既立賦姓，則知其以前矣。而至乃考中，賴通公乃奏為莊園，蓋使李基等知其防，而置莊衙，以建莊名，縣與島津自私邑言之，曰島津莊，自官衙言之，曰島津院，而當時為都會地，何以証之，安元二年，文所謂莊衙，則知其為莊衙矣。而其下文，今據都城宮山氏，亦敘字書，所謂衙字，諸家府而為所治名，則藤夫安元三年後寬等赴調亦先至，于斯可以証其為都會矣。其見平前，所謂至日再國西方島津莊云，是也。而遠後世其治之者，東鑑所載，元曆元年，富山義良等，必是也。義良稱二志大夫，當時右族，詳見下章，天所治府，必有官衙，而官衙必有垣墻，凡有垣墻者，謂之某院，故如島津，雖立莊名，猶或時而曰島津院，亦依此，則按折宿氏所言，元弘三年，于島津院，有曰右衙門五郎者，怒劫掠，至劫人出三，於是十月，嶋津莊日向方，富山義道者，以開乎我。

道通公，是二月，約解白衣官行實，本十三日。

後醍醐天皇曰，以公為守護。

公乃命備前郡司，入道威業及土考入道，府左位以督之，居守護故也。竊道稱七郎左衛門尉，按富山氏系圖，無義道者，蓋上流職官口義良之族也。義良之先，山三藤族，相名宗義，稱藤大夫，以亦濟復居任於中鄉，生男三人，長名義俊，稱藤次大夫，次義兼，稱藤四郎大夫，次清宗，義兼有男六人，長即義良，次義行，稱富山三郎大夫，次義忠，稱長谷四郎大夫，法名行念，次義光，亦稱藤五郎大夫，次義任，稱大郎大夫，次安兼，稱富山勾當，見後。又按行菜氏系圖，義良有女，嫁龜島郡司藤內親友，則書曰日向國中鄉弁清定富山一，部大夫藤原義良，此也。蚤死，弟義行嗣，今都城巨富山氏，其後云，所謂中鄉，固係島津莊，而自賴通公創衙莊衙于茲，至元弘中，剩三百年，在其間，則富山氏等，世居莊衙，遂屢命於，近常殿政政，以掌島津莊，安元年而下文所謂，則當藤原朝臣等，此此屬也。而後無世不順乎守護者，亦足據知焉。然其明年，為建武元年，天下大亂，九州分裂，戰爭無窮，則如口向之島津莊，悉為足利氏屬部，寧見比志島氏世書，於是諸葛氏乃造若林左兵衛尉秀信等，別建殿政所於東日向地，以掌島津莊，山是秀

信以島津莊殿政所，振名于世，而尊氏又割歸地，以穆統院為御台所湯沐也。如新約院，則以島津時久為之地頭，莊內北鄉等，以島津資忠為地頭，語在後章。自是以後，島津莊，惟存其名，至如政肥，小自尊氏，則近衛氏失莊，亦在此時。而富山氏守治之莊衙，亦係是資忠。從可知也。秀信等所居穆改所址，詳見下卷。而古莊衙址，今尋其地，則應永十五年，所造佛像，書日向國島津院安養寺云云，又文明十六年所造佛像，亦有日向州島津院四福寺阿彌陀云云之語。又天文十四年，島津雅備上聖文，有日向州島津御莊郡木之文，而阿福寺遺址，今在都城中鄉那元村上之坊，又安養寺址，今為阿村農民所居內名，又島津稻荷社，亦今尚嚴然在同地，而里人相傳，今那元村，曰名福戶，然避國姓改那元云，按上井口記，天正十一年，猶書山之口與福戶之間云云，其破之亦在近日耳。觀此，都元則古之所謂島津院，而向三俱良寺等，倉院建焉，至乃守中，西之莊衙，新開一府，遂為墾下之莊衙，亦足以知權與乎斯也。愚嘗聞諸肥後縣贊，曰，昔以刀筆吏，給事山本教授於陽秋堂，頗聞國語，然據梅山民所食之島津，今莫詳其地云，愚竊補之以為島津必當那元，昔平不台先年以其乘遠，故亦併註焉。

先是，隅之正宮，每有典事，輒照和節例，必募工料於二州田租者，數百

年矣。然長元中，聖基乃奉神託，創伊勢及二從於其莊內，以祠兩神，為

莊祈禱，闔莊極然尊奉之。兩神謂之宗廟，在莊巨成。不飲事者云，見神社考。社云所謂，御莊之總

鎮守，而世以神人亦其修造，遂乃殿下以委於。

朝廷，遂神所告，賜之，言言，以其社曰神社太神宮，如宇宏，猶仍其旧

名，而更奉基為大宮司，世領其祀事。長久四年，弟良宗亦祠八幡於始，事見知通類，及文明十二年戶部奏請所新

拜文，但兼進奉聞耳。有延季安問諸良色曰，野道遺者曰，廟築古蹟，自古

為神社，近及等傳，謂曰拜觀，新築殿四，突以曰板，乃恭按之，板蓋有文，則書

長久四年平判官，加以花押，無常隨者，尚能言說，如延行事云，季安稱諸佛凡氏

曰宗國，則所謂平判官，為良色所奏，而長久四年，遂令茲天條五年，為七百九十

一年，亦足以証莊衙也。按莊衙考。

按莊衙上疏，創置神社，則為長元中，而闢荒野，言乃壽中，明獻莫善

焉，但雖由神告曰神社，不言奉基事，然臨厚玄難亦著其事云，三吳

神注，則平大監，夢調伊勢，奉其神勅，所以創焉也。因梅北氏，為之

洞司云、而略年月、今參証而併記之、又實文中、社司梅北兼指、藤正

演世所承、以為在任云、乃素三年、季孫既臨海北、得建家司、枳杖於

大古上、正月二十、聚役夫五百、雖合輸其住、三天難等、其有女、

時方六歲、往而視之、乃外留託女而官曰、祀余於此、季孫懼、乃遣

人報美、在伊勢亦記七歲兒、實以是事、故遣使告、道通下原、今社、

語則相符、自古所傳、伊勢與日向之邊、北公、自茲別遷、其第九

九日、遂祀、此因到于今、定例祭日、又當此時、內宮亦現於出羽之莊

肉、而祭祀之、則及神柱、二分木那、各領其半、故謂日本二柱神、

季安尚非本庄、親與山之神、曰、神柱之宮在武也、道出羽人、其人

問曰、爾其舊有地答法內、而地甚廣、再水亦同地答法內、原野在、且相

而地更廣、以同其時、為兄弟區、若使相視、亦必、其所託狀、與

相手以對之、相平無異、故曰、以祭案也、其所以託狀、與

兼說異、然大較同焉、按後紀延曆十七年云、昔者國造那領、職員有別

各守其任、不致遺誤、慶雲二年以次、令國造那領、寄宮神事、動

公務、此云神託、亦此比類也、又永七年、祭經疏、口向州南鄉益村

神柱向、則平大監末基、后三年、謂伊勢宮、謂兩分垂逐、以祀內、

巫祝許之、乃章尊遺繼之嗣、世謂日本二柱、即其一柱、又天安四年

棟札、則言島津術藤原神柱宮、皆令都城橋北村神柱、是也、而

隣近有宇左宮、在鹿老町、相馬某為之社司、自山相索、亦為末基

創社、而社今藏獅子木像、書正成辰七月、綾小路仙師定臣、當是五年

壬辰、而在官等管也、後天正十年、北鄉一雲新之、其兄桐言疏等、又

有春日社、在西可二町、蓋領家氏神改也、莊官上疏所謂、神柱宮及宇

佐八幡、則指此明矣、凡今條向社、歲十二次、其春冬仲所祭一次、行

於宇佐、余祭神柱、而每有事、自古必使高山氏持守護位、以世守之、

如其素性、皆取諸郡城云、若見而官疏、

而社亦亦伊勢神領、特加御宇曰津島御莊、今勿因正官等事、遂為永

例、

掘鹿尊氏藏島津御宇官等上疏、而按其引領參所由下文、謂以名法之

狀、姑言于此、凡加御幸、稱謂本體等、言非三宮、格之年母、及臣等、領等、參

係大神官領、即遠江有鎌山御厨、信濃有麻績御厨、又有仁科御厨、

伊勢有滋田御厨等、皆大神官領也、疑其可領、又官領、則源氏所謂、字

治御莊、東鑑所謂、高陽院、鳥羽、御莊、或上嘉門院、崇德、御莊、

類、此也、若夫江守領、非因此例、無所歸莊、則如何漢大口莊、越後

紙屋莊、越前越前莊、法性寺領小島莊之類、是也、然亦御領有之、

東鑑、註大出司、紙屋莊等下、曰殿下御領、或丹波栗村莊、為崇德院

御領、外見、或日向御領、見其久、之類、是也、

而院並為、東鑑、而島津御莊、則安莊宮疏等、別、年、平、大、監、等、以、其、所

龜田、屬宇治關白家、祠太神守依之神宮、而飭其事、以建孫也、爾來本

莊、二百余歲、無化真稅、專見下文、承元二年正月、皇曆三、年六月十五日、皇通數、云、然其

疏、久藏島屋氏、未聞彼有表京平世也、於是、季安乃忘固陋、務稽古

籍、原之終始、則所謂宇治殿時、以宜官符、多據公山於諸國、為己

莊園、天下書其大焉、當散足平宣竹抄、說古事談、百續抄等、而慶雲

三年以來、令國造那領、寄言神事、動厥公務、亦見親與三代稱、據

此事實、以考證而疏、則實皆確說、而於其意、雖有承續、其必有然、

如合符節、以是親之、島津御莊之有御宇、蓋本乎祀太社官於其莊內、

而非當初承宣官、必不可至私加御宇、以隨公務、亦可推知也、又後治

曆三年、十月、額孫公平準二宮、食邑三千丁、事見補任、或忠美公亦

降準二宮、封三千丁、受高陽院御任五十余所、而高陽院、乃公之女、

內為、

鳥羽帝后、追后其尊、公受其御任、以併家領、事見其疏、大為國、黃

白石五美、等、而謂答則曰、后妃湯沐用、既非外家、不可亦湯

沐田、又如坊田、進入寺家、不可亦坊田、新、謂、生、母、自、斯、始、云、然、今

我、舊、所、遠、古、簡、往、往、香、島、津、御、莊、或、書、殿、下、御、領、則、一、公、之、為、進、后

時、因、備、御、領、亦、似、有、請、焉、並、書、所、疑、以、埃、厚、讓、但、如、山、尾、氏、名、傳、言、

則深里人說、文化中書、云、島津之為地也、臣係高千穗百廿、故加御

宇、其、雖、云、爾、猶、似、未、安、今、也、先、生、既、已、逝、矣、焉、不、起、諸、九、原

母實前說以考究焉耳。

由是、三州自舉而仕者、往往聞殿下薄其禮敬、皆願耕於其地、累月積歲、地進墾長、匪嘗三州、遍及七道、遂至以流毒於諸國、迨寬德二年、距方游

二十、正月、十六

帝後冷泉帝立、乃下令七道、罷新立之國、後二十四年、為治曆三年、

十月五日、

帝幸宇治、平等、七日、詔賴通公陸準二宮、封三千戶如忠仁公故事、四年

帝云太子位、補任為、泉太弟、是為

拜後三條帝

帝親賜刀機、多軍前拜、五年、二月、四月改、元弘久、詔申教令、停止白寬德後所

立莊園、匪但限此、雖在以前、立養不斷、而官於國者、亦悉罷之、以故、

閏月、置記錄所、令正券契、天下大悅、宇治殿威權、於是摧衰、延久四

年、四月、遂開變事、更名遠寬、五月、

帝亦削髮、時年二十九歲、在位未幾、十二月、依太子位、是為

神、白河帝、時年八歲、三月、〇八月二十、年八十二、純百錄抄、

帝立三年、賴通公薨於六年二月、三月、為承安元年、補任、為十、德傳抄、統

古事談、是則島津莊、領家之祖也、明年十一月、月十五日、另師美公

代叔父教延、為開白、亦執政柄、是為領家二世、抑藤原等、建國以來、各

佃所墾、未嘗改班、尋見續紀、是以如島津莊、亦白万壽中、以所墾中、

宇治殿之私邑、立為御莊、券契昭、斷而非新掠公口類、則雖延久後、尚

立御莊、如故、觀在官上疏、引世下文、所以陳之狀、可以証焉、

按東鑑、至鎌府治鎮西、亦以遠方故、不與余國同其例格、從世下文、

特地治之、事見寬元二年、又按比志島氏藏書、凡開墾荒野、如其租、

則減斗代云、見天禧元年報遺狀、管天禧遺風、而治之、如在例外、亦

可併知也、又源平時、治莊司者、尚多平世、則眉山莊司二郎重忠、淡

谷莊司重國、工藤莊司景光、下河辺莊司行平之屬、是也、疑皆島津莊

類、而隱管抄等所謂、宇治殿之遺莊、亦處在此等中也、

前此、季基有女、無男可嗣、遂許兼貞將獨繼戶、而過益實、玄珠日記作

季基乃迎、延齡寺語、兼貞居之月余、季基曰、余有一女、請使之為足下

侍執巾櫛、足下若語、欲於公下、以我三僕耳、兼貞乃語、遂娶其女為妻、而

享其邑、如季基焉、按、依、季基女、於万壽三年、為六歲云、推

而量之、長元九年得十六歲、據此、兼貞娶之、則處在長元長曆間也、白

是、季基別管舍於管野、以老焉、玄珠所謂、其屋形址、在梅北与都城接

界原野、到于今炳焉云、亦庶此也、神在區則口、兼貞考於管野、本名知所、

町、今俗曰御所云、又都城有地名區形、為其址云、處亦指此原也、距春日社可十

原、然其所在、与此合否、証據者、而其創即島津御莊、則在乎季基等、

可以知焉、兼貞既嗣、本姓伴氏、其先出自伴善男、因仍本姓、無易乎氏、

伴善男、本大伴氏、其地自高野山而南、大伴氏之子祖父應、而至父國道、遊

和帝許、改大伴伯耆、為伴行禮、事見國史、然兼貞後裔、亦世傳其國氏系、則

為、天智皇子大友之後、與合附會、為為是矣、故近、詳見下文、生男

季安為其後人、博傳史籍、今不贅焉、因稱肝尾太郎、是為肝尾

女名五人、長名兼俊、遷并濟使於限之世、因稱肝尾太郎、是為肝尾

氏宗、今肝尾新大元兼、次名兼任、稱次郎、是為兼原氏宗、次名俊貞、稱

三郎、是為安樂氏宗、次名行俊、稱四郎、是為和泉氏宗、次名兼高、稱

五郎、為齊宮介、領祀神在事、是為梅北氏宗、客以莊官、分異其門於島

津莊之地、喜見玄兼日記、及肝尾氏、和泉氏、梅北氏等藏書、但梅北系

圖、則以梅北氏為伴正官、

按兼貞妻、長元九年當十六歲、事如弁前、以是推之、延久元年、則年

四十九矣、凡女產子、齒限七七、多為帶數、據此、兼貞諸子、大抵皆

延久元年、距仁安二年、九十九年、文治二年為百十九年、且古系云、

和泉行俊曾孫成房、娶兼貞女、按兼貞、則行俊父也、據此、兼貞之於

成房、為族會祖、而成房於兼貞、為曾孫、且兼貞女、於成房、為族

祖姑、無所稱理、以是考之、則知悉非兼貞親子也、故如行俊、非兼貞

兼貞親行子弟、則其曾孫成房、不可娶兼貞女、兼高、亦後於兼貞、

犬抵百年、多皆其孫若曾、蓋古籍圖說、既無可考、後世為詳者、強

四郎之類、探職系圖、始如兄弟、故其有乖、如上所疑、然今也尚懸  
而莫山考究、姑從曰說爾、

嘉保元年、寬治八年、師夷公上表、請師通攝政關口、

詳、攝河帝乃勅許之、師道公、則領家第三世、宋幾先父、從于康和元年、

年三十八、而後三年、師夷公薨、年六十四、和仁如、法号法覺、自歎五

年、為長治二年、忠美公為關白、十二月、乃師進公子、而領家第四世也、

初師夷公業六子、出為浮屠、名曰覺信、嗣法頓信、陞大僧正、己為額主、

創一乘院於南都、實祀春日、春日、乃殿下遺祖、而所謂氏神也、覺信

寂于保安二年、三月、年五十七、乃以其弟之覺信正、為一乘院別當、

亦師夷公第七子、而於忠美公皆叔父也、是年三月、

野鳥羽帝以忠通公為關白、乃忠美公男、而領家第五世也、三年、忠美

公以關之帖佐卿、為正八幡神口、觀平山、覺信之第一乘院也、蓋忠美公

等朝島津莊、以日之飲肥等為其寺領、使長谷場氏、野辺氏等之矢、各就

其地、皆領收納并濟事、

觀貞和二年、沙弥純阿等明者、及其明年執達狀、長谷場、文保三年、伊

作莊下司高純等上疏、而執達狀、則曰、春日、兼一乘院領、島津莊、

日向方、飲肥云云、上疏亦曰木家近衛殿領家一乘院之類、可併証焉、

四年、正月、

帝位

辭崇德帝位、以志通公為讓政、如忠仁公故事、而二月、

帝即位、納忠通公女顯子為皇后、是曰嘉嘉門院、見、長承二年、

鳥羽上皇納忠美公女養子、亦為皇后、此曰高麗院、亦見、保延四年、僧

行玄為天台座主、亦師夷公第十一男、而忠美公叔父也、六年、六月、

崇德帝勅給忠美公年官爵、官乃數月史生、為准三官、而封三千戶、亦如

忠仁公故事、忠仁公名良房、乃忠美公九世祖也、清和帝幼而即位、奉、我大隅

先帝遺詔、始為攝政、其封三千戶、為實額十三年四月甲、

之深川院百伍拾余町、財部院百余町、多稱島五百余町、新立御其亦在此  
時明矣、

撫公卿補任、大系圖、及凶口帳等、則帳所請新立莊七佰陸拾町、保延

年中以後、新府、不隨國務云、可以証焉、

康治元年、初師夷公第九子、亦出為僧、名曰仁源、為天台座主、四十、亦

忠美公叔父也、至是、忠美公受戒於東大寺及天台山、二年、忠通公亦歸

俗、更名曰親、與大、久安三年、初師夷公所下文、以伴信房為薩摩郡入

來院并濟使出當、爾後信房、克恭厥職、輸租於京師、莫敢懈焉、故又下

文、補地頭於郡之山出村、及高城郡軍內村、既而迨右衛門尉某、臣

監注務、兼領軍內地頭、於是二月九日、信房上疏有請、右衛門尉乃懷信

房仍領山出地頭、如故、信房與兼貞同其祖、高城郡司伴信章之第三子也

入來院、四年、閏六月、忠美公、獻

民慶言、四年、閏六月、忠美公、獻

法皇蒙毛色、海西所產云、台記、可錄、所謂海西、亦疑島津莊也、六年、

先是、忠通公辭職、至是復為關白、父忠美公、愛次子賴長、而信口公甚、

乃奪朱羅宮盤、悉授賴長、為氏長者、尋收忠宅地莊園、絕父子義、於

是忠通作食邑于備前具、不然以為意云、大日、仁平三年、島津莊大隅

寄郡、上御莊檢注帳、亦見田帳、而寄郡、久安元年、十一月、

辭近衛帝勅、奪右衛門尉源為義官、坐于為明在鎮西橫暴事也、台、二年

四月、勅大宰府、捕源為朝、保元元年、七月、復忠通氏長者、賴長兵死、

世所謂讓左府也、平治元年、

辭二條帝立、以基美公為關白、補任、為前年、乃忠通公男、而領家第六世

也、納平清盛之女、為北政所、号白河院、永曆元年、三月、清盛流、源

賴朝公、於伊豆州、與大系圖、而公之乳母、北倉尼、按時如非尼、為

其夫掃部允遠宗、往而仕之、東、蓋尼之女丹後局、時年、亦隨父母、

俱仕配所、語在後章、是歲、蓋領家為惟宗法言、遷大宰少貳、乃日向守

基言之子也、

按作者部類、職原抄等、採載于此、則部類曰、惟宗所言、日向守基言  
子也、為後院、所作和歌、五百千載集、一首載下葉集、白承曆元年  
至承永元年、少監式部云、文雖甚效、今按等、永觀承曆、為百六年、  
而承曆元年、得二十年、則承永、在承永元年、而承永元年、亦已推  
是親之、其并少監、在承永元年、而承永元年、終于承永元年、亦已推  
知、置子比、始備考耳、

其担任也、巡察所部、居於口之島津、  
迦安國寺中狀、聖業自記等、則申狀曰、臣已於八文字民部大夫、為  
向羽司、居於島津、死三歲久亂、又自記曰、得臣公御養父八文字民  
部大夫殿、初居島津、公居其址、故号島津殿、又一本云、初居島津  
殿、号島津殿、然今委安、按職原抄、大小鑑典、則所給大臣以、諸公  
卿、分其差之官、而庇大巴等求、任之云、拋胎、臣言之居島津、亦似  
領家所遺者、比云民部、作者部類、則作式部、宋知執景、安國寺、在  
隴川内、為申狀者、莫語道号、傳始酒勾式、稱一、郎、再考於、慈翁公  
應永四年、公遣、議入公、時亦一、稱二博多、二郎從行、見參津令、

山田氏、後稱右、重天、致仕為僧、主安國寺、當是時、藤州持久、用久  
為守護代、撰問旧政、自狀、則其對也、事見申狀、及公室由來、於滿  
最為古昔、望來、姓山田氏、名忠尚、稱中羽守、乃  
得仙公之七世庶孫也、以應永五年生、高先古事、屢訪道聖、多所著述、  
則自記是也、眞聖、名忠朝、稱山城守、亦稱羅州、亦  
公六世孫、久百君之次子、老号道聖、同和泉賦、精、公室譜牒等、  
取榮、及伊集院賴久之屬、就而多聞云、事見自記、後在引扇、不悉記  
之、讀者可以知其為言書焉、

定藏六月、流跡出雲守源治保、及三權前守光宗、於薩摩州、舉事故也、  
日本、應保二年、一月、  
二條帝立、皇道公二女育、為皇后、乃  
號、六條帝之母也、六月、十八、忠美公薨、年八十五、号知足院殿、而  
一年、為長寬二年、忠通公薨、二月、年六十八、号法蓮寺殿、又超一

年、為仁安元年、其美公薨、七月二、年三十四、号六條殿、當是之時、  
領祀棟柱事、則伴長高世、兼高世藤父職、為齋宮介、有男五人、長名曰  
兼、立讓父職、次名兼盛、無後、次乃伊賀房、次号賢著房、次兼政、並  
出為僧、先姑、大僧正覺田、初長束於三井寺、覺田、前此六十九、則領家  
賴通公第六子也、後又覺出、曰大僧正主、為三井長史、亦領家近美公弟  
也、從源平六十、遷于承元中、惟此、安元、文師通公之弟為僧、居三井寺四  
年、則年二十許時、為長壽寺、其新考、  
人、曰道智、曰久美、曰仁澄、曰覺美、皆出美公之叔父也、兼非高世因  
若右緣、遣伊賀房、及感者房、往于百教於三井寺、并抄、而伊賀房兄弟、  
居於三井寺、事、然曰應保二年、至是、五年、領家忠美公、及子忠  
見安美民古系、  
運公、孫其美公、相繼三代、為其間、故是、三井寺、正應寺、  
正、未詳為誰、乃運天台禪院和通等、奉法教所刻梁印像、  
註後考、  
傳、據源平傳曰、手刻三張、其一在北、  
觀山、其一在離山、而其一則也、來創寺於島津庄内、氏別傳、  
余、安、御島津莊、建乎賴通公、而如財部深川等、  
久村、見上保、可謂有功於莊矣、於是乎、雖為領家所創、得取公法号、  
延六年、而於其山、由邊禪師、名曰保正、寺号正應、正應台教、則緣公  
知恩院、而於其山、見上保、  
皆受讓於天台仁源、治元年、亦足概知、  
按等說、仁安元年、天台祖慶和尚、奉三井寺一品觀王命、創寺於此  
殿、三坊、則天台教山之徒也、而歷皇統三百余年、伽藍既廢、  
自仁安  
正元年、為、而所存者、唯藥師堂、及山王禱耳、降永正中、  
三上考、為、  
正元年、為、  
三上考、為、  
自永正元年、  
總百有五年、  
月、忠能附之田租七倍、而改真言、則自看政始云、遂口百餘  
尾、百五十年矣、如券契亦從逸墜、後與鹿者、既已失仁安元年所創來  
由、而為之、故今寺說、不細一言及軍家為祀正事、然委安按社官上

年、為仁安元年、其美公薨、七月二、年三十四、号六條殿、當是之時、  
領祀棟柱事、則伴長高世、兼高世藤父職、為齋宮介、有男五人、長名曰  
兼、立讓父職、次名兼盛、無後、次乃伊賀房、次号賢著房、次兼政、並  
出為僧、先姑、大僧正覺田、初長束於三井寺、覺田、前此六十九、則領家  
賴通公第六子也、後又覺出、曰大僧正主、為三井長史、亦領家近美公弟  
也、從源平六十、遷于承元中、惟此、安元、文師通公之弟為僧、居三井寺四  
年、則年二十許時、為長壽寺、其新考、  
人、曰道智、曰久美、曰仁澄、曰覺美、皆出美公之叔父也、兼非高世因  
若右緣、遣伊賀房、及感者房、往于百教於三井寺、并抄、而伊賀房兄弟、  
居於三井寺、事、然曰應保二年、至是、五年、領家忠美公、及子忠  
見安美民古系、  
運公、孫其美公、相繼三代、為其間、故是、三井寺、正應寺、  
正、未詳為誰、乃運天台禪院和通等、奉法教所刻梁印像、  
註後考、  
傳、據源平傳曰、手刻三張、其一在北、  
觀山、其一在離山、而其一則也、來創寺於島津庄内、氏別傳、  
余、安、御島津莊、建乎賴通公、而如財部深川等、  
久村、見上保、可謂有功於莊矣、於是乎、雖為領家所創、得取公法号、  
延六年、而於其山、由邊禪師、名曰保正、寺号正應、正應台教、則緣公  
知恩院、而於其山、見上保、  
皆受讓於天台仁源、治元年、亦足概知、  
按等說、仁安元年、天台祖慶和尚、奉三井寺一品觀王命、創寺於此  
殿、三坊、則天台教山之徒也、而歷皇統三百余年、伽藍既廢、  
自仁安  
正元年、為、而所存者、唯藥師堂、及山王禱耳、降永正中、  
三上考、為、  
正元年、為、  
三上考、為、  
自永正元年、  
總百有五年、  
月、忠能附之田租七倍、而改真言、則自看政始云、遂口百餘  
尾、百五十年矣、如券契亦從逸墜、後與鹿者、既已失仁安元年所創來  
由、而為之、故今寺說、不細一言及軍家為祀正事、然委安按社官上



疏、及大義園等、以稽年世、則時為近衛重國、而忠實公等三世、  
之持、無可疑焉、而寺諱亦在安元年、奉台教、創寺莊內、名知足院、  
忠實、云之類、如合符節、故書如上、且莊內有疏所謂、當御莊寺、  
或建曾後寺、在公之守本村也等、可併証也、

於是之時、基實公孫、基基道公嗣、是為領家二世、而平尚好、  
叔父其房、代為其殿氏長者、  
基實公北政所守白河殿、名曰盛子、乃  
清盛友、而參論重盛殿、  
尺肆基房、乃謂清盛口、勿以莊園屬今還政、在吉治感通時雖併領之、他  
皆分制、而今公道、於白河殿、雖非所止、而義為母子、室割領之、清盛  
大喜、於是、基實公在國第宅、古器文等、多屬基通公、而白河殿、知生  
園等事始初、致基房乃雖居攝政、惟受國守領云、則與他寺、法成寺、平  
等院、御學院、應用方上、等數所此也、  
基實公孫、及  
等、永為近衛家、  
亦清白二井、故父及尚、乃制西生寺於莊內、本堂四間、方尺壹間、  
奠之弥陀、又置佛坊六區、  
曼荼羅院、三月二日、  
其叔出、  
手院別當、  
梅北氏系圖、及弘安元年法橋社所新銘等、而銘則曰、  
兼尚之稱、  
凡感、  
及五世孫本卿、  
之、  
辨、  
見安、  
術二字、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

御覽、則為領家所建者、無可疑焉、然銘所載、不言寺名及山名、只  
有院名耳、按此九年新納忠武所新文、則曰西生寺大曼荼羅院、亦無  
有山名焉、而刻其載仁安二年等語、則兼高朝基高、或弘安三年、拜  
壽緣、  
九、  
好、  
山、  
十一、  
信、  
以、  
則、  
妄、  
七、  
廟、  
中、  
心、  
其、  
心、  
寺、  
疏、  
開、  
被、  
其、  
繼、  
實、  
其、

承安五年、七月、改元安元、八月十四日、猶書承安、蓋天送也。御在改所別當執行

伴朝臣、別當漆島宿禰、別當執行藤原朝臣、各一名、皆書花押、不可差。別當藤原朝臣

三名、別當漆島宿禰、一名、別當伴朝臣、三名、下文居民、實勾當備安兼

同上、別當漆島宿禰、同上、別當伴朝臣、同上、下文居民、實勾當備安兼

為大陽寄郡百引村弁濟使職、以務勸農、徵納莊園之課役、十二月、御在

改所日代數位伴朝臣、別當執行伴朝臣、別當漆島宿禰、別當執行藤原朝

臣、各一名、別當藤原朝臣、三名、別當漆島宿禰、一名、別當伴朝臣、

同上、別當藤原朝臣、同上、別當漆島宿禰、同上、別當伴朝臣、

三名、下文部內、使百引村弁濟使勾當備安兼、執行一事、按伴朝臣、皆梅

北族、藤原朝臣、皆富山族、而安兼、亦富山族、次郎、大次郎、之五弟、稱富山

勾當者也、詳見二年、七月、島津御在河沙抄下文、以勾當備安兼、復大

隅寄郡百引村弁濟使職、前此、安兼既補本職、然新部內亦悉服、故安兼

乃陳所承、以求居職、至是、在司下文若荷、亦亦諭告、

載右下文、皆都城臣富山氏所世藏也、所謂莊荷、則乃延年間、所名莊而

置焉、今都城中鄉郡元村、亦其址也、詳見上章、可併考焉、野宮黃門

答新井白石、言莊園事曰、凡領之者、悉叙其土毛、手安按此、一日莊也、私置率

行、謂之莊司、莊官、別當、而勾當亦大抵猶別當云、今關富山系圖、

書曰富山勾當安兼、猶曰齋藤別當安盛、亦貴門曰、夷盛之先、出自魚

名、而其裔藤、乃安藤、近藤之類、而諸藤之氏也、本越前人、至夷

盛時、事小松內府、內府多莊園、乃使夷盛為別當於武州長井莊、據此

觀之、宜稱長井莊別當藤原夷盛、然以姓氏繫其職名、而省莊名、故自

山六兵衛、陳世所傳曰、得公之就封、亦特遇而家、猶遇父母、而每有事於神柱及宇佐、假

公親隨之、既而後使富山氏長守護位、以世与之云、於是乎、追近衛公

既失御莊、亦惟同家尚居故地、而如富山氏、珍藏若書、到于今、稱御

名代、多隨巴士、以与祭者、似有謂焉、百引、按建久八年園田帳、及

建治二年石築地賦、則有田拾參町、而隸島津御莊寄郡小河院、七百伍拾會町

之內、但寄郡解、見下建久八年註、

是歲秋、隸之光武、在生、名王國吉、九郎、及島津莊官等、按園田帳、牛屎

萬五千五町、而置弁濟、院、取牛屎院大奉元光所作式拾伍町三段之出毛、

使、此云莊官、疑此也、院、取牛屎院大奉元光所作式拾伍町三段之出毛、

元光善相撲、屬右近衛府、前此、自府遣番長和氣光里等為府使焉、以故三

年二月、及元光等以聞于衛府、於是四月、右近衛權中將使右近將曾惟宗

清榮等、陳命光里等、道理禁侵、以收園吉所獲稻、悉還元光、右大將

按補任、命也、

平承隆、命也、

據花園臣桑波出氏所家藏、安元三年四月文書、及建久八年、藤原國

田帳等、參証載之、又按藤原抄、得曹及番長、則皆處於近衛舍人、舉

用之、多為例云、

六月、十八、相國清盛、流平判官、檢非、丹波、右近、

僧部、法護等、檢見、於地界島、道人日向、西至島津莊、山二十卷、若長、

而皆赴詣於神小島、八月、改為治承元年、成經康賴、告稱於熊野、乃嗣

諸島、二年、七月、召還成經康賴、段阿本平家、而俊寬竟瘦死于島、蓋

尚在高、由成經等還歸回都、至世人亦知海西有疏黃之島云、所謂後覽足

野廟、今前在疏黃島、想猶公時、獻室而疏黃、事見源朝事、又明此八

年、田室公新藤野廟、見島隱雜著、而其名為說、恐別有所著、今不復贅焉

按島津御莊、盛於万春、見莊官上疏、然於原文書島津御莊、而存乎今

者、季安得親詣之、則自此安元中下文等始也、後三四年、而得公生

於治承三年、然

公之就封也、右幕府、賴朝、許問藤原多島与等、而謂

公



公呼島津殿、事出古今殿、又僧文之、著歷代歌、亦云、始領三州曰島津、繇是世人或至而誤此事、謂島津初、始自公領三州、然今率矣、博稽衆籍、其為因姓、則雖似然、至論其骨、恐未精駁、則可編上所叙以解其疑高也、但古今戰、大島忠恭所著述云、觀其為香、上盛於國常立、下迄于天正戰爭、按忠恭、稱出羽守、義天公第四子有久之後、而從松齡公、師于朝鮮、所著有紀行等、如今今戰、蓋寫古人著書、袖緒以近世事耳、

- (1) 寢惡密
- (2) 一下廿一枚黃白問答ノ註ニ、ニ入
- (3) 忠平上當補藤原字
- (4) 格字恐當前
- (5) 者字似可削
- (6) 和疑同訛
- (7) 相疑同
- (8) 源氏、源氏氏對語也、當作源語
- (9) 黃門云々八字註、宜改作野宮中納言定基其、新井城後守若美高答也、中納言底名對門、若美高白石、因名曰黃白既答、二十七字、分註卷言黃白問答之下、「玩古按黃白問答一名新野問答」
- (10) 「六枚下ノ忠仁公ノ註コ、ニ入ベシ」
- (11) 近野邑等曰、屋形原、在益富村、春日華表埵位六町余、當野、亦在律村埵位、与梅北接界米吉郷、而今縣地曰網所原、若本名網所址也、據此、屋形原与御所原、似非一所、尚疑杜撰考耳、
- (12) 按知識撰記、師運公不為撰故、削之
- (13) 此註上ノ六枚忠仁公故事ノ下ニ入ノ忠実公九代村ヲ頼運公六世祖ニ改ムベシ
- (14) 寢婦如何大未死
- (15) 寢後、家藏本作筑前、傍註朱書異本作後
- (16) 或陸家藏本作永隆
- (17) 持久乃義天公ノ第二子
- (18) 兩家、若富山与梅北也

管  
窺  
愚  
考  
中

# 管窺愚考 中

管窺愚考卷之中

應府 伊地知季安 觀撰

治承三年、己亥、領家諸公、年甫二十矣、十一月、  
聖上高倉帝以基連公為關白、是歲、我

得休公生於攝州佐吉、謹按、

公本姓源氏、乃右藤府公

藤族、父名瑞宗、二本、

稱瑞部允、母曰比企尼、

初丹後局之生也、長幕

府一年、而至明年、幕府生、

其母比企尼、按時未尼、

後亦隨父母、仕于經傳、

獲東鑑、武家系圖、酒勾安國寺中狀、山田聖榮日記、公室譜牒、公室

由來、古今戰等、而公室譜牒、以丹後局為比企尼之孫、聖榮日記同之、

然或為該員娘、公室由來亦作妹、或以該員為局弟、語亦白文中、安國

守戶狀、古今戰、並為能員姉、凡諸言奇牙植如是、則必有其誤、可以  
知也、故今幸安按東鑑、則治承三年、十月、日、口、該員娘母比企尼、

昔為、幕府乳母、道、幕府歸于京州、不忍遠別、榮譜所於武州比企那

所記謂以、按是尾氏及肝付氏藏卷、凡所定租入、自攝關之、不論水旱田園、必輸年

租、各奪其地、雖之詔所、事是此等三年九月、或云正廿一年正月、鎌田政近等

母并付、及夫掃部、俱在堀尾、自永曆元年、至治承四年秋、表二十年

於是今幼若、原文為若公、該稱等元、之生也、學尼之甥、該員為尼猶子、

而使能員妻亦為幼若乳母、以特報尼之忠功云、又其明年、養和二年

三月、日、政子之卒也、幕府令奇之、丹後局乃陪膳云、又能員妹、則有

為武藏守能員妻者、出文治四年、不書其名、而、公亦為能員妹、則有

建仁三年、然不詳何婿、稽之武家系圖、能員則歸遠宗子、然亦不載其

為猶子、或有妹丹後局等事、志疎漏也、於遠宗則稱掃部允、其如豆州

朝夕進食、以正於、幕府、亦與東鑑如合符契、為比企尼夫、無可疑焉、

而我能員妻、謂丹後局為能員妹、或為其姉、或為其娘、未細其能員

員本比企尼甥、而為尼猶子者、今觀東鑑書尼猶子、知遠宗亦為能員妻猶

子、以是觀之、能員必遠宗猶子、志別有生父也、又其所書嫡母子、

今按字書、為母之姉妹、此比企尼、則與能員之母為姉妹明矣、而參

陸旧乘為能員妹之誤、則比企尼之於丹後局、亦為嫡母、雖非無拋、旧

乘所載、於姉妹娘猶未竟誤、且其遺亦不詳其同、以為緣坐、今由旧說

解所証、以參考之、則丹後局、必必比企尼所生女也、而於能員、當養

妹也、何以言之、丹後局則以八十二、豐三安貞元年、推以逆置、生於

久安二年、而、幕府生於其明年、八月、尊見邦乘、拋是考之、比企尼

之為乳母於、幕府、亦所以由乎丹後局既生而上其乳高也、果如所考、

則、幕府與丹後局、豈有之、為乳兄弟、無可疑焉、於是乎永曆元年、

幕府之放豆州也、丹後局年十五、隨父出行、俱上食於二十年、無

與比企尼等異焉、何以証之、觀東鑑載丹後局陪膳於、幕府、或出水氏

古澤、載始稱丹後殿、仕於御末方之類、可并知也、是故得幸於幕府、至

以當、公、何疑之有、若若與其尼俱仕于御末、以進食於朝夕之夕、

何索得幸焉乎、可視是以愈知無疑乎、比企尼與遠宗生丹後局、而局與

幕府生

公於蝦島也、於是乎、

公葬、幕府、松在世吻、則太閤西征及播磨、亦作由斯、事見其論、又

台德廟石見貞高、亦語及之、

松齡公聞而為榮、出其文印、

松齡公長

然先史河野通古之上東郷也、

松平安心軒、松清內藏充等、

合三藩邸

藩之古乘、而有開焉、曰

何氏諱

太祖為、幕府之風也、顯親証書、以聞其詳、通古對曰、匪謂

大和、雖到後世、亦無獨有者文証古者、今人猶然、況於古乎、但大

叙官封國、則所以賞有功也、既、幕府開謀、未輕授人、然

太柱生七歲、乃叙左兵衛少尉、封之數國、賜之衣、幕府子、何以

至此乎、凡物至誠、則能動人、獨坐稱者、無非信服、事見先史重茂疏、

此疏為然、若夫北條時政、和曰義盛、山重忠、梶原景時之徒、皆當

時功臣也、而景時稱平三、重忠稱次郎、義盛稱小太郎、時政稱西郎、

未叙叙爵、可觀是亦知其不謬異

公也、然猶水戶侯修日本史、荒井白石著藩翰譜、皆至是

公為、幕府子、以弘安說於天下後世、是故季安慨然、博稽古籍、坐忘

感管、欲演在昔丹後所以待幸於、幕府、而生

公之根源、以開世妄說、緝紹通古等之意、斯誠微意、而後博議更有止

焉爾、

先是北條時政以其女妻、幕府、是為夫人政、政子而而怒之、

幕府在豆

追星發也、亦猶變之、

拋古今戰、而安國申狀、則曰得流口向、而出鎌倉、又公室山文、亦得沈

繪島、故流日向、按時局猶仕於鎌倉、亦乃後殿、然、或曰鎌倉、

皆迫苦累耳、荒井白石說其誤、亦必其說也、故今季安宛言今戰、註

弁誤爾、但公室由來、此云御當家土茶、撰者未詳、今季安割其為爭、

則謂信元初身、云勳守東堂今福昌寺此也、按、勳顯天在公曾安燈輝師

為永正六年八月事、而其居福昌、迄十五年、則此書成於永正二十者明矣、

然其篇末、載後世事、主如、少將忠信公、是必後人所添於慶長中、非

皆永正文也、嘗流伊集院兼顯所寫本、疑有詳焉、曰、永正文書、而真

蹟猶見、粗述其事、標識上層、以還主人、既而未幾、木隨枯賢、飯俣

集芳久美、祭稱、所藏古本、 幕府書名曰焚、而加、以亦示黑、風折示

而曠口、有是哉、黑疑久矣、此與永正本也、乃稱前事、以商量之、

繼所參止、寸毫弗差、本正後事、無一釋之、據此考之、

爾憲公時、有僧賴政、俗姓酒勾氏、嗣法顯意、居力龍藏、一乘、 振名

平世、永正五年、迄

公拓和於、城府、石為主僧、今太興寺也、而所著、有真俗二諦常住記、

或可、承政、酒勾與國等云、今據由來多言僧事、且載酒勾次郎居安國寺

事等、精於他言、則亦志願成所著也、而如後事、亦按其人、則長谷楊

宗純所著、頗似變焉、稱麒麟守、為人好古、慶長中、著翰遊集、又寫

狂言集、文明記等、各據夫簡、觀此、所撰、必宗純之徒也、詳註于

此、竣傳識爾、

於此、幕府陰使其弟、一說、 能員等、率之以逃、曰、所生女、則惟汝所

為、男則叛知、而公室出米、古今戰則曰、行至撰州作古、合頗未定、安國

公室由來、其云、幕府時政、作如其所為、 古戰、為、申伏、

公也、時曰孫善、兩水涉池、乃狐火照暗、若三神術、 是即

拋安國申狀、公室由來等、而德口、本謂謂狐為集名殿、且、公室之將

有禎祥也、狐必發音、而雨亦為瑞、皆首丁斯、古今戰、則其產也雨澤

不淨云、又安國曰、問諸書考云、持如京、劍遠石、又由來曰、凡所踐

石、豆休吉社、南在古池到云、又自水氏所成古書曰、石在松原、大且

平云、今度諸人、距社垣山背垣側、而非社前云、按伊東譜、追覽永末、

肥後守祐昌知郎京師、石殖在仁刃、二人相公、唱、唱、 石、為、公室所、

而未設石焉、祐昌乃問

宮賜公、命工緣以石闕、凡此石有石闕、 白斯始云、可併知也、

明且公領家共通公神社、聞見、 繼而風之、從者作以其矣、

事見邦乘、然安國申狀則曰、作吉祐夫、 謂此事、乃以告御所、而舍之

云、今季安按大系圖、治承二年、津守長盛禰神主、四拜叙從四位上、

魏此、安國所謂相主、當此長盛明矣、  
基通公乃取

公及嗣而歸、令其於其第、  
亦見其乘、按丹後局、逃自豆州、而生

公於任市之時、猶未稱局、山水氏日記所謂、始仕相末、稱丹後殿、治  
後得爵、丹後局云、是也、又按東鑑、丹後局前居於、幕府、事見後  
和二年、三月、凡膳厨所、俗記御末、可併觀也、山居亦局、見于古書、

亦曰斯始、魏此考之、前年、幕府嘉祐忠功、拳甥能員為其猶子、以報  
功勞、事見東鑑、詳二社治、  
承五年、幕局亦曾隨局、勞於豆州久矣、故、幕府賜

以嘉号、似賞尼例、日記所謂、後得聖号丹後局云、此必是也、然當時  
別又有曰丹後局者二人、其一則為栗朝御台所女房、按承元四年、前

此、栗朝御、納功門入納言信清之女、為御台所、於是六月、坊田殿為  
之裝送、乃使其女房丹後局兼京行、道長駿河、為盜所奪、十二月、

局至鎌倉、報以其狀、亦見末鑑、是歲、  
公之母室丹後局、則年六十五、既在瀧、魏此、母室雖居京、亦非

無其事、既出嫁人、此云女房、必必相隨而居其行者也、又其、則為  
詳、後高羽羽帝之女、一而生尚江內親王、手見大系圖、從若日本史、作丹

波局、未知孰是、然拋名石、以舞女得報云、則非与  
公母室一人、必無可疑焉、或或問感此等心、吾子疑

公母室亦稱局、而仕配所者、故今委安、粗弁此、以發博識史有、正  
舊爾、

四年庚子二月

帝即位於、太子、是為  
一、安德帝、時在櫻櫻、  
詳、後白河上皇、尚被万機、乃以基通公為攝政、四月、

帝即位、  
時年、進基通公位、陸從一位、於是乎、北政所位子、亦陸從  
三位、  
仁壽元年、右大臣藤原良房進正一位、夫人、乃相國清盛之女、而

帝親母建禮門院、  
詳、及基通公嫡母白河殿、  
詳、之妹也、大系、是月

源賴政等、奉、高倉三、  
詳、高倉言路也、  
詳、幕府起兵以討之、幕府應、興師於伊州、五月、高倉言、及

源賴政、奔于南都、二十六日、敗死于宇治川、八月、幕府遣攝政等、  
擊平兼隆滅之、  
詳、稱、未事官、  
詳、乃、  
詳、

元曆、二十日、遂發三州、行發長陸地、九月、源義仲亦起兵信州、以  
心、幕府、十月、幕府遣人鎌倉、十二月、開府於大倉、

五年、辛丑、二月、相國清盛薨、諸州多除鎌倉者、兵威大衰、  
足乎、能員乃報知鎌倉、以丹後局既產男、幕府乃降詔鎌倉、名

公曰二郎、  
詳、見下、  
詳、命養於能員宅、  
詳、進久四年詳、

魏公室自來、但年月闕、然拋東鑑、載明年三月、丹後局既候鎌倉、則  
其招之還能員宅、  
詳、在是歲、故查于此耳、

七月、詔改三号、為養和元年、八月、  
帝以前欲討平貞能為巴後守、討後西反者、二年、壬寅三月、政亦子、

孕於是九月、幕府合律之、丹後局乃逃播磨、  
詳、事見、  
詳、妻居從豆州、久幸食

膳故也、  
詳、出水氏日記、  
詳、明而、幕府恐局逃隱生、  
詳、

公言泄於政子、故令出河家惟宗以言、  
詳、詳見上水、  
詳、歷元年詳、以密

公於其京、  
詳、在、  
詳、由是、  
詳、

公冒惟宗氏、亦避嫌也、  
詳、拋公室出京、亦據年月、今按、姑置于此、五  
詳、但日本史、為瓜可、日雖惟宗公、誤也、

月、詔改年号、為寿永元年、先是、高倉主之奔南都也、延曆寺僧永雲  
等、送王子、  
詳、即此、  
詳、及源仲綱了於源義仲、  
詳、至是流僧永雲於陸奥、  
詳、伯願真

於土佐、皆坐王子事也、  
二年、癸卯、六月、白後守平貞能還京、定鎮西也、八月、  
上皇勅削平族二百余人官爵、  
詳、領京無主、  
詳、

上皇欲親王子以立之、  
詳、初、  
詳、等、  
詳、高倉王子、  
詳、北河、  
詳、義仲葬之、乃番髮加冠、  
詳、當居於越中宮、  
詳、因稱北陸官、  
詳、又稱、  
詳、

疑此人所。至是或仲秦稱立之，卜筮不從，故不立云。前此島津御莊人

伴信明，張別當於薩之入來院，是月，信能上解，請命於領家。見管入來

之，十一月，按載。見氏威。

上皇詔罷基通公職，三年，甲辰，正月，復公領政，二月，勅諸司，停徵兵糧於公田園莊，

三月，幕府下文，令於九州，速降鎌倉，安堵改封，以討立族，四月，

詔改年号，為元曆元年，十月，此為府生，凡府生，給事

上皇賜基通公內舍人近衛等，大將以上，事見攝原抄，

二年，乙三，先是九州多屬平軍，唯豐後否，至是三月，勅發諭之，是

歲，得仙公年七矣，幕府猶恒以

公教親子，與之基通公，撫古，承進公及夫人三位，詳上，按

公子之，公室由來，作殿下兼君，而皆，六月，幕府陰石

公於鎌倉，十五日，無詳，按任少尉前，故置于此，疑

公造觀而，而見，幕府，按玉符等，幕府行北陸官入京，亦為攝關事，改後世或

二年等，初，疑，公為高倉王子，蓋附全耳，但北陸官事，見上壽永元

公繼父，聖業日記，惟云區言，發山山莊司，忠之幼，盛卒，再發丹後局，

與市采，即作養父，而市志本蓋為基通公行官，說在，於是乎，幕府乃令重忠加公

氏系圖，說在，元服，因謂重忠為烏帽，親，聖業日記，但為年十，取其恩字，名曰忠久，冒

瓜百姓，号惟宗氏，而任左兵衛少尉，三，在與時事，誤也，六位諸大夫，及侍

接大系圖，及，幕府教書，見上文，等，山山言忠，稱莊司次郎，又按

攝管抄云，宇治殿時，其所領莊區多蓋於諸國，所謂宇治殿，即關白親

通公而基通公，之六世祖也，而今季安，我重忠世，聖業日記，於秩

父郡，且

公亦隆於基通公策，而重忠加之冠，引重忠所司山莊，亦區三治殿家

領，而世之，隸基通公莊領也，斯莊所疑，亦按書論更有正焉，北云地

先是故出羽守平信賴，領地頭於伊勢之須可御社，及波山御馬等，張，非

鎌倉所稱，而後經古符所，謂本地頭，此与此同也，幕府遣兵伐其，兼隆等，既滅之，見上治

此日下文，以

公為之地頭職，善盛

太神宮領地，說見，七月，日向往人富山長良以下鎮西士人，多應驗會者，

於是二十二日，幕府下令，戒征軍衆，勿侵農之，藤原稱二郎大夫，當時

右族，冠領西者，與東族，或謂長良以下，而島津莊司也，說見，二十八日，

許後時羽帝即位，時年，而

法皇親臨方機，基通公演政如表，八月十四日，詔改年号，為文治元年，

前此云言后任於島津，詳見上卷卷元，故丹後局亦隨之任，繼繼不欲離乎

公、屢私於大江匡元，及前院次百親能，地頭于三州八條，求使

公受封於僻遠地，出羽宗白話，而三州水為其遠地，基通公亦与夫人二位

治秋四年，太平此矣，局賢自習，故說孫叔致乎，乃使其大夫，下文鎌倉，告授

公給官於島津御莊，至是十七日，幕府亦聽之，乃下文御莊，文中在任領

家下文云云，蓋指領家北政所三位公子，聖見上文，然當時又有，以

尚三位同齊，諱曰成子，法皇齊人，而尚三位也，詳備異國傳，以

公為下司職，按攝原抄，大正隔年任檢一人，納言等三年一任，其他每年給巨足

而浮信其昔，一人，以分其權云，公任下式，亦蓋結子，而分其權之類耳，

州德下司職矣，不与伴，蓋以島津御莊為三州總務，由斯文云，魏先史甲中國

兼承了司系部總領也，兼承了司系部總領也，而得能通和者，則浮信，在文治二年四月二日下文云云，誤也，又於十七日

下文，於廿元曆二年，地比，領下文，在二四日前，明矣，改於領官，未識有改完，

雖麻，時區，當是時也，公尚未亂，七歲，初島山重忠，納其從本庄二郎親信，

東鑑 之女、生一人、追加

近常 幕府乃命重忠、許以其女於

公、擬公室由來、以故重忠等、為

聖宗日記等、本山系奉 公諱、乃追稱恒之子其親、則為親恒、等、先如御社、詳見下 其之狂勢、

徵輪殿租、供給

公百事、且以探聽仕官等之消息也、十月、

法皇隱 幕府遣兵威稱詔、朝憲十八日、上卿經宗宣 旨、使藤光雅、勅源

行家、源義經、備兵討之、行家、幕府取 時昔說成以為出乎基通公首諱

奏之、故 幕府善焉、初基通公、納清盛之女為北政所、即三位 乃追禮門

院、安徳 之妹也、由是與 幕府不協、而此說起、即三位 乃追禮門

日、行家、義經、赴西國、二十五日、幕府 幕府察浦之、於是大江広元、

為 幕府謀曰、世末悉請、許州殿兵、哥乘機討、莫如及今臣守慶於國衙

地、於莊園、令以鎮之、幕府大睡、遂從其策、時會時政既便於京、乃使

時政因藤經房以奏請之、

二年、丙午、二月、幕府 幕府又奏請催基通公職、以謀美為攝政、兼吏、乃

領家五世忠通公、法性 之第三子、而於基通公則叔父也、三月朔日、

法皇遂以幕府為六十六州總追捕使、及地頭職、常服外、計 而以時政為七

州地頭、幕府乃嚴守護、或作 於諸州、地頭於州之在國鄉保、神東鑑、

日本史、如其兵紀、與五畿山陰山陽備後四國二十六國段、兼官請接

別五升以充之云、所謂番郡租与此同、詳見下卷、四年、令以攝州、徵之歲租

而如其進退、不論國衙莊園、為 幕府所統領、其下文、 賜以平軍行家

龜孫等、美以照頭則仕官等之威、亦以 於是、天下兵權日漸歸之、將軍

是之時、幕府乃以

公為島津御社地頭職、亦令撫民、以徵歲租等、亦擬下四月三日下文、

公補之、今歲下交行云云、按此、其後、 據頃刻三三三三三三、其後、

代、為十一日、其後、 公押御地頭、必在其其其其其其、其後、 十二日、

法皇遂賜基通公攝政、以兼吏為攝政、及氏長者、初基通公察世有莊園、

則如島津御社、是也、後追

鳥羽上皇后孫、日高陽院、忠實 父忠美公、知足 受其御社、五十 亦併

家領、而基通公與、其弟基房、日高 代為攝政、其後、 基美公後

室河殿、即皇子、 許保氏守寺、其後、 以攝攝、而

於其他宗器莊園等、皆云基通公、後室領之、如基美公時、而追基通公亦

為攝政、併食攝攝氏守領、先例也、至是、基通公乃致攝攝、云之兼吏、

如他家領、尚悉領之、亦日行設例云、先是兼吏亦及

宗德帝后孫、日高 忠實之女、受其御領、併食攝攝、以食之、然、

幕府又欲經奏、而奪基通公家領、以班之兼吏、乃使時政、因經房、亦

奏請之、製茶鑑、大業 前此本由自親等之入御社也、備布

公定、滋無 庶民、徵之歲租、其後、 然於御社、則自上、其後、

近衛氏、如三所職、而唯北昌兼、兼高之子、 等、世相承相其所所經、

如富山義良等、世司其御領、經攝攝、不轉員者、蓋百六十年丁茲矣、

於是往往至托其命、以故自親等乃謂于鎌倉、其在官上疏、東鑑、公室由

是四月三日、幕府下令島津御社、日殿、基通、既能攝政、右府兼吏代為

攝政、而如御社、必難全至兼吏而收易其領家、如諸國諸莊地頭、則既奉

院宣、亦以統領也、是以前此令

公、原文、 為之地頭、以撫莊民、徵歲租、且聞州之武人等多不從令暴

逆殊、其後、 則必必必必必必必必必必、其後、 自今以後、宜從避之、五月、五

日、其後、 幕府曰、如後、則食氏寺領、既有奉册例、況兼美享光

而進領、如上 必勿割世祿、以加攝攝、大業、 由是基通公雖罷攝政、為領

家於島津御社等如支、本由自親等、時在高津御社、聞

公尋為總地頭於島津御社、乃振地於山門院、城木平礼、

按地頭志、所謂山門院、則今出水郡野田、高尾野地、而木台札城邊





宋、為社久二年事、又按宋人所表、于仙閣記、及于光而堂記、天寶敕  
禪師、以梁西所教材、建于仙閣於紹興四年云、則當建久四年矣、此  
寺說美有概、而梁西以長余材、建於五年明矣、如山來記、蓋不切於年、  
只類記之、後世謬者、遂以梁城創寺皆始就時事、是是誤也、若徒  
其說、則罪下文、何者元年八月、

公持下司、自時而後、如貞觀亦米布收命、或上國人、多召命者、明年  
三月、幕府既聞其拒命、進

公為給地頭、四月下文信球之、而八月  
公就封、貞觀等築城、蓋在其間、以待

公至、則勢當然也、何限募役創寺乎、恐時未至、故從寺說、臣下建久  
五年、

還以報  
公乃之國、八月、就封於山門二月、入不牟利城、本江次郎貞親、酒勾左  
衛門尉景貞、猿渡藤四郎実信等數千人、公事由、從之、劫

公之生於吉地、晝夜雷雨、狐火照階、若白神祐、咸以為猶荷靈顯、  
既詳、至是

公感神顯、創社於山門、以土祭焉、先左  
法皇没入平族故氣在諸州者、使、幕府管領之、習之沒官御領、見東、於

日州、則在相杵郡、凡六、三都宮家泉信以為之地頭、於薩州、在邪吉院、  
百拾、入來院、市比野、拾江町、保新用、牌拾貳町兼段、高城、拾

武町、木温下浦、仁建行式町、高領、兼拾伍町、祭公領、警保公領、高城、別  
當風船所、必宿御町、武拾、武拾、在上、五町、凡非何拾

卷町、除外領不市比野拾出下、二寺領在温、自  
平氏領、兼島津領、謂之安郡、解見下、幕府領之、以千葉介官胤

為之祀司、國口帳、幕府乃進紀太清齋、往為代官、而幕府、為論正  
人、清康之在、幕府無狀、公從掛頭等命、勳為幕道、公言其民、幕府

附之、是月三日、下文莊官等、令朝清遠以禁止之、初小城八郎重貞、亦  
有訴承、求為正司亦清使於薩之牛屎院、是歲、幕府使  
公命重運以補之、

公居給地頭改領、擲下、二年、伴兼景、以無子故、臣司延兼任備前院郡  
可職、聖長氏、兼任、本主系圖、肝屬族、而梅清、在日之宮崎郡、亦島津御在寺  
郡也、十二月、幕府以天野遠景為筑紫奉行、下、三年丁未、

公年九矣、初平東登、臣為郡司於薩之伊作郡、二百及口禮北鄉、凡佰町  
動治町、其會參拾町、肆八、南鄉、伍拾、之欠小野、凡拾伍町、重信之、其  
備孫兼善、小野太郎家兼司之、餘參拾陸町、茲修町多  
本地頭平臣即官所領、道建久三年十月、古攝房等并為之  
下司、後三年文二年二月、日新公聽取此等、改名表音、凡所兼或信掛拾伍町  
亦島津御在寺郡、而河多郡本地頭平四郎宜澄、兼之地頭、至是所部民戶  
凋弊、通公、全隸御在  
以斷公務、便、孫世繼、司郡可愆公文等之職、乃三月、裁証書、以請政  
所、撰文治四年立券狀、建久三年下文、八年國比帳、云德  
元仁黃時下知次等、并是下四年十月、建久三年十月、五月三日、

幕府下文、前年、稱小城重運職、有見、復太美元光小屎院郡司并濟使、如故、先  
是、幕府以天野遠景、本縣內、又女良、為鎮西九州、奉行、及諸所城頭職  
之任九州、事見、遣使巡察、然有稱物追捕使遠景使使在幕者、蓋是時

公屏愆地頭、兼任日代、擲下、而未兼守護、故其威令、猶未易行、頗為  
刻等所受暴、又、任在幕之、九月九日、幕府及夫人政子、臨觀幕於比企  
尾宅、其出、兼飲酒、比企尾、乃、幕府乳母、其出、而蓋

公之外已母也、說見、因陰訴幕府、以還司等所以妨、  
公威令、於是乎比口、幕府下文、罷廢幕使者人島津莊、以  
公為島津莊御使、即是薩陽日三州守護職、而兼殿地頭如初、

按京鑑、守護者、則文治元年元上院、書曰守護、而二年三月、  
法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

公之外已母也、說見、因陰訴幕府、以還司等所以妨、  
公威令、於是乎比口、幕府下文、罷廢幕使者人島津莊、以  
公為島津莊御使、即是薩陽日三州守護職、而兼殿地頭如初、

按京鑑、守護者、則文治元年元上院、書曰守護、而二年三月、  
法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

法皇補之幕府、則日補諸國總追捕使、或書每國置總追捕使、而松維山

載其譜、則書諸國置守護、扼此、忽迫捕使與守護、本一職而為兩名、可以知也、又十二月、東鑑補遠景、則書鎮西九國奉行人、而此下文、云忽迫捕使遠景、而

公補之、則曰押領使、而未六旬、東鑑書遠景職、曰鎮西守護人、又建久八年、幕府政所下文、以

公為瑪羅兩國奉行人、令以符券、酒勾貞阿、載之目錄、日限薩兩國奉行、又建仁三年、幕府政所、分設此職、東鑑書之、曰忽守護、時

公職亦書大隅薩摩日向等國守護職、然而元德二年、十月、英時居探題聽之訴、亦拋

公為押領使、下文、以斷由直、又康安二年、道譽公訴、幕府書、亦言太祖之旨領島津進日限薩也、引此九月九日下文、以証其事已、日限薩三州、為島津其內其明職則、幕府下文炳焉公、所謂炳焉、指此下文、及元曆二年、八月十、下文深帖之類、可併知也、參此衆說、以證職原抄并疑、則延享四年六月、檢非違使等、追捕郡盜、皆關其為兵、各有差事見西官記、又承和五年、二月、檢非違使、給看督長六十六人、以遣諸國、亦自編後紀云、且

公為檢非違使、詳見下建久四年註、扼此、所謂押領使、蓋使斤、即檢非之類、而猶繼追捕使、繼這捕使、不與守護異、亦猶書與羽按察使、或置鎮守府之類、而按東鑑、當時、幕府之設此職也、行家、義經、既隱跡遁、故恐復等復屯兵於諸州、奏請

法皇、所以置也、是故其公追捕使、則為使之追捕彼黨也、押領使、亦猶官守護、為使之領其國、以比國人叛心者也、故幕府補之、非忽迫捕使、或言忽守護遠景、則書鎮西奉行、或書鎮西守護、或等忽迫捕使、公則書島津押領使、或書限薩奉行人奉行、或書瑪羅兩國奉行、或書薩限日等守護職、扼是謂之、其失則皆守護職也、或時筆吏與其稱者、可併知也、而自幕下以下遠景等、皆以守護兼地頭職、事見東鑑、於公亦以守護兼忽地頭職、猶幕府兼忽迫捕使及地頭職例、故雖後此、幕府職

公下文、猶書島津莊地頭、或文永二年、五月、相模守時宗請、道公執差狀、出志高氏藏本、亦言守護地頭兼帶之類、亦可証也、今言所稱、以候傳藏、

四年、戊申、公年十矣、三月、

法皇詔、幕府、備令於諸地頭等曰、左邦從國司、在莊從領家、毋擅拒命、如私巨震、指東鑑云月及、六并四月五月前此、幕府遣所於薩原管領、及天野遠景、擊鬼界島、五口、降之、十月、島津莊安郡伊作、及日當北野等郡司重澄、初以其所領、歸順領家、至是基運公以告國司、受之序宣、是月、乃使改所命司等、立券永隸於新莊、蓋乃舊例、而所謂塚公甲、亦此類乎、凡式日捌拾伍町、詳見前、拾町、白是道和泉郡、卷四、為島津莊薩之一日御家陸伯參拾伍町、而重澄、猶后北鄉下司、阿多四郎宣澄、居本地頭、并幕府所補也、

公為之隱地頭、蓋皆如故、據立券狀、圖曰候、古、五年己酉、公年十一矣、女國聖德二年、是歲、並為十三國領事也、先是、幕府聞義經遁歸於奧之深衛家、乃欲帥兵伐之、二月九日、賜公書、徵御莊兵曰、凡服戎者、汝民徵我、來會關東、且充朝謁、躬在孟秋、七月、必勿後期、公八歲入部、亦略、閏四月、泰領殺義經於衣河、三命也、有北吉、足以証焉、閏將、七月、

公將兵至鎌倉、十七日、幕府遣基運、謀在伐之、命重忠為先鋒、山、拋棄、而參差、於是衆成請太子、小字五郎、後名、賴家、時年八歲、為之總督、太子持幼、賴家、時年八歲、初平言娶之忠婦、遂卒、再娶丹後局、而

重忠又娶時政女、乃政子妹也、故局及平言、予託實忠、欲以時白於政子、初平言娶之忠婦、遂卒、再娶丹後局、而使

公亦貴顯、與先史、於此時政既聞有此人、以証重忠、重忠以為稟白政子、重英說、莫善於斯時、乃且告幕府、幕府尚念夫人將妬惡之、而令重忠曰、汝

如其宜。聖業 曰是重思。後子曰：所難於家氏，亦慮之也。今始成立，蓋

自記

學以代焉乎。政子伯曰：故言可也。吾且欲見，然豈而謂、何如而可。重

忠曰、

公之薛京也。陛下惜別、統直系縫、取其綴率、留為記念、則肯統者、足

也。且為帽子、拆左為標、注意識之。聖業自記云、其統者、則、薛府手統之、

而左折、為於氏例、實、薛府本云云、

顯朝之出櫓穴、赴並肥也。衣藍衣兜繁、遠頭繁、遠大符之、等通櫓及、乃衛

製八折、一頭左折、頭右折、大折、從士曾六折、我獨得左折、先折八體殿

以來、世為將軍、皆若斯折、今我後之、與乘本平、惟折名曰大太郎、見藤原紀、

而異乎忠臣等、大徒之云、故有此折、東道則唯乘平、從後曰口云、未知孰是、給

聖業自記、為藤原紀云、折八體說、可此知也。又安國寺云、釋教記、於折、

為折、乘或公折也。各法折、與此小異、今從公空由來、折註誤、惟其

既而進

公、與諸幼士衛、朝于彼廷、政子獨條、見

公、顧其成、乃與重也謂之於。薛府、

公尚幼、故亦不許。重也固請、許之。細觀言謂謂、漸謂側前云、於是、重

忠奉

公為先鋒總督。薛府乃縱橫管、面為才字、以定旗章、賜

公、則提攝兵所提級、二正等之奏林云。

按大田道綱說曰云、有北条寇之者、泰正元年、其騎十及中村重頼、

治部 歸於藤原、海軍橫機斬首、失其姓名、尋獲毛烏、其旗章、則原奉

降於二重、以為級云、我備備至彌地東等以請、二正等、象上、音之說、

亦復取諸斯乎。

十九日、幕府自得將鑿會、八月十二日、次于曰府。往多 初其東也、告備

神也。事出 東盛 神身義也、十五日、幕府開軍儀中有暴掠神社者、而軍立處且宿

國府、特以阻且移宿陳原、問重忠及北条等所將兵、無犯法律、特察逐其

整、然猶重忠、幾請前、率幼子行、持不可危、必信戒戒、勿使從卒違

弄心願、苟混乘乘、其暴掠者、令其其罪、令其所犯、雖無與之、明日若

公小字也。

原文傳字、自非時人、未遽易說、說於解之乎、初

道鑑公時、守護代西宮貞阿、撰文治至文科、百六十年間、公室所世

位、古書五拾念、為之巨缺、而以斯十五日、及二十日、見 所賜教書

二進、非五千百三二、 為 右大將殿優文親等、自時而降、建元祿十年

大玄公時、入史田十間明、右 推播古語、為之註解、三年而成焉。然

十二年、林榮酒、入字頭、 有勝於

公空、君侯太社、為 右幕府庶長子、雖載魏說、在行平世、未知其

源所由本也、願諸君

公乃益附、德宮原本、及所世補三州守護下文等、附句解及謂略、其

年十月、長國明似、祭酒、祭酒之、大感悟曰、有若所獲、則世云亦宜

哉、真為解難、又與經乎、明正三月、祭酒為跋、則書 右幕府庶長子、

無是所疑焉。

為乃別令機諸曰平乎、曰是天下殆至無間、公室原自附者云、今其

解本、也行乎也、感亦皆得拜讀之、果如國明、博愛多識、有功平藩

可謂良史矣、今極其要、一二置焉、所謂、あかう所三郎をやうく、ニ

せんとむたると、ついでくしたるなり、口許多引假名遣、京師

及源氏語等、以詳解之、所謂二郎者、

公小字也、事見古今源、指

公則矣、公本 あく、爪印を言、加与古近、而字其韻也、故あかう、則

与あこと同、為、幕府指

公之詞、其可謂的解矣、但所猶曰方云、感此語、平山氏書、神代所謂保止、

則書火所、秀進保止、果在東都、今以傳古傳于世、故應亦有按撰、以

是錄之、所則也他、夕齋所讀、おかうと、假名遣為幼少、則与此同、

公亦雖幼、重忌微事為諸若人、為付別於幕府之議、今季安按安田守申狀、聖業日記、公室山來等、皆被是事、聽其所言、稱請東鑑、是役九月七日、書、從美字次由列八郎事、有各進御前之語、養和元年七月、亦永元五年七月等

御前子、多、拋此、上ノニハ、曰許雖為幼請、倭子御休、二之相似、疑處己也、而其義、則与御宿之御同、其下云云、曰許為專一義、愚意當是部也、蓋盛時稱幕府、謂之御前、猶今俗語、却詞似儂、或指政子、謂御前、亦猶巴御前例、而義亦与古觀合、而皆能通、又もの者、曰註為公、愚以為名字、必指重忠、今所引上、安國聖業之著此事、亦並以公為大將、且重忠為之副將、事見公室由來、拋此、

公為先鋒總督、而幼少故、使重忠付副、以應隊下者、明矣、是以東鑑惟載重忠事、至賦

公為先鋒總督於征奥之役、是則無他、實公尚幼也、若幕府假憚御前、公然使

公入親子數、則雖幼少、豈漏東鑑、親夫愛衣冠、与諸幼士隨、僅示異於其班列、可以察也、且從曰許、以者字為

公、則曰上之子、所謂氏余乎波、似不成語、以思觀之、蓋幕府意、言於真忠、則微為請若人於御前者、而為付副焉、特慎戒師、勿必犯令之義、却与古俗、似有通釈、抑愚淺陋、而於曰許、猥容喙、則雖罪大、百一微疵、不与隱微者、粗并于此、亦惟疑思問意也耳、凡此文体、則盛時筆、命、原公盛時名、下皆第一字、与重忠書、原云、言莊、可次、世、按盛時、姓平氏、

稱民部丞、右筆、幕府、見東鑑等、前此文治三年、十月一日、亦同此例、而有言云、仰盛時被遣御書於広元許、是也、然於公室、盛時奉書、雖他亦多、惟斯二者、則自道鑑公時、世珍襲以為、右大將殿倭文親筆、豈無謂焉乎、季安謹按、道鑑公、則

太祖玄孫而生於其後四十二年、文永六年、而二道道公公薨、則尚雖姪、年僅、二世夫人西忍君、薨于正治二年、則年既二十一矣、拋是觀之、

道鑑公之去

太祖世、未甚為遠、有因而知者、可以想也、其代官酒匂貞阿、缺為親筆、如前所舉、則幕府親書、託名盛時、以故曰時、世伝其夫、為親筆云、其必有所承、証憑莫明焉、是以林祭酒亦信古俗、且感幕府之教諭重忠、叮嚀親切、寔出乎愛慕

公幼之序然、特嫁之、曰嫁、右幕府手書後云、又按元久元年、十月十日、北条時政為幕府、實親、遣重忠之子六郎重保等如京、迎御台所、前此時政使其女婿親政、親信子、亦、上六角第、以繼京師、乃十一月、重保

与之關於其第、親政、親之、乃相与請重保父子於時政、事出、由是時政令重保父子幽於其國、親、二年、正月、姑婿時政、東鑑、重

為重忠等、請赦、許之、大重忠之於

道公、時年、為父終、而重保亦於

等怨、猶未可釈、尋見其書、今其善本、在露野天、亦貞阿、其年六月、時政遂殺重保、及重忠等、七月、奪其家領地、以班功上、東鑑、我不宗秩

父氏之先、亦曰重忠之宗兄重光、重光稱山太郎、年十九卒、生子季光季光孤弱、為重忠被養育云、今季安按東鑑、重忠死時年四十二、拋此、其始、從幕府、前承、當十七時、假令重光長之二年、亦時既逝、可概知矣、推此、重忠遭難時、季光當二十六七、則如家邑亦被没入、而潑泊者有年矣、生子季親、季親信仏、更名尊西、号因幡房、貞心三年、自元久二年、泰時執權、遂追念祖時政信濃、其殺重忠、而又有傳、特尊尊西、使為右筆、直於幕府、泰時、泰時、泰時、例在東鑑文永二年五月、而泰時、与

太祖夫人、古文書、曰、既有外兄弟、夫人、重忠女、而本田氏所出也、也、山尼御前此、泰重忠嫡妻、則時政女、而泰時姑母、屬故云爾、且夫人之於尊西、亦為從祖姑、而

道公及恩編等，皆所生也，故於尊西，則有從祖兄弟屬，於是乎，道得公公補守護於越前，使公子忠綱，往撰其職。

道公公，亦拜地頭於列之生都久安直富等，若西子時季，亦與有并筒城於其州，而與公室，世傳曰好，頗見古書，則又曆二年，六月，泰時復

道公公書亦謂，由若侯有緣於山殿，特念親近之語，或山田聖宗所請伊地知，福崎，中馬等之，臣於公室，本緣恩編居越前時事云之類，

古人徵文，雖難遽解，稍諸乘籍，以原終始，足概其耳，但時季自居并筒城，始守伊地知氏，而兼季，而季清，世襲右筆，且季清，則与

道義公同隊，而直博多館，見永仁七年引付等，而季隨，季隨稱彈正忠，亦与

道備公同隊直博，詳見前，至尊氏世，得罪，獄，初

公年二十一，喪曾祖母西忍尼，見永仁六年下引付，尼，乃

道公夫人，而尼之於，太任夫人，也，繼為其婦，她此，季隨於真忠，為宗後者，如

道鑑公，則謂識之，似有謂焉，於是乎，其恩也，

公請鑑勿回，尊氏許之，亦詳前，以故，季隨，康永三年，自越前來，巨

事于藩，乃封下大隅，特加寵進，後三十六年，康曆二年正月，伊地知左

田氏所獻之系圖，季隨之季清之兄，曰長德大夫長清，生男二人，右近將監重清

左近將監親清，又一郎曰清，而謂伊地知左近將監，則此親清，而於季隨

從父兄，親歷二年，從，

贈岳公，輔于金殿，賜其危，乃言

公諱，戰死征敵，令家僅得時能也，稱主，

公以脫請錄錄中矣，凡錄會札，每歲正月，必獻燒飯，別後班序，多分

日行，而元日，則自時政始，見正治二年，蓋時政，乃二位尼，父，而

威權無比焉，故以北条氏為第一，事見東鑑，我藩，先君行此札，亦悉微錄會，而元日，必自伊地知氏始，永為典例，

古續，秀次

雖斷所蒙，數以享天正三年，六年，上并日記，十年十二年二十四年等，年男日記

道鑑公之招季隨，則由其系系冷，大夫科人之終後焉，故謂北条，以伊地知氏為第一，亦可見矣，而家世

有云云，幕府賜重忠書，先世多獻，公室，然今斯二証，二十五，見下，實

賜重忠書，而與貞阿撰亦在體處後，則其所承說，亦非不合焉，故叙其所

世也，亦併詳此，以備異聞爾，

二十日，幕府入玉造郡，田卷衛城，泰衡既委城去，殘寇既降，於是

幕府且如平泉，而謀以為泰衡又叔故卒，則平泉城，其必發出，恐先鋒重

忠等，以塞兵徑進九十橋，乃成起，荒穢備取之口，汝等備備，各尚延錄

非整二乃，實勿乘勢，巨巨破之，此書亦原文樓宇，而貞阿所謂，幕府親筆二通之一也，詳見前註，然

後上方，則脫失云，而其所存文，及年月日赴，与東鑑合，但雖不言

公及重忠名氏，實其所論先鋒書，而京遷則載重忠等各說此書，如合符

節，亦足以証，公為先鋒總督於征奧之役者也，

九月，幕府遂破泰衡，二十日，效關土功，各行其賞，而重忠討意西郡

公乃補守護於若狹州，按安國中狀，

公封若狹，為征奧功，又聖宗自記，以若狹州為越前州，公室由米向之，

但賜首途云，並無年月，今按東鑑，則行征奧賞，多在此日，然不悉著

其姓名，蓋，公討若狹，亦在此時，昔候博識耳，

二十八日，幕府，班師，十月，自鳥津莊，從，公征奧者，北鄉斯太郎兼秀，請于幕府，求與并洛候，時幕府在滑途

不詳本狀，乃三日，使盛時，以其解狀，併敘，公亦在先鋒於其言故也，曰，彼從征奧，厥功可賞，所陳得美，宜令復之，

前所載十五日親筆，則幕府稱，公曰三郎，急遽不寬，呼其小字，誠是親近之自然，而猶稱其弟既為廷尉，

亦呼九郎義經例也。例在東鑑元曆元年、三年。而此書、則盛時奉旨、与

公親宗兵衛尉殿、是當時官名、而其略左字、說見下建久四年註、惟宗

之省惟、猶東鑑比企四郎、菅藤四郎、或乍者部類、定當後撰註宗八左

衛門人遣、新之例、而宗、則惟宗略、藤亦藤原略也。但此書、亦与

上親筆、能有暇心、足以証

公為將帥乎征契之役者也、

二十四日、幕府遣鎌倉、十一月、廢島郡司藤内康友、亦送將取、幕

府使盛時辨責、復原任、賞其功也、

(1)、解マシハルムラダシ、字典、誤文字稍同也。从羊祥在星下、尸辰也、

曰、相出前也、顏氏家訓、共鑑註也。皆由後人所釋、以讀、讀今、初屬切

集韻、初音切、並音辨

(2)、體小足略也

(3)、承元四三、則待奉三年之後、二十二年、謂之四時、似不切

(4)、類史、卷諸朝業列史、仁壽元年事、則作又滿實錄為可

(5)、此後府在盛朝、疑當躬身也

(6)、為莊司者重忠之父重忠也

(7)、振錄則謂振錄也、如此本文似謂振錄之食源、訛故

(8)、伯野曰

(9)、語意訛

(10)、病短二字、恐不當、当作致

(11)、太子當作世

(12)、禮

(13)、爪、爪印、禮語解也

管齋題考卷之中 終

管  
窺  
愚  
考  
下

管窺愚考 下

竹類志考卷之下

廳府 伊地刺李安 謹撰

建久元年、庚戌、

公年十二矣、三月、領家美公任右近衛中將、補任、為二年、乃志通公男、二月五日專、

時正五位下、凡以五位任之、性敏、

初立氏嗣世、使平八成白為地頭并濟使、

領救仁院、因号救仁院氏、既而為其弟安樂立九郎為成親春其職、至是

為成首謀叛道、其地皆係島津御注、料也、乃五月九日、幕府使使盛時致

公書、奪為成職、遷成直地頭并濟使如朝、二年、辛亥、

公年十二矣、四月、勅流佐左末定綱於薩摩、米子、其重教傳神入事、出

歲備案西瀛自宋、通心守山此、凡戶領至、引島津並奪往其貨物、為故事、

數更云、五年、藤原三守、為大寮少次、檢校唐人貨物、通海

記百宗等、以上帝、授從五位上、如新授與之、故稱後高、至是存伊豆藤

内等部、小忍等之者、在自等乃具狀、引三領家、五戶、領家以三鎌倉、

於是十四日、幕府使盛時以書命藤内遷還并衛如例、并紀無云、疑、上二

月、幕府開島津注人多推

公令、十一日、下文令悉遷之、且取成直職、使

公為救仁院地頭職、凡孩拾則、櫻田直、

三經、王子、公年十四矣、七月、十二、

先是阿多本地頭四郎五澄、覺解氏、至是十月、幕府罷之、乃二十、

日、使時政及盛時致

公書、罷宣階職、悉收其所領谷山、凡式伯職、其伯割拾貳町、公領、而番員

伊作郡、見上、日隆兩鄉、凡伍拾貳町、可參拾貳町、番員割莊、其餘拾

亦、及伊集院入口、所地頭、櫻田直、公、櫻田直、亦、櫻田直、

公為之地頭、凡式伯割拾貳町、皆島津莊寄部也、前此伊作郡、日隆北

鄉、茶子、南鄉外小野、拾伍、并為一田莊、凡式伯割拾伍町、詳文給

公乃併此、領其地頭、而如租入、地頭與領家、各分其地、以食之、領家

則置領家職、

公乃置代官、各全掌之、但半重澄、成、張、原北鄉下司、乃楊房覺弁為南鄉

郡司、多如故、

拋時政執達狀、建久國用帳、元德元年妻持下知狀、古城主記等、參拜書

此、按伊作郡、今廣河多郡、而為鄉名、蓋此也、北鄉到日高、今日日高鄉、

有日高兩田二村、此為其地、又南鄉、桐郡今永吉鄉、吉利鄉、即其地

云、而水吉鄉水古村、有領家屋敷址、及地名地頭所處云、今季安按、

其領家屋敷、蓋是運公所置焉、而地頭所、則

公所置焉、昔足以証當時者乎、

當此時、該島四郡宗家亦為同多地頭、領阿多郡久吉、凡伯割拾伍町肆段、

在日高兩鄉、為本名主、其餘在、加世田、村原、凡拾伍町、亦、凡式伯拾

町肆段、亦何多向置支邑、而係沒官領、蓋、

公不為之地頭、非島津御注故也、其領久國田原、及古城主記等、參証此、

見下章、山田利榮所記、除彼局云、亦謂是事也、詳

久七年、



四年、癸丑、

公年十五矣、前此、

公在鎌倉、其時年至正、幕府還自收待、富士

公之國、八月朔日、發鎌倉、道過京、訪近衛第、初重忠貞自總等之國、

攝行

公職、據古今略、公室由蓋如御在之在薩摩方、罪淺平治、島津汗衛、尚不

悉服、幕府既親下文、文治二或沒時政等屢申嚴令、以蓋新法、文治五年

前年十一月、然在官等、動至具狀、因陛下以誅鎌倉、前年於是乎、蓋基通公等

以為莊官猶未心服、

公雖夙成、尚為成童、進之請亂、恐未可也、況

法皇之在世、替為

公貌似高倉王、而特恤之、法皇猶公、古今戰則為是年耳、恐追替誤、法皇崩

而四州高、日新院緣託、書高倉王與在百年十月、處在也又世或疑、公為高倉王、

子之類、蓋言本乎世諱似云諱也、不如始令換而留京、以候壯時、當是之時

幕府既為右近衛中將、兼任夷大將、而基通公之子家夷公、則為右近衛

中將、擬大系圖、先是

公由少尉為左兵衛尉、見文治元又轉右兵衛尉、見文治五年奉吉

蓋基通公等、聽

公令以原任、事

後、後鳥羽帝於其衛府、尋為檢非違使、見新最為重職、謂之使所、凡為衛府

兼帶衛門兵衛尉、見藤原

按公室由來云、

公之西也、

法皇為

公貌似高倉王、而特恤

公、故

公朝、內奏、屢承寵恩、又按古今戰云、建久四年、

公反日鎌倉、訪基通公第、基通公及群卿、留

公令於內、而至於七年、幕府又促之國、如其留京為

法皇詔、則必有誤、既弁上註、是

後鳥羽帝時也、凡

公所叙歷官、則皆武官、而莫不皆於近衛府、(8)抑

公之國於京也、元曆元年、則年甫六矣、其年十月、

法皇賜基通公近衛等、與明年六月、

公任左兵衛少尉、蓋基通公既已舉

公、充諸近衛府生、而任少尉、似有謂焉、自時而後、幕府使益時等

公等、則雖曰宗兵衛尉、多省左字、按百鋪帥、凡詔左右兵衛等、則

左必如字、而右不說、只呼兵衛、為俗習云、擬此、未幾

公由左兵衛少尉、歷左兵衛尉、任右兵衛尉、故省右字、只書兵衛尉

可例知也、但繁宗子、則惟宗際、解在上註、又按建久八年國戶帳、日

向國權等所報呈、每為海衛莊、則曰地頭前右兵衛尉某、本昔亦為註

也、又薩摩國權據、及大隈國判官代等所報呈、亦於島津衛莊、則皆曰

地頭前門兵衛尉、而無稱建久中

公山東鑑、則其時

公必不在鎌倉、亦可知也、又當其時、基通公之子家夷公、亦為中將於

右近衛府、而右兵衛尉、則其屬官、而自此尉、多稱衛門、又為檢非違

使別當者、必帶衛門兵衛督、事見藤原抄、而

公為檢非違使、以預發祭、亦見新後撰、則準別當督、

公亦帶衛門兵衛尉、似有準拋、又幕府之生也、為義朝第三子、故名

三郎、因

公小字曰三郎、亦既取之云、而幕府之幼也、任右兵衛佐、平治元年、

且比時既為右近衛大將、兼征夷大將軍、

公取隨父、亦如例、擬是親之、古今戰、及公室由來等所載、則探

所自古世世說、雖誤亦多、至乎滑機而頗難弁、其必有以所徵於事記者

如合符契、其云建久四年迄七年、公仕于

大內、則親夫日向張、嘗前右兵衛尉、藤原帳、載衛門兵衛尉、及新後

撰集、或以後非遺侯預奏祭之類、足以參証焉、

公則於 幕府為庶長子、而於家實公亦有兄弟義、故遺其為大中將於右近衛府、相与奉

公令以右兵衛尉、仕于

大内焉耳、其職衛門兵衛尉、則方

公為檢非違使、必以帶之、猶為其別當者、必帶衛門兵衛尉例、在職可

併知也、但擁建久八年六月日向帳、書前右兵衛尉、而薩陽帳書衛門兵

衛尉、則六月以前、既為檢非違使、亦足極知焉、

公以檢非違使、与奏解、詳見下註、

凡近衛中少將、則每歲四月有奏祭、小西行之、為祭事第、故單言祭、則

解也、

帝勅之、使于賀茂、左衛門尉、位半里許、六府諸衛、兵衛、各左右亦往警衛者、旧典

也、見北野、山

公之仕

王職也、以檢非違使、往与其事、密亦家實公為 勅授之年數、

事見新撰撰集所載、惟宗忠良餘歌小序、原文云、祖父忠久、枕其講使

仁大祭主、太利計留事、忠久比天、加茂乃社仁与美民率列計留、又其款云、

越天新尊、志留之阿良世与、表草、加佐名流助波神茂志速之、是也、

致作者部類、惟宗忠景、為常陸守、乃同防守忠繼之子、凡所為致十八

首、載撰集云、按公族系圖、忠繼、則

公之二子、而忠景、以繼之第三子也、其系

公為祖父、亦与系圖合、無可疑焉、况新撰撰、則正安三年、大納言藤

原為世、奉

神、後子多上皇勅、至

神、後二條帝嘉元元年、所撰撰焉、

事、吉備後者嗣、尺素往來、則為後可謂明証矣、故原其

五年、甲寅、

五年、甲寅、

公年十六矣、本山貞親拓寺於山門、請僧榮西、為之開山、命曰感志寺、

之人宋也、文德將渡天竺、洋遭狂飈、反入温州、語虛龜敬禪師於万年寺

天台、三年節見卷之、授以信伽梨等、未幾、師自万年、往主天皇、西亦從、居

歲余、聞師有改作千仏閣之意、請曰、無路報恩、吾同主近屬、國司

他日回國、當教良村、以助之、師曰、唯、建久而痛、二年以祖父所管司地

築下感康、尋山際、不敢畏險、遂遊狗留孫、山名、本曰創刹樹恩、曰

端山寺、寺伝、榮西回日而日躋攀、扒材於山林、多伐百箇之木、以運諸海

凡其運諸巨材對動、西乃合乎己名、夫如其教、既巨材必輸、故今往往巨

杖者、尚舉榮西宋西、蓋于此、而名迹志、為創建仁時事、恐是開創也、清大船

數艘泛致之宋、意久而其至也、二夫成集、沿江截河、擊致山中、師大喜

曰、吾事濟矣、乃端工度材、列徑四十、多泅口水所致、余取其山、凡三

年告畢云、其事始於和應四年九月廿五日、則我朝建久四年也、事見於宇土樓前撰

云、太白名山、平天、而仙閣、尤為第、後世欲為之、其材

無及焉、蓋柱植、日本國色千光法師所致也、詳見大德殿公圖記、蓋

公歛其德、竟入禪門、号曰行仙、山匠望榮云、公号得仙、則為禪門名、而曰

語錄序、可、六之有禪宗、白榮西始、事見於長綱明禪師

公命也、據此、貞親之創寺、雖起於榮西來取材、蓋亦

按西之取材也、匪徒吾藩、前此二年、建久三年、建報恩寺於樂樂香椎

社旁、後此一年、建久六年、建聖福寺於博多、蓋皆有緣於取材故也、

然後建仁元年、

神、土御門帝及 幕府賴家公、特尊其德、創寺居之、勅曰建仁寺、

建永元年、主東大寺、賜紫衣、建保元年、擢僧正、三年、遣寺福寺於

鎌倉、七月五日、年七十五、號千光國師、

七年、丙辰、

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公年十八矣、幕府又促

公之國、於是乎、幕府亦察情由、 晏廷令之、在官任命、 乃親筆論

公曰、見公事由來、聖業日記等、然 遙聞御莊之降御業、任土地者、莫先於

梅北、若其上疏、 而司其莊御者、莫願於富山、東鑑、及詳 汝其就訓、

富山、疑是誤、 其必如父、而過梅北、亦必如長、 担如較島、別使

地頭於沒官領、詳上、 至其他十人、官督為汝家人、往飲故、

按公案白來、聖業日記、莊官上疏、玄兼日記、東鑑、看宿氏文書、古今等

參証為文、而聖業云、以三州家人、為

公家人、則明年十二月、幕府下文、 以

公為薩摩家人奉行、應言是事也、 又言較島事、按其為地頭於河多、則

為建久三年事、詳見其年、從此、聖業等所謂、親筆論

公云云、必必在此入部時事也、但以阿多忠景事、与之附會、則必時采

等任副親耳、

當是之時、領家公達公、亦蓋應莊官等不肯服從異姓人、凡既應

公為所子、乃遂賜

公姓藤原氏、令以親之、往在御莊、 六月朔日、聖業

公亮京、八月朔日、即前所記、 人部山莊、魏公案古語 於是若夫莊官首山梅

北之屬、雖口數於領家者、亦同領家賜差

公為其子、聖業以下公為所子、 尋賜之姓、是河津、 以服事于

公、由是、事見公案由來、

公乃命從臣等、嘗館舍於島津莊衙、謂之祝吉御所、

御所遺址、在日州津內兩鄉洲之內、市見聖業日記、 而其所謂、知內令

為田名、在都城安久村、一說、在中鄉那元河云、 那元河、即名島津、 則

安元年內、文所謂、島津莊衙、 是地也、解見上方壽中島津莊註、

十一月、先是、 基通公以按察、居散位久矣、 至是、二十五日、

詔改兩日、以兼表公退求、初秋源空、 建念公宗、僧官阿 淨光明寺主

公亦服之、是歲、創於慶島、 招宣阿為開山僧、因号淨光明寺、 亦聖業

氏傳念公宗、聖業動行、 聖島亦島津御莊寄郡、而係

寺曰聖島寺、是也、 公任之、麻內康友、 為郡司焉、其置寺、 案為地介於山門与在內間故也、

八年、丁巳、

公年十九矣、先是、 幕府置地頭於諸州莊園、使以巡察焉、 而於郡

鄉、猶或闕職、 故寺社及同司等、各所置群吏、 亦於闕所、動現地頭、 頗稱

難治、於是四月、 幕府有議、十五日、 教書令九州守護人、召在守有識

者、各報知其國日數、 及領土等、上月、 守護乃依令於三州權掾等、大防

按以、六月、 日向、薩摩、 大得等、報呈岡田帳各一通、 凡口向總出、捌仟

陸拾肆町、而所謂島津御莊、 則參仟捌佰參拾柒町、以其中式任式拾町為

一町在、

按羽田帳、北鄉參拾町、 中鄉拾捌拾町、南中鄉貳拾町、 教仁經伯陸拾

町、今志布志鄉、 即其地云、有權藤島、 中鄉流方所老師抄云、廣柳毛

町、草、 所謂櫻那、為近南領領官志布志二在土庫、 亦係於此處焉、同矣、 封部鄉

百五拾町、三原院庄拾町、 島津院參拾町、吉田庄參拾町、 進計為一町莊

或任式拾町、皆在諸島郡、 日本中鄉宿八下、無十字、 不合、疑胸、 又

島津院之宗、作破三、 恐誤也、解見上註、 今府所謂莊內、亦當時指此

一町在、後稍增邊、 僅存其名、可以想也、 而方壽中、宇治殿所置莊衙

亦在此島津院參拾町之地、因以島津為比莊焉、 如前所并、而島津莊、

必源院、故三州國司等所領公田、 亦多附之、凡附而猶奉司務者、 是

為寄郡、寄寄郡地、 必隔島津地、遙聽命於島津莊衙、 故如薩摩大隅、

則雖無其中必置津地、亦拘謂之島津莊寄郡、 凡寄郡地、三不輸貢、

見弘安七

年下知狀、而雖詳務且如前領、 同亦其終、至一町莊、 則所謂木莊、亦見

知狀、而惟弁莊務、 無資兩資、議見上文治三年三月、 四年十月、可併

等、皆指此地、而弘安七年下知狀、指地、由藏所謂、本莊者、領家一丁之地也、亦是也、又諸寄郡、皆所供本焉、故或謂之島津注出本、則火文十四、島津稱而上藥文所書、日州島津御社郡本是也、而至近世、皆島津字、只日郡本、解詳上乃幸中島津注註、

而所余、行御拾拾柒町、是為寄郡、

亦按國田帳、新名伍拾町、延喜式所謂、武典、疑此也、三丁名、皆曰來拾町

伊形拾伍町、大貫拾貳町、以上在白岩町、新納院拾貳拾町、皆上新

目、供納院、當時地頭、則掃部頭親能也、至是久九年二月、公督領之、詳下章、宮頭參拾町、以上在見湯郡、

繼院院參拾町、教仁院玖拾町、其幸院參拾貳拾町、以上在諸島郡、飯肥北鄉肆拾町、飯肥南鄉伍拾町、繼院院參拾町、以上在宮崎郡、通計

如本文、海郡肆既見上註、

公為之地頭、其他所剩、肆行式拾柒町、而於其中、有參拾拾町、係寺領、三行在陸町、係社領、廿柒拾拾拾町、係權田領、陸拾捌町、係沒官領、

貳拾伍町、係公領、而所謂寺領、則拾拾伍町、為寺佐跡助寺領、拾柒郡

參拾伍町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

陸拾參町、寫高參拾町、土橋太郎信綱、為之地頭、陸拾參町、為幸府安樂寺領

兒湯郡清水社肆拾町、屬高郡司、那賀郡江田社參拾町、宗通計社領、与上正

合、所謂權田領、則任伍拾貳町、為八條女院御領、女、母美禰后也、日

野御拾町、古田參拾町、飯藤陸町、龜河陸拾町、赤平五地頭、爾宮本御領、鴨

野御拾町、今泉參拾町、那賀郡那河式拾町、田島陸拾町、三云、亦疑院之領、說

既見上、鏡平伍拾町、兒湯郡土原壹拾町、傳木參拾町、新田拾拾町、下宮伍拾

拾町、通計行參作御拾貳町、是為一匹非、秘北鄉柒拾町、鹿野田伍拾拾町、通計

拾貳拾町、是為寄郡、總計如本、兒湯郡平那在伯

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

陸拾捌町、為沒官御領、田捌町、通計如上、亦信細地頭、或為信

内令入康友為主、光武伍拾伍、九郎大夫

國吉爲名主、通計正合、而公地頭焉

山門院住持拾伍町陸段、光則住

町陸段、平秀忠爲之院主、弁清使分或拾伍町、在權拾伍町、

前此是兼入道爲名主、時則通欠、通計正合、而

公地頭頭、別武拾陸町陸段、

係寺社領、併此

莫彌院肆拾町、又或光武爲之院司、十町伍拾町、小太夫

兼保爲名主、通計正

合、而公則進頭焉、日置西鄉參拾陸町、公爲之地頭、而加世田別府陸拾陸町

山田村貳拾町、千与宮總拾町、番屋後人石田入道爲名主、通計正合、而

公地頭焉、又別拾伍町、在村原、係設官領、以後爲山田爲地頭、併此、凡兩拾伍町、

本以、公爲地頭、必是誤也、又武拾伍

町、係社領、詳見、註、道前、爲伍町、知醫院參拾拾町參段、而、而公地頭

焉、又別玖町、米段係府

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

領、見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

見下、併此、凡肆拾町、

頭、別武拾參町、係府領、見下、併此、凡肆拾町、

內式拾伍町、爲益口莊、以係社領、本無參段、

堀田太郎光澄下、通計正合、爲一田領、而權拾伍町參段、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

爲伍拾伍町、

幕府下文、賜三郎、入山村式拾町、為首崎百原先日、亦賜三郎云

原奉妙、是為郡本、備切而脫田數、與建治賦律言、車良院以

拾町參段式丈、應國院割拾伍町段、肝付郡伯參拾町式段參丈、福原北

候肆拾町伍段肆丈、下大隅郡玖拾伍町段、始良西侯式拾肆町陸段式

丈、小河院內百引枝拾參町肆丈、小河水利拾式町陸段肆丈、曾野郡永

利式拾參町參段參丈、何羽野肆拾捌町伍段壹丈、通計是石陸拾式町陸

段伍丈、不與本文合、建治二年賦、曾野郡永利式拾參町參段參丈、別

作曾野永利拾壹町壹段、月村式町肆段、全濟使分參町參段、加治屋伍

町式段壹丈、通此所計、式拾式町參段壹丈、亦以併前、則為乘恒陸拾

壹町陸段參丈、此亦不合、孰必有誤、今藤田政篤、

亦併前、皆

公為之地頭、而所剩什式伍玖拾陸町參段、係正官領、

柳段、在小河院、佰拾參町玖段、在桑東鄉、佰肆拾參町陸段、在桑西鄉、參佰

拾壹町、在帖佐鄉、佰拾町玖段半、在津生院、拾捌町玖段、在吉田院、佰拾

町參段半、在加治木鄉、拾拾町、在福原院、陸拾肆町、在桑野院、捌町、在

屋院、在拾余門、在拾長、通計什參、於其中、伍佰町伍段、則為不檢、前

佰拾拾式町參段、與上不合、孰必有誤、於其中、伍佰町伍段、則為不檢、前

所謂、一內注是也、乘任玖拾伍町捌段、則為必檢、帳所謂、四方所當亦

田、蓋是也、又如帖佐浦生等、為半不檢、亦所謂寄郡也、而都頭親能皆

地頭、東鑑卷四年、其所謂掌吏、為官方御家人、詳見下建

而佰陸町半、為其公田、柳拾壹町、在曾野鄉、捌町伍段半、在小河院、拾出町

字、疑亦佰參拾參町參段、為其不檢、則似所謂、守田經請田、是也、拾

陸町、為府社五箇所領、在町陸段、在會於郡、捌町肆段、在小河院、捌

掌那吏、為官方御家人、亦見在

按岡出帳、薩州日三州總計田數、壹萬伍仟玖拾式町式段壹丈、而島津御

初

初

酒勾得實、道鑑云、以島江莊爭口限、事昭晰下文、又必永記云、

薩州日三於御莊、故謂島津御莊三國、又山田野原、島津莊乃社內

地、以在內懷三州之類、是也、所謂下文、則拾元曆二年、八月十

定公為下司於島津御莊、浮帖其文、以為三州總稱者、可見矣、而其為總

稱、則幕府意、亦在平使

公稱統領三州者、亦明矣、聖采自記有之云、三州兵強、御家人等尤誇

美、是故、幕府使

公容遲武威、以陰服之、亦併証也、

是歲、

公自山門院、徙居在內、謂其館舍、曰祝吉御所、詳見前年、

聖聖采白記、公采白采、古今職、繼漸社記等、但

公之就藩、自古諸書、多涉兩說、而其一、則為文治二年、又一、為建

久七年、今幸安按皆失誤、而似尚有謂、其於謂文治二年

公始就藩、則於五年、幕府賜

公書、曰宜來在兵、會于聖采之文、其既入部、從可証也、又所謂建久

七年入部、則拋古今職等、四年迄七年、

公住

大內云說、與新後撰等、有符合、亦足証焉、以是觀之、聖采自記、文

治二年秋、

公就國云、或又先至山門、自其而居島津莊始內云、或古今職、先住山

門、其後移在內云之說、並雖無年月、其所謂前者、指文治二年、而曰

其後者、指建久七年、明矣、何者、一則入部山門、一則入部莊內、故

公入部、自古相承、而說並云、亦可以知也、但公室山采、本田親恒、

先至山門云、則指文治元年

公拜下司之時、而

公至、則在一年後云、亦指文治二年、明矣、或由米文、因近衛殿云

公三州、就居島津云、亦莫指建久七年事、參此衆說、可以証焉也、

公之生也、狐火照噴、從者咸以為彌衡所殺、據安國聖采二書、

詳見上卷卷三、故其評京也

事見文十四 乃九月 年戶 地 創於島津 德以祀焉 因号

率而就封 年猶有上梁文 其社位 創於島津 德以祀焉 因号

島津權術 山縣與自訂 天文十四年 十二月 先是

公以終地頭等 入部三州 然猶在公神社 所各官職 如郡司 稅所 田

所 執行 政所 訂所 下司 名主 介清使 以納使之類 多為御家人

而附錄名者 數十百人 於薩州 則薩島郡司藤内親友 河辺平次郎通平 別

府五郎忠明 顯種次郎忠康 伊作平四郎実納 仙岩云 薩摩太郎忠友 知

覽郡司志益 一説 益山太郎光朝 薩摩四本 高城郡司藤高 在國司道友

本木藤 藤季太郎忠友 為本木清 長谷場原木 無以人 今從水

平太郎 名主 見其曆二年下知狀 引稱執台氏 及江白氏二本 莫備

郡司成光 山門郡司秀忠 給家郡司有清 指宿五郎忠光 東澤力場坊寬

舟 小野太郎家綱 南來郡司家房 瀧家郡司業平 宮里八郎正信

宮城記 藤季太郎 或作 一郎 伊集院郡司時清 和泉小大夫兼保 是為薩摩御家

人 事見 限州 則稅所藤原篤用 領會乃守 事見卷之四 重武參

郡司房 領會乃守 事見卷之四 重武參 山 桑東縣松永家町 通計式拾珍

酒井家房 津浦作宗房 延任行漢 領會乃守 小酒郡司 故式拾則

帆佐郡司高助 兼領公山陸拾 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守

秋松郡司 延任行漢 領會乃守 小酒郡司 故式拾則 領會乃守 事見卷之四

今本校政系圖詳讀 平良清 既兼此人 亦必此人也 領會乃守 事見卷之四

郡元行伍前 小北院 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四

元行壹町武段行步 禮儀郡司建部清重 領會乃守 事見卷之四 重武參

郡司下雖御家 禮儀郡司建部清重 領會乃守 事見卷之四 重武參

府以禮儀郡司入道建部清重 禮儀郡司建部清重 領會乃守 事見卷之四

清重必為郡司 而大道於其七年間 亦無疑焉 然小北院系圖 則以清重法師 為

司則貞 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四

志必二町 足為司方御家人 國司 即國司領也 政所守平 長大夫清道

息長進 源大夫利家 修理所酒井兼宗 領會乃守 事見卷之四 重武參

古山氏 源大夫利家 修理所酒井兼宗 領會乃守 事見卷之四 重武參

郡司守綱 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

清 矢太郎大夫連之 嶋四郎近延 始良平太夫良門 始良數領 社受得丸

也 並見上卷 執行大夫助平 新太夫宗房 亦季善宗清 小平太夫高媽

亦季善宗 小五夫 數很次郎延包 肥後房良四 領會乃守 事見卷之四 重武參

夫宗房 高信乎 數很次郎延包 肥後房良四 領會乃守 事見卷之四 重武參

三郎大夫近信 是為官方御家人 官方 正官領諸職也 而 幕府既浮帖

下文 解島津御莊之義 為薩摩日之總務 詳見上卷 領會乃守 事見卷之四 重武參

公為其總地頭 以在此等 然非御注者 善前往往或平 領會乃守 事見卷之四 重武參

公命 動至兩宿衛 大番 或略取人 或擄殺人 於是三日 幕令政所

別當因權守正元等下文 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

書曰 充實御國御家久 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

按東卷 以天野道景為鎮西九州奉行 或善之鎮西守義人 而酒勾貞

因撰目錄 亦載此下文 作大隅薩摩兩國奉行 又御家人等大番于京

皆隨守義人 例亦在東卷治二年 正月二 又鎮西地頭御家人 及本所

一曰地頭 皆宜從守義 立軍功 事見東卷九年 十二月 領會乃守 事見卷之四 重武參

道義公書 且此下文 有宜守護國山之語 地是視之 領會乃守 事見卷之四 重武參

公為大隅薩摩守義職 亦在此時 却似有明証焉 山田聖業所謂 卷府

花押下文有之 云三國逃頭御家人 宜為公下人亦必本乎此 明矣 所

謂下人 家人之誤爾 領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

日 汝京職 勿冤無事 如家人等 亦勿誇優 拒奉行令 既而 幕

必限明春 三月宿衛於

樞密印氏 江田氏家本 並有左衛門尉 而長谷場氏家本 則作備

公門兵衛尉 禮諸義勇出帳 首身之合矣 擬此長谷場氏本近是

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

領會乃守 事見卷之四 重武參 領會乃守 事見卷之四 重武參

丙亥、乃二十四日。

公移交諸君、以詢告之、蓋自隱隱家人言、而今日隱御家人言、亦必以在也、感承之誠耳。

九年、戊午、

公年二十矣、既移居於口之島津莊街、視吉隱言懷服其苦言等、蓋若隱隱

諸御家人等、亦莫不厭焉、繩上文移、於意乎、亦府賜

公島津氏、蓋本藩以島津為國姓、則自斯始也、

據按古書、

公稱島津氏、馬所竊見、則自本年二月二十二日或津伏始、而前年十二

月二日下文、則隱隱惟察其、又其月二十四日下文、亦只書曰、而未書

氏、如上所註、視此、迨

公屏於島津本姓、始以為氏、可概知也、又其始於島津氏、蓋必在乎八

年十二月二十四日以後、九年二月二十二日以前也、而古今戰事、亦

府謂

公曰島津殿、亦必言此時事也、又按聖宗自記、云惟宗所言、始居島津

稱島津殿、

公居其迹、故稱島津氏、又花押數云、右大臣顯朝子、維島津家、亦

承聖宗說乎、先史田中國紙云、自

公以前、無島津氏、今從其說、惟仁煥考證、

前是、日之飯加南鄉、拾拾、真平院、拾拾、穆佐院、參信、隱之河家院、拾拾

青里院、拾拾、各處之郡司名也、而隱之曰隱郡南鄉、原文無郡名、視

唐臣院、拾拾、各處亦清使名也、皆係島津莊、又日之白村郡新名、至者

浮月、拾拾、尾湯郡新納院、拾拾、亦雖同寄郡、新名以下、掃部頭總能為之

地頭、又佐澄者領地於莊內、本無地名、按隱州國田帳、入山守則守于

公、則其強地頭於島津御莊、猶原有關焉、至是二月二十二日、而於

使時政贈

公書、悉以告之、書曰島津左衛門尉殿、

公呼島津氏、見于古書、蓋于斯始也、初久米乃次郎家慶、事、亦府而無

子、故家願請以所領佐弟忠重、忠重尚幼、隱內展友領其地、所在未詳、而康

院不增、五町、見前年

國引帳、據此比地乎、皆

公任所也、至是九月復致

公書、使按察之、書曰島津云云、亦如前例、蓋居於莊街故也、

十年、己未、

公年二十一矣、正月十二日、幕府、將軍、將軍

勅改年号、為正治元年、

二年、庚申、

公年二十二矣、往等、幕府於鎌倉、癸丑年、二月二十六日、賴家、壽

公東掃從焉、左衛門尉、蓋公或貞隆、則自斯始也、

建仁三年、癸亥、前二十二月二十五日、

公年二十五矣、先是、幕府、公、賜、六郎重俊、下文、使、領、隱、之、補、南

俣四谷町、係正領、而重俊、蓋南長地頭、而於郡本參拾町、以建、部、清、重、為

之郡司、如佐次拾町、理上為、亦、隱、建、部、清、重、為、之、補、南

重延、益、代、重、俊、父、兄、重、禮、地、頭、於、南、俣、院、而、重、延、卒、於、是、乎、爾、後、郡、司、可、將

重入道如鏡倉、求、補、重、延、隱、乃、七、月、三、日、賴、家、花、押、使、時、政、命、清、重、法

師為南俣院地頭職、當、此、時、

公在島津、故、二、十、三、日、清、重、將、飯、時、政、乃、致、公、書、令、以、諭、之、居、家、人、奉

行故也、初、賴、家、納、能、員、之、女、上、若、生、子、一、万、外、祖、能、員、欲、立、之、以、飯、其

感、八、月、政、子、隆、家、二、十、七、日、遷、諸、豆、州、乃、岡、向、日、城、公、其、弟、千、晴

小字、關、西、三、一、幡、調、東、二、州、能、員、聞、而、辨、他、陰、謀、滅、北、条、氏、政、子、問、知

以台時政、乃、八、月、二、日、時、政、使、天、野、遠、景、等、殺、能、員、及、子、宗、員、等、四、日、

公亦連坐、罷、薩、隅、口、等、守、職、東、條、

公於能員、有、義、朝、屬、三、年、下、註、時、亦、在、島、津、而、無、行、焉、十、日、政、子、遠、景

三年下註、時、亦、在、島、津、而、無、行、焉、十、日、政、子、遠、景

公於能員、有、義、朝、屬、三、年、下、註、時、亦、在、島、津、而、無、行、焉、十、日、政、子、遠、景



千斷、立幕內後、恐世且乱、乃時政發書、命役

公等原任、上月、時政遣武藏守朝政如洛、宿衛京都、三口、朝政赴之

故又飛檄、備徵西州領民者、各皆如洛、與護京師、亦見

公在島津、玩弄能員察、又會徵至、乃將猪行、而心猶豫、於是十九日、

拒書、告稱於隅之末集院、今清水台明寺、曰、方今如洛、無事得還、宜作不至

參問、以酬仙恩、豈而赴之、至則無事、故

公反自洛、遂作之云

事見願言、但旧說、則為至鎌倉、今稽願文、有上洛語、則與貞鑑本月

三日朝政上洛事、如合符節、然至鎌倉云、非遠願文、恐無稽爾、故從

東鑑、註嫁傳識、且是歲、

公年二十五、俗所謂御厄年、而遭比厄、她是觀之、今世流俗、值此年

者、必禱神仏、亦於西瀆、蓋首于斯也、

先是、

公居押領使、而如下大隅郡、鹿野院、串良防、小原別府、指北俣

位我維、或序為、肝馬郡內浦、此云得分米、、亦係其所

領、至是、十一月、領家致所、更有所議、十日下午、使委區、按富山系圖

行次稱、有三郎左衛門義弘者、疑此、皆追輸之於京都、無野神田、藤良勇、義

人、而日記所謂、富山為父、亦此云、福氏文書、四年、甲子、

公年二十六矣、正月十八日、御莊院所、蓋指島津莊、下文、令於郡鄉院、如前

年下文、二月、

勅改年号、為元久元年、初

公之地頭於島津御莊也、遺代官等、徵輸歲租、、義弘云、與人令伊、至秋補

然莊官等、動至与之交爭其租、地頭分也、、稱者、蓋指、即今地子、此云、

公、乃告于鎌倉、定地頭人、此云得、曰、於木莊、則段別壹斗、

被田令、凡田長二十步、分米、、曰、、於木莊、則段別壹斗、

又該解云、東稻、春得米伍升、拋比、、穀稻二束二把、則壹斗壹升、

正三位以上田租、亦同之、然本法、段別壹斗云、比諸田令、、則知鎌倉

升焉、

如寄郡、則段別伍升、當租稻壹畝、則弘安九年下知狀、所謂、、而別則藤原

冬奉拾町、日向肆拾町、正三位上、、以許地頭、為用作田、通為忙町、如其何

町、則段別壹斛貳斗、至若其他山野狩倉、亦各分其堀、是為地頭分、乃

五月四日、鎌倉執權、下文於三州地頭等、令遷是法、、知狀、及比志島氏、

滿保二年十二月八日武藏守等下知狀、、是正治二年一月、所謂願租之類乎、

今日矣陰下知狀、

今幸安、生平六百餘歲之下、按建久八年區町帳、以遷是法、則島津御

莊、日向本在式任式拾町、以其中拾町為用作田、以段別壹石貳斗計

地頭租、此云地頭、為肆佰捌拾石、而所余本莊、任玖拾捌拾町、則以段

別壹斗、計地頭租、為玖拾捌拾石、又寄郡任捌拾拾町、以段別伍

升、計地頭租、為玖拾捌拾石、薩摩本莊、陸任參拾伍町、以其中

參拾町、為用作田、亦以段別壹石貳斗計之、則地頭租為參佰陸拾石、

而所余陸拾伍町、以段別壹斗計之、則地頭租為陸拾伍石、又寄郡任玖

拾伍拾陸町陸段、以段別伍升計、則地頭租為玖拾捌拾石參斗、大隅

本莊、梁伯陸拾町、以其中參拾町為用作田、以段別壹石貳斗計、則地

頭租為參佰陸拾石、而余本莊梁伯參拾町、以段別伍升計之、地頭租為參

佰陸拾石、又寄郡梁伯拾伍拾陸段參丈、以段別伍升計之、地頭租為參

佰陸拾柒石玖斗壹升伍合、凡三州本莊、總計參任肆拾伍町、於其中、

任町則地頭用作田、而其租為任式拾石、所余本莊、參任參拾伍町、

其租則為參任參拾伍石、又寄郡總計、肆任肆拾玖拾玖段參丈、

任柒佰伍拾玖段參斗壹升伍合也、但當時、六尺為步、參拾陸步為畝、

參佰陸拾參段、參斗陸拾步為町、蓋和制也、後降文祿、京命草制

步增參寸、又降慶長、增之五寸、而以降尺伍寸為步、參拾步為畝、則

畝之一步、較今之一步、方減伍寸、而今之一畝、較古之一畝、亦減六步

故隘古畝者、陸分差厘肆毛等、其徑至段、亦猶減古者、陸步差分肆厘

伍毛者、又其至町、亦減古者、陸拾、、即為、陸步肆分伍厘伍毛者、推是

觀之、三州總計、雖如華右、古之町段、廣於今者、如是、則古之計田猶有所益、從可知也、然

公所食租、姑從古田、以按算土爾、今也日減腐那、而立封建制、白

是列國、皆世襲國故如祖法、亦家所制、而我、藩今租法、則大抵石別

所入參斗伍升、及役米貳升、代米壹升、感米壹升壹合、該以古租、

推今法、所謂陸行米伍拾玖斛柒斗壹升伍合、則今稅額壹萬陸仟玖佰

捌拾肆石貳斗捌合伍勺肆撮之入、而似租甚微、然稽時勢、則當時既王

室雖衰、其故家遺俗、流風善政、猶存者、亦府縣業、殆乎成、亦難

變遷、則東鑑曰、地頭職、勿如私邑、見文治五、若遺領家、宜謹其職、

亦見五月、多如此類也、且按綠令、正三歲食封給百三十戶、猶以役令、

凡封戶者、皆以謀戶充、調庸金給、而二分田租、其一入官、其一給主

云、若夫忠仁公、詳見上

齊清和帝時、以外祖戚、封三千戶、知足防忠實公、亦詳上

群、崇德帝時、封三千戶、皆、待恩而所罕有也、今地頭井兵數、以三十

二戶、充田二町、計之町積、則雖三千戶、猶減百町、匪昔本邦、孔子

大司冠祿、亦為今陸行陸拾柒斗貳升、可以知古者王制、與今

懸隔也、地定觀之、如

公所食、則於當時、既知豐薄、超乎古制矣、況不但三州地頭租、至若

三州守護領、及伊勢若狹越前信濃等、亦於其所食多焉乎、自時而後、

王室稍衰、天下兵權漸歸、政柄遂移、出自執權、繼之以元弘、

而南北分

朝、群雄割據、勢分地、強益強、於九葉、則大宰少貳賴尚等、聽尊

氏命略地襲兵、遂成其罪、如日之島津氏、及道實莊、亦多係其氏國、

今按比志高氏藏書、其舉足列氏屬國也、於目前則曰、國言莊、按延久

在尊崎、那珂、尾崎之三部、凡、日島津莊、是也、治其領之、國曰

千五百二町、皆係八葉女院御領、一作人、秀信、居任於島津莊總政所、以掌口之正事、由是、秀信聲振遠近、

屬也、

按是領家政所、而降其氏、在尾崎郡、建武二年、尊氏別御莊、十二月、教書使島津

亦未可知也、詳後考、時人為地頭於新網院、在若果郡、如藤佐院、在若果郡、為御台所湯谷邑、

是月、八代城主伊藤祐成、藤內左、等、必護其具、劫掠隣近、十三日、

進入國常莊、二十四日、收獲你院政所、三年、正月、島津莊總政所、

即前所傳、按藤所址、恐不存、本莊內所遺本村也、按甲斐重則筆記云、天正

六年、我、已則公、馳服日向、向島田縣、尚云悉殿、故父言向、乞兵平之、

公遂其地、以軍備為地頭、使領山代半島知重、十六村、則有白赤麻村在其中

矣、秀信等所再總政所、廢後各名、同為其址、亦未可知也、恐同請延所人、尚

係藤所、及本州守護代安隆、姓氏、等、告急於大空少貳、二十五日、少貳

乃使羽月元真、通影右、等、募兵伐之、與野田縣原氏文書、及日

莊領家、則、近衛基通公六世孫、關戶經基公均、四年、五月、經忠公

備國守、經忠元年、昌口直顯、收新網院、亦隨之、二年、二月、尊氏

又以島津資久為白井院地頭、文和元年、四月、兼府、詳見、教書、賜資久

高崎郡等、島津資忠、莊內北鄉三百町、前此、西頭取新網院、祐成取

穆佐院、各拋之、至是、二十九日、幕府賜島津族人書、使俱伐之、八

月、關白經忠公、是為堀川殿、為尊氏被奪御莊、亦必在斯時也、故

欲復之、而無

南雷可見矣、凡島津御莊領家、肇於經忠公、諱平經忠公、歷世十三、

自万壽元年、迄文和元年、其代經議三百二十九年、而所謂十三公、則

宇治關白賴延公、莊官三疏所謂、宇治關白家是也、而京極義政師笑公、

而後二條關白師通公、而知是院忠實公、大隅關白權所謂、保延年中建

新府者、按大系圖、則此公也、而法住寺忠通公、而六系某公、而

普賢寺基通公、雖有幕府下文、及莊官上疏等所謂、島津莊領家、多指

此公、而我

得仙公之御契父是也、而控隈關白家某公、而尚關白兼經公、而深心

院基立公、而淨妙寺家基公、建治二年、石鏡地賦所謂、島津莊領家近

靈殿、今推年世、則此公明矣、而岡本左大臣家平公、永仁五年、

七月、執權與相兩守、与

道義公山田 查所謂 島江莊本家、及應長元作長元、合峯山嶺路所謂、關

白證下、皆當此公亦明矣、而堀川關口經忠公是也、而公之子曰二叔經

家鄉、凡近稱宗後、至此鄉約、而今近稱經、則出自家半公弟後淨妙寺

經平公、而基嗣公、而道嗣公、而兼嗣公、而良嗣公、而云嗣公、而教

基公、而政家公、政家公至準三后、文明十三年秋、進太深祖田、突

使於藩、乃我

門至公、特遇待之、十四年春、辭職、事見漁唱、杜蕃 書曰準三官約

旨、或曰大相國釣命、稱執系函、皆指此公明矣、而尚通公、永正九年

洛人集松、稱傳 稱傳、詩、勸之京、其序云、君侯一世、分亡藤

相國、而人游京、為可惜焉、亦當公時、所謂分自相國云、則追言彼基

通公賜

得松公姓藤原氏事、可見矣、於景平、尚江公區賜

大翁公書曰、書、求情曰好、雖然、

公時三州大亂、至其孫位於

大中公、而 梅岳君與

大中公、伐之、八月二十八日、年賜、於 尚通公又賜

大中公、書曰三郎六衛尉 書、益催之、開歲、義 晴納尚通公之女、為

御台所、天文五年、御台所生男、月 是為龜輝、當是之時、新納忠勝

近江、守 守

大翁公、亦振兵威、以故四月、尚通公又賜忠勝書、其大次進藤長美、

守、亦奉旨、皆廿 日、遭世亂劇、如家領亦為人被奪者、有年于

此矣、近西幕府、既奉節君、家門昌盛、天下安泰、莫善於斯、今而不

與、殆將衰絕、抑家門之於貴邦也、由緒異化、故使九沢軒特備曰好、

與以謀善、而其賜書、親加花押、今奉安禮請花押款、則公花押、無可

疑焉、且長美書所謂、禪問亦指公、明矣、而種家公、種家公時、聞三

州多仰

大中公為中興主、乃十四年、遣日野資光來賜

公書、及守護東帶、以勸之、二年十一月、又勸幕府、賜名世

子、其明 公、以諱龜子、晦日、幕府手書許之、二十一年、賜下賜

公及 梅岳君、欲遣使京、問古市甲斐守 出羽上人、嘗游京師、尋歸

下知、乃使國老伊集院忠朝 大和 守、守 守之於種子島、時甲斐老矣、故使子実

清 松長門守、 代經乃、於是

公遣表清如京、使於殿下及一色式部大輔、六月、表清至京、為

公私請復爵、殿下以聞 幕府、乃十一日、幕府釋

公任修理大夫、且賜 其明 書、因是二十七日、殿下賜世子書、

及太刀一口、賀之、此日、又賜 梅岳君、及輝山善久 安美、 書、且發 君小

護 色 三十六日、善久二十日、皆言由緒異化、宜縮曰好之狀、二十八日、進

善久書、七月三日、又賜表清書、特勞之、九日、半松齋宗善亦致書、

藩、山是 世子名曰義久、而前久公、永祿七年、前久公及父殿下、為

公及 世子、請官途於

正親町帝、乃三月、宣旨以 公為陸奥守、舉世子任修理大夫、小字又

乃殿下脫新納忠元 武藏 書、使予告之、天正四年、前久公來宮于藩、

賞明公札待授簡、而信尹公、信尹公時、 豐太閤西征、

賞明公身之成、而及

松齡公

慈眼公代朝于聚樂、信尹公皆加寵遇、文祿三年、信尹公及太閤不善

四月、太閤放諸西藩、其共居坊 薩之 也、交通愈深、於是乎、關原亂後

殿下為藩竭力、成乎

神祖、然荒井氏曰、藩之與殿下交通、自前久公屬於藩始云、殊屬無稽、

不足為耳、而信尹公、而尚嗣公、而基照公、而家照公、而家久公、元

祿十三年、基照公等、因藩之

太祖以來交遊既久、欲為家久公聘

大玄公翁主、名龜、使遠光院先施字

公乃譜、十二月、以聞

額府、額言、許之、寶永二年、嫁立兼中、而未幾兼中薨、年十、是為英光院殿、三年、家照公復欲為聘

淨國公翁主、名滿、亦尋請之、王德二年、嫁為兼中、五年、兼中庶女延

君、亦未幾薨、年十、是為光相院殿、享保五年、延君薨、天、是為源松院殿、而內前公、內前公、納尾侯翁主、為兼中、則

慈德公所許嫁源池夫人、名房、而孫繼公、名房、則

額府、家齊、納我

三位公翁主、名茂、為御台所、經繼公予為猶女嫁之、而基前公、基前公、則今

御台所發兒也、而忠繼公、是即今殿下、而美我

老公、深山、之女婿也、抑自方守中建島津莊、到三、茲、天保四年、得八百

有十年、然方中突經忠公時、為足利氏被奪其地、如上所叙、而我

得仏公、則自基通公時為下司於島津御莊、尋為惣地頭、又拜守殿、而

逝鎌倉、連室町、歷聚樂、迄東都、其世不絕於薩隅日、況室町時、

命  
大岳公、被值義於日之福島、幕府議教褒賞其功、益封琉球、附庸於

島津、永以為宗國矣、自文治元年、到于皇統、天保、六百四十九年、而

至  
今公、齋藤、計其世、則二十七君、其世并親於殿下、及

額府、亦猶如是、實可謂千歲無窮

右幕府造種地、而離万世、享其祀之國也、

(1) 註即天野遠景云

(2) 大  
莫不皆於近衛府云々以下文意不穩、以六衛府混合為說、六衛府職掌各異

(3) 合職辨、職原抄等、有明証

(4) 為世定家會孫為氏子也

(5) 院宣

(6) 以當作能

(7) 捨物之間、疑隨町字

(8) 疑疑

(9) 世襲侯爵四字不穩、今改文曰、自是死同、租法不均

(10) 引孔子云々之文似無用

(11) 後更名忌廟

管窺愚考 卷之下 大尾

管窺愚考 附錄 完

管窺愚考 附録 完

管窺愚考附録

此卷ハ、本篇を讀まん人、座右に備へて、引書の際手に応じ、時々披き合せて、其証を取べし。

廣府 潜隱 平季安 纂輯

上卷

○天平二年、三月辛卯、太宰府言、大隅薩摩兩國百姓、建國以來、未曾  
遊田、其所有田、悉是墾田、相承為佃、不願改動、若徒遊授、恐多喧  
訴、於是隨旧不動、各令自佃焉、

○延暦十九年、十二月辛未、加造宮大造一員、是日、取大隅薩摩兩國百  
姓墾田、便授口分、  
延暦式二十八

○大隅兩、臥馬、蒲生、火水、  
○薩摩國、臥馬、市来、英禮、納京、市来、英  
田後、野、各五疋、  
○櫻野、高来、各五疋、  
○日向國、長井、川辺、刈田、美禮、去飛、足邊、当崎、田敷、麻敷、  
各五疋、  
○武里、郡田、野後、夷守、袁所、水俣、鳴津、各五疋、  
長井、川辺、刈田、美禮、  
去飛、野後、夷守、袁所、水俣、鳴津、  
野邊、去飛、野、各五疋、

(一) 季安按、蒲生は、始羅郡今の蒲生ならん、大水は、大隅郡の今の

垂水歟、詳ならず、市来は、日管郡今の市来ならん、英禮は、いに

しへ、英を、アクとよみける微ありしを、中むがし知らずや、莫爾

と翻れるならんと、山田清安語れり、今出水郡の阿久根なるべし、

納津は、網津の誤りにて、今高城郡水引に遺れる、網津村ならん、

機野は、薩摩郡、今の種福に遺れる、市比野村あたりならん、高来は

今高城郡の高城を、かく作れる歟、田後、道の後、また江戸人の

姓、補後などのよみ例にて、田尻とよむならん、今伊作に、その村

名あれども、駅家をおかれし地なれば、今遺れる名のみに泥むべから

ず、路程の遠近、また方角の当否をも考へ、重て註すべし、日州の

地名ハ、本篇にかうがべおけり、

○承和五年、五月乙丑、安芸、言管駅家十一起駅家別、駅子百廿人、山

路險阻、送迎繁多、良倍他國、勞逸不等、始自今年、減公廩、頒加、

奉三万二千二百束、以彼后利、充給駅子等食、許之、

○百練抄云、延久元年、二月廿三日、可停止寛徳以後新立庄園、縱雖彼

年以在、立券不分明、於國勢有妨者、尚停止之由宣下、閏二月十一日、

始置記録所庄園券契所、定寄人等、始行之、

大日本史

○後三条天皇本紀、延久元、己酉、二月二十三日、庚申、赦寛徳二年以

後新置庄園、一切罷之、雖在二年前、券契不明、有違害者、宜停止焉、

扶桑略記、百練抄、閏十月十一日、甲戌、始置記録所於、大政官朝所、

神皇正統記、

○又管抄云、延久の記録所として、始て置れたりけるハ、諸國七道の所

領の、宣旨符もなくて、公用をかすむる事、一天四海の巨害なりと

問食しつめて有けるが、此ハ東百と坐しほどの事と申せり、此すなほち宇

治殿の時、一の所の御領くとのみひて、庄園諸國にちて、國々

のつとめ地がたし、など云を、問し食し持たりけるにこそ、さて宣旨

を下されて、諸人の儀知の庄園の文書を召れけるに云云、といひ、  
此に文書と有は、風土(5)  
記なるべく所思たり、

○又鑑古事談に、帝即位ありしに、秋の納にも及ばぬに、世の中なほり  
にけり、始めて記録所を置て、詞々の姿を直されたり、延喜大曆以來  
には、誠にかしこき御事なり、此時より、執柄の権抑へられて、君  
づから政を知り給ふ事に帰る云云、又云、東宣の時、天下の政をよく  
く、聞置たまひ、御即位の後、さまざまの善政を行ひ給ふ、其中に、  
諸國重任の功といふ事、永く停止せられしに云云、  
此天皇より前、治暦元年、七月一日、

中國に下されたる官符に、案云、延喜二年、五畿七道諸國符云、  
此止前前任中以後新立庄園云云、符寫抄に見えて體あり 左位四とせ云云  
又註、延久四年十二月、第一皇子白河院天皇、八歳にて御受禪あり、  
後三条院天皇御臨之の事もおはさぬに、三十九の御年にて、八歳の皇  
子に御位を譲り給へる事、秘けき故ありける御事なるべし、藤原の臣  
人たちの、甚く威勢ありし頃なりけり、

□ 季安群言一覽に考ふれば、辨白事談は、写本三卷、書体は古事談に  
同じとあり、百鍊抄も、写本七卷、記者詳ならず、大治季安文曆  
の頃の事共記して、奥書に嘉元二年正月十五日、以大理定房御本書  
写、校合畢、貞頼とあるとぞ、愚管抄も、写本七卷、慈鎮和尚の作  
にて、總代より當代まで、君臣の事跡をしるし、東鑑と參考して、  
益あることの甚見ゆ、尤卷首に、慈鎮の自序あるといへり、本府にて  
此三部を探れども、所蔵の人なし、右の註に、平田篤胤の、詮人儀  
知の庄園に付たる文書を、風土記ナルべくおもふといへるは、季安  
心得ず、(7) 序宣、また八立券状にこそあるべけれ、本篇の、文治三年、  
四年に、併せ知るべし、

庄園實百四卷 庄と申もの、言にハ既え不申候、中頃より相聞え候て、  
庄官庄司  
など申もの、別當を置なご申候事、相聞え候、東鑑の中、こゝか  
しこに、庄名多く見え、當時諸國に、庄と申もの、散在仕候、郡にも  
あらず、郷にあらず、其地界も、今ハたしかならず候、昔庄と申も

の、出来たることの起り、如何御座候儀、答へ今知行所と申す其起  
りに候、庄は俗字にて、莊字にて候、誤會に舎出と、又正字道にも、  
唐崔暉知貢舉婦、妻袁問令置田、辨曰、我莊三十所と、廟ハ説文に、所  
以樹桑也、今案に、莊園と申候ハ、其始め人の譲たるか、又私に買得た  
る地も有之候、以不封地賜田和莊園、さるによりて、新立莊園など、  
申候、末の世に給ふ事を得候へども、先生の法にあらず候、故に地は  
広げれども、俗に下やしき皇屋跡など、申こゝるにて、庄園と申候、  
此起りにて申すなり、事長々しく、まづあらまし申入候、我邦上古の  
三制、季唐均租調之法也、以河計口、以口班田、言ハ、一軒の家にて、  
一軒に、主人以下、子弟奴婢十人なれば、十口と立て申、一口に付キ  
田を賜り、男は田二段、女は減三分之一、一段の田に、稻五十束を得  
申、束を齊て、五升を得るの山、令義解に見え候、されバ、尊ハ太政大  
臣、卑ハ奴婢にても、おしなべて二分田を受け申候、口分の租ハ、一  
段に二束二把を出して、男は九十五束余を、一人の養に給り候、是に  
よりて上、貧富ひとしく、その中尊は用途ひろきゆえ、位田封戸等の  
品を立て、不足なき様に設け置る、大法にて、其位田職田等も、封  
戸とて、みな一段二把の租を出し申候、位田とは、五位以上、  
位階に依て、田を給り候、令に、正一位一町と、此類にて候、職田は  
大納言以上は、職重きゆえ、別に又田を賜り候、令に、職分田太政大  
臣四一町と有之類に候、封戸とハ太政大臣封戸千五百戸と申す類に候、  
前に申候、千五百戸を給るにて候、封ハ、封地封國の字の意に候、如  
此なれば、上は爵位にして足足り、下は豊饒にても、暴富驕奢なく、  
國治り、俗うるハしく候、此外に賜田と申もの、是ハ令曰、凡別勅賜  
人田者、名賜田と、此田は、后妃湯沐の料、功所勤勞の口にて候、令  
所謂大功世不絶、上功世三世など有之、皆その限り有て、かの位階職  
田も、その身没卒の上ハ、返還申候て、収公す、口分も死没して収公  
す、又あとより出生出身にて世絶す、仍て班田の法は、六年一廻と、  
令に見ゆる、又輪流子田と申もの有之、しかるに是ハ、公私雜用の外、  
多く余りたる田にて、是を民に授て耕作して、其租を奉るなり、此法  
は、毎箇品差不同候、これ延喜の定にて、此田も六年に一度返還す、

ケ様なれど、案に六十六州雄を立る程も三口は無之候、凡三制は、殊  
 の外上誓ひゆえ、おのづから政ゆるまり、班田の法も怠がらになり候、  
 かの后妃湯沐の料を、外家に譲り給り、功田は子孫守に施入す、惠実  
 押勝大職冠の功田を以て、山階寺維摩刹に施入する事、國史に見え候、  
 かの后妃湯沐の料の、外家へ授け申てハ、湯沐の所とハ亦じがたぐ候  
 功田も施入の後ハ、寺にて功田とハ申されぬゆえ、かの出やしきと申  
 ずやうの意にて、是を庄園と名けて、後々ひろくなりて、親へ庄園多  
 くもりてハ、富有なれバ、近隣の庄園を買得て、豪民國々に出来候、  
 富ハ益富き、實は益富にして、豪民國々に買得て、豪民國々に出来候、  
 宋徳の事なれども、伊藤祐規、くすミ河津の荘守候も是なり、一端  
 の例は申候、かやうなれバ、下民奮事候故、後朱雀院寛徳年中に、  
 新立の庄園停廢の立下有之候、ゆえは無届民の由なり、後三条院延久  
 の初政に、記録所を置くも、この停廢のこと第一の議なり、其後代々  
 の聖王も、政の第一ハ、此事のまなれども、跡々より止ミ申候、こ  
 れを申せば、下官先祖の事をそしり申候に似候へ共、下官が先代にか  
 りにもあらず、多くの人のことにて候、往世執政大巨も、とかく田地  
 を賣るゆえ、辭にハ被停廢の事を申せども、忽に失儀ある申なれバ、  
 何かにことつけて、この庄園をはなち申候、しかのミならず、尚新  
 立を企申候、延久より長承までハ、六十年許にて、知足院關白、宗忠  
 公に談せらる事、中右記に見へ申候、此より甚しきハ、後々の人主  
 停廢のこと宣下せられながら、御親位の後ハ、院の御領と稱せられて  
 定れる御封の外に、田園を貯へられ、刻へ御領の後、遺命を以て、男  
 女親王にわかち給り、得頼の女房學敏、侍女官等に分ち下され、是を院  
 の御廻分と申候、ケ様なれば、庄園常になりて、争論出来候よし、旧  
 記に見え申候、元久の頃、京極黃門定家卿の所領、江州吉野庄を、三  
 位局に據られ、度々訴訟に及候事、明月記に見え候、如此風俗になれ  
 バ私領と申候こと、いよく盛になり申候、義家朝臣、武衛家衡を撃て  
 三ヶ年戦ひ、勝利を得られ、勢に乗て、東國の豪民を麾下に招かれ、  
 御家人を建らる、義朝平治逆乱も、是よりひびきたると被存候、頼朝  
 御流人にて、兵を起さるも、時政の類、三浦一党、かの豪民御家人

にて、是を助けなし申候、されば寛徳延久の政に、つとめて庄園停廢  
 のこと申候ハ、誠に後代の弊を思ひはかる處、遠く深く、恣ながら存  
 候事也、このゆえニ、庄園ハ私領なれバ、郡にもあらず、郷にもあら  
 ず、ひたすらに買得れバ、境界の定もなきものニ候、或は庄園主人も  
 なくおとろへ、子孫断絶なれバ、つぶれ申候なり、又は往昔は富て貯  
 へおくれも、貧になりおとろへ申て、何となく在名になりたるものニ候、  
 さて庄園は私領にて、其領内にてハ、國法にもかまわらず、自由は働  
 申、是を成るに名をかりて、頼朝御地頭を賣れ、遂に六十余州を手に入  
 入られ、かの庄園の内の上も土産も、皆其領主に受納し、其事行人を  
 稱司庄官別當など、申候て、私に召置ものニ候、此趣諸記雜集の旨を  
 以て見れば、僅にかやうに見え申候、  
 公補任也  
 〇後一条院

- 方寿三年、丙寅、正月十九日、太皇太后宮
- 太政大臣、從一位藤公季、二十一ノナツシ
- 關白、左大臣、從一位、巨藤通、卅五、三月廿一日、上表、勅答不許、
- 右大臣、正二位、同実資、七十、右大將、兼右衛門、四月一日、應嘉車、
- 内大臣、正二位、同教通、卅一、左大將、
- 大納言、正二位、同資信、六六、中宮大夫、
- 權大納言、正二位、同行成、五十、二月七日、兼按察使、
- 權中納言、正二位、同長家、廿二、
- 中納言、正二位、同兼隆、四十二、左衛門督、
- 權中納言、從二位、同実成、五十二、右衛門督、
- 源道方、五十五、右大臣、大皇太后、
- 藤公信、五月十五日、



正三位、同朝祥、五十四、  
從二位、源維房、十九、十一月六日任、廿  
八日兼春宮權大夫

外二參議、略之、

万寿四年、丁卯、九月皇太后崩于崩、  
十二月四日、入道相玉葉

太政大臣、從一位、藤公季、七十一、

關口、左大臣、從一位、同賴道、卅六、十二月四日服解、廿八日復任

右大臣、正二位、同實資、七十一、右大臣、皇太弟博、

内大臣、正二位、同教通、卅二、左大臣、十二月四日服解、

大納言、正二位、同齊信、六十一、中官大夫、

權大納言、正二位、同行成、五十六、按察使、十二月四日免、

同賴宗、卅五、春宮大夫、十二月服解

同能信、卅三、中宮權大夫、十二月服解

權中納言、正二位、同長家、卅三、十二月四日服解

同兼隆、卅三、左衛門督、

權中納言、從二位、同実成、五十六、右衛門督、

外略于此、源道方、六十、宮内卿、皇太后常大夫、九月

寬仁三年、己未、前大政大臣、從一位、藤道長、五十四、三月廿一日、出家、

日返上隨身、五月八日、詔任人賜稱准三宮、義如故不改、又封邑二千

戶、殊以賜之、六月十九日、上表止準三宮二千戶、勅答不許、

改稱子為、七月三日、修伏、又詔万寿四十一、八宮行啓於法成寺、

也、同給千度者、十二日、天下非常大赦、依入道太相

成寺、入道相更病遷延、國病也、廿六日、行幸於法

成寺、仍行幸、即以封戶五百烟事施入寺家、又有御誦經、

布一千端、兼又以數位藤原庶子朝任美乃守、

補檢非違使、無其關、依是依造塔行事各有其、又被供養寺家并南北

兩京高僧一万人、廿九日、東宮行啓、十二月四日、遂以總、六十二、在

官閑白撰政勢廿三年、長德元以後、長

治曆二年、丁未、

關白、從一位、藤賴通、七十、十月五日、行幸宇治平等院、同七日、

勅年番年官一準三宮、又食邑三千戶、内舍人二人、左右近衛兵衛各六

人、為隨身、資人戶人、一如忠仁公故事、十一月五日、上表回許、六

日、勅答不許、廿九日、重以上表、十二月五日勅答許之、但政口細可

諮詢者、治曆四年戊申、四月十九日、庚申、天皇晏駕、皇太弟良祚、

斷白、準三后、從一位、賴通、七十七、三月廿三日、依病上表辭退、政

無細可諮詢之、勅、四月十七日、勅答從所請、肥後守治別暨、延久

四、四廿九、出家、以權律師長實為戒師、法名蓮實、後改寂實、同六

年、二月二日薨、行年八十三、前太政大臣、從一位、藤賴通、四月十六日辭關白、準三后、

國史略、卷之三、

從五位下、行大舍人助、兼音博士、源賴由松重、編次、

從六位下、白羽介、和氣義真、校、

一條天皇、諱懷仁、田原帝長子、母梅壺女御、諱詮子、右大臣兼家之

女、治安元年、左大臣顯光薨、乃以右大臣公季為太政大臣、内大臣賴通為

左大臣、實資為右大臣、教通為内大臣、〇二年、法成寺金堂成、設大

法会、天皇、及、太皇太后、影子、皇太子、影子、中官、影子、皆臨幸之、

三后皆道長之子、自是以後、世人稱道長、為御堂關白、寺在近衛北、京

中、極東、金堂其

〇万寿二年、尚侍女嬪子卒、道長第三女、為、東宮所幸、年十九、贈正一位、

道長自仕、一條帝以來、事無不吉、至是始被其女、哀嘆殊甚、〇四年、

皇太后崩、諱妍子、亦道長之女也、道長悲傷、遂病、尋薨、道長曆事

三朝、權傾内外、政出父子兄弟之間者三十余年、子男繁多、榮貴最盛、公卿六人、女子立后者三人、其餘為妃嬪、遂至世相家不斷、宮嬪亦衆、衛門、若榮華語四十卷、使說者如目見其富貴也、○長元二年、關白賴通遷公卿於白川別業、有舞樂、道長薨後、賴通相繼專權、

○後朱雀天皇、諱敦良、母、上東后、外舅左大臣賴通關白如故、其義女、藤原子立為中宮、敦康親王之女

○後冷泉天皇、諱親仁、先帝長子、母、則皇太后諱嬪子、道長之女、上年二十二即位、賴通關白如故、○康平三年、賴通罷左大臣、使教通代之、賴宗為右大臣、賴並長男大納言師實為內大臣、父子兄弟皆居相位、賴通二弟能信長家、稱信家、妹大源節房、四人共任大納言、○四年、賴通任太政大臣、○治曆元年、右大臣賴宗薨、以師實為右大臣、師實為內大臣、○三年、賴通請、前、幸于治平等院、賴通年既七十、椿山莊于此地、世稱于治院口、朝政無大小、取決于此、

○季安參考、長德二年丙申七月、藤原長祿左大臣、叙正二位、賜一座、長和六年、丁巳、二月、

後一條帝即位、三月、授道長從一位、停其攝政、以男賴通代為攝政、四月改為寬仁元年、十二月、以道長為太政大臣、二年、戊午、二月、賴通為內大臣、攝政如故、三年、己未、三月、道長薨、改名行觀、又改、五月八日、詔賜賴通三員、義如故、特賜封邑三千戶、十二月、賴通上表停攝政、勅為關白、五年、辛酉、正月、賴通進從三位、時年三十、二月、改為治安元年、七月、以藤公季為太政大臣、時年六十六、而於賴通從祖叔父也、而乃壽三年、則公季居太政大臣、賴通以左大臣為關白、而其弟三人、賴宗居樞密大納言、教通居內大臣、長家居樞密中納言、且父道長時尚存、則島津庄官等上疏所謂、以關白出寄進、幸治關白家、即是、立券在島津本庄云、必在此時也、當時感悔、莫比肩者、何事之不可為、而況於無主荒野乎、可以觀上疏所言非虛妄矣也、四年、丁卯、十一月四日、道長薨、年六十二、所謂赤染右衛門之榮花物語、言此道長榮花云、長元二年、己巳、十月、公季薨、賴通乃居一所、而永承二年、丁亥、則賴通教通賴宗兄弟三人、居左右內大臣、又他弟

能信長家、居樞密大納言、康平三年、庚寅、七月、賴通辭左大臣、關白、弟教通任左大臣、賴宗為右大臣、男師實為內大臣、弟能信長家居樞密大納言、四年、辛丑、十二月、賴通任太政大臣、我島津稱号之隆、藤原今御孫其源、則首乎如是之榮華者明矣、故書所考以榮來哲爾、

右に抄載し、且參考すれば、愚管抄にいへる、宇治殿の時、一の所の御領、とのみいひて、庄園諸國にちて、受領のつとめ場がたしなと云へる、當時の感懐をよくおもひ知りて、鹿屋氏に就めたる、島津御庄官等が、嶋津本庄者、万寿年中に、主も無き荒野を闢發せしめ、庄号をつけて、幸治關白家に寄進せしむ、言非しける状を、併せ觀れば、今庄内の郡本あたり、開墾して、延喜の頃より、賦に立たる地名の、島津を其庄号となし、世々近衛家の家領にて、彼殿より知行せらるる、庄園となりしには、疑ひなし、まて左に表章す、併せ考べきなり、

○嶋津御庄官等謹言上

欲且依代々、政所御下知、并庄号以後二百六十余歳不勸例、大隅國正八幡宮御造當本庄、不動子細、副造、

- 一、通、普賢寺律定殿下政所御下文案、承元二年、九月日状云、於無日記者、神人等今案計也、旧跡之外可令停本庄新儀支配云云、
- 二、通、同政所御下文案、建曆三年六月廿七日、状載、以同前、此外貞應三、嘉祿三、正嘉弘長年萬、御下文御教書等數進、又弘安元年、十二月廿八日状、云造正八幡宮嶋津本庄役事、
- 一、通、同一年、六月九日、同前、
- 一、卷、當御庄寺社繪圖、
- 一、卷、同年中行事、
- 右謹考故実、正八幡宮御垂跡者、和銅年中、正殿已下社屋不殘一字、被支配三州國田、日向、大馬、鹿屋、之間、既五百余歳御造當、敢所無相違也、嶋津本庄者、万寿年中、以無主荒野之地、令開墾庄号、令寄進、

宇治關白家以降、長元年中、奉遷伊勢太神宮、依事考、宇佐八幡、正行  
以後二百餘年、彼寺社造營之外、無余事之処、神官等、建仁三年、  
始雖掠賜官守御庄官、以下略、

於當本庄園上之跡、為無二荒野開闢之地、停止新儀、以下略、

右正應元年之言、狀歟、正應元年、後人所謂也、自万壽二年、至  
六十二年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

十年、則延延以後二百六

例、竊然開訴之、郡司亦為永吉地頭進止事、無其例之旨陳之、者如宗  
久所進貞應二年四月十八日御下文者、可早為地頭代、罷發鳴津庄口向  
方木庄内荒野事、件荒野、為地頭代沙汰、令既作、云領家御年貢、云  
地頭分米、無懈怠可弁濟云云、就彼下文、上別府者、為永吉地頭進止  
之由、雖申之、以鳴津庄日向方木庄荒野開闢事、備達德慶方者郡司  
文之條、難指兩、就中如弘安御下知者、於下地者、郡司可為進止之由  
被或事、當別府於永吉地頭令進止者、先相論之時、尤可申守細之延、  
安無其儀、山田上別府兩村下地、可為郡司進止之由、被載之間、宜為  
越訴歟、仍地頭訴訟、不及沙汰焉、

右按于正安二年七月二日、前上總介平朝臣下知狀、本皇志布志山田  
氏文書といへり、前件の島津御庄官等口上狀に、此外貞應二云云御  
下文と引載せしハ、右の下知狀にいへる、貞應二年四月十八日の御  
下文を指なるべし、

比吉島氏本  
○德慶國書後三郎左衛門尉忠賴領荒野事、為地頭沙汰、開闢常之荒野、  
減斗代可令弁御年貢之由、所申請也、三為公平歟、可被申達本所之狀  
依録會殿仰、執達如件、

天福元年九月廿二日  
武藏守  
相模守

駿河守殿  
攝部助殿

○造正八幡宮鳴津本庄受領、如鎮西去年三月三日津進狀者、正安三、  
德元三、嘉元三、以上三年、旧米對違云々、甚無其禮、急速可致沙汰  
之狀、依仰執達如件、

延慶二年三月十日  
陸奥守判  
相模守判

鳴津下野前司入道殿  
右も雜抄にあり、陸奥守は、宣時、相模守は、前時、みな北条氏にて、  
守邦親王の執権なり、前に載せし、正官等が言上せし赴を申奉て、正官  
の造營料をバ、鳴津本庄より八出さりと見ゆ、それゆえ斯く沙汰あ  
りしならん、頼朝公此かた、守護と地頭は、將軍の令をきき、庄官等は、

公の造營行、即今の、  
御家考、  
なり、老て女兼と思ひ、所着の日記あり、後に載す、  
斯りければ、此書も、彼家に遺れるならん、  
一 于別府、為永吉地頭、令進上下地各事、  
右地頭、則島津庄荒野開闢之地、為永吉地頭進止之条、云御下知、云傍

その後尊氏の世となるまで、多くハ領家の下知を守りて、如此對捍せしと見たり、

○大隅薩摩口向、於此三州、峯氏之源被分候次第之事、少々管知分註候候、

大伴親王後胤、善男大納言、清和天皇時、檢非違之尻當二而御人候、其時流罪候、其末子兼貞言仁、鶴戸參詣之禮、三侯院御進候、三侯王平だひけんすえもと、云人之在所を一見候、折簡平だひけん表に指出候て、彼兼貞見參被申候て、客人はいづくより御渡候哉尋被申候時、いづく共なき旅人にて候被仰候、左様候者、善御逗留候へと留候間、一兩月逗留候、然者彼平だひけん被申事ハ、身者無子候、女子一人持申候、あわれく御奉取せ候へかし、左様候者、我等が跡を可進之由被申候、其儀候者ともかくも被仰候て、平だひけんの智に御成候、無程男子出来候、其次第御子出来候已上、男子五人候、太郎ハ八付、次郎ハ秋原、四郎ハ和泉、五郎ハ梅北と、皆々在名各乘候、兼貞梅北而遠行候、然二梅北方ハ五人めて候、兼貞之跡を次候、則善男大納言十番之けい馬の時、本どりにゆひ儀候て、信仰申候、十一面金銅之仏をハ格護之由申候、二侯之神社者、平太檢校、御伊勢夢想を承り候て勸請候、其より梅北殿大官司御持候、彼平太檢校在所、都城与梅北間原に、屋形に今在無難候、伴家騷之事、大堂官の御帳被下、錦にて候、備横広二尺三寸、長サ一丈二寸五分候、竿五尺也、伴家騷ノ文、きつこゝの内に、足上たる錦二ツ、其にくもてを合、根の日の松を一本ツ、くわへ候、幕布、上三乃ハ白、下二のハ黒候、妙見氏神也、三侯院神社大明神也、

右もまた鹿屋治が版本なり、

鹿屋周防人追

○鹿屋の善男之大納言ト善男雨の寸、もとゆにゆひ儀候て、しんかう白候

十一面金銅御ほとけをハ覚悟之由申候、三侯之上様大明神ハ、平檢校などの、御伊勢夢想を蒙り勸請候、それによりて、梅北殿大官司御持候、彼平大けんとの在所ハ、都城与梅北間、原ニ屋形に今在申無難候、伴家騷の事、大堂官之御帳被下、錦幅にて候、幅之横広き三尺三寸、

長き一尺、鳩二寸五分にて候、竿一丈五尺也、

鹿屋一釣入註之乾、

右と前木と小鼻あり、松写の誤にて、得失も互にみゆれば、併せて宜きに従ふべし、前の庄官等が言上せしには、長元年中、伊勢太神官を偲め奉り、神の告により、神社と号したる事は申たれど、崇めける其人は、誰とも記しなけれど、右之鹿屋一釣入道が記せし赴と、古き棟札等に併せ考ふれば、平大監等なるには疑なし、

○大日本国海西路、日向州、南郷益貫村、初柱宮再建勸進疏、

夫神祇者、天地之精靈、而二氣之良能也、陰陽所合散、寒暑所往来、無非神明之至誠、故有其誠、則有其神、無其誠、則無其神、蓋誠者天之道也、誠之者人之道也、其氣発揚于上下、而能鎮非情、此百物之精靈也、故曰至誠如神、于茲南郷益貫村有古廟、扁内宮外宮一宇、金軟尊星三垂高跡於茲郷、昔平朝臣平大監奉蓋者、住居於此地矣、伝聞其志誇神助之至誠、以慈精身、可謂一代之善士也、万寿三年、丙寅歲、參詣伊勢大神宮、謂巫祝曰、爾分彼垂迹、請安臣於我國、巫祝許之、終拜受頂戴歸去、創造大廟、巧架高殿、唐宮祖始如立爾公孔子之廟相似、世人不謂乎、日本二柱、是其一社也、以汝母神社妙見大菩薩、其実体天照大神也、奉國傳知尊信者惟夥矣、則奉稱御社之宗社、蓋萬世傳、威光照應、証明蒙護持、春祈秋賽、不敢怠焉、不享非礼、李氏如旅於祭祭山邪、所備有材、退之者被於衛山耳、請候、大夫、及諸士、致美乎獻焉、行膳于其宮者、祭如在、此所謂神明之至誠也、自最初建立以降、已五百有餘年、風霜所侵、柱根腐朽、雨露所擊、梁棟傾斜、造敗壞凡五六箇度也、永正十三年丙子歲、前近江守新納忠武、宣鑿建立之善、而經之當之、庶民之役、匠人成功、不日而落成矣、輪奐之美如在耳、其如周文遷始靈台者乎、永正辛卯之冬、干戈蜂起於鼎國、而不安社稷、日施千致矣同癸巳、二月十又五日、寇讎滔三此境、乱得雲集、步卒毘邁、八人放出、忽成焦土、恰不異武陽成原也、鴻業沙如崩、烏有冰澗石僅存遺塵、荒廢矣、爾来矛戟未收、徒移涼燠而已、戰塵踏踏、兵庫岐原、依之借沙門前進之力、欲興起此宮、無緇素、無尊卑、不損多寡、分与半文錢、善因之善化、良報之功徳、不可思議、不可称量、其

詞曰、

靈柩數十間麗籠、蓋塵尽美、幾至紺殿、英靈加威、龍蓋微毛、歌辨難  
響、漣不回楫、郊社龍備上下之礼、昭穆元有左右之倫、今也此地、昔除  
秋尽、黄葉堆霜、廟前日晚、碧草傷雨、若無驚浪屢駭、爭成爲瓦礫營  
大永六年丙戌秋九月廿有四日

勸進沙門

○奉修造島津御庄惣領守神村宮御宝殿一宇三間、

右意趣者、奉為金輪聖王大長地久、別而者當極越藤原紀臣忠實、同  
朝臣忠勝、并同朝臣久如、官祿增進、武官長久、領内泰平、万民豐  
樂、殊者社頭安全、諸人快樂之故矣、將亦當大官可伴朝臣兼秋、并  
勸進沙門權律師顯舜、同隆行、無二造靈力、願有縁、勸無縁願念忽成  
就、抑當社妙見者、日本二柱尾神伊勢大神日神、此而大為無雙尊神  
依是口州南郷奉崇敬者也而已、仍謹願成就如件、

本願沙門 敬白

天文四年乙未卯月廿九日

小工 藤原正綱  
大工 藤原龜統

○奉修造島津御庄惣領守天照大神神柱宮御宝殿三三三間、

代々造管之事、

- 第一、万寿三年、丙寅、大願三平朝臣平大監末基、
- 第二、仁安二年、丁亥、大願三散位左朝臣兼景、
- 第三、弘安四年、辛巳、大願主執行左衛門尉忠兼世、
- 第四、応永八年、辛巳、大願主島津朝臣前陸奥守元久并讃岐入道沙  
弥道日、
- 第五、文明十五年、癸卯、大願主島津陸奥守武久、
- 第六、永正十三年、丙子、大願主島津近江守忠武、
- 第七、天文四年、乙未、大願主新納忠重、遷宮卯月廿九日、
- 遷宮二月九日、願主市部当張弁貞家、大守守満、同守次、
- 遷宮、四月十四日、本願主沙門顯良、願主市部当貞次、大工貞統、
- 右筆者權律師慶舜坐主、七十三、

○梅北太皇太后宮、委文、不取、

第一建立、平朝臣平大監末基、万寿三年、九月十五日落成、第二再  
興、三位伴朝臣兼景、仁安二年二月十三日落成、第三再興、左衛門  
尉伴朝臣兼世、弘安四年八月廿七日落成、第四再興、陸奥守藤原朝  
臣元久、応永八年十一月七日落成、第五再興、豊前守伴朝臣兼統、  
文安五年戊辰、十二月十八日落成、夫以白鳥傳壽之遺月、衆生本  
行之徳、而心水木覺其如之資、豊原之國、神光之現於跡矣、抑當  
社益於春秋、久獲威福、遠而既及慶城刻、去天文廿季、南日十六日  
俄大風頻吹、不計刻那而反隣、因茲神主竹島守平權秀信、并宮太郎  
丸、累年步於迷而突前、幾千有余之勳於人力、新造立大古宮一宇三間  
也、此願若庶主各々恩災延年、子孫繁昌、家内如意満足、并、遷宮  
道經西生寺別當梅大僧都勝貞、同言之、

梅北村御宮本  
神柱大助神

右万寿三年、丙寅、正月十日、平朝臣平大監末基願領当地、移之、日  
所崇也、同年九月九日、神柱造立伊勢内宮也、此羽正内、社、日本二  
柱之神也、仁安二年丁亥、散位伴朝臣兼景再管、弘安四年辛巳、修造、  
大願主執行左衛門尉伴兼世、応永八年辛巳二月七日、修管、陸奥守藤  
原朝臣元久、并沙弥道日、文明十五年卯二月九日、修管、陸奥守武久、  
永正十三年丙子四月十四日、修造、嶋津近江守忠武、天文四年卯月廿  
九日、修理、新納近江守忠勝、天正四年丙子二月廿日、島居建立、北  
郷左衛門時久入這一雲、同十四年丙戌八月三日、時久代地頭伴兼世、  
慶長十四年、修管、北郷齋岐守忠能也、

○日州内梅北内、  
島津御庄惣領守、神柱同社妙見大菩薩御本地

一初建之事、  
平朝臣平大監末基と申す、平家の侍、梅北をきりあげ知行せられし、  
万寿三年丙寅正月十日、大門の柱を大古宮よりひかれ候時は、片柱を  
五百人づゝのつもりにて候処、片柱うごかずして、千人よりて引候処  
に、末基の女、六歳になりけるが、見物に被參候時、被六歳の女子、

俄にくだげ候て、御たくせんあり、伊勢の外宮、此地にいわんひ敬有べく候、此儀不用候ハ、即彼女子めしあけべき日候間、領掌口候て、伊勢の国へ飛脚を以て此を申され候也ニ、い勢人も、神人の子七歳の男子にのりうつり、御たくせん候故、口向へ尋に飛脚下り候、伊勢へも尋にのり候也、あがたにて同じく宿をとり、相互に物語とも仕候へハ、同儀を申候故、さうハ同前にて、談合つくに、伊勢のものはいせへののり、日向のものは日向へ下り候、其時の事を、伊勢や日向の物語と申也、其後同し年の九月九日に勸福中候故、今に祭祀なり、梅北より彼社頭を覚悟申事ハ、右の末基齋、平家の世の末に成たるを見きりて、宮野の本名の御所に隠居して、渡されたと申伝候、梅北ハかこしきを、先征の善男の大納言のきりあけ所にて居られ候へとも、鳴津さま中之郷の堀の内の御所へ御進怒なされ候時、梅北家より、梅北名をうけて知行口され候時、相互に御入刃の上を以て、かごしきを鳴津さまへ渡し申、梅北へ移られたると申伝たり、梅北は、益貢と申たるを、梅北より知行被申候故、梅北と申也、神林内社と申事、伊勢の内宮外宮、日本六十六ヶ国を、三十三ヶ國づつ司にて、内宮は出羽国庄と申所といわれ被成候、外宮は、日向國庄内にいわれ被成候、是によりて日本二柱と申也、

右上代ノミヤ書付申候、今はをしに成事おしし、

寛文六年丙午二月吉日

梅北正兵衛判

一 伴兼貞北之方ニ、梅之木多郷へ罷移、家名を梅北と被申、兼貞之子孫、古来西牛寺之郷へ、無根梅と云梅有て、根無之して、其枝繁り、北之方へ枝を打候ニ付、其郷を梅北と名付候共申説有之候、何れ歟是歟可考、無根梅之儀、近來迄ハ有之候へども、枯候而、三今元之木ニ似合せられ、稲穂、石寺地ニ有之候、右梅北家之儀、古来者代々梅北を領知候由、忠久様三ヶ国守護職御給而、縁由より御下向之時分、梅北隣郷堀之内へ御流之儀敷、梅北を父とせよ、富山を母とせよと、頼頼為被成山口伝候、梅北富山御所へ隣り居候ニ付、左も可有事、今于梅北内へ、女子分内と申候云々、

益貞  
一 宇佐八幡宮、南向、神柱之柱より奇町斗東之方、

伝云、平大監末基建立焉、天正十年、一善入道時久再營之云云、

代官司 相馬勝善坊

余社略ス、

右者古来より有来候神社之山求ニ御座候間、相認可差上之由被仰渡候ニ付而、御差圖之通和調奏上申候以上、

成四月五日 同宮 感応寺河内印

神社大神宮、并宇佐八幡宮御祭事、

正月元日 正月七日 二月彼岸 二月初ノ卯日 八幡宮祭 五月五日

六月十五日 八月初日 八月彼岸 九月八日 九月九日

九月十日 十一月初ノ卯八幡宮祭

合十二祭

守護領名代として

社參 富山六郎兵衛

北郷名代として

地頭

右者古来より富山家社參仕候事、

一米四石三斗五升五合、右十二祭之人用分

一米六斗四升八合、 鎮守講入日、

一米七斗五升、 大般若入用方、

右は春初於和神前載読有之、都城茨より相渡候也、

一米三九月九日、御祭ニ付鑄流馬志願、浜下り御座候也、

右出来之儀者、勸進帳、并縁紀要敷相見得申候故、書写差上申候以上、

代官司 梅北伴左衛門印

同宮 感応寺河内印

○ 覚

忠久様三ヶ国江御下向之時分、頼頼公も、富山を父とせよ、梅北を母

とせよ、三ヶ国之者共ハ、御家人たるべしと、御教書を下給、御下向

被遊、庄内兩鄉廟之内御所へ被成御座候時、富山之舞に被成御成候、就其御北神柱を御信仰被成候而、神柱御祭二一兩年御自身御參詣被遊候へ共、其後薩摩方御移被遊候故、富山へハ名代被仰付、御代參相勤申之由候、故之私先祖代より至今、毎年御祭之時分ハ、龜など為持申候而、梅北衆中何度上下着用ニ而、屋形被御名代之御供之由ニ而、石列參詣仕來申候、此等之由緒、古來より申候付、如斯御座候以上、元禄十年丁丑

六月五日

富山六兵衛 印

右に見得し、神柱宮と、宇佐八幡の神社は、前の庄官等が言上状に併せ考ふれば、島津御庄を調給せし、平大監季基が、長元年中に創建したる神社、即是なり、右に所謂十二祭も、可しき状に、年中行事といへる事に、おもひ合せられ、御庄開発の由緒も、跡うたがひなく考ふるゝなり、また此宇佐の事にやあらん、慶長五年、正月十一日、酒匂新右衛門が呈上せし訴状に、かくなん見得たり、首尾を省き左に抄出す、

一忠久様、薩摩大隈日向、其外三方江四ヶ國、七ヶ國、御給被成、当同江御下向之刻、豊前國宇佐八幡宮へ御參詣之時、御太刀を灣江江被仰付、供奉仁候、於社檀音錢二枚、御款芳の袖にふりかゝり候を、被成真藏、酒匂ニ被下候間、代々傳家ニ覺悟仕候事、此間略ス、

一鐵魏江鎌田尾張守殿御使ニ而、忠久様宇佐八幡宮江御參詣之時、錢よりたる由被聞召及候、于今覚悟仕候歟と、被成御尋候間、則 義久様江掛御日申候、其後ハ不被返下候条、定可御物之内ニ可有御座候事、右悪郷とあるハ、日当山地頭にて、右馬頭忠將に給事して、永禄四年七月、馬立の戦ひに陣歿せし、酒匂源左衛門なれば、御覽に備へけるも、永禄三四年以前の事に当れば、近古の説にハあらず、然あれバ、所謂宇佐八幡は、豊前のかたより、島津庄の内に洞れる、右の宇佐こそ近からめ、さあるを、豊前と伝誤るにあらざるや、併せ考へし、

○帖佐士安染五郎左衛門藏、

(中衛) 座衛御願、大曼荼羅院二字、三四

弘安元年、歲次、戊寅、八月日、修造之、

右当守者、其仁安二年、歲次、丁亥、尋常聖人造立之、大願主当檀那伴朝臣

兼高也、而其後從百十余運之而於相代、「弘」於安元年、八月廿九日、時正

初日、尋常聖人孫孫弟法橋上人位尊應為大勸進造立之、于時施主兼高

五代孫子、右衛門助伴朝臣助兼、六代孫子、方郷弁濟伴朝臣兼高、但前者雖為一間四面、法會時堂内狭少之間、座席依有其煩、人改前造

所造於三間四面、仍銘如左、

造宮樂行值舞施、

右の字、すべて古跡らしく、其後款を其彼とかき、百十余かへりの

回を、廻とかき、弘安元を、於安元とかき、如件を、如外とかくの

類、ミナ文字に誤り人、云寫を誤りしと見ゆ、是に拠れば、座衛御

願も、また座衛御願の誤なるには疑なし、然るれば庄衛とハ、島津

御庄の府本親所にて、安元二年七月日、島津御庄よりの下文に、庄

衛宜承知云々の、三衛に當るも、また疑なし、府本とは、近衛殿下

御領の三ヶ所、諸方に散在せし、寄郡の政令を出されし、官洲の在

る所を云ふなるべし、されば、此大曼荼羅院西生寺といへる寺は

近衛領庄園長久の御祈禱、またハ御先祖冥福の為建られ、御願の

文字あるは明らけし、其かうがへは、つばらに本篇に述べられたる、

併せ証すべし、

○ 奉修造西生寺大曼荼羅院、

奉為金輪聖皇、天長地久、別者当日那藤原朝臣忠武、官位増進、武運

長久、領内泰平、万民豊樂、殊者当城軍代藤原久友、御息災延命、

中文、即当寺者、屬天台之教風、而灌比叔之法水、亦略兼又見先修

之銘記、意創者、尋常上人之開基、伴朝臣兼高、仁安式年、丁亥、第

二再興者、尋常聖人之勸進、巨那伴之兼高、弘安元稔、戊寅、云々、

大勸進兼從中

賢明庶九歳申三月日

大檀那藤原朝臣忠武 本願田中坊沙弥秀跡

奉行大藏朝臣匡成 大工 藤原武典 小工 藤原藤正

霧島山、西生寺、大曼荼羅院、勅額有之、

後鳥羽院或伏見院宸筆共申伝本尊阿弥陀 固澤櫻堂古 行今來秘仏、并鎮守山王権現、

勝宮弁財天社有之、右御堂、一丈間、十間四間、四方 凡只 各丈間一間像施茅葺也、古寺領町反不知、今謂

之三千石余、其後新納忠武公知行三百五十石寄附之、其後五十石贈成、大御監

も悉破壊、故實宗第六世仁備美海法印、御堂引移寺中、四間三間並西尺堂造實

于今有之、又屬五十石被 当寺古社於霧島山佐野邊建立、近來梅北引移

召致、唯今八町地許也、 山好符合之、又於霧島本 亦平家小松殿建立、比時大橋口將殿有下

云云、西生寺下云公有之云、 門下成福寺、 棟和永享三年、庚戌、建武、大且郡中務少輔源知久、当已持

法印真海等云、唯今八百姓地ニ成、高拾八石一斗、今勸落、

神宮寺、 神社直經一、于今当寺ノ末寺地、高 貴船社康三、于今当寺

今三石七斗、 二十六石、只今五石、尊皇院妙見山、貴船寺、ノ末寺也、高二十八石

性淨院普賢山、新山寺、 廊等有六切云、于今当寺ノ末寺也、高 臨坊

坊、云、 内山寺、 山野慈為 有六

皆為山、 可姓地、 右六ヶ寺ノ内、三ヶ寺敗壞也、

西生寺内、 山王社、 木像七体、 燧金鉢二鉢、

右神鉢厨子ノ内ニ、五寸方許ノ板ヲ藏ム、其文如左、

仁安三年、 歲次、 三月二日、 庚、 造立之、

為大施主且那散位心朝臣兼高、并藤原氏息災延命、次諸人快樂、 殊致精誠、所造立如件、 結誓願大悲中、一人不成二世願、

逃虚妄雜垢中、不還本覺捨大悲、

行やう檜板にかき、先年西生寺の仁下條の、朽損したる、鉄内より

露われ出けるとなん、前に載せたる帖佐士人安樂氏に藏めし、弘安

元年、戊寅、八月、再建の欵に、庄禊の御願として、当寺を、仁安

二年、 歲次、 丁亥、 尊誓聖人遊立之大願主、当檀那朝臣兼高也と記せるにも、

能く符合し、疑もなき当寺開基の時造れる、仁王の鉢内に銘し納

めたる、小板の古物にて、細字なれども、仁安丁亥より、今とし天

保癸巳まで、六百六十七年、尚文字も火燭よまれて、当寺の什宝と

なるは、寔に珍奇ならずや、仏し板に三年とかきしハ、二年の誤な

るべし、 常福寺曰跡、

右此地常福寺門と中候、霧島山西生寺、六ヶ末寺之一寺ニ而、久敷破

壞仁、当分寺跡數ニ相成、其號之内ニ、近在迄阿弥陀堂有之、是も及破

壞、隣家之者假堂阿弥陀 本座像、一安置いたし、花香相借置候也、文

化十五年之夏五月、大雨大風之節、破敗いたし、後光緒損し、鉢内よ

り纏據出候よしニ付、白幡相札口候得共、所中為河訣為存者有無御座、

其後家中四半出云兵衛と中者、持候候日記ニ符合仕候ニ付、左ニ書写

差上申候、 文明十八年、十月二日、三幸田三河守武則書置候、新納三河守是

きめられ、此に終す、此常福 久、原京原忠祐、戦死之次終なり、此一件ハ、別段書置候もむ

等、即西生寺末寺の成福寺也、大曼荼羅院といふ、五字の勅額、妄に永仁

三年、乙未、七月十日、正四位下左衛門佐藤定成書と記しあるといへ

り、さあれば、前に宸筆と伝へるハ誤ならん、永仁も、また島津庄官

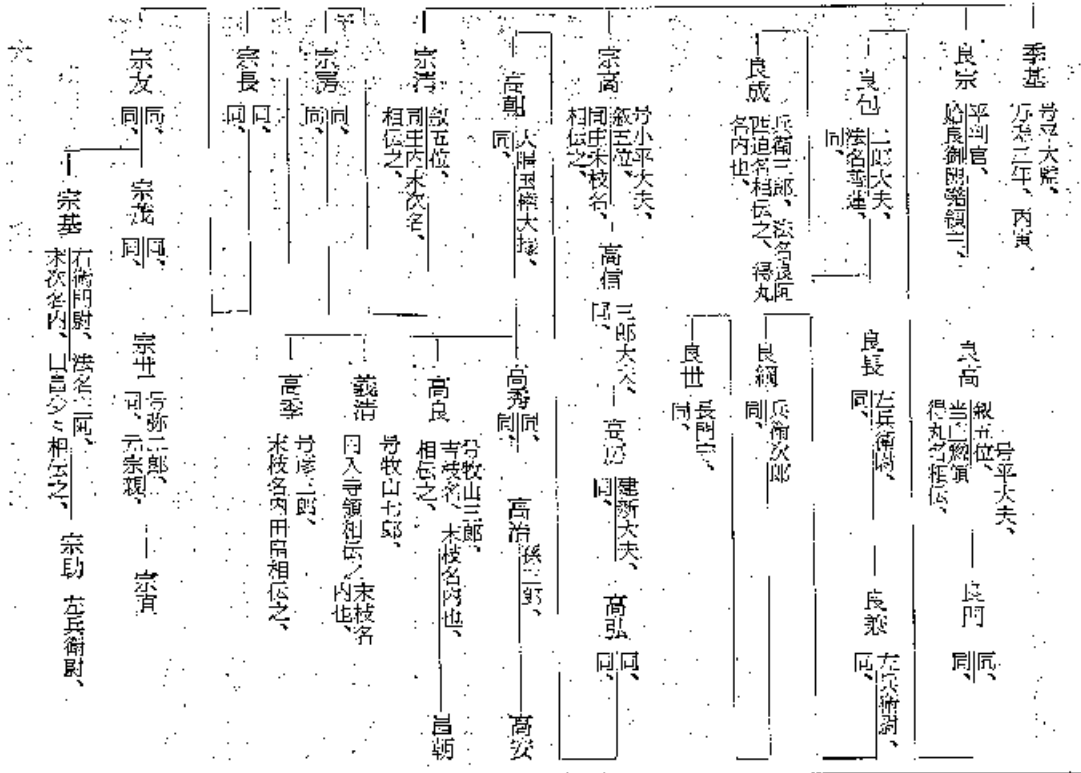
頼阿等が時に當れり、庄官言上状にいへる、当御庄寺社繪図の寺社は

此西生寺と、神柱宇佐の両社などを指せるハ明らけし、又仁安元年建

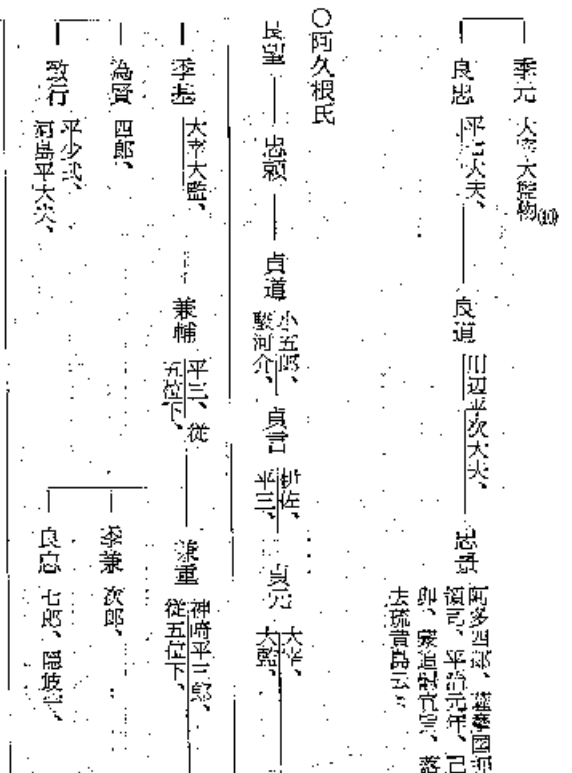
られし、今安久村の医王山知見院正応寺も、同じき寺社の中と考合ら



○得丸氏古系圖



○加世田氏系圖



名勝差出  
安久仕富山家事、九月九日、正祭礼之節、古代守護御名代參詣相勤、手籠狹箱供廻石列申候、右年月由緒料知不自候、御礼相忠久公、建久八年、三ヶ国守護職御給候而、御下向之節、口州島津之御片、中之邊安久殿之内ニ、御所作ニ而、被成御座候由、其以前より、罷居候と相見得自候、往古より伝来之文書等御座候ニ付、左ニ書写差上申候、  
御袋下家司源(花押)

○ 正政所下 百引村  
定通六濟使職事  
勾当信安兼

□人為彼職、殊致勤農、為令勤仕庄園□之課役、所定這如件、住民等宜□知用之、故下、

承安五年八月十四日 別当伴朝臣

別当伴朝臣

別当伴朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣

別当執行藤原朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰(花押)

別当執行伴朝臣(花押)

○庄政所下 百引村

定遣弁濟使職事

勾当僧安兼

□人為令執行一事已上、所□遣如件、部内宜奉知用之、□下、

安元元年十二月日 別当伴朝臣(花押)

別当伴朝臣

別当伴朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当執行藤原朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰(花押)

別当執行伴朝臣(花押)

目代散位伴朝臣(花押)

○鳴津御庄

補任百引村弁濟職事

勾当僧安兼

□人任相伝文書之理、補任彼職□畢、庄衙宜奉知、敢勿違失、故下、

安元二年七月日

沙弥(花押)

件境神官等、不知

之狀、根依致非論、令言上于細於京

□第令停止彼濫妨之由、設下政所御下文、□軍家御成敗之狀而度彼成

下事、仍守彼狀□守護所弁備領方懸奉行所八木入道、同窓□假出司

打存件裏、加見知之処、次第証文与政無有相違事、神官等之非論、誠

以顯然□者、為止後代之非論、所令記錄如件、

元仁三年二月廿一日

左近將監藤原朝臣(花押)

別当伴朝臣(花押)

右近將監藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

左近將監伴朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰(花押)

別当藤原朝臣(花押)

文章生伴朝臣(花押)

別当伴朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当伴朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

執行 沙弥(花押)

執行散位伴朝臣(花押)

別当漆嶋宿禰(花押)

別当藤原朝臣(花押)

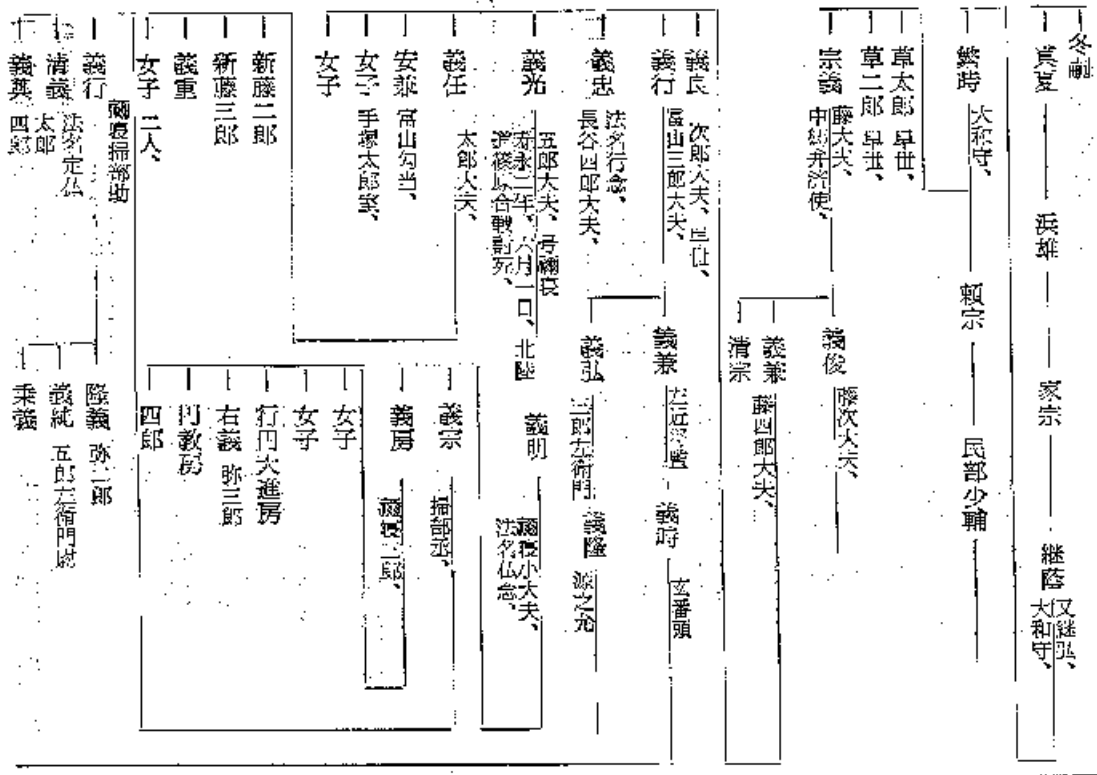
別当藤原朝臣(花押)

別当藤原朝臣(花押)

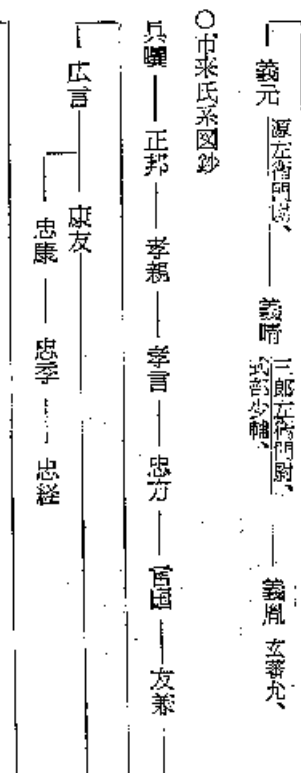
執行 沙弥(花押)

当村地頭石兵衛尉中原朝臣(花押)  
目代少監物藤原朝臣(花押)

○高山氏系圖抄



○市来氏系圖抄



東鑑  
○元暦二年、乙巳、七月廿三日、壬寅、日向山住人富山二郎大夫義良以下、鎮西望之、可憐御家人分者、他人不可令煩之旨、今日所被成追教通御下文也、

高門七指宿十郎右衛門尉木  
○嶋津庄日向方富山七郎左衛門尉義通中、嶋津院住人右衛門五郎致追捕、  
若田以下狼藉由事訴狀、副具如此、早土持掃部左衛門入道相共被所、  
且遂檢見、且企參上、可明申旨相触之、可被執進請文、若令離決者、  
職相請文之詞、可被明申也、仍執達如件、

元弘三年十月十三日

沙弥判

都府郡司入道殿

○日向国富山和房快実申、嶋津庄日向方北郷官丸名内宮永成清等事、舍  
兄阿孫四郎義恒、隱密親父富山掃部左衛門入道覚成護状、押領下地無  
請、所詮快実所帯、任親父覚成護状案文、快実、可令執行之状如件、

建武元年五月十日

源頭巨御はん

○嶋津御庄行政所補任

貴船首大宮司職事

數位藤原義

右職者尼妙覺与左衛門太郎邦求多年、口訴陳之処、邦兼彼兼理判副御  
下知以下、口避渡于妙覺事、雖然妙覺成爲非式之身、口及知行之間、  
被召履後職事、爰發榮爲本、口子孫之間、任重代之実所令補任也、早  
可被、口状如件、

康永四年三月五日

日代僧儀実

○日向国富山彦五郎義弘申、嶋津御庄日向方北郷官丸名内宮水、口成清等  
事、相伝之段無相違候、仍京都御吹卷所望仕候、可有申御沙汰候時、  
以此旨可有御披露候、恐謹言、

延安八年三月十一日

越後守氏久(花押)

進上、長山藤原六郎左衛門入道殿

○かくて日数もつもあり行、日向ひうがの国あやべのみなと、わか津にこ  
そつかれけれ、夫よりして、日向てつりんミそくのさかにとり上給ふ、下  
藤ハかなハまるとも申けり、日向元ハ我朝人皇の始、じんむ天皇の、ひうが  
の国當時の郡にて、日向かまとをたて、御即位有し時、三女一男くたりて  
つちの仏をつくりて、日向てつりんミそくをたて、供御をしてまつり候

り、それよりして、最初霞門三皇の峯とも曰、都にありし時ハ、家の  
日記をもて是をしるといへども、いかでか親に見べき、遠流のおもひ  
出に、かゝる名所を見るこそ、すこしなくさむ心地すれば、宝野船引  
大山といひて、本月影日影もさ、ぬ、深山のがたる石岩をしのぎこへ  
て、ひうがの国本西力、方嶋津の正につき給ふ、かの庄内に、あきくら野と  
いふ所に、一ツの峯にかくそびえて、煙たえせぬ所あり、日本最初の  
峯、霧島のたけと号す、金峯山、しやかのたけ、富士のたかねよりも、  
最初の峯なるゆえに、名づけてさいしよの峯といふ、六所権現のれい  
地也、かのいたゞきに巖穴あり、長時に猛火もへあがりて、雲につゞ  
く、いつとなく黒砂降下りて、其すえ何千里とはかる事なし、しかれ  
どもかのミねを、何の本地ともしらざりけるを、播磨国しよしやの山  
をこん立してける、性しやうくり上人、かの峯に登山して、この神の本  
地を拜ミ奉んとちかひ給ひて、中將七日參籠して、法華廿八品、尺の石  
の面に書写して、こめ奉り、そとばを作り、五りんをきぎミ、梵漢両  
字を書などして、わすれ形身を残し、梅桜をまづからうゑおき、様  
く、中かの山の山にわすれがたミを残しなどして、宿に下向あり、中落きて  
はやに夏影とかみあかさかといふ所をうち過で、大すみの岡、けしき  
の森に着給ふ、少將此森を見給ひて、秋近き、けしきの杜に、なくせ  
ミの涙の露や下葉をむらん、といふ名所ハ、是や候ハんとぞおほしめ、  
ける、正八幡官の御あたりを、よそながらおがミ奉り、宿頭を立て通  
られけり、中略きつまがたとハそう名なり、きかいハ十二の嶋なれば、  
口くち五嶋ハ、日本にしたがへり、おく七島ハいまだ我朝にしたがはず  
といへり、白石、あとしき、くろしま、いわうが嶋、あせ納、あせは、  
やくの嶋とて、あらふ、おきなハ、きかいがしまといへり、くち五嶋の  
うち、少將をバ三のとまりのきた、いわうが嶋に捨おく、慶頼をバ、  
あとしき、しゆん寛をバ、白石が嶋にぞ捨置ける、かの嶋にハ、白岩  
おほくして、石しろし、水のながれにいたるまで、波白くは見え、い

さきよし、かゝりければ右嶋といひけるなり、せめてハ一嶋にもす  
てられたらバ、なぐさむかたもあるべきに、はるかなるはなれしまに  
すて置ければ、くるしきなどいふもおろかなり、  
廿卷平家四ノ巻

○従夫室町野船引大出岳とて、月影も日影も混らず、幾も石殿を凌越  
日向國西ノ方、嶋津ノ庄に着給ふ云々、

按に日向國をば、西日向東日向と分け呼けること、昔よりありける  
にや、大國西征のとき、諸郡の内、西日向百三十七ヶ村、東日向  
の内、惣佐飯田内山八代綾五郎二十七ヶ村、都合百六十四ヶ村を、  
薩摩に加へ賜とあれバ、西ノ方とは、西口内にある、島津の庄とい  
ふことならん、且至内と云へるも、今の庄内あたりと云えたり、ま  
た島島の事ハ、別に考ことありて、牟氏の譜にづばらに述おけり、  
薩摩方十二島の手ハ、嘉禄二年、

得仏公より、御二代道公にゆづらせられし國々の中にも、薩摩  
方地頭守護職、并十二島地頭職とありて、文永二年六月、道公より、  
御三代道公に譲られしにも、十二島のしほと書せられ、元徳三  
年八月、御五代道公より、宗久公にゆづらせられし時にも、十二  
島のちどうしきと云へ、またその御所領の註文にも、薩摩國河辺  
郡同十八島ともあれバ、右の物語に、十二の島と云へるも、能く  
稽へみれば、得仏公御地頭所の十二島も、おなじ嶋をば指すならん  
此等のかりがへハ、既に南興組考と名づけ、三世を著はせり、おき  
なハとあるハ即木球の事にて、俗に昔より沖繩島といへり、近頃さ  
る有司の間を承て、薩州唐物の来田も書綴り、其中にも、大概ハ白  
述たれば此にもらしぬ、

加治木桑波田氏家本  
○右近衛府政所下、薩摩同牛豚郡相摸人大兼元光、并府俊光里等、  
可早任道理、停止國三坊口地、并取取口式并伍町參政事、

右得去二月日、元光、并府俊光里等、解状「具、前件元光由地以去去  
年可停止國吉坊之由、被宣下筆、而彼國吉、或相認國衛在府官人等、或  
相認嶋津在官等、悉去年秋取作田手稻之由、有其間、事若素者、且  
任道理、且任先日下知之旨、停止彼國吉坊、早可糺返作取取稻之狀、

依 大將室所御如件、敢勿違矣、敬下、

安元三年四月日

將曾惟宗朝臣清景  
將監藤原仍臣定統  
播磨中臣宿禰近誠

權中將藤原朝臣

右文書の解ハ往年桑波曰が語に依て、別に一小冊を著はしおけり、時  
の大將は、公卿補任を按に、權中納言從二位平宗盛の、右大將たるの  
年間に當れば、宗盛の宣給ひし仰なるべし、

中卷

安國守申狀

○童部之時分、候し候ニ、きたかならず候得共、存知之分合申候、抑當  
家御先祖忠久と申ハ、右大將頼朝之御子、三男にて御渡候、御母ハ丹  
後之御局、此合の藤四郎があねにて御渡候、懐妊候時、頼朝之御台二  
位殿と申ハ、北條四郎時政があね、仍此二位殿之御はからひに、謀叛を  
もくわだて、天下をおし取て、何事も二位殿之御はせめざるべし、ま  
に探問、丹後の御つばねの御娘、御二右へきよし、其間へ有ニよつて、  
殊外御そねに、彼女房、海ニしづむべきよし、頼二被仰ける間、  
口向國へながし被申べきにて、鎌倉を出させ給けるに、若男子ニ而あ  
らバ、追より御左右を口べしと、頼朝被仰下けるに、摂津國住吉にて御  
腹氣つかせ給ふ間、御宿を借候得共、住三之晋にて、不浄之人ハ久し  
くいむ所にて候間、更に宿をかきず候候ニ、折節大雨にて候けるに、  
道の辺に平々大石候二御としをかきすへ、纏て御産候ニ、男子にて御  
わたり候間、鎌倉へ鎌脚を立、比由を申、住吉之御守此白承、いそぎ  
御所をあげ候て入中矣、御産候間ハ大雨にて候化、ミヤうぶ殿はあた  
りにそひ中て所て候ける間、自家にハ野二殿と入所を、吉事ニせられ候  
由、彼石を御産の左とて、此辺よりのはられ候年來之人ハ、押し申け  
るべし、老若共被申候し、然問男三之山、頼朝被聞召候而、摂津國よ  
り被召返、八文字三郎太夫広言預申て養育候間、丹後の御局を給ら  
れ候て、さいあひ候、忠季と申ハ、兵部太夫が子にて候、忠久一腹の  
御兄弟にて御渡候、隨而初ハ惟宗氏、承久三年ニ改姓ありて、号藤原

比木ノ判官を、承久兵乱に、謀判ノ人数にてうせ候ぬ、其子孫土佐ノはたの庄ニ、ひま、なかわら、さかハ、ひこをかとして、今もあひ残候云々、山田聖業自記には、御養父八文字民部大輔殿も、始ハ鳴津ニ居住有故、鳴津殿と奉申、其後八文字殿、土佐國へ御移、中村などへ御隠候山、其末子今御座候土佐松也、有之候、妻妾考に、安國守は、八文字と比木が事を、併せて、後に其子孫、比木中村などとして、とも相養候と書おかれし、比木中村などハ、皆比木判官の子孫をいひて、八文字の子孫とハ、別事にハあらずや、八文字の子孫ハ、市宗氏にて、御田の市宗あたりに残と云説に合はず、また作者部類には、

○作者部類、五位、筑後守、日向守、兼言子、千五、五二、惟宗弘言、自承暦元年、至寿永元年、少監、武部、鳴津民部大輔、行貞子、兼、惟宗忠貞、風一、新千一、

信都、良仙、民部大夫、惟宗博助、兼一、結一、遺二、凡備上、宗八左衛門入道、才一、定覚、称広言助、

右建武四年、七月六日、類聚せし古言にて、右の如く、広言の名に似たるを采収めて、此に抄載し、来哲の考に備ふ、

○山田聖業自記、鳴津忠久御記云、泰も源之頼朝之御子、頼家夷朝者、北条四郎時政息女、二位殿之御腹、当腹之御事候、三男忠久と奉申は、比企判官議員之御妹、丹後之御局之御腹之御子なり、然ニ二位殿御幼深ニより、八文字民部大輔と申人ニ、丹後之御局を給り、妻として、忠久をも養父八文字民部大輔が宿所に育ひ奉る云々、

○御当家者、頼朝卿ノ三男、豊後守忠久、鳴津判官と申奉ルヲ為養祖、御母者比木藤四郎義員之妹、丹後ノ御局是也、頼朝殊ニ御最愛有テ、已ニ養人ト成給テ、御台様二位殿ト奉申者、北条四郎時政息女、相換守義時之姫也、嫁姑世ニ越給間、彼御局御懷人ノ事聞食シ入テ、速ニ給

島ノ沖ニ沈ムベキ山遊鱒有ケルニ依テ、不及力給、コ向國へ流シ奉ル由ニテ、舍弟之義員ニ仰付ラレケル様ハ、女子ナラバ汝トモカクモ可計、若男子ナラバ、何所ヨリモ可造上段之由蒙仰、摂津國マテ器具下ラレケルが、出國住吉ニテ御座候出来ト見給マ、其アタリニ御宿ヲ被借ケレドモ、社領ハ不淨ヲ思由申テ、一宿ヲ奉ル所ナシ、サテアルベキ事ナラバ御座ヲアル石ノ止ニ極居、御旅宿ヲスル間、御座ノ紐解キ給フ、則男子ニテヲワシマス、カクテ一夜ヲ羽ケ給フニ、大雨頻ニ降テ、深夜ノクフセサ限ナカリシニ、一狐来テ火ヲ灯シ、其アタリヲ牽守變風情也ケルトカヤ、サテコソ當家ノ御氏神稻荷大明神ト崇メ給ヒ、狐ヲ殊ニシツシ給フ其謂也、直ニ名ヲ不申無名殿ト申也、去レバ必ス御吉事有ントテハ、狐声ヲ立、御発足ノ御三雨降事、其御佳例ト申伝タリ、其御座之石トテ、于今是有、住吉之社頭ヨリハ南、古池ノ辺ナリ、去程ニ、如御義員鎌倉へ渡進申サレタリケレバ、摂州ヨリ石カハサレ給テ、養員ノ宿所ニ置奉リシガ、其隠レヨワスベキ、御台様間食シ付給ヒ、以ノ外ニ逆鏡行ウヘ、當時北条殿太心事執行、粉骨ノ忠節ヲ尽サレタル人ノムスメニテ渡ラセ給ヘバ、御台様ノ御駕難止思食ル、ニ依テ、其比名ヲ得タル、八文字民部大輔惟宗ノ広言ト申ケル人、無双之頼朝御寵愛ナリケル間、彼御局ヲ広言ニ給リス、則忠久ヲ養育仕奉ルベキヨシ仰付ラレ、彼所ニテ立立セ給フ、サレハ皆ハ御養父ノ始ヲ御養有テ、惟宗ノ忠久ト申奉也、如此アオガチニ副シ給フ事ハ、御台様ノ御旨司表朝之御料ノ如海、御用心ノ故トゾ奉ル云々、

○要安これ山田聖業に寄る、いへる、今生古の御地、菅原の御に、かの御座石あり、社頭よりハ西也、此御自來は、社頭の南、日池の邊とあるハ、所違へり、社頭の在所、前にかハれる故、ハた此御座石を移せしか、蓋亦此記者うつゝに其地を指しらで、聞たがへたるまゝを記し置る候、いづれに、今ハ雨ならざる事ハ決セリといへり、さて比御座石に、今とあるハ、承正六年より、同十七年頃までの詞なり、こは本篇に註しおまぬ、今の言葉が載とて聞けり、

○万代もかげずくづれず此石や三國よくにのしづめなるらん、

○承正十九年五月十一日御当地出立、三三御對、正保元年御座石、

○一京都大坂御留守居之節、大坂信吉之かこひの内に、鳴津石と申、取之人申伝候、むかし、忠久公御誕生被成候所之由ニ候、此石ニかき

も無之候を、祐高御請之内ニ、石ノ井垣を御申被成、御調置被成候  
末代ニも井垣ニ而候、京都御司役ハ、高崎惣右衛門殿ニ而候、惣右衛  
門殿ハ、格別御若輩ニ而候、本文之云々、みかげ石、于今たをれ有之、  
近年又々、あたらしく出来候得共、其内ニ有之候、  
是は伊東肥後守祐高  
家臣、吉田与三とい  
ふもの、覺たる事共を室永六年八月、聞書せしもの内にあり、

○抑摩之國ノ大守島津殿と申ハ、頼朝之三男忠久之後胤也、去程ニヒ  
キノ藤四郎義カスノ姉ニ、丹後之局ト申テ、天下無双之遊若也、内ニ  
頼朝之御手ヲカケサセ給出、程無傳人ニ成給、此事北条ノカミ、櫻岡石、  
頼朝ノ安時吉時ナドへ仰せケル様ハ、此局如何成瀬願ニモ沈メバヤト  
有ケレバ、彼兄弟三人計イニテ、君之御心中者ヲソシケレドモ、姉  
ノ心を休メン為ニ、日向之國へ流ス由申ケリ、乍去頼朝へ此白申上、  
偏ニ暇ヲ御出シ候得かしと申、若左様無御監候ハ、御外間取敷事モ  
や出来候ハんと申上ケレバ、其時迄ハ頼朝も未流人之御事成レバ、彼  
北条ガ心ニ不任シテハ、如何トヤ思召ケン、菟も角モ北条計ヘトノ御  
返事也、乍去今程只モナキ由申候、何処ヨリモ産之紐ヲ解給タル御左  
右可申上ト仰ケリ、左有ラバ都之如く上せ、便り次第日向之國へ流シ  
トテ、養津之國住吉野原迄列下リケルニ、彼住吉之松原にて、俄ニ産  
之紐ヲトキ給、サレバ不思議之キズイ多カリケリ、先何人共無キ女房  
妻之出来らせ給而、カイシヤク仕給、中ニモイトクラカリケレバ、火ナ  
ドヲ燈し、色々養生仕玉フ、明朝者、我々ハ鎌倉之若宮也、三島也、  
伊豆也、箱根也、木瀬、岩松、春日、住吉也ナド、テ、声々ノ玉ヒ  
テ、カキ消スヤウニウセ給、見ル人間人モ不思議成トゾ申ケル、中ニ  
モ櫻岡ハ未立歸給ハズ、居給折節、大雨降りて、住吉ノ不浄ヲ洗キケ  
レバ、彼狐女ノ姿ニ身ヲ成シテ、若君ヲネムリカハラケナドシケリ、  
擬社御稻荷とハ知レケリ、此山鎌倉へ御内意申上ケレバ、当時平家繁  
盛之折ナレバ、我下不知様モテナシ、母ヲ誰ニモ遺せト仰下シ給、  
其比ハ文字之民部太夫トテ、漢ノカウソノ後院成人御座マスガモトヨ  
リ、彼局者天下無双之女也、我モ館上藤ナレバ、此女房ヲ給リ、都之  
カタ原ニ仕給、然者彼君ハ生サセ給時ダニモ、神々ケ様之キズイ有

ケル故、本トヨリミ只人トハ見得玉ハズ、ハヤ勢程モ次第ノニ乙各  
敷成せ給へバ、頼朝モ天下之將軍ニ成せ給、我が子トシテハ則御秘有  
トシテ、時之隈政ニ而御座マス恐ニ、近衛殿ニ奉ル、去程頼朝程無ク  
セイ將軍ニ成せ給テ、御祝限無シ云々、  
高尾野上出水氏殿本

○宿をかりうけおき申、よくいたわり申ける程に、十三の御年まで  
ハ、かくし申しのひ給ふところに、その比奥州ひでひらと申者、緩急  
あり、これを頼朝御せいはいあらんとおぼしめし候へ共、大しやうに  
さだめられん人もなし、畠山重忠に御頼有けれバ、重忠申されける  
ハ、今日の御座しきに、左おりのえぼしして、きたりけるわかき人が  
大将と申、頼朝ふしんの事を申ものかなと思召て、やがて御らん候へ  
ハ、重忠申すやうニ、是ハ何ものかと御尋ありけれバ、其時重忠申け  
るハ、是こそ丹後の局の懐たいにてながしまいらせ候ひし時、住吉に  
て御産のひほるとき給ふ御子にて渡り給ふと申せバ、頼朝おほきにめ  
でたしと御らん候て、やがて重忠をちとかうし給へと仰下候程ニ、  
宣忠の志と云文字をまいらせて、忠久と申奉ける、其後丹後局ハ、八  
文字民部太輔へ給て、さいあいをなし、男子二人出来たりける、忠久  
宇治川を渡し給ふ時、御供申、河を渡申ける時、馬弱くて、河にうも  
れうせし間、子孫なし、其時鞍のもんニ、櫻のもんをしたりける間、  
御当家ニ御意候、又御当家ニ門屋きらい候ハ、かどやなき所ニ御宿を  
めされて、十三の年御せいじん候間其賀例を引也、  
一、三日まで松原にひくくして火なる石あり、其上に此子をすておき申、  
三日すきて、八文字の大輔今ハともかくにもならせ給ふらんとおも  
ひて、參候て見申せば、白き狐かこあり、此きつね乳を參せてゐたり  
しを見申候て、やがて御宿へ懐中申かへり、十三まで住吉に御座候、  
しかるあいだ大雨ふりて、やがてうみちなどをきよめ申、其外ふしぎ  
なる事共多く候ぬ、八文字がうらハ惟宗氏なり、市来殿先祖ハ八文字  
也、一比市来殿申されけるハ、我家より鳴津殿御はんじやう候程ニ、  
惟宗氏にて御座候と申され候、惣して水上をたし申きバ源氏にて  
こそ御座有へけれ共、此方へくたされ給ふ時氏重忠が養子として、氏  
を巴近衛殿まいらせ給ふニよつて、忠久ヲ藤原氏と申遣也、つくしに

御下候ほどに、幕のもん八何にて御座候するやと、重忠頼朝ニ申され  
 ければ、おろしも御台時分にてありければ、はしを盛敷になげ候て、是  
 がごとくにして有べしと、御意くだる時、御はし十文字になる間、と  
 にかくにし人々十文字と心得候へ共、十文字にてハなし、御はしの  
 ちかふもの也、式の十文字のやう、筆のいきおいにねたる文字のすが  
 た、かまへてあるべからず、まぬ人帯の文ハ、此方へ御下候しるしは、  
 人々かやうなると、当家の御事ハくハしくしらぬ也、御えほしハ前  
 ニかきつけおく、忠久此方へ御下候、日向国嶋津庄と申ところに御下  
 候、所の名におほして、嶋津と号す也、忠久御腹ハ、はじめハ丹後殿  
 と申、御すゑの方の人なり、頼朝御てうあひ有しによつて、後ハ局に  
 なり給ふと、是名付候故ニ、丹後のつばねと今にこゝるとのいわれ人  
 しまぬ事也、

東鑑

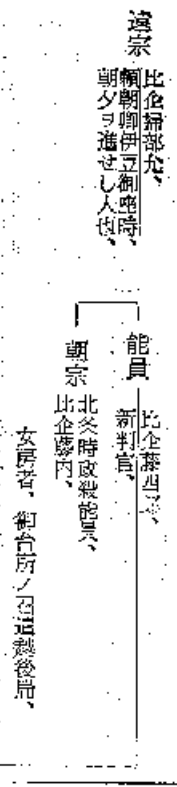
○治承五年、辛丑、七月十四日、十月十七日、中寅、御台所并二若公、自  
 為養利元年、御座所入御管中云々、比企四郎能員養御乳母夫、奉御贖物、此等難有

若干御家人、義具嫡母、身比、当初為武衛乳母、而永曆元年御遠行于豆  
 州之時、存忠節余、以武藏國比企郡為請所、相長夫掃部允下向、至治  
 承四年秋、廿年之間、奉訪御世途、今当于御繁榮之期、於事就、被關  
 被奉公、件尼、以甥義員為猶子、依奉申知比云々、

○養和二年、壬寅、五月廿七日、三月九日、己卯、御台所御指帶也、常

風妻依仰、以孫子小太郎胤政為使、獻御帶、武藏率令結之給、丹後局  
 候階騰、

本朝武家系圖、諸氏ノ部、  
 ○藤原氏



時員 比企四郎、与市兵衛尉、  
 宗員 比企四郎、  
 女子 笠原十郎左衛門親重妻、  
 女子 中山五郎為重妻、  
 女子 精盛藤太兵衛有季妻、  
 女子 頼朝將母安若狭局、一福若之母也、

養母次男

○頭時 名越通江守、  
 母比企藤内朝宗女、  
 建久六年之即誕生、

仁治三年、五月十日、出家、四十  
 九、法名竺西、  
 時幸 四郎、藤原從五位下、  
 左近大夫將監、母  
 同、寛元四、  
 五月廿五日、出家、  
 河六月十一日、卒、  
 太郎、  
 母有時女、

時春 室名、正徳、五郎、右近亮、河守、

政家 室名、筑後、  
 政直 室名、竹鶴、

基政 四郎、室名、宮野、  
 母嶋津御防入道女、  
 女子 平兼吉女、

右鈔於伊地知氏古系圖、本山嫡家  
 所藏古本

下 嶋津御庄宮 頼朝御花押  
 可早任頼家大夫三位家下文状、以左兵衛少尉惟宗忠久為下司職、令  
 致庄務事、



右件庄下司職、任領家下文、以忠久爲彼職、可令致仕務之狀如件、庄  
官宜承知、勿違失、以下、  
元曆二年八月十七日

右の下文に、領家太夫三位家下文とある旨趣、むかしより史館にて  
も能く解せざる事の由にて、季安が従兄本田親学、史職に居れる  
の且、彼職原に精き、赤井清兵衛、伊木某等に、訪ひ糺したれども、  
竟にその詳なるを得ずとの物語を、季安も竊に問ことあるに与れり、  
爾米庵を注めたるに、伴氏の語を改撰するわざを頼まれ、近ごろ薄  
く史籍ども捜覓せしに、幸にして鳥羽御庄の開発を言上したる文書  
を、藤原氏が蔵書に見あたり、彼此と稽へ糺せしに、実に本立て道  
生の心地して、此御下文なども、愚が心におひてハ、解釈せらるゝ  
やうにおほえ待れば、斯く漫に訓誦を注たり、その恐れ誠に鮮な  
からずといへども、只職者に訪て、感ひを解かん益のみなりき、因  
て此に其和訓したる愚意を志おけり、夫鳥津御庄とは、近衛家代  
より、叙し給ふ三淵の名号にて、領家とは、今俗に領主の志にて、そ  
の頃の近衛護下基道公を指し云へるなり、大夫とは、近衛家に使令  
せらるゝ諸大夫にして、尚通公頼家公の時など、進藤筑後守長英と  
いへる類と考へれたり、三位家とは、崇基公の北政所、従三位位  
子を謂ふなるべし、然あれバ、頼朝公より、忠久公を、我子と遊ばし  
てハ、賜給ふよりにて、時の謀政近衛殿に奉られしこと、古今職に  
いひ、また奥三ヶ國は、近衛殿の御分國たる間、御業あり、或は  
頼公を近衛殿御養君となど、御当家由来に書おけるおきにも、能く  
符合し、基道公と、その北政所の三位家は、御養父母のおはん統し  
たまはせませバ、其頃、公は御七つ、なほ庄務など知しめす御年なら  
ねど、只其權を分ち給ふ例にて、御養料に、此下司職となしまいら  
せよと、北政所の三位家より、大夫に仰せたりけんを、下文をもて  
鎌倉へ告たる状に任せて、頼朝卿より別御判をすへられ、御下文を、  
鳥津の御庄官等に下され、斯く、公を下司職となし、庄務を致さし  
め給ふによりて、その以前より、領家番代の庄官たる、富山海北が  
職掌など、よく承知して、即ち此御下文の旨をバ違失すること勿れと

の、御判物ならん、則御当家由来に、公より一任ききに、本山が  
下りてとあるも、此年の事に符合し、公は御七つの時なれば、  
右職の御名代に、先づ下司しけんハ疑あらし、

○頼家同史、仁壽元年、十一月乙亥、進右大臣藤原朝臣良房醫正二位、  
加其家夫人正四位下源朝臣藤原姫冠三位、

是にて、基道公従一位昇進の時、その夫人平位了も、従三位と爲り  
給ふも、例して知るべし、尤その従三位たる事は、大系図に見ゆれ  
ども、年月考ところなし、

○頼家同史、聖武天皇、天平十六年、己未、授左大臣家令正六位上舍  
仁外従五位下、○清和天皇、貞觀五年、十月二十一日、天皇晏太政  
大臣於内殿、以賀賀六十、而授其家令従五位下菅野朝臣内弟従五位上

○六年、二月二十五日、幸太政大臣東京興殿、授其家令正六位上  
奉部若外従五位下、○陽成帝元慶三年、五月八日、丁酉、授右大臣家  
令正六位上菅原朝臣永津外従五位下、永津檢校造東山庄、仍有此授  
也、○四年、十一月二十五日、先是太上皇不子、是日自櫻殿觀御内  
寺、詔授左大臣藤原家令正六位上兼宿禰、校従五位下、棲霞院者、  
左大臣山庄也、故有賜賞也、田覚寺者右大臣粟山庄也、

是をみて、大臣位の家令、三位に叙せらるゝ例なきことを知るべし、  
然あれバ、領家の大夫が、三位家の下文に任せてと説て、通するや  
うに覚えたり、

田中四朝書系藤原系  
○嶋津と云事ハ、元來薩隅日三州之惣名也、然るに御元祖忠久公、八歳ニ  
被成、薩隅頼朝公薩隅日之三、被成職に封せられ、文治二年、薩州山門院江  
御下向被成、三州を御領知被成候ニ付、三ヶ洞之惣名嶋津を以御家号ニ  
相定被成候、忠久公より以前、嶋津と号候家ハ無、亦同三州之惣名  
ニ而候証拠、元曆二年、八月十七日、以忠久公被任下司職候節、從頼朝  
公嶋津御庄官ニ、被下司御下文ニ、嶋津御庄官と右之候肩ニ、詞筆ニ而、  
而紙を以、和札、日向大隅薩摩三ヶ國惣名也と有之候ニ而、無疑候事、  
御当家由来  
○去程ニ、奥三ヶ國者、近衛殿之御分國タル間、御譲り有テ、奥国防職

之タメニ、御在國有テ、日向國島津ノ御庄ニ御居住有リ、島津判官ト申、御下向之時、女子殿原トシテ、本田ヲ、秩父日本ニハ、父秩トアリ、白尾天柱云、今東國に伊秩父テム名有リ、或人いひけらく、秩父の郡名も、本は伊秩父なるを、那村の名は、各ニ字を用ひられし時、秩父の字に省けりといへり、さらば秩父ハ本伊秩父の上段、伊地知は伊秩父の下略なり、凡物の名に、伊より取らば、多く楚語の辭にて、家をへ、木をさだ、猪をし、と、猪を呼ぶがごとき、余多例あり、昔の村字、かゝる誤りへしらざるらんか、至安國て按に、此例は、吾藩の地名にもあり、正徳五年、十一月廿日、御庄内に、伊作庄の内宮内、伊与宮、今田、て三ヶ名見たり、また寛永十三年、薩州赤松にも、伊与宮源兵衛とあるを、何れの頃より歟、伊の字を省るに、今ハ伊作の地も、府上の家号も、皆以伊宮と呼べり、さあれば、上古の伊秩父を、秩父と省けるよしへるも、謂れあることなるべし、斯りければ、秩父氏後に薩前に移り、播磨なる城をも、伊地知城と呼なかり、家号も伊地知と、伊秩父の下を省けるならん、吾藩に遷りし、理正季嗣が伊地知の事も、山田町茶の記されしに、伊地知、福岡、伊馬などは、感前より見え、また室町前にも、康暦二年、正月、伊地知左近將監於越前國トあり、此ハ理正が從弟、親船が守に當れば、康永三年、理正が移れる以後、二十七年の、感前の伊地知は、源びたるを見ゆ、今に其遺蹟には、非尚、ヨリ不申サレケル事者、忠久様ノ上様山陽藩にてふ御親あると伝聞けり、ヨリ不申サレケル事者、忠久様ノ上様本田次郎親経ガムヌメ、重忠ノ思人ニテワタラヤ給フ、其腹ニ持給ヒタル御ムスメト云云其故ニ、當國マデモ御供サレレルトナリ、先御先ニ下向シテ、薩州山門院知行シテ、瀬崎野ノ牧、又ハ感應寺ナリ立初ケルニ、一年後、忠久ハ御下向、御供十人仕、富山ヲ父トセヨ、梅北ヲ母トセヨ、三ヶ岡ノ御家人ハ、忠久ノ家人タルベシ、但數島者可指置下、頼朝御自筆ニ違ハシテ、給ハラヤ給ヒ、御在國アリテ、仍テ御分國ハ、御家百十三ヶ所、只ニ御重忠ニ是アリ、鯨島ヲ御指置ルベシトアツパン候事、如何トナレバ、鎮西ハ郎為影ノシウトタルニ依テノ義也、然ニ忠久、近衛殿ノ養子ニナシ、御申事、頼朝御遠慮フカキ故也云云

山田聖家系圖ヨリ  
 ○忠久、文治二年秋之北、三ヶ岡ざいこく侯歟、  
 全百記

○嶋津忠久御記云、父四國之末、日向大陽薩摩とぞ、地頭御家人強固なり、伯父鎮西八郎為朝、鎮守府將進として相隨、其儘三ヶ岡ニ住居有リし、其間なれば、忠久が自力に持べしとて、相隨と云々、御領之

臣は七ヶ岡、伊勢、若狭、信濃、越前、薩摩、大隅日向、國ノ御本領六拾七ヶ所、皇孫後之御局之折ノ、に大膳大夫広元、齋院司官、攝部頭親能、御口人に付而、猶主候様子者、同者天下に應せざらん遠國を忠久に知せ給殿之由被仰候、依而廣三ヶ岡御入部也、先薩州山門に御下、夫より嶋津之御庄と申者、九州庄内三ヶ岡御入部也、先薩州山門に御下、夫より嶋津之御庄と申者、九州庄内三ヶ岡を懐たる在所とて、三内嶋津之庄、南郷之内、御住所、城之内ニ御所作有リ、御座候訖、御養父八文空兵部大夫殿も、始ハ嶋津に居候、其跡に御座候故、嶋津殿と申也、頼朝之經者御判ニ茂、三ヶ岡地頭御家人ハ、忠久が下人たるべし、但比内、阿多四郎忠景ハ、為朝之せうとなるに、其式台に除かれしと承及フ、鯨島方事也、

古今載  
 ○建久七年ニ、薩摩之如く下らせ給、建久四年ヨリ七年迄ハ、都へシハシ給ケリ、去程ニ其中ニ、木上次郎親恒ハ、薩摩へ下り、様見兄オウゼテ、又御迎ニ上リ、而七年ニ、御供三下下り給、先出水之山戸へ御登有リ、其後庄内へ移せ給ふ、サレバ志布志ニ其比高橋之、中將一門仁礼殿トテ在之、應見島ヲ失ニ殿トテ御座マス、分領之人ノ引替り嶋津殿ヲ候ハ、其時ニ外山ヲ父トセヨ、梅北ヲ母トセヨ、其外三ヶ岡之者共、可為御家人と、御教書ヲ下シ給云々、

全  
 ○武藏之國富山チ、フ殿ヲ召寄、此三郎ハ鳥帽子ヲ着せ、御身之子ト名付候へと仰ける、添トテ繼而鳥帽子ヲ奉リ、御名ヲ則又三郎殿ト号、御名乗也、白身重忠之忠ト云字カタ取、忠久と定被中ケリ、其時頼朝ヨリ、宋主定ヲ又國ナレバトテ、越前、信濃、伊勢、若狭、四ヶ國ヲ給せ給、頼朝東へ御打立被成候、其時子ニ御殿、秩父 本田次郎親経殿ヲ、チウアヒ仕給、其腹ニ姪人御座候ヲ、彼又三郎殿ニ奉リ、執権ニ仕申サセ給云々、

右に見得しやうに、忠久公の御夫人ハ、富山重忠之女にて、その母ハ、本田親恒の女なれば、重忠の爲には女婿、また親恒爲にも外孫女婿におはせしゆ也、親恒一とせ御先に下向して、山門院を知行せ

しなど云へるは、右の下司職と爲らせ給ふ時、庄務を致さん爲めに、下れる事なるべし、左ありて翌文治二年三月、公愨地頭に補せられ給ふ頃までハ、高山門あたりに在り給ひ給て、其事も忒知せしならん、故に木牟礼の城を見て築き、御迎に上り、其秋八月、はじめ山門院に御入部在つらん、高山梅北が事を、御自筆もて御下知在りしは、鯨嶋が事と、おなし文治なるに扱れバ、古今戦に云へる、建久七年御下向にて、庄内に移らせ給ふ時の御下知なるべし、但鯨嶋が事と、忠景が事と、附会せしハ、聖堂等の間諜なるべし、忠景一族没収せられてこそ、鯨嶋は没官領の地頭に、建久三年補せられ下れり、何ぞ為朝の外翁と云にあづからん、公も没官領に地頭し給ひ、御同職の諺あれば、常の御家人とハ式駈をかへられて、鯨嶋は除られしならん、また親恒等、御先に居て、庄務の事を沙汰せしに、武士國人など、忠久公の御下知をバ白白に對持して、御庄の年貢を妨るもの有りしとて、また左の道下知し給へば、其間ハ、必ず親恒等言上せしには疑あらん、

頼朝卿花押

○下 嶋津御庄

可令早停止旁濫行、從地頭惟宗忠久下知、安堵庄民、致御年貢已下沙汰事、

右昔諸庄地頭成敗之条者、鎌倉迄止也、仍件職、先日以彼忠久令補任畢、而今殿下依令相替給、雖無領家之定、至于忠久地頭之職者、全不可有相違、違令安堵士民、無懈怠可令致御年貢之沙汰也、兼又為武士并國人等、恣致自由濫行、或打妨御年貢物、或背忠久之下知、每事令對持之由、有其間、所行之旨、尤以不当也、自今已後、停止彼等之濫行、令安堵庄人、不可違背忠久沙汰之狀如件、以下、

文治二年四月三日

○嶋津上總入道々繁代得百護百上、

欲早被直用捨御沙汰、就鎮西管領御下向、寺社本所領平成可有御管領旨、被成御教書由、承及問事、副進

一通 右大將家御下文案、文治三年九月九日、敦達雖行之、依案附之、

二通 鎮西管領御教書案文、弘安九年三月卅日、正應六年三月廿一日、

右道憲親祖後守忠久、去ル文治三年九月九日、以嶋津庄日向大隅薩摩、并與三、

拜領之条、右大將家御下文以下柄焉也、其後大宰鎮後守先祖、ケ國、

源政隆小建久年中、筑前前肥前、号前二、

次郎資頼、ケ國、拜領之、大友刑部少輔貞親先祖、号後三、

源院次官親能、建久年中、自後肥後筑後、ケ國、拜領之、如此無勝劣、充

行九州於三人、以米面守護職管領無相違云々、就中日向大隅薩摩三ヶ國者、為嶋津庄内条、御下文明鏡也、下文、

康永元年四月十日、略之、

康永七年、九月九日、丁未、比企尾家南庭、白濁開敷、於外未有此事、仍今日迎重陽、二品并御台所、渡御彼所、義澄遠元以下宿老類、候御共、御酒宴及終日、剩獻御贈物、云々、

○下 嶋津庄  
可早停止藤内遠景使入部、以庄日代忠久為押領使、致沙汰事、右号惣追補使遠景之下知、放入使者、義澄王家之由、有其間、事案者甚以無違也、自今以後、停止遠景使之入部、以彼忠久為押領使、可令致其沙汰之狀如件、以下、

文治二年九月九日

按元德元年十月五日修理亮英下知狀云、文治五年遠景下文云、下薩摩國日置庄云云、日置三者、為孫勒守比事之由所見也、縱雖為吉利名

文書、同三年停止遠景使入部、以忠久為押領使、可致沙汰之旨、預御下文記、況遠景狀、非論所事之謂、雖亦真忠規模云々、

全下知狀

○文治三年三月日、軍證寄進狀案云、相伝所領三箇所、在薩摩國內伊作并日置北郷、同南郷外小野、副進次為讓度文書等、右件所領、日置等

者、年來嶋津庄寄那由、而百姓逃散之間、庄内四方課役難勤仕之間、於今者寄進御庄領記、下司郡司惣公文職者、以重澄子々孫々、不可

有相違云云、所

右伊作宗久法師代、道慶所進云、見元徳元年十月五日、修理亮英時下知状云云、真忠香齋勒寺庄下司、宗太郎真忠也、

○立券

口上薩摩國密郡内、殿下新御庄四至事、在伊作那加外小野走也、

四至而、限小桃崎井上毛夜木瀬任下塩道大牟礼、北限外小野北波多迄日置塚波多々尾上黒河戸浦、

勒勒寺領、白余略之、

右依平重澄寄進証文、被成下政所御下文、并国司庁宣畢、隨任庄兩施行等、宣立券言上如件、

文治四年十月日

下司平 在判

善生數位藤原代在判

使藤井 在判

○嶋津御庄内、薩摩方、伊作止藤等、法橋承信、并下司高純謹言上、

欲早被与奪当庄本訴奉行入安富三郎貞泰方、被経御沙汰、被召上同

国阿多郡北方一分地頭高嶋三郎、不知被究御沙汰淵底、任傍例、蒙

御成敗当庄人來別府名内犬牟、并大野名内塩道上毛夜木瀬任、和口

名内橋半礼被野被牟礼以下所々、打越往古境、去正安三年以来、令

押領条、更不可通所当罪科、了細事、副進

一通 立券状案、文治四年十月日、

右当庄者、為 本家近衛殿、領家一乘院御領進止之地也、而高嶋三郎任

兼意、打越往古之境、令押領之上者、且被与奪安富三郎方、被召上被

隠没三郎、被経傍例御沙汰、為蒙御成敗、仍頼恐々言上如件、

文保三年六月日

英時下知状

文治四年十月日、立券状案云、薩摩国寄那内、殿下新御領四至事、右伊作那日置北郷、除勒勒寺庄、右依重澄寄進証文、被成下政所下文并

国司庁宣訖、任庄同施行之旨、立券如件云云、取、又建永嘉禧手継状云

日置庄領、与勒勒寺各別云云、日置者嶋津庄也、其内勒勒寺者、八幡河領也、云云、

伊作日置御文書事、

合

一文治寄進状案、外三四ヶ条略、

已上五通者、進之畢、

一立券庄号文書案、外二三ヶ条略之、

已上四通、追可進之、

右所進地頭御方也、

元亨四年八月廿一日、前俊(花押)

委安被に、右の花押は、左衛門尉前俊なり、領家一乘院雜掌たりし

事、正中二年七月下知状等に出たり、また元徳元年、英時下知

状にも、此三文を引証せり、右に見えしやも公儀にて、島津庄に寄

郡たる事は、御庄方も、国司方も、両方ともに、課役を勤けるもの

とおもわる、然あるに、百姓逃散して、両方に勤めるの難儀きに、

時の郡司平重澄、その地を一円近衛殿下に寄進し、子孫代々下司

郡司惣公文職は、相違なきやうにと、文治三年三月、証文をこゝの

へて、殿下に寄進いたしけるとおもわる、それゆえ御庄方よりハ、

領家の支子より御下文を成し下され、国司方よりハ、戸宣を下され、

庄国共に、下文と戸宣との施行あるに任せて、翌四年の十月、下司

と善生等、いよ／＼新御庄に四至の境など、立定たる、立券の御届

を、斯く言上せしと見得たり、左あるに、近衛殿下の一円領と

なれり、本篇につばらに解おきたり、此例にて推せば、万寿年中、

聖宗基が亦もなき荒野を開拓して、宇治関白頼遠公に寄進して、島

津御庄と名号を立られたりし時、大かた如此例にて立券ありしなら

ん、左ありて、御庄方にのみ勤められ、国司方の勤めは為さるもの

にて、いと利得なるものゆゑ、此処も宇治殿の御領、彼処も宇治殿

の御領と、のいひて、我々／＼國語國にまぢて、門々／＼國司方の

勤め堪がたく成ゆくを、後三条帝聞し食し上られ、宣旨を國に下され、諸人右やうに庄園くといふて、勤め領地の文書を、記録所を立て、そこへ召し集めて、吟味させられしとおもひ併せられぬ、然あれバ、懸竹抄に、庄園の文書とあるは、右に見得し、それく領家政所より下されし御下文と、國司の宣旨也、立券状の類を改られしとこそ見ゆれ、大角大人の、風土記なるべし所説たりと分註せられしハ、淺陋の季安さへも、心得がたし、宣き便を得たらバ、問ワましものをもと、斯くハ此に評しおさぬ、

下卷

○前右大將家政所下、左兵衛尉惟宗忠久

可早為大隅薩摩兩國家人奉行人致沙汰条々旨、

一 可令權内裡大番事、

右催彼國家人等可勤仕矣、

一 可令停止所買人等、

右件条可禁遏之由、宣下調處、而辺境之輩違犯之由、右其間、早可停止、若有違背之輩者、可処重科矣、

一 可令停止殺書已下狼藉事、

右殺害狼藉、禁制殊甚、宜守護國中、可令停止矣、

以前条々、所仰如件、抑忠久等事於左右、不可寬凌無給之輩、而又家人等、誇優越之余不可對持奉行人之下知、愆不慮罪出来之時、各可致勤節矣、以下、

建久八年十二月三日 案上清原

知家事十原

令大藏丞藤原花押

別当前因幡守中原朝臣

散位藤原朝臣花押

酒匂前阿彌文三日記

○大洲薩摩兩國奉行、建久八年十二月三日、右目六如件、

○止八幡宮神輿事、所被下給旨也、被時津本庄、被可奉動神輿之由、所用神人等治權云々、若有御人落寫者、薩摩國守護地頭御家人等、可奉留之

狀、依仰執達如件、

正應六年二月七日

下野三郎左衛門尉殿

○嶋津庄内知行分事、所被止領家一乘院所務也、於有限仏持事用途、并本家年長者、任先例可致沙汰之狀、依仰執達如件、

永仁五年七月五日

同下野彦三郎左衛門尉殿

藤原氏藏本

ウラニ鎮西御下知案文

○鎮西御下知 正文者嶋津下野守旨之、

嶋津下野前司忠宗法師 法名道義、今者死去、

今者死去、

子息、三郎兵衛尉忠忠代明孫、薩摩

國伊集院郡可四郎兵衛尉時終法師 法名道念、今者死去、

今者死去、

子息跡五郎宗繼法師、

迎意、

如遠嶋津庄三方地頭代之元久元年五月四日關東御下知者、地頭得分事、

本庄者段別者斗、寄附者段別五升、任領家御注文、可徵納、用作田百

町、所免給也、日向方四拾町、薩摩方參拾町、大隅方參拾町、段別者

石式斗地三町徵納、三管國郡司職者、自領家所被付地頭、下文紙接離無之、

比高島藏本

○正六位上 平秀忠

右嶋津左衛門尉殿、依奉成志深、所令書進如件、

建保五年五月廿九日 平秀忠 在判

○和号 山門院地頭所務条々、

一 地頭符合開券事、

一 山両方開券、可為本符倉也、

一 商等事、

酒藤園者、重安塔其身於彼園、有限在家受、并二地利物等、可令其勤之、於源次郎園者、可為地頭之業、於高小野實者、半分者可為地頭遊止、今半分者、居百姓可取在家後并、下文紙張より撰之、

一 狩倉事

右如向方自狀者、云領家分、云地頭分、被分狩倉事勿論也云々、然則遊頭分之外、不可妨礙家分之狩倉矣、以前条々大略如此、抑当御三垣頭得分事、已去元久元年、承元、建曆下知先事、而地頭代等、各守彼狀、可被沙汰之延、張行新機非法之間、於事正諱、及正務乱之由、雜掌所許申也、地頭代等所行甚不隱便、自今以後者、停止自山非法、且守先下知之旨、且任當時成敗、可致沙汰、之法依鎌倉殿仰、下知如件  
嘉祿二年十二月八日  
武藏守 在御判  
相模守 在御判

右に記得し、元久元年下知とは、藤野氏に成りたる、鎮西御下知といふ文書の内記、元久元年、五月四日、關東御下知とあるごとく、おとひ知られたり、伊せ考べし、

○元文元年未五月、筑後より稻荷御修補所被仰付事、頭之御書云々、  
○都之城郡元村之辺、都府在古者、鴨津与申候処、御名字を遠慮仕、鴨戸と改、当分ハ都元と申候、忠久公御下向被遊候初、御勧請被遊、古来より各歳棟、真鍮ニ而十字之御紋打付御座候、山田聖来日記云、忠久公三ヶ内にて御入部、薩州山門に御下り、大より鴨津に御座候とハ、三ヶ内を庄の内にて懐きたる在所に依て也と相見得候、且又忠久公御誕生之時、陸神稻荷を、鴨津に御祝御申候、同御事条々有、此内穴賀云云、不可他見者也と被記置候、日記にも、鴨津之稻荷之御遊宮、文明七年乙未八月廿一日、武久公御代官に、官丸殿孫子之鶴丸殿、御へい取申され、願辨請事取なされ候と見得申候、天文十四乙未二月、筑後杵北郷讚岐忠相、右社頭修補所候節之棟札ニ茂、忠久公御創建之旨相見得申候、右三付而、副被申出趣相違無之、庶兒島稻荷大明神縁起に、治承三年己亥忠久公於攝州任事、夜雨頗烈風烈し、狐火を燃し雀護す、御成人之後、三ヶ内御安濟之而御下向、鴨津の庄、鴨戸に、件之狐を稻荷大明神に御崇め、累世御氏神と定給ふ、命婦殿とて、狐之社于今存せ

りと相見得申候、鷹鴨稻荷神社は古代社耳依火災、稻荷請之年月不詳候得共在都元稻荷大明神ハ、古書付にも、有縁起にも相見得、無余儀事二而、別所同敷之神と相見得申候云云、

○名義志書山本百景

○惣持所神責、右祈念者、信心之大法小山寺、  
奉寄進、島津稻荷大明神、立願成就而已、殊大檀形和合、諸人愛敬白如件、天文二年辛亥、二月吉日、

○名義志書山本百景

○上棟、謹奉在造日州島津御三郎本稻荷九社大明神御三殿一字也、伏以当古者、北郷乃祖、藤原朝至島津忠久、自京師轉來、以安當此郡号社禱之神、爾交露往雨來、物換星移、棟檁凋落、丁爰北郷後胤、藤原朝臣島津讃州太守忠相、并左金吾尉藤原親、并次郎忠豐、欲企修造之願力、以夜繞日、經之營之、云々、丁時天文四年龍集之己十一月二日、大檀形北郷主君藤原朝臣島津讃州太守忠相、并左金吾尉藤原親、并次郎忠豐、和出越中守匡盛、并宮内少輔三浦、木願橋律師家成坊三門、基中少納言、

○全 申之郷 郡元村

○全 申之郷 郡元村  
祝古、飯屋本より廿廿廿丁程、

日記、此処、岩後守忠久公、薩州御下向後、以島津庄為履、初号姓島津、此其遺蹟也、御題号庵寺、  
一面此地初曰島津、以為御名字、中改島戸、  
音相違、亦改郡元、按忠久公御座三ヶ内島津庄事、見島津家日記

○同所同村、仏閣、飯屋本より廿廿丁程

○命婦山正覺院和光寺

日記、關山權大僧都葬會、建久八年十一月忠久公御創草、此寺為稻荷坐主云々、  
中之郷安久村、  
屋形石、己巳ノ閏二、

日記、強之因不幾程、有号建立寺場、有二蓋石礎、其高五尺許、彫刻梵文、号屋形石、不知所謂如何矣、

○委安按鹿屋玄素日記云、平大檢殿在所、郡城与梅北間の原に屋形于今在り、無隠候云々、また寛文六年、梅北止兵衛が神社記云、末基即平

家の世の末に成たるを聞きりて、菅野の本名の御所に隠居、云々あり、近ぐる邑津津由氏に問へば、今梅北益戸村に在り、春日社の華表より、末申の方六町余に屋形ヶ原といふ地名あれど出緒詳ならず、此安久村の屋形石は梅北より五町に当り、また郡城は、梅北より支子に当り、菅野は梅北に隣接せし支子の内に、今其地名あり、神律宮より末申に当れど、今その本名御所などいふ地名は、伝はらずと對たり、  
堀之内町

御所跡

忠久公御下向之初、東郷堀之内へ御所被召立、一往御仕居、日跡于今有之、幣ヲ建奉敬仕候、

御所跡

○毛車、執柄家家礼之人、用積御毛、積御、前関白近衛領鎮世志摩戸上御所云々、仍所服用之云々、

右の鎧抄ハ、嘉禎四年、十二月、年五十五にて、葬せられし中院の元祖、通方公の御なり、さて毛車を用られしハ、承元三年十一月、土御門帝の春日に詣給ふ時になど見へけるとぞ、それより四年まへ近衛基通公の御子、家実公、摂政関白に爲り給へれば、此に前関白とあるハ、基通公なるべし、左ありて通方も、承元の其年は、二十六の時に当れば、承元の古振もや抄写して、斯くハ載せられしならん、然あれバ、我が海公既に鳥津の庄衛に人部まし、ての後にて、積御を御所望ありしも、必ず

公に所望し給ひつらん、島津出一町領の内にて、敦仁嘉示布志の海、上二里許に、積御島とて、菟菜多く茂生するあれば、是をいへるなるべし、

無名抄

○つくしのしまどといふ所にかとよもの、其のついでにかたり侍りしハ、つくしにとりて、南のかた、大隈陣摩のほど、いつれの通とかやわすれたり、おほきなるみなと侍、そこには四五月にハ、あけくれ浪たちて、しづまるまもなし、四月にたつをうなみといひ、五月にたつをきなみとなん侍ると、いひき、うらま月といふゆゑにや、いどけふある事也、

右無名抄は、鴨の社人菊大夫長明入道嘉胤が著す書にて、長明が建暦二年著せし、方丈記に、我は六十との文に表れバ、仁平三年まれのものにて、得仏公より八二十六ばかりの長年、前時の人なるハ明らけし、然ありて、此にしま戸にかよふもの、と云に拠れば、庄内の島戸を指すなるべし、そこへかよふ道のおほきみなど、ハ、志右志のあたり歟、波見の川口など、今も波高き淡なり、又文明十一年、

同室公の時き、權信杜権を召て、爲めに寺を廢府の海岸に建おかれしころ、杜権の作りし詩などに、海涯新居、あるハ海岸尺地爲暴風怒浪被摩敗によて、長亨元年には、寺を城西に移したる事ども、島陰漁唱に言へれば、その暴風怒潮ぞ、長明があけくれ浪たちて、しづまるまもなきと書けるに、当れば、直に今の前浜に岸波築地の無き以前の、抄ゆきをばかくもいへるならん、

○抑当家ハ、忠久受慶家護、去建久三年千子、右下向洋領三ヶ洞、仍薩摩大隅日向守御所之内、嶋津の御庄ニヶ國と申ス也、然者代々の相繼無別子証云々、

右の忠永記は、何人の著わすを知らず、元和二年、長谷場越前が写せしに、征言集と題して原本に市米の竜雲寺に藏めたる証を被せり、因て考ふに、竜雲の開山、心若良信は、俗姓大寺氏にて、後八程四寺の主架なり、忠永三年にうまれ、二年に、七十三にて遷化せし人なるに、征言集の端端、多くは、の年号を数へて、文安に止れり、文安は、心若年五十の時に當り、忠永中はその親しく見聞せし赴なるべければ、おほかたその著わす書にて、寺に被めつらんも、謂あるに似たり、建久三年下向云々と、その年二月、  
公阿多宣澄が旧邑没官領の地頭を拜し給へる事を、惣地頭の事に依へ諒れると見得たり、

○建久八年、薩摩日三州區田帳のおもむきは、くハしく本筋にのせられたる、斯に略す也、

○島津郷庄、領家近衛家、地頭尾張守殿、

新庄七百五十丁、七十五文

深川院百五十丁、十五文

財部院百丁、十文

多羅島、五百丁、五十文

寄郡七百五十丁八段一丈、下文略于此

按に右にいへる、近衛殿は、家基公の時に出る、尾張守とハ、名越尾張守時章入道道隆ならん、肝付氏の古文書に、当郡地頭尾張前守入道道隆と見える、是なるべし、此時我が公室におひてハ、道隆公のおほん時に当り、守護職をもて、惣地頭をも、御先例にて兼帯し給ふべければ、その内には尾張守等が如き、地頭も併れしにや、是して考をまつ耳、

○日宿、新山、風子宿、調宿、

○幸始、鑄、薩州阿多郡金峯山洪鐘一口、

右幸跡志者、為正朝外朝、天長地久、関亡破下、關東政家、四海守護、国土安穩、諸人繁昌、勸化、方澤主所請、仍如件、

應長元年辛亥十一月日、大御造金剛末了妙法敬白、

大工、沙弥西願、

亦た按に、應長は、九十四主花蓮帝の御代にて、調口殿下は、近衛家にてハ、家平公に当れり、武家は、守邦親王、また、護は、道義公の時の事なりけり、

○比、高島、安藏本

伊勢国、柳御殿、家藏、尾張国玉江庄、真直、達江岡池江庄、泰家、

此間、略、

佐渡国六斗郡同、筑前国同、豊前国門司郡同、肥後国健甕庄、日向国

高庄、同嶋津庄守時、下文略す、

○建武三年二月日記、

○島田、大隅方、寄郡、出數七百十町八段三丈、内寺社御寄附方、

按に宰府の安樂寺なり、

○野田、大蔵原、右、情、藏本

○新田、右衛門佐義貞、謀、伐、事、去年被下、關東御教書、而肝付八郎兼重以

下空、令向憲義貞、於日向國所、華旗、珥及合戰之由、当国守護代、并嶋津比惣政所等、依能申所、差遣羽月四郎右衛門尉元真也、早相權一族、馳向彼所、可被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日

廣武又次郎入道殿

○日州、藤原郡大山原村新地藏本

○土持新兵衛尉實業、於日向國所、敵軍忠次第事、

一去年、建武十二月十三日、位上亂之由、依有其間、一族相共欲今上落

之処、伊藤藤内左衛門祐広、新田右衛門、同弥七、同弥八、益戸以下凶

徒等、令乱人国寄出以下所々、依改盜妨狼藉、國中幸均、相隨彼党類

之由、被斷之由、同廿七日、一族相共擡御旗、打出宿所候畢、

同廿九日、押寄伊東弥七同弥八宿所、變、追落之、焼払畢、

去年、建武十二月廿四日、祐広以下凶徒等、相繼嶋津庄移在院政所之間

間隔日、一族相共馳向彼城、致敵、今被追落之時、祐広親類秀党以下

數十人討取之畢、

外ニ六ヶ条略之、

右實業所、軍忌如件、以此旨可有御被露候、恐惶謹言、

建武三年二月七日

左兵衛尉實業

進上嶋津庄院政所殿

承了、左兵衛尉秀信在判

○日向新地日記御惡老此地へ堪忍仕候事、御当家嶋津殿与申候ハ、右大将頼家之三男

忠久、忠義、久經、忠家、四代め也、此御三七人有、貞久、忠氏、

忠光、資久、資忠、久泰、此等之儀也、二番忠氏ハ、三代御座候而、

隨絶申候、七男久泰ハ、一代迄也、三郎多、四郎納、五郎山、六郎源

ハ、于今有孫也、小身三而見苦致候へ共、如此也、其ハ忠宗法名道義

鎌倉江居住候而、時に頼公習なれば、北条へ御合せ候而、御六大江

知行を譲渡し伏見有、嫡子三郎左衛門分、貞久之事也、文保二年三月

十五日、沙弥道茂と有、出數之目録別紙ニ有、是ハ又為殿功之賞取宛



行也、者守先例可致沙汰之状如件、文保二年三月廿三日、武藏守平朝臣泰時、相模守平朝臣時房、嶋津入道殿、嫡男上総介殿、忠宗のゆつり状、北条之添状と、今での知行文也、文官前也、右之等物、此四人衆、各々御暗候、我々が家に、是を山にも積せしと格護申候、嶋津入道殿五男、安芸守殿と被書候、是ハ資久之事ニ而候、其知行之地、権山、石寺、嶋津、此等百五十町、北郷之内百町、曾井ニ有、下内内二十五町、合て三百町也、然者庄内之此地ニ、八代迄者御作申候云云

○下 嶋津下野四郎時久  
可令早領知日比國新納院地頭職之事、  
右為助功之賞、可宛行也、任先例可領掌之状如件、

建武二年十二月十一日

○樞軍家御台所御領、日向國穆佐院嶋津之事、高山修理亮、伊東八郎已下、直冬兵衛等、難城難攻候之由、可令退治之由、所被仰一色少輔太郎入道也、可致合力之状如件、

觀應三年四月廿九日

嶋津人々御中

○被尋下候、高山修理亮直頼、并嶋津上総入道道隆等、匠作者令与同兵衛佐殿、猶御台所御領候、并嶋津近江守時久所領新納院、  
日向國 上内、度々及于合戦、致押領之由、御被仰了知候、次ハ道隆ハ、於

御方ニ致忠節候之衆、世以無其隱矣、若此条倫中候者、可罷蒙八幡大菩薩御筆候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、  
文和二年正月廿八日 沙弥昌連

○樞軍家御台所御領、日向國穆佐院并嶋津院事、度々被仰之由、高山修理亮、伊東下野守等、不承引之由、加浪治可沙汰付、下地於給主代若林、彈正忠信秀之旨、所被仰了知候、早馳向可合力之状如件、

文和二年十月九日

嶋津人々御中

此等の古文書を併せ考れば、穆佐院島津庄とあるは、穆佐院が、即島津庄の意なり、穆佐院、并嶋津院とあるは、新納院と、穆佐院に

日向國嶋津庄の内なれば、新納院の政所をも、島津院と書たるなるべし、庄内の島戸らふとは別なるべし、  
○日向國嶋津庄内、穆佐院領家職、（鹿部一、桑院領、）半濟事、為兵糧料所、取置也、者守先例、可致其沙汰之状如件、  
（今川、） 嶋津（花押）

應安六年十一月五日

嶋津安芸守殿

嶋津庄日向方、隈野郷内十町分事、為本給問、任其旨所宛行也、早守先例可被領知状如件、

應永十七年二月十五日

嶋津安芸守殿

○日向國北郷嶋津内、并靈摩國鹿見島、知覧見内所々得之地事、不可有子細也、任早先例、可令知行者也、仍後日之状如件、

應永十八年十月廿五日

嶋津安芸守殿

○嶋津御庄日向方、隈野郷内十町、日向國大日郷之内十町、日向國薄壇事、為給分所宛行也、早任先例可領知之状如件、

應永十九年三月廿日

嶋津安芸守殿

○日向國嶋津庄、郡本四拾町、日向州三拾町、司薄壇五町、合七拾五町、

為志第之賞宛行所也、早任先例、可有知行之状如件、

明志四年六月廿一日

嶋津安芸守殿

○権山、早水、寺柱之内、北郷之内、嶋津之内、買得所々知行分、現作四十六町、銀十三貫八百文日、銀四百十七文、

已上給四貫二百十七文、進上仕候、

土持太郎殿給分、

嶋津之内、權宮、須田別府之内、現作五町七反拾町、段銀一貫七百三十七文日、銀五十一文、

以上一貫七百八十八文、

永享十年、安藝守、次年十一月六日、此日、（略）へ遷候、

六月十五日、教久

○日向國、島津院、安藝寺造立、応永五年戊子、云々、

今郡元村の内にて、早水城に、堂山といへる所に、安藝寺門にて、百姓屋しき遺るとぞ、左ありて、今本尊の阿彌陀は、川東村大草氏の隣に移しあると也、

安及村正應寺札、  
○日向山土宮一宇、

右奉為天長地久御欠、殊者当郡守護藤原朝臣嶋津守遠江勝久、并当別当権少僧都慈範、又助城、（略）当代官藤原五代右京助友春、藤原鬼塚久義、応仁二年、戊子、二月十九日、大願主源連日敏口、

右より三年め、文明二年、山田聖宗の書おかれし吉原区をみるに、節山公の御舎弟、遠江守勝久の件に、郡城居住はつしんとあれば、桂氏の別社、阿水和尚も、その頃島津を領せられたり見たり、

○大日本國日向州島津院門福寺、阿弥陀如來、奉造立、文明十六年、甲辰、六月十五日、信心大願主、奉加、備忘秋、理世初、南之坊、越前房、作者快扶、沙弥道、五郎太郎、孫左衛門、（略）、

夫以日州島津庄者、我高社豐後守忠久、領刺史於薩隅日三州、権輿之地也、然則当社亦基于我高社云、文明之乙夏、与薩摩守同久、赴飯肥戰場之日、肅詣于祠下、積年不修、大政難起、竊念我軍速捷凱旋、本祠豈不修復、於是神威亦施、敵陳忽亡、可敬信哉、依是茲歲与同久言談、新建一宇之願、以抽源頭之毋誠、伏希上棟之後、定礎堅固、榮煥安會、神德增光、一向共興、武功之弘大、仁政師厚、三州受致民業之服寧者也、長享二年、己酉、願主薩摩守藤原同久、修理亮藤原忠廉、可役助工権大僧都宝淳坊快扶、

○日州島津庄者、我高社豐後守忠久、於薩隅日三州權輿之地也、則文明乙巳夏、与薩摩守同久、赴飯肥之戰場日、雖起、精練會繼八幡宮勸

請之、願主前左衛門尉藤原教久、讓岐守教久、修理亮忠廉、薩摩守同久也、亦發率再興大日蓮、藤原忠相并忠親、

○長久入道して高米と云しが、年六十三、鹿見島江彦參上、令託言、我淺田敷之性ながら、悉も道義の末子道聖の弟の流、いかでか嶋津の郡右名の松山をバ、困衆へ可渡、願くハ御奉行衆御分別の事、大望之由數返難申上、太守忠兼孫、御老中、薩摩の鎌及御手、榊山得心次第ト云々、

右大水元年の五月頃ならん、榊山は、今勝岡の村名とおぼゆ、其頃までハ、彼あたり、向島津院の内なりけるにや、院と郡のことは、前に詳なり、

○十六日、鹿見嶋江彦參上之為打立候、田野へ若候、上之原之長藏坊江宿牛候云々、

一廿八日、日賀、田野之宿を打立候、山之口と嶋津之宿ニ而、肝付源正忠殿、宮崎老、善信之為使節被渡候ニ行逢候云々、

一五日、敷長二五郎殿、朝食長壽也、從大休生新度、宮崎へ越之由候間、同道二打立候、北郷殿へ御礼可中存候而、郡城江采刻許越者候、公之原本既当古郷隆昌殿へ宿仁候、休世齋者、嶋津迄追見候、云々、

○雖未申渡候、以事次令渡候、抑就白緒之儀、速ニ巳作へ令申候キ、可然之様被中談、合力候者可為本意候、仍雖左道之云候、屬三本進之、猶筑後守可申候之儀、令省略候也、

八月廿八日、  
（花押）  
嶋津三郎左衛門尉殿

右花押藝に稽れバ、近衛尚道公の花押とミゆ、尚通公は、天文二年四月、御出家、同十三年、八月、葬し給へれば、御宛は、貴久公にて、巳作とハ、勝久公歟、さあれば筑後守とは、進藤長美ならん、

鳥除嶋肥文集を按に、文明十三年、十月、送大医阿祖田詩序に、茲年文羽辛丑之冬、陳公泰奉左社府殿命、遠飛使尋於薩隅之地、太守忠貞非溺飲其釣旨之重、兼知公之為人、社待恩礼尽敬者非一焉、

云々、また文明十七年八月、送大医竹田公彦京師詩序にも、忠貞

云々、

公の英給ふ時、馳使于京乞戻于吉、於是勢州閣下、孫衛左村附鈞旨而命公とあり、按に此等の左相府は、皆家公にて、尚通公の御父なり、また乱道集に、豊州志朝の上京を奨める詩と序にも、伏致者分言氏於藤太相國焉などありて、詩の起句に、貴族會徒互相分と作るも、尚道公の山緒をいへれば、右の書詳も、おもひ合すべき也、

○雖未申通候、由緒興十御事候、令啓候、御一乱以來、不弁之儀、難  
新御事可本、賦比呂候御事通之、  
尽紙上候、此時一段預合方候者、可爲御書候、併芳情頼入候、猶九沢  
軒申合候、毎年期後信候也、狀如件、

卯月十七日 (花押)  
嶋津近江守殿

○雖未申付候、以事次令啓候、抑御家御事、異于他御山緒之延、御無  
言美背御本意候、定而聞言及候哉、公方様御祝言之事、被遂其節、取  
去三月、若公様御誕生候、天下安去、御家門殊御大慶候、自然対応之  
儀申入、随分不可存疎意候、然而依数年御御乱道、御家領等非分族  
抑妨候、言語道断候、如令者可及御断絶候條、口惜次第三候、此御以  
旧好之儀、被成御馳走、被扶助申候者、公私所仰候、比等趣懇可被差  
下御便節之山、御有増候、不笑内之因、延引之刻、乃兵軒下届之日候  
罷、雖被致致障候、種々被仰被言伝御言候、再花五十五首、御筆同、  
從織田御書短冊十首御筆、乍御俾被下候由、得其意可申旨候、猶彼所  
可被演説之、可得御意候、恐惶謹言、

卯月十七日 長美 (花押)  
謹上嶋津近江守殿御如

道濂筑後守

謹上嶋津近江守殿御如 長美  
右の申を、將軍家語に格れば、義輝は、天文五年三月十日誕生、母八近  
衛關白尚通女とあれば、去三月、若公様御誕生といふに相当り、ま  
た花押を按に、判形も、尚通公の花押に疑なれば、卯月廿七日  
とあるハ、天文五年の事にて、同一年月より自家し給ひしかたな  
れば、御書とも見えたり、さあれば外に時の關白禮家公より、御書

并花月五十首の御筆も賜ひて、權關尚通公よりも、右のごと新納八  
代の近江守忠勝に給ひたること、此頃勝久公被若守あたりは寛行  
まし、忠勝の勢ひ強きゆえならん、其より同十四年三月、大中  
公白興の太守と仰かれ給ひしおりか、禮家公より、日野左大弁幸  
相資將を本洲に遣はして、三河、及び守波の東行など場ひければ、  
おり、かたみにおほん消息あらせられ、同二十一年、日新公より  
伊集院忠朗をもて、吉市長門守実清を、種子島に召されて、京師に  
ゆき、禮家公、及び一色式部大輔に便して、大中公の叙爵と、世子  
又三郎君の御書を、幕府義輝公に請はしむ、是におひて、其年六月  
十一日、大中公は修進大夫に任せさせられ、世に御諱字を賜ひて、  
同二十七日、禮家公より世子に御書もて、其事を仰進はされ、日新  
公と權山善久へもおの、御書もて、公へは色紙二十六枚、善久に  
は二十枚、染筆し賜ひけると見ゆ、七月、実清京を請ひて、警回る  
左の如し、時き世子は善久と名つき給ひしとなり、

○好便之條、馳筆候、家明事、对其國、旧好美于他儀不珍候、進々無味  
意馳走之儀、執成頼入候、仍色紙 三十二枚 雖其進多候、昔進之候、委曲猶  
口言吉長門守候也、狀如件、  
六月廿七日 (花押)

日新同  
○去任上落之日候処、不能対面候、背本意候、家門由緒之儀、異于他  
細候、弥無疎意之條、進々修進大夫執成肝要候、仍色紙二十枚、雖  
其進多候、昔進之候也、かしく、  
六月廿七日 (花押)

權山安芸守どのへ  
○雖未申通候、抑御家御事之申、随分申調、義之字武家被染御筆  
候、後一家繁栄之基、尤珍重二候、仍太刀、腰、表御儀計候、猶委細  
中合、吉市長門守候也、狀如件、  
天文十一年  
六月廿七日 近衛清家 御判  
嶋津又三郎殿

六月廿七日 近衛清家 御判  
嶋津又三郎殿

○今度上洛、殊種と懇切之儀、本宮候、委由御印候、家門之事亦可然之  
様、以御走にて、来年上洛待入計候、執成肝要候也、かしく、

七月三日

(花押)

古前長門守とのへ (花押)

○右の文書、長門守が子孫、最上右近衛偶家に伝へけるをバ、明曆中、史  
官平田純正、遍く古書を徴す時、日新公あての御書などは、撰写せら  
れ、万治元年十月、点検ありし、百六十九通の内には、ミゆれども、  
右三十六枚の色紙は、はや其時より見得ずとなん、近ごろ府士和口秋  
美、かの種家公の書給ひし色紙三十六枚を市に獲て、御書中に所謂色  
紙も、比ならんと疑ひ、季安をして詳に其考を記さしめ、天保五年二  
月、伊集院兼直が江戸にゆけるに託し、事蹟を訂され、若や御用にも  
成なば、献納せんと請ひければ、四月兼直抱て江戸に至り、二十四日  
岩下直道に因て、

溪山公の英覽に備ふ、公特に珍玩せられ、直に皆召上られ、その三十  
六枚を、やがて十八枚づつ、二幅の掛軸に装束せられ、御幸中の色紙  
ぞ此ならめと、季安が考も副て、宝愛し給ひけるとなり、さありて、  
其秋八月、道朗をして、人の下るに齎らせ、明人談叢が画ける古雨の  
御掛物と、縮緬をバ、秋葉に賜ひて、右の報となさしめ、且季安が  
かうかへも、甚精し、史官の材と称せられ、平素の事まで問はせ給ひ、  
竟に此書四冊も、呈上せよとの仰ことありて、同十二月、これを江  
戸に献す、六年正月、道朗もち出て、英覽に備せられければ、老公熟覽  
まし、辱も御感涙からず、六月、道朗件の密旨を伝へて、季安に  
金十兩を賞賜せられ、別に新書もあらば、また呈せよとの内命を蒙れ  
り、さて其頃編に有司の意を承て、一向宗を禁せられし来由の考と、同  
考より琉球に預参せられしことの考など、画三冊ありしを、閏七月、  
江戸に呈す、其冬、老公大藏に御持下り、こもまた熟覽まし、いと  
と御感ありて、七年、八月、高輝を發給ふ前日、また道朗をして、密  
旨を伝へ、また季安に金五兩を賜ひ、七冊共に、副編とゆれば更に  
淨写し獻せよとて、此美濃紙一束を添賜ひぬ、然あるおりから、五代  
秀晃、感考の事を伝聞、再探方に御用あるとて、長く史局に徴し留ける

ゆえ、いまだ淨写に成らざる中、寔に老公も察せられ、道朗も殉し、  
斯く淨写せしも、献るに際なし、その為に賜ひたる紙なれども、後の  
時延をまら、粗其事をかき附て、季安が子孫に給し、堅く他に貽すを  
禁せしめ、幼きより玩古の癖ありて、因らずもかゝる恩恵を蒙れるあ  
らましを、永く吾家に知らしめんが為め、かくハ記おくなり、

都賀本

○近衛事、嶋津分領之内へ被遣候、然者日向之内あやより、人足百人、乘  
懸馬拾三疋、則奉行已下中付、嶋津修理入道屏城迄可送届候、嶋津又  
四郎かたへも被仰遣候、可被成其意候、猶陸奥可中候也、  
卯月十三日 朱印

北郷左衛門入道

○大口木史、一百八十、列伝第百七、將軍二、

源頼朝下、云、三子、頼家、実朝、自有伝、庶子信貞、頼朝思政子姑  
婢、潜時仁和寺僧隆晴為中子、住高野山、  
野山、自叙父有島津忠久、大友龍臣、並為頼朝子、島津家三子、比企能員、  
後房、御子頼朝有娘、遊取子姑、清赴西國、通伴吉世、御子久也、為推  
宗広言、言性雅家、大友家神田、大友家次列御前、為頼朝妾、大友、賜之  
高麗次官藤原頼隆、生藤原、言頼朝姓、為藤原、以外祖氏稱大友、東鑑頼朝二  
人異姓、前不言為頼朝子、則頼朝稱乎、抑亦所忌而然乎、則見系圖、則思久  
也、未知孰是、附以傳改、  
一、女、長適志水冠者義高、次三幡、稱乙姫、幼  
蒙女御命、未及入内而卒、  
一、女、長適志水冠者義高、次三幡、稱乙姫、幼  
蒙女御命、未及入内而卒、

○紺珠 荒井岩樂著

近衛殿御家礼之事、准藤兵衛少輔物語りに、伊豫家之儀者、世上も一  
通りいふごとくニ、山陰中納言の後なれば、藤氏の長者なる故ニ、近  
衛殿江礼あり、かゝるニ、殿公御幼少の時ニ、無双美少年なりし故ニ、  
政宗、并藤堂泉外、柳三丹州等、常々上洛之時ハ、御心安く出入あり  
し、政宗杯も少壯之礼を以てや、交り給ひけん、限りなくむつまじく  
なりて、昵近候事なり、今ニ御家礼被中候なり、藤堂此前之事を定言  
してまいらせられしとなり、近比の火事に焼ぬ、それほどの御事なり、  
殊に藤堂家ハ、歳暮に、葉中ニ黄金と鷹とを献す、近衛殿より御取次  
なり、長橋より奉書の日日をバ、近衛殿にてかへ給ふて下し給ふ例也、

又嶋津家之事ハ、近衛殿の家ニ仕へし豊後之扇といふ女、関原へ下りて、頼朝に仕へし、二位殿始ニ而、探原をして白比の浜へ沈むべしとなり、梶直引て出し時に、扇云、我京都に在りし時、近衛殿の御あはれを受て、既ニ懐妊仕候ぬ、我身いかにも厭ならん、此子迄をむなしくなさんの悪しき申せば、梶原も侍殿のおもひ給はん事を恐れ、殊に懐妊の事、憐ニ寛へしかば、沈め申せしと被断して、ひそかに落し申たるに、摂津國難波のほとりの石上二座して、男子をうめり、此よし近衛殿に申たりしかば、男子をいづくしとをたて給ふて成長の後、關東へ此よし聞へしかば、頼朝呼むかへ給ふて、おりふし薩州之嶋津ニ継子なかりしかば、此子をとらふ、依之嶋津者頼朝之御子共白せども、実ハ近衛殿の御子なりし世、彼出生の時の石の辺りニ、社之産土之神をいはひて、今も嶋津家の上下共々、往來の海岸に参詣在り、殊ニ、慶長關が原之役ニ、嶋津家之人々、近衛殿に家ニ帰し給ふ、上蔵を近くまで嶋津蔵とて侍りし、今ハ焼失仁りぬ云々、

附録の跋 此は、洋写せぬ三への文なれども、美陀に據りし條にも載たれば、本の如く重くなり。  
 管をもて天を觀るでふよりも、なほおろかなる季安が、久しく世に埋れし朽さえにて、いと似合ぬ遠つ世の事など、察ふとも、いかでかよく胸に湧びく、疑ひの雲をはらさんや、まして此御さうの証どもハ、所謂三國の總名にてそにあづかれる殘文断句も、また古今に駈けわたる、三つ國に散り墜ちて、往く依りのこれば、遂によく辨め考ふべきわざにしもあらず、然はあれど、そもよくしたしく島津の御國にうまれ、島津の君のおほんいつくしみをバ、世々絶まで浴きつゝ、朝な夕なわらがへの時より、くちにずし、心に尊む、島津の御名氏ながらその由緒を訪はれては、いかなるわけたも弁へ知らざるハ、いと本意なくおもひ侍りて、年月こころをつげあて、観るに従ひ、聞くにつれあとさきをわかつのいとまもなく、只半のまに、かき集めおけるを近ごろ新納久仰君と、その芳族伯胤等と、勧め給へる言の葉の、いとせちなるはいなひがたく、ほろかりの關のほとかりをもちりわすれてさきの月、はや愚考三卷を著はしたり、さりとて此石に誦へる文どもハ

おほかた冬の筆を下すとき、記の授け、事の証しにも引たれば、来背の幸ひ、是を陸として、なほたしかに併せかりがへて、淺陋の季安が妄りに誤り込るふし、をバ、更によく正し給ふかたもありなんとき聊かその胸にもなれかしと斯く写し附おきぬ、およそ三まきに引る、諺の「書どもハ、何ぞ是のミに限らんや、くさくさなほ多なれど、つるはてなかりけれバ、此冊は、まづ紙も尽ぬるまゝ、今こゝ英巳の卯月十まり八日といへる、平の季安、藩隱の意に筆を捲り、かくなじるべして、冊をたけり、こもまた天保四とせの事なりき、

- (1) 治安、稱二郎左衛門、長三郎守
- (2) 是月無考、大日本史係一月
- (3) 愚管抄ノ文蔵云々モテ校正ス
- (4) 受領
- (5) 同上記ノ季安ノ著下ニ在リ
- (6) 三部共ニ載本ニアリ
- (7) 此季安ノ著、当シリ、薩州ノ諺アシシ
- (8) 驚恐贊
- (9) 此二字系列不見
- (10) 此字不用
- (11) 少抄余リナゴリ檢クシテ
- (12) 此考ハ測冊ニ在リ
- (13) 蕨木如左、筑前守(ハイ後)、永濟ヲ永曆ニ作ル
- (14) 持久脱カ

管窺愚考附録 大尾

果立圖書館本管窺愚考下の一節(終りに近らところ、語は島津家本によって付した。)

(題註)  
 一 愚管抄 元正九月二回度 權家公領筆色紙形三十六枚ノ米塵ニ付成ニ據按アリバ重テ考テ再撰スヘシ、イマタ精シカラザンバ也一  
 政治家。至學三后。文明十二年秋。遣太医陳祖田矣使於藩。乃我 田室公特遇待之。十四年春。除取京。卓見論。 所著 則口準三官鈞旨。或曰大相國鈞命。稽諸系。皆指此公。羽矣。而前通公。永正九年。洛人巢松隴。忠願 守。皆并序。勉其如京。曰。伏聞。君族上世。分三廢相國。而不游京。特為可惜。亦當公時。所謂分自相國。迫言垂通公賜。得松公姓

藤氏事。可見矣。於是平尚道公屢賜。大給公書告楮伯好既又至。大中公立  
 与梅岳君第。二月廿八日。十八日。年。賜。公書亦促之謂。尚道公以其女  
 妻幕府。公。為御台所。天文五年。御台所。男。三月。是為幕府。輝。當  
 是之時。我。藩大亂。新納忠勝。等。率。大翁公。頗。兵威。於是四

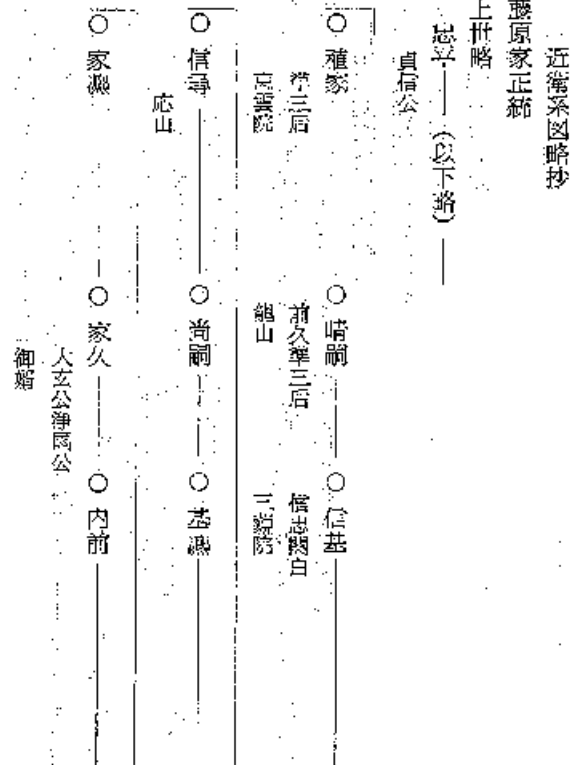
月。尚道公親加花押。賜。忠勝。二十。其大夫進藤長義。亦奉旨。致之書  
 亦。曰。遭世亂劇。如家領亦為人殺奪者。有于此矣。近。幕府。既生  
 貴邦也。由緒。故。九。特。好。與。以。而。今。安。花  
 其。所。加。公。花。押。也。且。長。美。書。謂。御。亦。指。公。矣。而。植。家。公。植。家  
 公。時。我。梅。岳。君。及。大。中。公。等。三。州。亂。亦。指。好。好。十四。年。進。三。州。多  
 御。公。為。中。興。主。乃。植。家。公。進。日。野。將。來。於。藩。賜。公。書。及。安。東。東。帶。以。賀  
 之。二十。年。十。一。月。植。家。公。勅。賜。輝。輝。賞。賜。公。其。諱。義。字。乃。晦。曰。幕。府  
 手。許。之。明年。六月。撤。下。亦。賜。公。書。山。是。公。名。曰。諱。久。前。前。久。公。  
 永。祿。七。年。前。久。公。及。父。殿。下。為。大。貢。二。公。請。官。途。於  
 正。親。町。帝。

県立図書館本管窺愚考附録の一部(番守玉里本との対比番目)  
 (一) 季安按菅生ハ始良郡ノ今ノ濱生ナラン、大水ハ大隅郡ノ今ノ垂水敷  
 詳ナラス、市来ハ日置郡今ノ市来ナラン、芙蓉ハ古ヘ葵ヲアクトヨミ  
 ケル古徴ヲ中ムカシ知ラデヤ莫爾ト謂レルナラント山田清安言ヘリ、  
 今出水郡ノ阿久根ナルベシ納津ハ網津ノ譌ニテ今高城郡衣引ニ追レル  
 網津村アタリナラン、田後ハ古ヘ道ノ後ナト明証アリ、且今ニモ江戸  
 人ノ姓ニ檢後トヨメバ今伊作ニ追ル田尻村アタリ歟、櫛野ハ薩摩郡今  
 ノ種脇ニ追ル市比野村アタリナラン、高米ハ今高城郡ノ高城ヲカク作  
 レル歟、眠家ヲ置レンシニテ今遺レル地名ノ似タルニノミ泥ミテハ路程  
 ノ遠近方任ナトノ当否モイカ、アルヘキ、重テ考フヘシ、余ハツバラ  
 ニ本篇ニ考フケリ、

口 右東郡平田大角ノ古見徴ヨリ抄或ス、群言一覽ニ考フレバ、諸古事

後ハ写本三卷、昔終ハ古事款ニ同シトアレハ、真字ニテ記ルセシトヲモ  
 ワル百練抄モ写本一七卷記者詳ナラス、大治承安文曆ノ頃ノ事共記シ  
 テ、奥書ニ嘉元二年正月十五日以大坦之房卿本吉宣校合畢貞顯トアル  
 トゾ、飛管抄モ写本七卷慈鎮和尚ノ作ニテ、神代ヨリ當代迄君臣ノ享  
 跡ヲシルシ、東鑑、參考シテ益アルトノ赴サト見ユ、尤卷首ニ慈鎮ノ  
 自序アルトゾ、本府ニテ此三部ヲ探レトモ、所載ノ人ナシ、驚亂カ右  
 ニ註セシ諸人領知ノ庄園ニ付タル文書ヲ、風土記ナルヘク、ヨモフト  
 バ、季安心得ス、序五マタハ立券状ニコソアルヘケレ、本篇ノ文治三  
 年四年ニ併セ知ルヘシ、  
 (黃白問答ノ引用ナシ)

(二) 右ニ抄載セシ通ニテ愚管抄ニイヘル守治殿ノ時一ノ所ノ御領タトノ  
 ミイヒテ庄園諸國ニミチテ國々ノツトメ迄ガタシナト云ヘル當時ノ權  
 威ヲモヒ知ラズベシ、是ヲ觀テ鹿島氏ニ載メタル島津御庄官等ガ官上  
 状ノ赴モ能ク符治セシ事ヲハ徴トスベシ、  
 大系圖  
 近衛系圖略抄  
 藤原家正統  
 上世略  
 忠臣——(以下略)



○経路  
○墓前  
志源

今  
御台榭  
此御獅子  
今  
漢山公御葬

○大和名所図説

一乘院 (略)

大乗院 (略)

右大和名所図説ヨリ抄載ス、一乘院ハ覚僧正ノ本願タリシ事ハシラサリシニヤ、寛治元年ハ覚僧正十八歳ノ時ニ当レハ中興ナルカ、新井氏折々タタシメ南都南門主一乘院殿 相論ノ事已ニ御裁断ニヨヒヒテ御他界アリ、此事ニヨリテ一乘院門主使者並ニソノ院家花藏宗、發心院等ヲ下シテ向ナル、事夫アリ、シカルニ此事ノ由ヲハ近衛ノ相國ヨクシリ給ヘリ云々、又寛文五年十一月三日ニ其望申サレシ旨ニヨラレテ御宗印ヲナサレタリ、前代初ニヨリヒテ公家ヨリノ仰ニ興福寺ハ藤原氏ノ氏守ニテ代々ノ天子御外戚ノ御寺ナレハ公家ノ御沙汰ニマカセラレタキ由ノ御事ナリシカハ其仰ニ任セラル、貞享年中ニ至テ一乘院ノ門主ハ雜摩會中第六日ニ寺務職ニ任セラレ大乗院ノ門主ハ進講ノ後ニ拜任アルヘシトハ實下セラレタリケリ、

聖安按公卿補任等、(以下玉里本奉安診考案) ……今測尋其源則首

平道長之榮華者明矣、

右ニ輯録セシ趣ニテヨクノ万寿万寿ノ宇治國百威威勢ヲバ會得シテ左ニ文章ヲシ御庄宮等ガ言上伏ヲ觀レバ島津御庄テフ庄号ノ立券シテソノ以來代々近衛家ノ家領タリシ庄園ニテ本庄トハソノ一内持切今ノ庄内則ソノ遺址ナル事ヲ知ラル、ナリ、

○鳴津御庄官等諱言ト云  
「志布志國屋權兵衛兼治家蔵ト云」

勸小細「專」(朱)「日本例字ト有朱註云、此間誤ス、今奉安案文藝詞只  
賜事字耳、此註恐有錯誤故以朱補之候長本陣」

母 (玉里本ココニ次ノ記事ヲ欠ク)

源州帖佐城ハ保安三年知足院禪定殿下被寄進正八幡官雖然其以後帖佐治郡宗家法拍至元短地頭之廻右大將家頼朝公建久九年七月被遊之亦被寄附 正八幡官其後善法寺在下向榮河成所云々  
右平山家山緒書ニ有之、是ニテ考ヘ候ヘハ帖佐廣保安三年已上ハ島津臣之寄附ニテ為有之筋ニ被考候奉安記之、

なお県立図書館本は玉里本にくらべ掲載史料数は少ない。たとえば玉里本の左記の如き文句ではじまる史料は掲載されていない。

- ・抑懸老此地へ攝任候事
- ・日向國島津庄内禪佐院領家職
- ・日向國北郷嶋津内
- ・島津御庄日向方
- ・日向國島津庄
- ・椎山草水寺柱之内
- ・日向國島津院安養寺造立
- ・右の事を將軍家譜に稽れば
- ・去年上洛之由
- ・雖未申進候
- ・今度上洛
- ・右の文書
- ・大日本史一百八十
- ・紺珠

雲遊雜記傳 上



# 雲遊雜記傳 上

延喜式所載神名帳日本國中大小神社三千一百三十二座其外石清水吉田祇園北野号式外之神後朱雀院長曆三年秋八月二十二社之數每歲勅神祇官以奉幣帛祈年穀除禍災名之曰祭、先是每歲仲春四日遣幣使于群國、至是其國司奉記各祭其國之神云々、出于道春神社考、

清風筆記

一、往昔下大隅噺原前内海辺隣タル地ヲ領スル者アリ、俗辺田七人ト

云、上井 今讀註臨六家園 敷根 今島津右 今個氏家 今池袋氏在外城

石井 今二家斷絶乎垂水 伊地知 今秩父家垂水云城三海 元社肥後守平

七郎家下大隅高城領之 高城垂水ノ内ト相見得候

右七人領地之如何程ニ相当可致哉觀察候、

一、南方 海辺知覽願 一山北 東郷入來村各陸境城

一、坂ヨリ上ハ福山ノ坂ト云、

## 雲遊雜記傳序

余也不肖ニシテ二十七ハヨリ覺取ニ連坐シ躬ヲ三年ノ遠謫ニ苦シメ心ヲ今ノ禁錮ニ焦シ阿ヲ杜キ深ク憤テ此ニ世交ヲ絶ツコト通計十九年昼ハ宿工シテ乘機ニ充テ夜ハ苦ヲ猶テ其レト語ルニ我藩ノ書籍ナド古今ニ驅リ三國ニ散墜テ板本ハ行ハレス、公ノ秘閣ナドニハ據ケ畜ハヘラレ宗ル人サヘ得モ獨クハ抄ラレザルホド多カルトナン聞侍レド古來深ク秘宝シ玉ヘレバ家々モ其ハ散ヒ多クハ珍寶シ侍リテ誠ニ合璧ニ持ル編タモ此ヲ聞クニ便ナク彼ヲ借ルニ縁アラヌ、ヤウノ三四百部モ坂得テ読ツレド腕舐惡筆ニテ殺青ハ勤メヌ、記憶ハ薄ク今サラ何一ツ胸ニ覺タルフシモ無レドイツシカ聲ニ華ヲサカセ齒輪ニ打スキ復出テ仕奉ルヘキ余餘モ無ク入テハ幸トナン云ヘルモアレバ貴テ、我身ニ叨ララ見セタル親トモノマタ其遺ツ親々ノ事業マデ次第ニ尋辨テ家語トモ撰修テ追奉スル事ヲバ今ノ吾ガ勤トオホヘ是ヲシテ在先ノ世々ニ榮顯シ、治亂ニヨテ或ハ身ヲ節ニ殺シ、或ハ忠ヲ職ニ竭シ、彼是ト功ヲ立家ヲ興シ時ヲ任ヘテ令吾何ノ功ナキノミナラス、罪ヲ負ヘル余マデモ生才ガ有難ク國士ノ恩ヲ永ク荷ヘル事トモ誠ニ何ノ日ニカハ忘ルヘキ、此等ノ高恩ヲ善クノニ孫ニ知ラシメ彼等方尚永世忠報スルニ専ラ業ヲ文武ニ勵ミ身ヲ忠孝ニ研キテ志公ニ懈ラザルコトトモ候テ只深ノミナリキ、此篇ハ別先世采ヲ姫木ニ食者アリシニ其名文明六年行脚僧雜錄トナン云ヘル古書ニ見ヘタレバ其レガ事トモ搜ストテ博ク戰籍ヲ考ヘタルニ其類ノ名族多クハ心ニ淨ヒ自ニ覺タルモアレバ時々筆ニ任セ爾ラスモ斯ク編ラ成セリ、左レド罔ヨリ管ヲモテ天ヲミルテフハ尚慮ナル余カ淺陋ノ臆説ニテ既ニ三百五十年ニ余レル古事ヨリ遠キ神ヲ代ノ事マデ引出シテ漫ニ演述スレバ何モ角モ只編願ノミナラント題シテ雲遊雜記傳ト名ツケ別ニ又原文ヲ善端ニ表章シ朱ヲモテ墨按ヲ註初シ一篇ノ提要トシ、他口筆ヲ識者ニ逢ヘル時ナド事ヲ問ノ種子ニ姑ク序シテ遺忘ニ備ルコト滿リ、文政丙戌正月筆ヲ城北上ノ原潛隱ノ茅庵ニ扨リヌ、平塚安

原本本文

〔愚按突給〕

文明六年 甲 八月之頃花洛西九州下三分隔日向大朝薩行征討聞侍仁  
当守護御形島津之又三郎殿藤原朝武久 忠貞公 御年十二歲代御住  
所鹿兒島

一、別府仁「島津」薩摩守 薩州 国久御舍弟「島津」中務「太輔延  
久」、同彈正「忠經久」、平山仁「島津」後守 越州 季久御子息「島  
津」修運亮匠作忠廉、石右衛門仁「島津」相模守 相州 友久御子息「島  
津」三郎左衛門尉「忠幸」、權門三「島津」式部太輔 東部 久遠、同又  
四郎「善久」御曹子、三撰下城仁「島津」伯耆守 伯耆 久登、一撰北仁  
島津「次郎三郎志徳、鉄肥仁新納近江守 江州 忠統、志在志仁御舍  
弟「新納」三郎左衛門尉「忠明」、御舍兄「新納」駿河守 駿州 一是  
久」、安永仁北郷「該岐守」義久、野々三谷仁樺山「安芸守」良  
久、加治不「信加治木左衛門尉清久」、知寛「仁」佐多「下野守忠  
山」、高城仁給察「民部少輔久統兼」、指伯仁「島津」九郎左衛門尉  
久繼、市成仁山田 加賀守忠広、平房仁官里「美作守忠常」、高江  
「仁」河上十郎左衛門尉「義久」、高橋仁「島津」藏人「幸久」、平  
和家仁宇宿左馬助、

一、御子持之御城柱 粟之類 三原高城仁新納越後守越州「忠泰兼」、  
末古仁高丸「二郎太郎知教」、牛山仁伊勢院「郎左衛門尉」繼久」、白  
木野仁河上「左近」將監「忠孝」、

遠江守公季」、山東仁伊東大和守祐義、同「子息」六郎右衛門、佐渡原  
「仁」佐上原謙敏守松賀殿「土持原、  
一、御内之方々串良仁立印左馬助兼宗 当奉行一今 鹿原仁「鹿原用防守」  
兼右、同高岳仁「鹿原」若狭介「兼資」、下大隅仁「高城八」已後「  
藤内左衛門尉盛高、華水八」石井「丹波守義忠、本城八」伊地知「太  
郎左衛門尉重盛、田上八」梶原「備前守景豊、下之城八」池袋「備前  
守宗政」、救仁郷仁肝付主税助「兼光兼」、延「仁彌兵部少輔」、敷  
根「仁敷良備前守頼次兼」、清水仁本田「因幡守」親兼、恒言「仁恒  
言門太郎兼」、蓬良仁大寺「彦次郎義幸法名幸榮丸」、庄内山口仁肝付  
大次介「兼恒」、給察仁蒲三「刑部少輔清清」、繁雄「仁頼雄美作守兼  
政」、阿多「仁一桑波田」右馬助、河田「仁河田飛騨守立昌」、比  
志島「仁比志島河内守立頼兼」、郡山仁村田肥前守經安当奉行各一城  
宛被持候、

一、都筑兼仁橋口末弘十郎四郎、宇備小次郎、南郷、木田、岩見、  
「安久在入雷山事、九月九日御任正祭三、御代參任來垂鎧被列候由、建武元  
年十月十日宮口快美、親父高山守部左衛門入道完成候狀、日向方北郷官九名内當  
永成清等告知行すへきの御朝臣御判あり」

本「市来仁大寺美作守」高率、曾木、隈城、渡邊、筑前守、高宗、天辰「新六」、本田周防介、成核「左衛門尉一族」、田五「周防介胤久」、伊作仁末孫「足成守殿」、牧瀬宗実、鹿見島衆、大寺七郎、永吉、和泉越前「久貞」、平田佐護守、飯肥「八郎左衛門」、而伊豆守、村出太郎左衛門、伊地知新左衛門尉「重貞」、梶原主計「純実」、河上「仁河上上野介兼久」、可因權守「忠村」、同左京亮「忠頼」、長野「備前守兼」、本田治部少輔「宗親」、内浦枝次「兵部少輔殿」、関「備中守兼」、田島「隼正久等」、五代「筑前守」、兼根查助、中俣「十郎殿」、谷山仁本留又次郎、長野助五郎、水引仁國分、高藏彦太郎、今給勢長州長次「勇石」門左「トカ左」ハ伊藤清社也、長州三郎九郎、一薩州之御持城和良、山門、高小野、阿久根、河辺、山田、鹿見、同老名高崎、一豊州之御持城帖佐、平土、高城、上之山、平瀬、蒲年、北村、溝辺、横河、京郷、同老名上原、一新納殿分南郷、志布志、安榮、松山、同老名限江、伊勢守「臣久九」、中野「備前守」、老名録曰「尾張守數年一、三原一、濃江守重秀殿」、一北原守城飯野、徳満、馬淵田、吉田、吉松、野尻、栗野、一山東城根松、池尻、曾井、宮崎、清武、田野、山之城、木之脇、阿屋、木城、都於郡、岡宮、財部、竹家、八代、平賀、塩見、比知屋、門川、新口、田島、同老名稻津、野村、垂水、兼合、宮田、一神谷院分大村、波形、鶴田、山崎、久木、一肝付分、高山、木城、宮山、野峰、宮下、滝沢、一瀬野分、西俣、大始良、右之本書ハ智恵之寺ニ為有之曰也、河野郷左衛門殿被持米俣故写也、

元禄五年  
中ノ十二月廿六日

「當時御記録奉行」  
右者先短助右衛門重英白筆写置于今致家茂候外、御先祖民部殿御名前相見得候ニ付御親筆被成願有之、此節被写置候儀別条無御至候、為後証加筆加比御座候、以上、

文化十二年三月廿六日  
伊地知助太郎 (花押)  
季美  
伊地知小十郎殿「季安」  
雲遊雜記伝巻上  
潜隠 伊季安 撰述

此書旧下名ナシ、又何人ノ記セルヲ詳ニセズ、昔シ文明六年アル僧キテ薩隅口ノ三州ヲ行脚シ廻リ諸ノ郡邑ニ割拠セシ豪族ノ護ヲ調侍リテ止メ時ス、邦君ヲ始メ奉リ御一家ノ歴々ハ云ニ及バズ同衆御内ニ至マテ其頃イト頼ハレタル士ヲ悉ク訪探テ此ニ載セタリ、按ニ忠仁ノ兵火ニ落中落外ノ人家公家武家寺院町屋焦土ト為ルモノ方ヲモテ數ヘ彼ノ南禅寺相阿寺等ノ如キ大御監督ツノ災ニ罹レリ、又文明元年ニモ清水寺ヲ失シ同十一年ノ薩迄再興モ業ハテ願阿ト云ハル信件ノ事ヲ幕府義尚公ニ訴ヘ鐵化ノ為メ九州ニ下向シ薩隈日ノ如キハ、田宮公ヨリ触サセ至ヘトノ御奉旨ナト持下リシ事アリ、其文ニ曰、  
清水寺建立事為勅 此ニ願 願阿十船令下向九州 爾々 可然儘可被相觸分國大隅薩隈日向三箇國之由所被仰下候、仍執達如件、  
文政十一年二月廿七日 布施 下野守判 飯尾 大和守判

「忠臣公」 島津陸奥守殿  
此等ノ事ニ拠レハ此六年ノ行脚モ忠仁ノ兵火ニ遭ヘル寺僧等花落ヨリ西國ニ下リ三州ノ豪族ヲ問書シテ己ガ寺院再興ノ工程ヲ尋ル為メニ時ノ次第ニ循テ粗叙録セシモノト見得タリ、原本ハ薩州知宮ノ寺 何レ寺知ラス、知宮ニテ寺アリ、一ハ持世院ト云、真山伊照法印ハ文安二年乙丑二月廿九日ニ遷化ナリ、一ハ四福寺ト云、此照止院院和尚ハ享徳二年癸酉十二月廿八日滅ス、皆文明、ニ云ハリケルトゾ、元禄ノ始ニ至テ河野郷左衛門通朗トテ太史六兵衛道古ノ子此書ヲ得テ時ノ太史伊地知助右衛門重英ノ所ニ携ヘ示シケルヲ重英写シ置レタル、親本世々其子孫ニ寄藏セリ、季安近頃復得テ写シ改シニ書ケル若斯ク永ク伝ルニ慮ナク聊カ一旦ノ用ニ留メ置シモノト見ヘ文甚ク簡古ニシテ盛衰ハ淵源ト替ル皆ヒナル

三三五五十年前ノ事ヲ一旬句ニ書ケル類ナレハ當時ノ人ニ非ルヨリ  
ハ遠ニ解セラレヌモノ多カリキ是ヲ以テ委安淺陋ノ語ヲ忘レ諸ノ旧籍  
ヲ校引シテ百ニ一ツモ考当ル事トモ拾采テ粗此抑ヲ起ス、竊ニ聞ク、  
山本正誼ノ国史ヲ編スルモ必此書ヲ引テ行脚僧雜録トナシ題号セラレ  
ケルトソ、因テ此ニ今斯ク題命シテ來百ノ正スヲ竣コト爾リ、

文明六年甲申八月之頃花落西九州下三ヶ国日向大隈薩摩行脚通開侍仁  
按ニ文明ハ 本邦百四代後土領門院ノ年号ナリ、六年ハ室町幕府八世  
義尚公即位ノ二年ニ當レリ、花落ハ京都ナリ、西九州ハ花落ヨリ西ノ  
方九州ニ下リテト云意ナルヘシ西海道九ヶ国ト云ヘバナリ、九州ハ安  
万侶ガ古事記 和訓元年 二著ス、 二所謂伊弉兩神ノ生玉ヲ筑紫嶋ニテ旧ト四面

ニ名アリ、筑紫國ハ白日別ト云ヒ豊國ハ雲口別ト云ヒ、肥前ハ建日向  
豊久土比泥別ト云ヒ熊野國ハ建日向ト云ヒ四ツノ名アリテ、其建日向  
ワタリハ則今ノ薩摩曰ト見得タリ、廣々許葛天降マセシ時キ猿田彦ノ  
天神ノ御子ハ筑紫日向高千穂櫻觸ノ峯ニ至リ給ヘシト云ヘルヲ概レハ  
日向ト云名ハ既ニ瓊々杵ノ時ミリアリケルカ養老四年退テ日本紀ヲ編  
メル時其事既ニ日向ノ故事ナレハ養老ノ時アリシ國ヲ誤リ參ヘルカ  
サダカナラス、又瓊々杵ノ天降マセシ時瓊完ノ空國ト云名モ見ヘタ  
リ齊ハ背骨ヤ肉ノコト也、完ハ余キニテ丸也、只人少キ不毛ノ空國ニテ

完鳥ナト而巳多ク何ノ財宝彩色モ無キ山國ト云意ナラン、彦火々出見  
尊ノ山ノ幸シ玉ヘルト十四代仲哀帝八年ニ皇后ニ神託アリテ熊襲ハ服  
ゼストニ彼カ國ハ替之空國ナリ、其ニマサリシ新羅コソ金銀彩色多キ  
空國ト云ヲ觀テ想像ルヘシ、十二代景行帝ノ時ニ至テ是國也直ニ日向  
出ル方ニ向ヒシ國トテ遂ニ神代ヨリ建日向ト謂キタル返ヲ始テ日向  
ノ國ト号玉ヘルナラン、其頃熊襲ト云オゾヒ者ノ近國ヨリ畏シガルホ  
トノ西州ニエ名高キ翁長坂キタル事モアレバ猛キ獸ニタトヘニ熊襲ノ

國トモ又其ヲ略シエ曾ノ國トモ 郡名ニナリテ 會於ト云ヘル、 云ヒ、或ハ火爾降命、  
彦火々出 ノ子孫阿多牟人、大角等入等ヲ稱國中ニ繁衍シケレハ單人ノ  
見テノ兄 國トモ或ハ夜城國トモ云ケルト見ヘタリ、今按ニ熊襲ト云ヒ單人  
ト云モ皆酋長ノ号ニテ川上島師ナト云類ニヤ茨ハ草ヲ次キテ國

ヲ葺クコトナレバ彼等ガ巢窟ヲ指セル詞カ 彌州國分ニ單人城ト云アリ、  
タル濱社ナラン、且下部民モ倭人ト祖ヲ謂スト姓氏録ニ見ユ、去レバコソ久  
八年前日向ノ國田トニ曰下部ノ依包成ハ薩摩行直言直感納ト見ヘタリ其頃迄  
ハ此ヲノ神祖モ尚繁茂セシニヤ、今世ニモ若切八木土持海江甲等皆曰下部氏ト  
アリ、其中ニテ土持若切ヲハ日向七領ノ列ニモ出タリ、皆其高ツル乎、  
皆是今ノ三ヶ國ノ總名ナラン、十三代成務帝ノ時ニ至テ國々ノ界ヲ定  
ラレ大小ニ夫々國道ヲ定玉ヒ、界ニミ亦大小ニ其々界主ヲ定賜ヒシコ  
ト古事記ニ出レハ此時マテ一國ノ日向ナリシヲ觀テ薩摩ノ國モ界定ラ  
レシナラン、本田親孝ガ説ハ四十二代文武帝ノ大宝二年八月薩摩ト多  
織ガ命ニ逆ヲ討玉ヒ而テ校ヘ吏ヲ置レシ寸薩摩ハ始テ分レツラン其  
以後ニハ大隅單人、阿多牟人ナト、對シ言ハス以テ觀ヨトノ説ナレド  
姓氏録ノ額口部氏ノ下註ニ二十代允恭帝ノ時キ湯坐速カ先祖ヲ薩摩ノ  
國ニ遣ハシ單人ヲ平ケシム、彼レ復奏スノ戶御馬一疋ヲ獻シケルニ額  
口部形ノ狸毛アリトテ帝喜ヒ玉ヒ額口部ノ姓ヲ賜ト見ヘ 出水ノ西口村  
ニ在ル今ノ額

口部ノ牧ハ昔シ 得仏公ニ從ヒキシ本田等觀ガ始テ馬ヲ蓄フ所ニナシ、御當家ノ  
自來ナリ云古昔ニ出タリ、按ニ此地タルヤ彼ノ年人ノ迫門ニモ五ケレハ、允恭  
帝ニ獻レル馬モ此ホドリノ鹿ナルニヤ、去レハ年人ノ時ヨリトク在タル牧ノ鹿  
シタルヲバ、公入部マシノ、復タ再起シ玉ナルヘシ  
又三十七代孝德帝ノ白雉四年七月唐ニ使セシ高田根麻呂ガ沿ヲ薩摩ノ  
曲竹島之門ニソコネテ没死セシ事見ヘ又文武帝ノ二年使ヲ南島ニ遣テ  
國ヲ寬ラレシニ薩末ノ比亮久亮ヲガ兵ヲ持テ使人ヲ刺動シタル罪ヲバ  
四年ノ六月ニ沙汰セラレタル事トモ正史ニモ見ヘレバ大宝ヨリ前ニ允  
恭ノ時ナド薩摩ハトク立居ツラン、又姓氏録ノ阿多御手養ガ下註ニ火  
爾降命ノ六世孫薩摩若相梁カ後也トミアリ 或人疑フ若ハ、 地名ヲ名符ト  
シケンハ詳ナラズド火爾降ハ彦火々出見ノ兄ニテ其ヨリ六世ト云ヘバ  
神代ヨ去ルコト尚遠カラス、薩摩ト云ヒ最久キ名ナルニヤ風土記 宝永  
五年  
坂ニ昔シ倭人ノ神祖ト國ヲ號計テ吾國ヲ道ラレシトテ魏問ノ迫門ト  
行 此異事モト何レノ、 広サ五六十町長サ百余町ノ口在ルト見ヘタリ、  
云ヒ 舊ニ地カ考ヘシ、 今ハ長サ  
出水ト長嶋トノ際ニ今流ル、單人ノ薩摩ノ迫門ヲ云ナルヘシ 二里余ニ

多岐野ノ八十町ニモ足シトゾ、去レトニ、又万葉ノ作者ニ際ノ妙筆トアル  
里ノ環リト云ヘルトナン記ハ誤ナルベシ  
ヲ統日本紀 第九  
ニハ薩ノ妙觀ト作り共ニ河人ニテ薩摩ノ人ナルト云  
ヘリ、日本親名ニ薩摩也ト釈ケリ陸ハ音形ニテ山絶吹也、山形ノ連リ  
延妙ガ中忽チ断絶スル者ヲ際ト名ク、又派ナリ派也ナド字典ニモ山タ  
レバ出水ト長島トノ連レル山ノ此迫門ヲ限テ忽チ断絶ルノ意ヲ取テ際  
間ト書キ散豆万ト訓セ、又此アタリヨ山門號ト云ヘルモ此ヨリ得タル  
名ナルニヤ、今長島ヨリ此ノ迫門ニ號メル所ヲ山門野ト云村名モ此リ  
又和名妙出水郡ニ山内勢度國形ヲ云名モ出タリ、今ニ野田ニ山内寺  
ト云名藍モ遠クハ皆此迫リノ旧ナルベシ、去レハ薩摩ノ郡ハ旧ト人  
少キ不毛ナル菅元ノ空因ニテ彦火々出見尊ナト山ノ幸シ玉ヒシ國ニテ  
其御見火闍摩命モ終ニハ威ニ服シ玉トアレバ其子孫等モ山ニ幸シテ生  
産メシナラン、幸ヲサキハヒトモチハヒトモ訓シ宿ハヒニ彌ノ利ヨリ  
云詞ニテ特サトノ生計スル事ト見ヘタリ、安房風上記白鳥社ノ伝ニ  
土俗祭此神得漁釣之幸トアリ、伊考ヘシ、伎ト知ハ横普通ヒ又知ト都  
ハ五首連ヘバ幸スル山ト云意ニテ山ノヤヲ約メテ散豆万トモ謂ケル乎  
幸スル弓箭ヲサツ弓サツ矢ト云ヒ、又幸スル人ヲ薩摩トモ薩人トモ云  
ヘハ其幸スル山國ナレハ略シテサツマトハ云ヘルナラン然ラ後ニ薩摩  
ノ字ニ音ヲ假テ定ラレシト見ヘタリ、何レニモ神代ノ遺名ナルヘシ、  
單人トハ其山ヤ海ノ幸ニ則レテ山坂モ幾ガ如ク猛キ業ヲハ云ヘルナラ  
ン、詩ノ小雅ニ賦タル彼ノ飛隼其レ飛テ戻ル天ニト云ノ箋註ニ隼ハ急  
疾ノ鳥ナリ、飛ハバ乃チ天ニモ至ルホトノ者ニテ士卒ノ勁勇ニシテ能  
ク深ク敵ニモ攻入ルニ喻トアレバ薩人等ノ氣質能ク比喩ニ適ヘル事天  
武紀云十一年秋七月壬辰朔甲午華人多來攻方物是日大隅華人與阿多隼  
人相撲於朝廷大隅華人勝之、又持統紀ニモ九年五月丁未朔己未變大隅  
華人丁卯觀華人相撲於西樹下トナト勁勇ノ業ヲノミ事トス (頭註) 新  
ノ若ク夫ハ高名花撰人也、  
方則薩摩ノ民ノ長之曾孫也、 又唐人歌合ニモハ我惡は薩摩の民の長なれ  
や片手にたはにも合太のなきナト見ヘレハ都方ヨリ名ツケタル名ナラン  
去リテ漸其玉城ノ化ニモ馴レタル故遂ニ召テ官員ニ備ラレ帝ノ門外ヲ

警固シ、或ハ出御ノ時ナト大狀シテ先驅スル職トハ爲シ玉ヘルナラン  
是實ニ薩摩ノ人ノ勁勇を取用スルニ始ル官ト見ヘタリ、隼人式ニ大衣  
着袂鎧第内盾左各一人、大隅爲左阿多爲右、又曰今交隼人令大衣習吹  
トアルハ此ナリ、サテ隼人ノ追部トハ陸奥ノ千鳥氏親養ノ住所ナル故  
ニ夷ガ千鳥ト云類ナリト冠評考ニ詳ナリ、但シ彼ニハ海門ト作レリ、  
万葉卷六 大群隼人

隼人乃せとのいははははあゆはしる芳野の端に猶じかすけり  
全卷三 被追筑紫水之時哥二百ノ其一 長田王  
はや人のさつまのせとを雲并なす遠くも我はけふみつるかき  
天不

さつまかた迫門のはやみのしほまひハたゞ遺漏よいかりおろきて  
斯テ四十三代元明帝ノ和銅六年四月ニ至テ旧御所内ヲマタ西郡割出シ  
テ大隅國ヲ置玉ヘリ、今此本文ニ三女内ノ内大隅薩摩ト云事ハ此時ニ  
ソ始リタリ、但シ大隅ト云ハ其以前ヨリ日向ノ郡名ニテ火闍摩命ノ子  
孫大角隼人等ガ居タル所ナラン、風土記ニ大角ノ島阿ルニヨテ大角  
ト云ト見ヘタリ、大住トモ青隈トモ書ケリ、サテ筑前・豊前・肥前ヲ  
前三ヶ國ト云ヒ、筑後・豊後・肥後ヲ後三ヶ國ト云ヒ、日向・大隅・  
筑紫ヲ奥三ヶ國ト云ヒトトモハ鎌倉ノ世ト爲リテ島津・少弐・大友ノ  
三家ニ分チ賜ヘル時ナドノ詞ナルカ、道徳公ノ守護代溥句傳貴カ語ニ  
出タリ、

当守護御所形島津之又三郎殿藤原朝臣武久御年十二譜代御任所鹿兒島  
按ニ当守護ハ其時ニ當リマス守護ナリ、守護トハ武家ヨリ國ヲ領スル  
トナリ、上古ハ因造トテ日向國造ノ始トハ崇行帝日向ノ行宮ニオハス  
時日向ノ御刀姫ヲ納レテ妃ニシテ生給ヒシ豊國別ノ島守ナルヨリ昔紀  
ニ出タリ、又旧事紀ニ日向國造ハ輕島豐朝御世ニ豊國別皇子三世孫  
老男定陽國造トナリ、薩摩ハ元明帝ノ和銅二年六月薩摩多爾爾國司ナ  
ド見ユ、同記ハ即國造ノコトナリ、大隅ハ四十四代元正帝ノ養老四年ニ  
隼人等反キテ大隅國守陽侯史磨ヲ殺タル事トモ見ヘ又天平宝字二年十  
月ノ紀ニ國司ハ四年交替ナリシヲ改ラレ六年ヲ限リ三年日ニハ必ス巡

察使ヲ遣テ民變ヲ慰問セヨトノ勅ナドアリテ國司ニハ守或ハ介、或ハ  
據、或ハ目ナド郡司ニモ大領・小領・主帳・主典ナド某々大小ニ多少  
ヲ分ケ

\*(行前書)

口内國造 輕島皇朝御世止坐田別皇子三世孫者房定賜國造

大瀧國造 源向日代朝御世治平坐人同初小仁德實代者伏布為日代賜國造

薩摩國造 源向日代朝代薩摩年人等鎮之仁德朝代日佐為日

多禮局

右出千先代同言本記卷十國造本紀

代ハルノ公家ヨリ諸國ニ入部シ

郡司以下多クハ五ツキニ 其國郡ヲ  
テ古ヲ世ニスル見ヘタリ

治ケルトテ薩限日ナトハ何ノ頃ヨリカ近衛家ノ氏神ナル春日ノ社領ニ

テ彼ノ天慶四年ニ誠ヒタル純友ガニ越前守直純ト云モノ南都一乘院ノ  
下知ニテ應鳥ノ郡司并弁濟使取納領等ヲ兼テ任ニ應鳥島ニ居テ以テ氏

ニシタル事トモ長谷場氏ノ

系圖ニナド見ヘタリ、然ルニ又歲世ヲ歷テ文治三年丙午三月右衛門輔  
朝公平族ヲ滅サレタル功ニテ 後白河帝ノ勅ヲ承ラレ國々ニ

\*(行前書)

一島津臣大國方寄日數七百十五町八段二丈

惣額合日數七百十五町八段二丈

右島津止 日向人 二百本家、兼院寄部地頭加御米寄  
隅薩摩

殿別五升也、官又注又案寧應元六ノ廿四トアリ、

朝田元相兼内親友手兼朝公粟州人ノ前ヨリ應鳥島ニ郡司職并弁濟使職タルニト  
盛時ノ事ニ見ユ、

守護ヲ置キ莊園郷保ニハ地頭ヲ居ヘ、其以前 仙洞ヨリ補任シ玉ヲ所  
ノ國司郡司等ハ故ノ如ニシテ別ニ又其上ヲ鎌倉ヨリノ進止ニテ武士ニ  
國郡ヲ成ラシムル事始レリ、其ヨリ國式等ハ有レトモ無キガ如ク威權  
日々ニ衰ヘ遂ニ其國ノ司ニモアラデ薩摩守豊後守ナド、員外ノ守多ク  
實ト名ト雖ヒ行クコトニハ為リケルト云ヘリ、御屋形トハ守護ノ居所  
ヲ尊ミ稱スルノ總名ナリ只其屋形ト云詞ハ古今大歌所ノ御歌ニ

水葦の風のやかたに妹とあれと寝ての所願の霜の降はも  
マタ玉葉旅ノ部ニ 慈鎮

雨はれぬ旅の屋形に日敷へて都恋しき夕ぐれの空

マタ夫木抄ニ飯ノ屋形トモヨミ餘材抄ニ屋形ハそこにつくりたる屋  
也、打聞ニやかたとはきとしたる殿舎ニハあらでよろしきを真似テ造  
れるを云なるべしとなど注シマタ舟ヤ車ノ上ニアル慶ヲバ和名ハ布奈  
夜加太車ノ屋形ナドイエバ飯リノ屋ヲ云詞ナルハ明ラケシ去レド大名  
ノ屋形ヲ尊ミ稱スルノ名トナリタル起リハ元弘建武ノ打ツ、キタル記  
レニ濱州エ行幸アリケル時キ十岐ノ宝林寺ト云人小島ト云ヘル地ニ行  
宮ヲ立テ、尊ヘマツリシニ世治リ入洛ノ時コレヲ屋形ト号シ住居ニヤ  
ミト勅シ賜ヒケレハ皇居ノマ、丸柱ニテ土伎郡ニ引移シテ屋形ト号シ  
ケルヨリ遂ニ余ノ諸侯ニミ斯クハ呼ケルトゾ、

\*(行前書)

「東鑑建久四年二月十五日壬辰、近日依可有那須野ノ御狩所被稱監沢之屋形等以  
宿次人夫被ケ渡下野國云々四月廿三日己未那須野御狩事終之朝監沢ノ屋形又  
可遷遷河國之曰云々、嘉祿二年六月廿六日甲子有御方渡于大膳大夫師貞屋  
形歌事及御抄云々、太皇記卷初曰乃弘三至云々、十一月廿八日官御下向、関  
東左邊頭入道以下御供階当小路以止御業作入道屋形為御所」

凡居ニ攝アリ嬭アル是ヲ屋敷構ト云フ、又其レニ櫓ヲ上ケ狹間ヲ切レ  
バ城ト云トイユ古壯麗ナドノ主トシテ多ク家人ヲ扶持シ、勢ヒ強大  
ナルモノ、屋敷構ヲバニ部下ノ人々城トハ呼ガタク是ヲ御屋形ト稱シ  
ケルトモ云ヘリ、公室ノ御伝記ニ屋形号ハ先祖代々御免ト見ヘ又上杉  
輝虎・毛利輝元ナド屋形号免許清化ニ準セラレナト又幕府職弁ノ時永  
正五年十二月十九日對馬嶋主宗義盛ニ扇形号ヲ授クトモアレバ十岐家  
ノ故事ニ效ヘルニヤ、モト行宮ヨリ始レル尊稱ナレバ杖許ナラデハ儲  
シガタキ事ナルベシ、島津トハ公室ノ御氏ニテ應原朝臣ハ其御始ナリ、  
今安ニ事ト島津ト申ス字ヲ尋侍ルニ古事記ノ神武大御歌ニ志麻都登理  
宇加比賣登母ナド又日本紀最行紀ニカ島津神云々見ヘ、又万葉 七ニ  
モ之麻都等里鶴養我登母波由久加波乃ナド見ヘレド此ハ野津鳥さへし

神津島ナドノ例ニテ島辺ニ居ル鳥ヤ神ト云ノ詞ニテ津ト云ニ意ナク  
只助辞ト見ヘ、固ヨリ地名ニハ非ス又地名ニモ和名鈔常陸國信太郡ニ  
島津ト云アレトモ亦人ノ姓氏トナリシハ群ナラス、又曰造本紀ニ島津  
國造志賀高穴穂ノ朝出雲臣ノ祖佐比羅尾孫出雲造夜命影賜國造トア  
リ、淡路島ノニトトカモ聞ケリ、又姓氏ニモ編日本紀ニ二十九代光仁帝  
ノ宝篋六年春正月庚寅復無位高津朝臣小松本位從五位下ト見ユレド其  
ヨリ前四十六代孝謙帝天平勝宝五年二月甲午齋宮大神可正七位下津島  
朝臣小松授從五位下ト見ヘ、其外津島朝臣ハ大中臣朝臣ト祖ヲ同シテ津邊魂命三世  
人見ヘ、姓氏録ニモ津島朝臣ハ大中臣朝臣ト祖ヲ同シテ津邊魂命三世  
孫天荒屋根命之後ナリトアレドモ別ニ島津朝臣ト云ハナシ、然アレバ  
彼小松ガ津島ヲバ伝寫ノ誤ニテ上下ニ顛倒シタルニ疑ヒナシ、タトヘ  
島津朝臣ニシテモ我羅ノ姓氏ニ關涉セザル事トモハ五尺ノ童モ弁ルコ  
トナレド只此ニ異聞ヲ傳ルノミ \* (東鑑) 島津ノコトハ皆羅國者ニ詳シ  
ニトモアレハソレ 爰ニ筑紫ニテ島津ト云事トモハ四十四代元正帝ノ神龜  
ナリニ打ラケ也、タレバ此説ハ不用トナレトモ引ケルニ成  
四年 或天平元 年トモ、ニ物故セシ人丸ノ歌トテ万葉ニ斯ゾ見ヘタリ、

希本朝臣人鷹下筑紫國時海路作二首 其一

大王之遠乃朝廷跡遠道島野見者神代之所念

此歌万葉集註ニ家持ガ越中ヲバ安万サカルヒナノ部ト認メルヲ引キ筑  
紫ノ朝ヲ差ト云ヘリ、大王ハオホキミトヨムヘシ、磯通ハ契仲ハ上り下  
ルコトトシ、真淵ハ現在スル島門トスト云ヘリ、今按ニ大宝二年ノ三  
月大宰府ニハ所部ノ國ノ隸以下及ヒ郡司等ヲバ専ラ詮擬スル事ヲ聽サ  
レ、或ハ慶雲四年ノ七月ニ使ヲ大宰府ニ遣シ南島人ニ位ヲ授ケ物ヲ賜  
ヒシ事ナド見ヘレバ遠乃朝庭トハ大宰府ヲ指セル詞ニテ註ニ筑紫ノ朝  
ト解ケルモ此ナルベシ、島門トハ孝徳紀ニ磯摩之曲竹島之門ニテ船ヲ  
撰タルナド見ヘ、竹島ハ今河邊郡ニ隸ケル島ノコトト見ヘレバ地方ノ  
岸ト嶋ノ岸ト左右ニ相對シ、或ハ港口ノ兩岸對峙ノ形ナドニ見ヘ  
タルヲ狹キハ迫門ト云ヒ、廣キハ島門トモ海門トモ云ヒ猶細カニ分テ  
イハバ其間ノ遙ナル渡リヲ沖ノ門中トモ云ヒ、地方ノ近キヲ津邊トモ

津如トモ辺田トモ云ヒ、鳥ノ方ヲハ島ノ戸トモ島津トモ云ベキニ大概  
ニ泛クカヨハセテ云ヘル詞ナルニヤ、神祇ノ御歌ナトニハ島津島又人  
鷹孫ノ歌ニハ留火之明大阿爾入日哉ナド又津守ノ國量カ歌ニハ橋乃小  
門ノ荒瀬ニ現レテナド又曾根好忠カ白良ノ渡ヲワタル舟人ナドヨミ皆  
水門ヤ島ベノ渡リヲ指セル詞ナルベシ、然ハアレド無名抄ニ筑紫ノ島  
戸トカキ勝抄ニ鎮西ノ島戸ナド見ヘレバ冠ノ筑紫ト歌ノ島門モ統ケル  
ニ非スヤ時ニ神代ヲ主ニシテヨム歌ナレバ既ニ筑紫ニ下リ唐テ大宰  
府ト相通ヘル口向ノ志麻呂アタリニ舟行セシ海路ヨリ其古シ神代ノ垂  
跡ナド海陸トモニ多カリシ國ナレバ相武帝ノ御歌ニモ 地名傳曰向ノ  
ト載セタルハ此ヨリ深リシテラン、今日鎮赤江ノ沖 名所ニ神路ノ沖  
ナランオト云ヘリ、小門ノ橋瀬トヨメルモ此ナルカ  
しほしこを東山しけ山茂るとも神路の沖に道ハたへせし  
又下部兼直ガ歌ニ 今本古南ノ郷村ニ幾分原ト云サマノ神代ノ古蹟遺リテ伊  
リ、吉田兼定傳記アリ、又一朝宮橋部ニ橋小戸トテ 上中下ニ灌ナト大田ト大塚ノ間ニアルトモ云ヘリ、  
縮古今

西の海や橋原の湖路よりあらはれ出し住古の神

又天平勝宝八年丙午六月十七日大伴宿禰家持作一首、日向國高千穂嶽

ノ歌ニ 統御ヲ披ニ此月之西遊道於七道諸國權檢所造國分丈六松象ト出タル  
八年正月己未ノ事ト見ヘタリ、宝字ヲ此ニ勝宝、誤リカ  
左アレバ其六月八日新シテヨミタル歌ナラン、考ヘシ、  
久かたの天渡戸ひらき高千穂の嶽にあもりしすめらきの神云々、  
(東鑑) 「万葉可見卷」  
斯ク代々歌人等ノ海ニハ住古ノ事、陸ニテハ幾々杵ノ天降リマセシ靈  
鳥嶽ナドヲバヨミ繼ケル所ナレバ人丸モ斯ル古蹟ヲ遠見シテ神代ノ事  
トモ念ヒ出テヨミタル歌ナラン、島ハ海中ニ山アリテ依止ルベキヲ云  
ヒ、島トハ到也人ノ奔到ル所ナリ、津トハ渡也ナリ、河津ヲバ三秦記  
ニハ龍門トモ名ツケ門ハ人ノ出入スル所ニテ堂房ニアルヲ戸ト云ヒ、  
區域ニ在ルヲ門ト云ヒ、和名ニ門ヲツ或ハカド戸ハト津ハツト訓シテ  
舟々ノ泊処ノ港ヲバ古事記ニハ男水門或ハ淡水門ナド、カキ、又延喜  
式祝詞ノ部ニ天津近番居大船乎ナド、カキ、又万葉ニモ火船之津守之

占領オドヨミ、舟々ノ料カヨウ津ニテ百令ニ

モ二人々ノ出入スル門ニモ同ク通ヒ云ト見ハ、万葉ナドニ門ヲツト訓  
タル例モアリ、則チ呂波ノツノ字比ナルトゾ、左アレバ島津ヲ島門ト  
モ島戸トモ寄キ、固ヨリツトトハ五音モ通ヘバ上古ハタガヒニ嗚ヘタ  
ルナラン、斯テ日向ノ島津トハ延長五年十月左大臣忠平等ノ撰ハレン  
延喜式ノ兵部諸國器仗ノ条ニ斯ナン、

大隅國馬場 猪生・大 薩摩國馬場 猪野・市來各五疋

佐馬 市來・英備・納津 日向國 長井・市來各五疋

・其餘・水使 當路丑・菟原・救式・臣卿・野後・夷守

・島津各五疋 長井・川辺・刈田・美禰 恩祿・去飛取各五疋

按三取ハ字共ニ誤ナリ、道ナリ、逸馬又ハ伝舎ヲ云ヒ、往來ノ絶ザル  
ヲ駱駝ト云ヒ伝舎トハ伝帳ナリ、人ノ止息所ハ去者復來テ駱駝伝テ常  
主ハ無キナリ、又賦通ヲ伝ト云トモ見ヘタリ、日本ニテハ神后ノ五十  
年諸國ニ令シテ始テ賦路ヲ作ラルト見ヘ、又元正帝ノ遷都三年閏七月  
賦十処ヲ始テ石城國ニ置レシコトモ見ユレバ國々ノ広狹ニヨテ多クア  
ルト見エタリ、蒲生ハ始羅郡ニアリ、大水ハ和名抄ニ葦刈郡ニ載レハ  
今ノ垂水トハ別ナルカ、百來ハ口賀郡ニ在リ、英備ハ出水郡ノ附久根  
ヲ古ハ莫爾トカケバ其誤リカ、納津ハ高城郡水引ニ網津村アレバ此ヲ  
誤ルカ、田後ハ阿多郡伊作ニ出馬村アレバ其辺リカ、後ハ尻ト訓ス、  
楠後氏ヲ列ナラン、櫛野ハ薩摩郡極郷ニ市比野村アレバ其辺リナラ  
ン、高來ハ郡名ノ高城ナラン、身井ハ口賀郡ニ村名アリ、川辺ハ求磨  
領ニアルトゾ、四日塚ヲ濫ルカ許ナラス、刈田ハ宮崎郡ニ加江田アリ  
此ナラン、去飛ハ今ノ高岡去川ノ辺ナラン、児湯ハ郡名也、當路ハ兒  
湯郡ニ葦刈ト云三十町ノ許アルトゾ、北ナラン、猪野ハ口賀郡ノ新名ナ  
ラン、市來各ハ横音通ヒ本阿弥ヲ本ナミナド云類ナルベシ、美備ハ今  
佐土原ニ美備ノ桑部ト云アルトゾ、其辺リナラン、田後麻救野サド  
ハ未詳、後火守ハ諸國郡今ノ小林野村ニ夷守録ト云遷リテ皇行帝ヲ  
向高屋ノ宮ヨリ遷幸ノ路次此夷守ニ萬玉テ見夷守弟夷守チフ二人ヲ石

瀨河ニ斥候ニヤラレシコト書紀ニ出タレバ後夷守トハ弟夷守ト居タル

アタリナラン、真折ハ真幸院ナルベシ、元正帝ノ和銅六年五月ニ諸國  
郡郷ノ名ニ好キキヲツケ山田原野サトノ名ツケル所由或ハ古老ノ相伝  
ヘル曰聞異事ヲ經ニ載ラレシ事見ハレバ夫ノ縣島和十攝ノ劍ニテ處石  
ヲ三片ニ折リ三ヘリト云異事ヲ伝ヘテ真折ト名付ラレシヲ後世ニ真幸  
ト讀リシナラン、去レド今ノ真幸院ハ吉田・馬関口・加久藤・飯野・  
小林ナドノ總名トナリテ彼三片ニ折リマス、和石ハ今三保院ニ隸ル高  
城ノ東霧島村ニ鎮シマス六所権現ノ義ナル故有谷ト云折ニ兩片ノ遺石  
今尚儼然タルト云ヘリ相伝ヘテ今一ツノ片石ハ雷ト為テ宮崎ノ方ニ飛  
去ト云フ、然アルニ今モ宮崎郡太島ノ内ナル平原村ニ在リ、其辺リニ

霧島ヲ訓ルトゾ、或人新口ヲ編ニ写シ、高城ノ新口ニ合セタルニ誠ニ

符節ヲ合セケルトナン、今高岡ノ邑正大城城介モ往テ正シク觀タルト

語レリ、左アレバ前傳ニ見ヘシ去飛ト云地名モ此ノ所山ナルカ、今ノ

去飛原ハ霧島ヨリ出テ方角モ宮崎ノ方ニ當ルトゾ、水使ハ諸國郡ノ三

保院ナルベシ、今云三保院トテハ高城・山之口・勝間及ヒ郡城ノ志和

地・稻山・高原ノ水流村 八郷城和地村ノ内也、長長子九年野尻ニ等ノ

總名トゾ、院トハ垣牆アルコトヲ云ヒ、又官署ノ從所也 院トモ云

ヘバ其々深ヲ分テ支配役所ノ別レルコト見エレバ後世領家ノ遷易リニ

ヨテ彼此ト上古ノ城ヲ犬牙ニ濫リテ真折ニ隸ハキモ二隸ニナド誤レル

ナラン、斯テ此ニ見ヘタル島津コソ我カ 公家ノ御氏ナル根源ナレバ

寔ニ御宗邑トモ謂フヘシ、諸國郡城今ノ郡元村アタリニ其名ノ遺レ

ルコト世々ノ旧記ニ歷然タリ、近キヨリ測リテ其証ヲ述ルニ上井覺謙

ノ天正十一年二月ノ日記ニ山之口ト島戸ノ計ニテ使ニ送ヘル事トモ見

ヘ、又榊山玄佐ノ日記ニ大水元年長久ノ藩ニ島津ノ郡在名ノ榊山ナト

見ヘ、又島陰雜著ニ長享三年薩州國久等ノ八將社ヲ再興之ラル上梁文

ニ口州島津庄ハ高祖恩久公薩州日ニ則史タル權輿ノ地也ト見ヘ、又郡

元ニ今遺ル曰瀨守ノ仙像ニ文明十六年六月日向州島津隊云々見ヘ、又

古書ニ島津ノ稻荷御遷宮文明七年八月廿一日 武久公御代官云々見ヘ

又安久ニ在ル山下ノ榊札ニ忠仁二年二月當島津守遠江殿勝久トモ見



聖宗白筆ノ古系圖ニ立久公御弟湯江守勝久郡  
又郡元ノ今鹿民ガ門名

城居在ホシシト見ニ、則作元社河水和尚ナリ  
ニ安養寺云云遺レテ、其仏像ニ心水十五年日向國島津院安養寺ナト見

ハ、其外酒匂・山田ガ二書ハ勿論、建治二年石築地ノ感大隅寄郡等ノ  
上ニ島津御庄領家近衛殿地頭尾藤守殿

次郎政云々アリ、院層張守ノ子カ孫ニカガルカハ是ハ一際ノ感地頭ニテ島津御  
庄ニカガルノ感地頭久公ノ例トハ

別格ナルヘシ謹テ混乱スベカラズ、見ハ、又延久八年ノ岡田丁藤原ニテ

ハ島津御庄一田領儀六百三十五段或ハ島津御庄寄郡ト云書所教百丁見

ハタリ、又日向ニテハ殿下御領島津庄田代二千八百三十七町ナト外ニ

寄郡ト云モ多ク見ヘタリ、且トハ莊ノ俗字也、モトモ盛ナル意ニテ

田舎ノコトヲ云ヘリ、御庄トハ今ノ制ニシテハ御知行所ナト云ノ類

家トハ地頭ナドヲ其所ヨリ領主ト云ノ類ニテ時ノ職名ナラン、建武二

年ノ条目ニ一領家地頭所務事ト云条下ニ領家ト云ヒ地頭ト云ミ違アル

ベカラスト見ヘ、又曆志四年卯月廿二日宗榮ノ状ニ戸次學前太郎頼時

ハ佐伯庄領家職并日向國地頭職云々ナト見ヘシバ領家職トハ公家ノ國

司タル領主ヨリ屬吏ヲ其所ニ遣リテ政事ヲ為スル役名ト見ヘ、其役所

ヲ領家政所ト云ヒ、又武家ヨリハ守御所地頭所ナト云役所ヲ國郡ニ立

オキ、其支配ニ人ヲ遣シ其レヲ地頭職ト守御職ナト云ケルト見ヘ、同

ニハ其職分ヲ一人ニテ兼タルモアルニヤ、斯ク見ヘシナルヘシ、然レ

ニ中院通方ノ辨抄ニモ亦前關白近衛領鎮西三原庄ト見ヘ、或ハ應長

元年金峯山ノ繪卷ニモ關白殿下ヲ稱レル語ナト見ヘ、殿下トハ五接家

ヲ尊メル詞ト知譜抄ニナトアレバ此建久八年ニ殿下御領島津庄ト見

ヘルハ時ニ撰政關白タル近衛基通公ノ知行所ヲ指テ中ノ詞ナラン、

其御知行所ノ隣關日三州ノ陪所ニ多ク散在シタル内ニテ島津土惣政所

ヲ上古ヨリ島津ト云タル延壽ノ頃原ナト立居ケル今ノ都城郡元アタリ

ニ建置レ國司ノ官廳ニ為ラレシ故、同司ハ關西ニテミヤツコト訓ス、文和元

三州郡々近衛領ノ府本ナレバ地名ノ島津庄ヲ離レタル余郷ノ殿下領ヲ

モ辨シナマ綴字ヲ諸ノ庄官等ヨリ離ミテ皆島津御庄ト云ヒシナラン、

其府本ナル島津最寄一ツニ曰レル所ハ北郷三百丁・中郷百八丁・南中

郷二百丁・救仁郷百六十丁・京都郷百五十丁・三保院七百丁・島津破三

百丁、今ノ郡元ヲ島津ト云タル所北内ケル乎、彼之宗許國田史史云院ノ帥

左モアリケンカ、兼、吉田比三十三丁、此等ヲ併セニ三十余町ヲ島津庄ノ郡

本トシテ其他二箇園ニ散在シタル飛地ハ島津御庄ノ寄郡トシテ此モ同

ク島津御庄ト云ヒツラン、弘安七年淨光明寺ノ鐘銘ニ嶋津庄内薩摩方

鹿兒島郡ト鑄出スノ取親ツベシ、斯テ其散在ノ莊所某々ニ防司・郡司

・郷司・名主・分遣使等ノ庄官分ヲ任シ、府本ノ島津ニ在ル國衙ヨリ

惣下地シテ治メケルニヤ、鎌倉ノ世ト為ラザル以前ヨリ從四位上掃部

助孝言ガ子日向守某言ナド此ニ國司トシ其宗氏部大輔、一本數、廣言モ

慶子日向ノ同司ト為リ島津殿下中ケル事安國守申狀、聖宗白記等ニ見

得タリ、得仏公生マセル年ヨリ四年以前當山氏ノ文書ニ斯ナン、

島津御庄

補任百足村赤濟使職之事

勾當僧安兼

任相伝文書之聖補任被職畢、庄衙官承知敢勿違矣下、

安元二年七月口、沙弥判

百足ハ肝付郡今ノ百引ナラン、建治二年石築地ノ感ニ近衛領島津御庄

ノ寄郡ト云内ニ百引村十三丁ト見ヘタリ、又鹿屋院八十五丁九段モ同

ク寄郡ナルニ其院ノ雜費兼信カ官上スル詞ニ領家一乘院鎮西禪代官匠

作云々見ヘタリ、一乘院ハ近衛ノ氏神春日社ノ別當寺カ此ニ見ヘシ、

守沙院ハ一乘院ノ僧ニテ斯ハ下知セラルカ、長谷場カ例ナド併セ考ヘ

キナリ、又、得仏公生レ玉三年前ニモ當ラン、二十卷平家四ノ卷丹波

少將成経等ガ疏黃島ニ流サレケル文ニ斯ナン、

從天室町船引大山とて月影も日影も洩らす我々石巖ヲ凌越、日向國

西の方島津ノ庄ニ着給ふ、

此ハ治承五年ノ事トカヤ、俗ニ日州ヲ西日向ト山ヲ隔テ、分ケ唱ヘル

二島津庄ハ四日向ノ内ニアシバ西ノ方トハ書ルナルヘシ、成経等ハ其ヨリ硫黄島ニ論居セシニヤ、彼等ノ建テ洞リシ熊野社ノ荒蕪シケルヲ思慮八年、円宗公御再興アリタル事島陰著ニ見ヘタリ、此等ノ島津庄大櫻山言ノ居ラレシ島津ニ当テ時ノ都合ト見得タリ、斯ル頃ニハ頼朝公モ蛭島ニサスラヘオハシ、兵後御局復所ニテ幸ヲ得ラレテ幸マシ、ニ夫人北条氏ノ始大形ナラス、頼朝公モ北条ヲ頼セテ下フ所ナシバ局ヲ西州ニ去ラセテ下フ、津ノ国住吉ノアタリニ來マセル時陸御ノ心地モ常ナラザルニ以テ大藏ヲ忌テ舎リテアゲス、遂ニ社邊ノ石ニ履ウチ掛テ得仏公ヲ生セシメ、實ニ治承三年ノ事トナン、折シモ、基通公ヲシキノ恩縁マシ、ケル事トモ世ノ知ル所ナリ、翌ル四年ノ八月、頼朝公モ義兵ヲ率ラレ其十日鎌倉ニ着セ玉ヒ、十二月鎌倉ノ大倉郷ニ新宮ヲ構ヘ玉フ、去レハ程オク御座ノ左右ヲモ討召シ御幼宇ヨバ三郎若ト付サセラレ、御子ト申スヲ耻ラレテ基通公ニテ進セ下フ、因テ殿下ノ御謀ニヤ、彼御謀所ナル島津ノ庄ニ因テタル惟宗公言ニ、頼朝公ヨリ御同ヲ打賜ヒケレバ、得仏公モ御母ニ隨ハセラレ、広言カ部ノ勞ナル家ニテ育チ玉ヒ、元暦二年御七ツニ成マス、二月平族モ悉ク西海ニ滅ンテ其四月、頼朝公從二位ニ任セラレ關東多クハ鎌倉ニ帰セリ、是ニ於テ三郎若ヲ鎌倉ニ召サレ山口重忠ニ仰セテ六月ノ十五日鶴ヶ岡ニテ若ニ廻冠ヲ加ヘマイラセ御島帽子親ノ忠ノ字ト御養父広言ノ性宗氏トヲ率リ惟宗忠久公トソ名乗ラセ給ヒヤガテ其口左兵衛尉ニ任セラレ伊勢ノ波出御厨下須可御庄ノ地頭職ニ補シ玉フ、同キ八月十七日島津御庄ノ領家基通公、基通ニ近衛頼朝所屬戸庄ニ云ヒ建久ノ國田トシテ殿下御領島津庄ト云ヒ、享治二年ノ賦ニ島津御庄領家近衛頼朝ナト云ニ極レハ此ニ領家ハ時ノ撰政基通公ナラント姑ク言テ者ニ傳フノミ、大犬二位某、近衛ノ家今ナラン、左大臣ノ家令ヨシテ、頼朝公ニ伺ラン、得仏公ヲ御庄ノ下可職ト爲シ玉ヘリ、故ニ鎌倉ヨリ此日御下文ヲモテ島津御庄ノ庄官等ニ件ノ趣キヲ仰渡サレタリ、去ル十四日年号モ文治元年ト改ラレシト見ユルニ尚元暦二年トカキテ下シ玉ヒキハ頼朝ノ大犬等皆ヲ伝ケル事其ヨリ以前ニテ時マテハ御領ノ屈ザルナラン、御當家ノ由來ニモ與ニケ國ハ近衛頼朝分國タル所御譲有テ異國防戦ノ爲ニ御在國ト書ケルモ此ニ誌ツケリ、去リテ是歲十一月、頼朝公大江弘

元ガ策ニ從ハセラン、事ヲ北条時政ガ京ニ在ルニ仰諭サレ時々東ニテ諸國ニ遣シハ彼此ト煩ハシ地頭トテ説トヲ徳テ國々ヲ鎮メント奏聞セラレシニ明ル三年ノ二月始テ六十六國ノ惣追捕使并ニ地頭ニ補セラレ玉フ、是ニ於テ時政ハ乃チ七ヶ國ノ地頭職ニ補セラレ我ガ、得仏公ニハ母後局ヨリ指示ナトニ御口入アリテ同クハ遠國ヲト望セラレ、復タ島津御庄ノ惣地頭職ニ補セラレ玉ヘリ、六百餘年ノ今ニ御領マシ、尚方々歳ニ三目出度ニケ國只御局ノ御領職ニ其内九家求美公蓋シ御姪ノ殿下基通公ニ代テ撰政ニ為ルト云ヘシ、近衛家ニツキタルヲ云カ、撰政新ニ啓ラセ玉ヒ、既リ五ヒ御三ノ領家、關白ニツク御孫ノ基通公ニ傳テニ又前年ノ秋ヨリ、得仏公人ヲシテ迄ニ庄務ヲ沙汰シ下ヘルニ對シテスル其人等モアリケルト、則召オヨバレ若ヤ地頭迄モ替リツラント庄民等ノ疑ヒ辨ル者モアラントテ文治二年四月三日、頼朝公マタ御下文ヲ島津ノ御庄ノ庄官等ニ下シテ諸國諸民ノ地頭ハ鎌倉ノ進上ナリ、殿下ハ替ラセ玉ヒテ先日定ラレシ忠久ノ地頭職ハ全ク相違ナシ、跡其下知ニ從ヒ住人ヲ安堵サセ、御年貢以下ノ沙汰ヲ御意スマシトノ赴キナリ時ニ其島津御庄ニ引札シテ薩摩大隅口向ノ惣名也ト誌シ賜ヒ、手懸料紙本文ニ只ナラスト云ヘリ、去レバコソ、五代道徳公ノ守護代酒匂得貴ガ語ニモ、忠久公ノ時分與ニケ國拜領之條ヲ以島津庄守口向大隅薩摩右大将御下文以下所稱也、或ハ日向・大隅・薩摩ニケ國ハ島津庄之内條御下文ニ明鏡也ナト見ヘ、又忠水記ニモ薩摩・大隅・日向等御庄之廣島津ノ御庄三ヶ國ト申也トモ見ヘ又聖業自記ニモ先薩摩山門院ニ御下リ夫ヨリ島津御庄ニ御移島津之庄ハ庄内也、三ヶ國ヲ為懷依在所也、去程庄内南郷内御住所堀内ニ島津御所作リ有テ御座候、御養父八文字良部大輔殿モ始ハ島津ニ后任有歟、安國寺申狀ニハ良部大犬ハ日官五間ニテ候ケル間、島津ニ居任候ト島津殿ト書申、其後八文字殿王佐國領移云々見ヘタレバ、按ニ見ユ、島津殿ト申シ、後ニ土佐國ニ御移トアレバ八文字ト云在名ハニ在ニテハ無キカ然アンバ後人誰テ後ノ家号ノミ記シテ世ニ伝ヘツラン、地名ハ世トシテ替ルニ多ケレド四國ノ人ニ問テモコト也、前ニモ云ヒタルゴト島津ト云所ハ庄内ニ在レトモ三州ニテ殿下御領ノ府本タル地名ナルニヤ、御領ノ總名ヲ島津御庄ト云ヒ、他郡ニ請散在

シタル御領ハ皆寄郡ニシテ亦島津御庄ト稱ヘテ薩隅日在々所々御鉢ホ  
ド其支配ノ地ナレバ表ニ庄内ノ島津庄ヲ母ノ體ニ譽ヘバ三ヶ國ヲ胎内  
ニ孕メルカ如シ 大輿圖安万侶傳記ノ序ニ云 斯リケル処ニ賴朝公跡  
頭ノ權ヲ握テ諸國ニ補任シ玉ニ至テ 得仏公ヲ島津御庄ノ惣地頭ニ律  
セラレ薩隅口ヲ一統ニ下知シ玉フ事ニナリタレハ遂ニ島津御庄ト云コ  
ト三ヶ國ノ總名ニモウチ成リ僅余レル他領ノ庄宮マテモ三州一切ニ知  
ラシマス様ニトノ思召ニテ此四月三日ノ賴朝公御下文ヨリ始テ二州ノ  
總名ト云事ヲ書付サセテ三ヶ國ニ融サセ給ヒシト見得タリ、其ヨリ斯  
ル趣ヲ御下文幾ラモ御賜アリテ程ナク三州守護職ニモ補セラレ玉ヒ  
官ノ口テ家号ニマテ名乗ラレケル、島津ノ府本ニ御所ヲ構テマシ、  
ケレバ賴朝公モ島津ノ多キ國ソト聞召セヨバレ仰セ言アリテ遂ニ島  
津ヲバ亦御氏ニシ玉ヒケリ 去レバ島津モ唯宗王臣言ノ近臣トモ島津ハ  
別在御領ノ地名ナレバ臣言ニハ別沙汰ナルベ  
シ、惟宗ハ彼宅ニテ成長シ玉フ故ニ別本姓ニハアラネドモ一任名乗ラセ玉フ故ニ  
冒ノテ史録スト見ヘタリ、

然在ケンハ蘇以テ三州ノ總名ト為リシハ古ニ及バズ、定ニ薩隅日共皆  
御苗字ノ地トゾ成ニケリ、斯テ惟宗氏ヲモ承久三年御年四十二ニ成マ  
ス迄留サセ三十三ニ生レ玉フ時ヨリ近衛基連公ノ恩縁篤カリケレバ遂  
ニ御假ニノ契ヒヲ成セラレ是年六月藤原氏ニ改メ玉ヒ其ヨリ御代々藤  
原姓ニテ間ニハ 道義公ナド惟宗ノ忌宗ト和歌ノ撰集等ニ載リ玉ヒ  
大岳公ノ応永卅二年三月大藏守エノ御寄治狀テドニ徳貴久、遊シタル  
モアレトモ寛永八年 寛陽公御本姓ノ頼氏ニ復シ玉時マデハ皆御支族  
衆ニ至テ藤原氏コソ多カリキ、去テ 得仏公島津ノ御所ニオハス頃ノ  
事ニヤ鴨長明方無名抄語漫ノ部ニ斯ナン見ヘタリ、  
つくしのしまといふ所にかよふものゝ事をつめてにかたり侍りし  
ハつくしにとりて雨のかた大隅薩摩の境といつれのくにとかやわす  
れたり、おほきななるみなと侍、そこには四五月にハあけくれ浪たち  
てしつまるまもなし、四月にたつをうるみといひ、五月にたつをさ  
なまとなん申侍るといひき、三月さ月といふゆへにやいとけふある  
事也、  
長明が建曆二年ニ著ハス方丈記ニ我ハ六十トノ文アレバ仁平三年アタ

リニ生シ、賴朝公ヨリ六ツ許モ少ク 得仏公ニハ二十六歳バカリ長リ  
テ時ヲ同シヌレバ當時志麻呂ノ都會テリシコト今ノ鹿見島ニモ類スベ  
ク見ヘタリ、大キナル浪トハ今ノ山川ヨリ福山ニ進フ内海ヲ指シ、  
朝暮浪タツ所ハ今ノ大崎ガ原ヨリ或ヘルナラン、僅ノ風雨サハスレバ今  
モ尚舟人トモノ最長ル、鼻ナリ、四五月トハ語者ノ折シモ見タル風潮  
ヲ云ヘルカ都人ノ雅量ニテ斯モ巧ニ詔レルカ、今ニウサキト云名モ遺  
レハウ浪サ没ノ所山ニテ名ヲ得タル乎、重テ識者ニ訪ヘシ、又餅抄ニ  
モ斯ナン、

毛早 執柄家 家礼之人用檳榔毛 檳榔嶼關白近衛領鎮西志摩戸住  
士産云云、仍所望月之云云、

按ニ毛早ハ檳榔毛ノ御草トテ天子遷幸ノ時サト用ラル故事トテ 得仏  
公島津ノ御所ニオハス頃ニヤ有ケン御年二十一ニ成マス、承元三年十  
一月 土御門帝ノ睿旨詔ニサド月ヲラレシ事アルトナン、餅抄ハ中院元  
祖運方卿 嘉祿四年十二月二  
十八日癸丑十五歳 ノ著述ニテ 公ヨリ五ツ許モ少ケレバ承元  
ノ古帳ヲ斯モ此ニ筆抄セラレシナラン、其頃基連公ノ御子家夷公ノ撰  
ニ鑑建保六年戊寅六月廿一日於御所御事ニ阿 格納  
半部 十七日將軍家夷人得拜資參  
被關臣タルニ出シハ前關口トハ基連公ヲ云ヘルナルヘシ、執柄家トハ  
岳宮船御中權御軍前一人牛六一人持綱八月十五日癸丑時德盛放生會將軍家御參  
近衛ヲ始メ五族家ノ事ニテ家礼トハ其家令ヲ云ヘルナラン、左大臣ノ  
守波言書御軍云々、  
家令余義仁ニ外從五位下ヲ授ラレシ事トモ天平十六年ノ紀ニ見ヘタリ  
此ニ所望シテ用之トハ基連公ノ家令ヨリ 得仏公ニ所望シテ島津庄一  
円ノ内ナル志布志ノ海上ニ眞許年ノ方ニ在ル檳榔島 同洞今  
里余 ヲ探ラ  
セテ獻ラレシナラン、故ニ志摩戸住土庫ト記サレシナラン、鎮西トハ  
聖武帝ノ天平十五年癸亥ニ始テ鎮西府ヲ置レシヨリ遂ニ九州ノ總名ニ  
ナリシナラン、檳榔ハモト精菜ノコトナルヲ漢名ヲ誤ルトテ近頃本名  
ニ改ラルトゾ、去レド上古ヨリ檳榔御前ト云フ彼島ニ洞リ 古事記ニ檳  
榔之長檳宮  
見ハ、檳榔ヲア  
アマサト訂セリ、  
善ニ帰ル可都蒙方語ニミテ彼王ニ加賜ヒシ物件ニ檳榔扇十枚ト見ヘレ

ハ誤モ亦旧キノミナラス、今志布志ノ名産ナリシ檳榔樹モ最久キ名物ナルニヤ、且志布志ハ島津庄一月ノ内ニテ津ト弥シテ上代ヨリ開墾延居テ島津ノ名ニ合ヘル所ナリ、宝満寺ト大慈寺ノ文書ニ斯ナン、

奉打渡 日向方島津御庄志布志津 大沢水

宝満寺救通四至境事 隈東深小路大道

限雨窪峰 限西河 限北天神山後堀

右任被仰下之旨奉打渡千宝満寺之状如件

正和五年十一月三日 沙弥蓮正判

日向同致仁院志武志院所駄口米事、先規有共沙汰者不可有相違之状如件、

永和四年三月十八日 沙弥判

大慈寺長老

島津ノ名ハ津モ無キ庄内ニ遺レト其島津庄内ニテ此ニ津ト稱ヘ關所モ有ケルト見ヘレバ日向國司ノ島津ニ都シケル頃ナド救 島ノ屋久 今ノ屋久 今ノ大島ニ天見嶽ト云アリ、文之ヲ琉球ヲ討ノ時ニ天見嶽ノ島也 薩美 今ノ大島ニ天見嶽ト云アリ、文之ヲ琉球ヲ討ノ時ニ天見嶽ノ島也 子島也 今ノ大島ニ天見嶽ト云アリ、文之ヲ琉球ヲ討ノ時ニ天見嶽ノ島也 度感 今ノ大島ニ天見嶽ト云アリ、文之ヲ琉球ヲ討ノ時ニ天見嶽ノ島也 中ニモ 得仏公ノ御代ナト際隅口ノ都會ナル島津ノ御所ノ水門ニゾ在リツレバイト繁華ナリシ地ナルコト想像ルヘシ、去レバニヤ 道義公ノ世ニ当テ花園帝モ宝満寺ヲ勅願所ニ建ラレタリ、今ニ至テ千家ノ町ナド云伝ヘルモ記アリシ事ナルベシ、斯テ 得仏公ヨリ御代々守護ノ職ヲバ襲セラシ三ヶ洞ヲバ治玉ヒ四ニハ古ヨリ造リシ郡司等ノ幕府ニ御家人タルモアレトモ皆 公室ニ附庸シ奉リ御代々 得仏公ノ故事ニテ惣棟ノ御下知ヲ為シ玉ヘバ一統ニ當テ守護御屋形トハ尊ミ敬ヒケリ、故幕府ヨリモ三ヶ洞ノ事トモハ守護ニ仰下ラレケルトテ文安三年丙亥炎上ノ頃モ斯ナン見ヘケルトン、

造内要料大隅薩摩日向三箇國段錢事、先度被仰之趣ニ今未済之条不可然、早可被懸進之由所被仰下也、

宝徳二年四月廿日

(本)「善政公曾領島山三箇國守護人遺徳本」 沙弥判

(宋)「島津公」 島津隆興守政

此ハ 大旨公ノ御時ナリ、段錢トハ守領ノ町段ニ歸テ山鏡スルコトト見ヘタリ、我輩ナトハ上古國司ノ時ヨリ文祿京竿ノ以前ハ采地等皆町段ニテ計ケルトテ 惣翁公ノ時ナト田宅段ニ俗家ハ五拾錢、寺社ハ百錢或ハ俗家三拾錢、寺社五拾錢ト段錢ヲ定ラレシトゾ、然ニ京竿ノ時ヨリ右モテ計ヘラレ、出物ナトモ石斗ニ算セラレシニ今ニ尚遠尋ノ百姓等山物藏ヲ四ニハ段銀藏ト稱ヘルハ誠ニ古言ノ流リト云ツベシ、爰ニ又三郎武久ト申上ルハ十一代隆興公初メノ御名ニテ正徳山公ノ御一子ナリ、御母ハ櫻原三郎太郎弘純ノ女茂山夫人ニテ寛正四年五月三日ニ誕生マシ、此文明六年甲午ノ正月十一日 成ハ八月 元服アソバシ、四月 先君ヲ喪ハセラレ、寔ニ御年十二ニテ襲封シ玉ヒ、同十二年十二月晦日修禊進ヨリ薩摩守ニ任セラレ、同十三年ヨリ御病身十五年十月御叔父久遠橋氏ヲ以テ叛カレ飯肥ノ新納忠統ヲ伐テ三州驅逐セリ、十六年六月白軍ヲ率ヒ末吉迄討陣マシ、テ忠統ヲ飯肥ニ敗ハセ玉フ誓ハ文明記ニ詳ナリ、明徳五年與國守ヲ建ラレ、翌年十月御社父大岳公ノ蓋ヲ崇ラレ小城權現ト号シ而シ玉フ、永正二年八月言將トシテ肝屬兼久ヲ高山ニ寄玉フ時新納忠統志布志ノ兵ヲ率テ高山ヲ援ケレバ、公ノ軍利アラス、十月十一日高山ヨリ御別陣アソバシ憤懣ノ氣ヲ御胸ニ透カラセラレ與國寺ノ本尊等悉ク安履シ玉ヒ、同五年正月廿五日平田兼宗ガ成レル申良マデモ權閔ニ去渡ケル時豊州忠朝 三 出社シテ御策ゴシニ詔ヲ取レケルニ既屬ト新納ガ滅亡ヨモ百年ハ越シト仰ラレ、其年ノ二月十五日西行ガ辭世ノ和歌ヲ御ウテスシ夜半遂ニ如來堂御二階ノ柱ニ倚テ自殺シ玉ト云ヘリ、時ニ御年四十六、御法号ハ巴室源經大禪定内與國寺殿トゾ中譽ル是ナリ、斯テ新納氏ハ其ヨリ三十二年ニ当ル天文八年七月二十六日近江守忠勝黨ニ志布志ヲ没落シ付氏ハ六十七年ニ当ル天正二年兼輔黨ニ臣ヨリ以テ 實明公ニ降リケレバ申良ノ師崎名上置ノ門ヲバ同五年二月與國寺殿ノ御麻領ニ假ヒケルトゾ、譜代御住所鹿見島トハ前註ニ云ヒシ直純ガ子孫代々郡司タリシヲ府志四年閏四月 五代道鑑公時ノ郡司矢上左衛門五郎高純ガ

權馬樂城ヲ攻陥サレ、六代幹岳公ニ進ラセ玉フ、因テ山門院ヨリ東嶽寺城ニ入部マシ、今安養院ノ後山ニ其遺墟アリ、此處見島ニ居マス始也、其ヨリ大給良ニ御移リ又志布志ノ内城ニ御移リ、七代朝翁公ナキ世子ニテオハシケル空穂年中此清水ガ城ヲ御築キ彼内城ヨリ移ラセ玉フ、今、府城ノ北ニアタル大興寺ノ後山ニ遺墟アリ、至徳ヨリ公ノ時マテ既ニ五世マシマセバ譜代御住所トモ書シナルベシ、其ヨリ流ツマヒテ、大中公ノ御代ニ迄ヒ、公ハ大永七年六月迄御養父大翁公ハ天文四年五月マテ此御城ニマシ、其久ガ乱レニ伊集院忠朝大中公ノ為ニ上ノ山城ヲ取構テ遂ニ御運ヲ開カレ、同十九年ノ十二月掛鳥院ヨリ、復鹿見島ニ御移、貞明公及ヒ、幕版公迄居マス御城ヲ其頃ハ御内トゾ云ケリ、慶長七年ノ冬、慈眼公、神祖ト御和陸アリケル嶺上ノ山ニ今ノ、府城ヲ築キ玉ヒ実ニ万世不易ノ鶴丸山是ナリ、爾ヨリ御内ハ本御内ト唱ケルニ同十六年、貫羽公カケレ玉ヒシ後禪菊ヲ建ラレ此ニ居マシ、公ノ高号ト、大中公ノ法号ヲ指テ大庵寺ト名ツケラレ、僧文之ヲシテ開山ニオキ玉ヘリ、鹿見島トハ延久八年因田丁ニ太陽正八幡宮御領荒田庄八十町鹿見島郡内ト見ヘ、今ニ荒田ニ八幡社アレバ上古ヨリ鹿見島神社ノ領地ニテ郡名ヲ為ルカ、延喜式ハ鹿島ト作リ和名鈔ニハ鹿島ト作ル、式ハ舊ノ字画ヲ誤認シタルナラン、且諸國郡里等ノ名ハ二字多用ヒ舊名ヲ取ルコト延喜式ニ出ルトナン、左ゾレハコソ弘安七年魚光明寺ノ總銘ナト七言十八句ノ中ニ鹿島郡造立梵宇ト七言ニ見ヘレバ上古ハ二字タリシ此明驗ナリ、然アルニ字体ノ長ケレバ書カニ不使ナルニヤ、惣給公オナドノ頃ヨリ俗ニ三字ニモ書キテ通ス行ハレケルトテ、淨國公ノ時ヨリ令シテ三字ニ定ラレシト云ヘリ、三字ノ郡名余國ニモアルカ、其詳ナルヲ知サルナリ、

別府仁薩摩守薩州同久御舍弟中務長彈正

按ニ別府ハ薩ノ河辺郡加世田邑ニ在リ、建久八年因田丁ニ加世田別府百町ト見ヘタリ、別府田開ト云ヘルカ、ノ村名ナドオモ遺墟ニ氏レルニヤ、國久ハ俗ニ所謂薩州家ノ二世ニテ、八世義天公第二ノ公子薩摩守用久ノ長子也、齊ヲ為甫ト云、當時薩シ薩州ヲミテ行ハル故分註セシト見ヘタリ、後皆コレニ倣ヘ、円室公ノ御為ニハ叔祖父ノ御子ニテ堂叔父

ノ御属アルノミケラス、其姪君ハ、先君貞山公ノ夫人ニ立玉ヒシコトモ見ヘレバ又母舅ノ御属モコレアルカ、嘉吉元年ニ生レテ此甲午ノ歲ハ実ニ三十四歳ニ当レリ、中務ハ乃チ大田氏ノ別祖ニシテ國久ノ二弟中務大輔延久ナリ、後ハ下野守ト更メ入道シテ諡足ト云ヒ、母堂ハマタ、円室公ノ御始玉泉夫人ニテオハセシ故堂兄弟ハ御属ナリ、輝正トハ亦タ國久ノ三弟彈正忠統久ナリ、此時國久弟阿久將ヒサ別府ニ居城シ、和泉、今作、山田、高小野、爾今、阿久根、河辺、山田、鹿見、籠子、併セ領シテ高城某ヲ家相トセラレシコトマ帝ニ出タリ、山田聖榮ノ系圖目安ニ斯ナン、

忠國代ニケ爾悉せいひつす、次國ノ疾之事も此代ニあり、せいはいつせらるゝ、勞々一家ニハ伊集院殿、四方おいてハ別府・和泉・平山一家不殘、牛山一族悉坂より上ニハ和川・高木・飯肥・櫛間・南郷・梅北いつれも比方之跡御料所として御一家御内ニ御はい分あり、阿久根も此時失ハレ候、麩藏御合戦之次第ミツヘ、河田・指宿・鹿兒島はやまか原・いさく合戦知覽大寺討死てうさ・ひしかり自身太刀打候、ミまた合戦時新納四郎三郎殿同大崎方其外數十人定死出東すた木之合戦ニハ一家ニはんかう右京亮・桃山次郎殿討死、子他國おいてハ肥州つなき合戦ニ菊池手討數十人宗との者共討死す、

立久当細代

三ヶ國悉以御せいひつ、御一家御内因方一味同前仰申所なり、京都より御しゆりやう御官を被成下候此時ニ薩州ニハ向來・羽嶋・高江・宮郷・高城・坂より上ニハ對部御せいはい候、何も御料所となる、

右此条々為月安ニ大方中にて候、勞々他見あるましき事候、

文明二年三月五日

薩七各三是符也 沙弥聖榮 志広へ

大隅國小河院内ニ成村岡於本城書、右ノゴト見ヘタリ、且用久ノ伝ニ出水ニ居住トアリ、然アレバ出水・

別府・阿久張等ハ、大岳公征伐シ玉時御司母サシ次ノ御舎弟ナレバ第一二月久ラ此ニ封セラレシコト以テ緩ベキ也、然シテ用久ハ永享年間頃久ハ文正元年十一月廿九日ヨリ何レモ一二年許ツ、守替代ヲ領シケル人ニテ時ノ威權守護ニ重ケルニヤ、此書モ第一ニ死セリ、頃久ハ明応七年戊午七月二十九日ニ卒ス年五十七、私ニ桂林園久大禪伯ト諡レリ、今其墓阿久根ノ蓮華寺ニアルトゾ、用久ハ阿久根・出水ニ居テトナン、国久モ後ハ別府ヨリ河久親ニ移ラレシニヤ、川辺ヲ弟中務延久ニ、別府ヲ親ノ新三郎忠福ニ、山田ヲ次子ノ駿河守忠綱ニ、鹿尾ヲ三子ノ伊勢守秀久等ニ分チ守ラセラレケルト見ヘタリ、然ルニ薩索四代忠興ノ時ニ至テ忠福別府ヲ以テ宗氏ニ授ケルニヤ、明応九年十一月忠興別府ヲ攻ケルコトモ旧記ニ出タリ、

平山仁豊後守益州季久御子息修理亮佐忠康

按ニ平山ハ隅ノ始維那帖佐鎌倉村ニ在リ、秀久ハ豊州家ノ別祖ニテハ世義天公第三ノ庶公子上原氏ノ所出ナリ、円室公ニハ叔祖父ノ御属アリテ応永二十年ニ生レラレ是歲平午寅ニ六十二歳ノ時ニ当レリ、忠康ハ則嫡子ニテ豊州家ノ二世ナリ、初名公久、一説ハ後名ノカタテニヤス、匠作ハ修理ノ山名ナリ、円室公ノ御為ニハ固ヨリ堂叔父ニテ大岳公第四ノ嫡子松元入道ノ女所生ナリヲ承セラレ故マク姉婿ノ御属ナリ、永享十二年ニ生レ是歲二十六歳ニ当レリ、初メ平山城ハ弘安中ニ城州石清水善法寺了清ト云モノ八幡神領ノ司ト為テ下向シ、平山村ニ領家タリ時キ築テ此ニ居リ因テ城ニ名ツケテ孫以テ氏ニスト云ヘリ、建治二年石築地ノ賦ニ平止川一丁八段半加神山定三丈一尺八寸五分何領家トアリ、向トハ前ニ恒見七丁七尺留守刑部左衛門尉貞用領トアレハ此ヲ指ニヤ、弘安ヨリ二三年前ノコトナリ、今止村ニ其村名ナシ、園分ノ川内村ニ平山ト云地名アルトナン、時ノ界彼アタリニモ探レルカ詳ナルヲ知ラス、了清カ建タル新正八幡ノ別当寺増長院ニ古徳ありテ大隅國平吉阿陀陀寺撞鐘一仁弘安五年五月日石清水了清ナト見ヘタリ、此一族紀姓ニテ応永ノ季トモハ最繁行セシニヤ、富田寺ノ奉加帳ニ平松公基守武味・平山越後守武豊・高城渡津守武宗・船田紀武井・平山信濃守武子・飯美作

守義武ナト見ヘタリ、皆其族トナラン、此等ノ一家族ラス、大岳公ノ時享徳年中征伐セラレテ御庶弟季久ニ其故地ヲ封セラレタルト見ヘタリ前ノ聖業ノ説ヲ併セ知ルヘシ、下章ヲ按ニ此時季久帖佐・平山・高城・上之山・平瀬・蒲生・津辺・横河・東郷ヲ併領シテ平山ニ居城シ上原某ヲ家相ニセリ、後ニハ平山ヲ次男越後守忠綱ニ成ラシム、因テ亦氏ニス、是御一家ノ平山氏ノ別祖也、斯テ季久ハ同邑瓜生野ニ城キ移ラル、今ノ建昌城ト云遺迹此ナリトゾ、疑クハ二世忠康ノ時ナルカ、文明九年丁酉八月六日季久卒セリ、年六十五或ハ三トモ、越後國常大禪伯ト法諡ス、總持寺殿是ナリ、同キ一七年七月円室公伊作久逸ヲ日ノ櫛間ヨリ復タ改メ伊作ニ移サレ、同十八年新納忠綱ヲ飯肥ニ易テ末吉・財部・救仁郷ヲ賜ヒ移サレ、此年十月十九日忠康ヲ飯肥櫛間ニ平山ヨリ徙サレ伊東方ニ備置ヒツラン、延徳三年辛亥八月二十日甲子撰州突王寺ノ返ニ卒セリ、年五十一、雪溪忠好庵主大陽寺殿青麻止ナト法諡シ家田州防介佐宗友瓜其三ヲ大守ニ安シテ祭ルノ文アリ、斯テ其子忠朝ノ時ハ飯肥・櫛間・末吉・志布志・松山・安栗・海北等迄モ併領セラレシニ五世忠親ノ時水禄五年五月飯肥ヲ伊東義祐ニ去渡シ志布志ヲ所領省約ニ去渡シ、又義祐信ニハ永禄五年壬戌正月廿二日飯肥悉受取トアリ、又頼戸口伊立自記ニモ忠親ハ飯肥ヲ伊東ニ去リ渡シ福島ノ院ニ引取テ、頃ハ弘治七年壬戌三月十八日云々アリ、

日布麻仁相模守相州友久御子息三郎左衛門尉

按ニ相州友久君ハ、九代大岳公ノ庶長子ニシテ、十代節山公ノ庶兄ナリ、円室公ニ於テハ伯父ノ御属也、初メ、大岳公新納忠臣ノ女ヲ立テ御夫人トシ庶兒島ニマシマセリ、心平夫人是ナリ、又伊作勝久ノ女ヲ納レテ次妃トシ伊作ニオキマセリ、心連六人此ナリ、永享四年丙寅人卒マシ十一月四日伊作ニ生マヌハ友久君、翌五日庶兒島ニ生レ玉八節山君ナリ、是歲甲午俱ニ四十三ノ御年ニ当レリ、御子息三郎左衛門尉トハ忠幸者ノ御幼字ニテ、円室公トハ堂兄弟ノ御属ナリ、後ハ相模守運久入道一親斎ト申奉リ乃チ、日新君ノ御養父ナリ、応仁二年生レ三ヒ是歲ハ御志ツニ成セリ、斯テ友久君ハ庶長子ニテ園ヲ安玉ハス、其多、日布麻、高橋ノ三邑ニ封セラレ玉トゾ、然ハアレド此頃マデハ日

布麻ノミ知ロシ居マスカ、河多ノ高橋ハ別ニ領主州タリ、高橋ハ島津  
藏人幸次阿多ハ桑波田右馬介ナド此頃領シ居レルナラン、下章ニモ又  
交陽十五年ノ笠掛日記ニ桑波田右馬介方ハ阿多領事ト見ヘタリ、然  
シ文明中河ノ年月ヨリカ友久君高橋ヲ併セラレ、明應二年癸丑三月  
十日卒シ玉フ、御年六十二、御法号天勇玄機大禪定門菩提寺殿トゾ申  
奉ル、然シテ一瓢君ノ御代トナリ永正九年三月廿四日河多城ヲ攻ラレ  
六月城主和ヲ乞テ降ケレハ遂ニ阿多ニ移テ居城シ玉ト云ヘリ、天文八  
年己亥七月十一日御年七十二ニテ卒シ玉フ、御法号大徳道澄大禪定門  
大年寺殿ト申スハ此也、一説一曰ニモ作レトモ、日新公實ヲ華マス前  
一瓢君ノ御諱辰トテ人ニ左右ラレ神主ヲ礼拜シ玉ヒ、遂ニ十三日ニ逆  
玉ヘリト云ヘバ十一日ヲ是トストナラン云ヘトモ御祖父久逸君ニ御諱辰  
ハ十一日ナレバ此御諱前ヲ依間ニ誤タルモ知ヘカラス、此ヲ相州家ト  
テ公室ヨリは々兼テ御祀ヲ奉ザラレ由來ヨリ御傍符他ノ公族ニ異ナル  
ニヤ古書ニ

一御一家中御參之時相州棟御家計者中奏者之事、  
斯ナシ見ヘタリ、御長房家ノ致ナルヘシ、  
箱間仁式部大輔東藤久逸、同又四郎御實子

按ニ東部久逸ハ一丸代大岳公第三ノ公子ニテ、錦山公ノ母弟ナリ、東  
部トハ式部ノ唐名後ハ河内守ト改玉ヘリ、円室公ニ於テハ叔父ノ御屬  
ナリ、永享十二年ニ生レ玉、是歲甲午ハ三十五ノ御時ナリ、初メ三  
代道忍公ノ次子大隅守久長隆ノ伊作ニ長セラレ伊作ヲ御氏ニシマシ其  
御歳七世ナル大安丸ノ十六才ニ伊集院諏訪ノ祭祀ノ頭人ニテ神事終  
レル時キ長祿二年十二月四日ニ卒死セラレテ絶ナントスル時家臣等久  
逸ノ其時十九歳ニ成マヌヲ切ニ諫テ大安丸ノ御妹ヲ娶ラセ伊作殿ニツ  
仰キケリ、繼間ハ日州那珂郡福島院ノ院語ニテ新モ作レリ、久逸ノ此  
ニ封セララル、事ハモハ較高右船、日危 古書ニ  
式部太夫殿ト曰テ御座候をれを分限三つけ御申あらんとて其頃くし  
マシハ野辺殿の持切にて候、野辺二名つけて、大岳さまくしま御光儀  
にて野辺殿へ橋間を御所望候程ニ野辺殿あからなく鹿見島へ参朝申  
され候、やかてくしまへうつし御口あるその時式部殿者中ハ幾田殿

三原殿也、上下文ヲ

斯ク見ヘタリ、御当家ノ由來ニハ立久御代ニ橋間院ニ移御申トアリ、  
大岳公ハ御隱居ノ後ナラン、野辺方系凶ニテ接レバ刑部大貳貞盛方時  
其ノ殿被守齋駕ヲ鹿見島ニ出シテ奉公サセケルニ、鹿見南郷ヨリ兵ヲ  
伊集ニ乞來テ備間ヲ攻ケレバ良盛防クニ術ナク飲肥・備間ヲ委テ庄内  
ニ引奔シ、妹婿ノ北郷義久ノ家ヲ頼ケルコト見ヘタリ、此ニ、大岳公  
ノ隠居、申伝ヘ、天正四年前久公ノ御馳走ニモ春山ノ御關持ナド、大村重頼カキ  
記シテモ朝館ヨリ帰陣マシ、テ後長十二年前寺原義厚等、五島大相守ノ阿  
保崎見島ヲ訪玉時從ヘル士衆有シテ眞ニ權サシケンハ旧式ノ廣符ヲ極島ニテ張  
行シ玉ヘルトナド先史中岡ヲ筆シテオケルトナラン或昔ニ由タリ大岳公ノ北郷關持  
ハ洩スレバ古老ノ説承ルコトアルヲ証スベキナリ、  
ニ由テ託テ橋間ヲ直ニ野辺氏ニ御所願アソバシタルハ盛徳等父ノ寇ヲ  
報ハンガ為メ、公ニ請奉リテ斯ハ認ラシ鹿見ノ野辺ヲ襲玉ヒツラン、  
鹿見島ニ參上トハ長前ヨリ出タル盛徳カ事ヲ云ヘルカ、前註ニ引ケル  
聖案カ書ニモ忠國代既胎・橋間・宮郷・梅北ナド御料所トシテ御一家  
等ニ御配分ト見ヘ新納忠統ノ諸ニ養和以來較仁院ヲ領シ來ルニ長祿二  
年、忠國公ヨリ飲肥ヲ加賜トナド見ヘレバ、久逸ノ箱間ニ移マヌモ此  
年ノ事ナルカ、去レハ伊作ヲ嗣キ玉ト道ニ封ヲ易ラレケルカ、御三男  
ニテ被ラセ玉頃ノ事方詳ナラス、又四郎御曹ニトハ其御一子善久ノ御  
小字ニテ、圓室公トハ堂兄弟ナリ、應仁二年ニ生レテ是年ハ僅ニ七歳  
ニ当レリ、下章ニモ橋間ノ家老ハ幾田・三原ナリシガ幾田カ策ニテ  
円室公ハ猖狂ニ居マヤバ御曹ヲモテ代奉ラバヤト申ケルトナン、三  
原以テ公ニ讒言シケルニ御曹子ヲ召テ尋玉ケレバ我ハ全ク知侍ラス雖  
口只笑止トゴソ申ツルト仰上ラレシニ幾田ニハ讒ヲ死ヲ賜ケルトナン  
是ニ因テカ事起ケン、文明十五年十月久逸伊集ト語ラヒ飲肥ノ新納忠  
統ト戰ヲ初メケレハ、十六年六月、公未嘗迄御出陣マシマシ兵ヲ遣テ  
忠統ヲ救ハセ玉、二十一日大ニ戰テ御勝利アリ、二十九日進テ橋間ニ  
入玉ヘレバ七月二日利平ト為リ、久逸モ、公ノ大營ニ親セラレ、三日  
遂ニ本領ノ伊作ニ移レル、ニ決シテ御開陣アリ、斯テ善久ハ新納是久  
ノ女ヲ娶、一説ハ賀養子ニ入リ、テ日新君ヲ生シヒ、若ニ成ニ成マヌ則

一説ハ賀養子ニ入リ、テ日新君ヲ生シヒ、若ニ成ニ成マヌ則

三年四月十八日善久卒シ玉ヘリ、実ハ叔僕ヨリ流セラレ玉トゾ、御年二十七、法号越山道辯大禪定円ト申マス、然シテ、日新君御九ツニ成マス明應九年庚申十一月十一日御祖父久逸君ミ加世臣ノ職ニ神没マシマシ御年六十一、法号ハ德隆淨輝大禪定円善勝寺設ト曰ハ此ナリ、去ルニヨテ、日新君ハ御臣梅窓夫人ノ為ニ鞠ハレ玉ヒケルニ、一飄君梅窓夫人ノ寡居ヲ憐ミ切ニ娶テ其孤ナル、日新君ニ家邑モ伝ラレントノ堅キ御契トモメサレテ遂ニ御再嫁マシ、ケレバ、藤ニ、日新君伊和兩家ヲ嗣キテ日邑伊作ニ相室ノ河多、円布直・高清ヲ併セテ、大中公ヲ生玉ヒ、公ノ時、公室ヲ中興シ玉ヘレバ伊和兩家ハ、公室ヨリ御兼帯ニテ御祀ヲ奉シ玉トナシ、

三候下城仁伯耆守伯州久豊  
按ニ久豊ハ豊久ヲ上下ニ誤タルト見ヘタリ、伯州豊久ハ、八代義天公第五ノ公子ニシテ、大岳公ノ庶弟今ノ義國家ノ別祖也、

円室公ニ於テハ叔祖父ノ御属マシ、応永二十八年生レ玉ヒ、是歲甲午五十四ノ御時ニ没シ、三侯ハ前註ニ見タリ、下城ハ諸縣郡高城今ノ有水村ニ其遺墟アルト云ヘリ、粟榮ノ記セシ古系圖ニハ伯耆守三侯下城属生ト見ヘタリ、家譜ニハ薩州平泉ヲ賜テ此ニ居タルトアレドモ下章ヲ按ルニ平泰仁字宿左馬助ト載スレバ此其ハ縣ニ封ヲ平泉ヨリ下城ニ移サレタルト見ヘタリ、文明十六年自辰十二月任作久逸、伊東祐國ヲ詔ラニ新納忠純ガ飯肥ノ城ヲ取メル時、豊久私奔三百ヲ將ヒテ二十日飯肥ニ出陣、豫テ謀ヲ公若クハ公軍ニ通セス、自カラ鎌ヶ倉ニ屯シテ和泉隱岐守久氏ガ成レル酒谷城ヲ救ヒ、二十二日久逸、祐國ガ軍ト大ニ鎌ヶ倉ニ戰テ殺セリ、其六一四、二トテ、法号ハ大口忠康居士トソ申ケリ、其ヨリ五世ノ孫藏人久延ノ時ニ至テ、貴戚公御諱字ヲ賜ヒ天正八年ヨリ始テ氏ヲバ義國ト号セリ、

次郎三郎忠徳

按ニ忠徳後ニ父ノ稱ヲ襲テ出羽守ト改メ忠徳ト更ナル、八世義天公第四ノ公子今ノ大島氏別祖出羽守有久ノ嫡男ニシテ二世ノ家督ナリ、円室公ニ於テハ堂叔父也又九代大岳公第五ノ翁ニシテ亦御姉婿ナリ有久ハ日科梅北七十三町及ト岡州堀城三三町、能佐ノ田中門四町八段

通計百余町ノ地ニ封セラレ梅北城ニ居テ子忠徳孫出羽守忠明ノ時ニ至リ三世居城セシト云ヘレハ今此ニ次郎三郎ノ上梅北仁ノ三字ヲ脱シタルナラン、前註既府ノ下ニ引置クル聖宗ノ書ニ梅北仁梅北モ帖佐モ大岳公征伐シテ有久ニ賜ヘルナラン、帖佐ノ西町余ハ平山一家ノ故地ナルヘシ、姫木モ本田重直ガ清水ニ叛ケル時、文安元年、大岳公ヲ將トシテ言恒ヲ討玉ヒ、清水ヲ新築忠臣ナドニ賜ヒタルコト本田氏ノ綱書等ニ出レバ三十町ハ本田ガ故地ニテ其時有久ニ賜ヒツラン、斯テ忠徳ハ文明十六年十二月二十二日豊久ト同シク鎌ヶ倉ニ戦ヒ深利ヲ蒙リ家ニ叛テ卒セリ、謂ハ文明記ニ出タリ、其ヨリ子忠明ノ時、円室公ノ命ヲ奉テ明應八年封ヲ大口ニ移シ、政麻備ヲ鎮成シテ二百五十町ヲ食メリ、享祿中忠明父子義利氏ノ難ニ戰没シ其後、故ニ忠明ノ外孫出羽守忠泰ヲ嗣ニセリ、忠泰ノ時永祿九年、按ニ九年ハ四寅也成十十二月廿七日島津支族多クハ采地ヲ氏ニセロトノ命アリテ大口ノ内大島ヲ以テ始テ氏ニスミ云ヘリ、大島今ハ羽

飯肥仁新納近江守江州忠純、志布志仁御舍弟三郎左衛門尉、御舍兄駿河守駿州

按ニ江州忠純ハ新納氏臣代修理亮忠治ノ長子ニテ第五世ノ家督ナリ、九代大岳公第三ノ翁主、忠治孫ノ所生ニテ、尚シ亦、円室公ノ御姉婿ナリ、飯肥ハ口州那珂郡ニ在リ、初メ新納氏臣々志布志ニ食メリ、忠純ニ至テ長祿二年、大岳公文飯肥ヲ加賜ヘリ、ヨテ忠純ハ飯肥ニ居城シ舍弟三郎左衛門等ヲ志布志ニ居ラシムト見ヘタリ、下章ヲ按ニ此時薩郷・志布志・安樂・松山等ヲ併セテ皆其家邑トシ隈江其・中野・栗ノ家相ニスト見ヘタリ、後文羽十八年、円室公飯肥ヲ末吉・厨部・致仁郷、大島ニ賜ヘテ賜ト云ヘリ、豊州忠康ノ飯肥ニ移ル時ナルヘシ、延徳元年己酉九月二十日忠純卒シ法諡ニ成笑翁ト云トゾ、二郎左衛門尉モ亦忠治ノ第三子越前守忠明ノ初名ニテ夫ハ忠純ノ二弟ナレトモ男ナク立テ嗣子トシ遂ニ六世ノ家督ヲセリ、明應三年甲寅七月二十七日卒シ法諡ハ光忠翁ト云ヘリ、駿河守ハ忠治ノ二子是久ノ字稱ナリ、忠純ニハ次弟忠明ニハ仲兄ナリ、改此ニ御舍元ト書キシナラン、文明



十七年六月二十一日見忠統ト伊作久逸下戦ヘル時キ久逸ノ子又四郎善久ハ是久ノ婿タル上、忠統ニハ加勢モ多クシテ久逸ハ其兵ナレハ其キヲ助ケテ死センニハ如シト遂ニ久逸ノ軍ニ会シテ鉄巴河原ニ戦没セリ或人言フニハ忠統ノ嗣子ニ清忠ト云ラレシヨリ是久快ト云ス久逸ニ覺セラレシヨラン、知ラス然レバ、此乃チ日新君ノ御外祖ニテ梅室夫人ノ御父ナリ、武藏守忠元ノ為ニハ宮在父ニ當テ梅室夫人ト忠元等ノ公室ニ敬助アルコト遍ク世ノ知ル所ナリ、

安永仁北輝齋久

按ニ善久後ニ敬次ト更メ讚岐守ト稱ス、北輝氏五世持久ノ男ニシテ母ハ和田氏、上佐守匡盛ガ女ニテ永享二年ニ生メリ、是歲巳午二十二歳ノ時ニ當レリ、父ノ後ト為リ六世ノ家督ヲ繼ケリ、初メ別社ヲ尾張守資忠ト云、四代道義公第六ノ公子ニシテ編應二年九月金限ノ役ニ功アリ、文和元年四月廿五日尊氏公其軍功ヲ賞シ北輝三百丁ニ封ス、十二月十二日始テ北輝ニ入部シテ藤原二居レリ、因テ北輝ヲ以テ氏ニス義久ニ至テ應仁二年丙内勢田 或作推田 ヶ辻ニ城ヲ徙此ニ居レリ、所謂安永城ナリ、今ハ村名、為テ郡城ニ屬ス、尤安永ノ地ト云ベリ、明應九年庚申正月二十二日卒セリ、年七十一、欲講道高太禪定門下法説ス、二殿寺殿此ナリ、

野々三谷仁權内長久

按ニ長久ハ權山氏六世安芸守入道宗家ノ名ニシテ五世兵部少輔清久ノ次子ナリ、元ヲ増五郎ト云後死ス、故ニ長久父ノ後ト為レリ、野々三谷ハ郡之城ニ屬シテ今村名也、初メ別社ヲ安芸守資久ト云ベリ、四代道義公第五ノ公子ニテ建武ノ乱ニ功アリ、觀應二年尊氏其軍功ヲ賞シテ柞杵院地頭等ニ補ス、又三内、島津、權山、早水、寺社等ニ封セラレテ權山ニ居レリ、因テ以テ氏ニセリ、今ハ勝岡ノ村名ナリ、男ナシ、北輝資忠ノ次子ヲ嗣ニス、二世美濃守善久此ナリ、應永元在七月細翁公相良カ所ヲ敗テ野々三谷ヲ取り玉ヒ善久ニ賜テ此ニ居城セシム其ヨリ代々相守テ五代日則長久ナリ、大永元在五月小日子美濃守広久ト野々三谷ヲ去テ隅州堅利小田ニ移テ程ナク長久卒ス、年八十六法守春岡兼公ト云ヘリ、安芸守善久入道宗佐ハ其孫ナリ、

加治木

按ニ是加治木氏十九代左衛門尉清久ナリ、木姓ハ島津氏、上章ニ見ヘタル豊州季久ノ第三子ニシテ匠作忠兼ノ母弟ナリ、一名忠敏トモ云ヘリ、内室公三於テハ実堂叔父ノ御屬ナリ、加治木小助ノ始羅郡ニ在リ上古ヨリ、大藏氏世々此ニ郡司タリ太夫良長ニ至テ没シテ子ナク其妻寡居シテ職ヲ領シケルニ富政三年経平卿 頼忠 罪ヲ得テ此ニ誘セラレ寡婦ヲ娶テ藤太夫経頼ヲ生メリ、七代ヨリ八郎親平ト云、時文治四年頼朝公頼平ニ御下文ヲ賜テ郡司ヲ安堵セシム、十八世ヨリ三郎実久ト云ヘリ、勇ナク清久ヲ嗣トス、因テ此ニ公族ニ列セント見ヘタリ、凡ソ池加治木トノミ其自ヲ寺キテ姓名ヲ略スル者ハ多クハ封土ヲ履ヘ其邑ヲ以テ氏ニスルノ久シテ當時ノ人遍ク知レルモノナラン後ハ皆例シ知ルヘシ、子能登守久平カ時ニ澄テ明應四年七月、内室公兵ヲ遣テ加治木ヲ攻ラル、明年二月久平降ル、コレヲ可多ニ移リル時伊地知州防守重貞、比ニ封セラレツラン、下京ニ見ヘシ、新左衛門此ナリ、

知寛、佐多

按ニ佐多氏六代下野守原山ニシテ五代豊後守忠遊ノ子ナリ、永享八年ニ佐レテ是歲甲午八三十九歳ニ當レリ、知寛ハ薩ノ給察郡ニ在リ、建久ノ凶口丁ニハ知寛院四十町ニ在リ、初メ別社ヲ三郎左衛門尉忠光ト云、四世道義公第三ノ公子ニシテ佐多ニ封セララル、因テ佐多ヲ以テ氏ニセリ、文和二年五月十一日、尊氏公忠光カ功ヲ賞シテ知寛院ヲ賜ヘリ、三代豊後守氏義カ時永徳元年六月一日護摩氏 左馬助 佐多ノ城ヲ復セリ、曰領五ヶ所ノ一ナルニヤ、此時知寛ニ徒レルカ、應永四年九月二十日探頼漢川頼頼玉調ニ証書ヲ与テ本領ヲ安堵セシム、此時佐多ニ四城カ、云レド辺塚アタリハ清平領ト見ヘタリ、四代伯耆守親久カ時刻二十七年、八世義天公川辺知寛等ヲ取テ親久ガ口領トテ上ノ木場二十町ヲ賜ヘリ、此知寛今ノ郡村ニテ官廳アル地ト云ヘリ、因テ同三十一一年親久佐多ヨリ知寛ニ移テ居城シ 城ハ永皇 十一代太郎次郎久遠カ時、天正十九年台命ニテ三州遷易アリ、久遠ハ川辺ニ、種子

島久時ハ知覧ニ  
文祿四年  
移サレ、十二代伯耆守忠充カ時、慶長十五  
年復本領ヲ賜テ知覧ニ遷リ代々伝領シテ忠山ハ文明十一年己亥三月四  
日卒四十四ニテ卒ストアレバ此ニ知覧佐多ト書シハ忠山ノ永世ニ居  
城セシヲ指テ云ヘルナラン、然アンハ知覧仁ト云仁ノ字ヲ脱シタルト  
見得タリ、

### 高城仁給察

按ニ志永廿一年八月 義大公伊集院親久ガ給察城ヲ攻取玉時ノ事ヲ聖  
榮自記ニ和泉殿本領トテ下永吉廿町被賜原ノ給察方ヲ指直ル下記  
セリ、此庶子トハ伊集院四代忠國ノ九男今給察長門守久俊ヲ云ヘルナ  
ラン、其子民部少輔久統等此頃迄ハ給察ヲ名乗レルカ、高城ハ薩ノ高城  
郡ニ在ラ云ヘルカ、應永二十九年 大岳公兵ニ料トシテ出陣ヲ受ラ  
ル時聖榮自記ニ高城方元弟五分レニツ成、仍合弟三郎方ハ長門守高城之  
候ベハ伊集院・向來・高江・宮島・羽島方、御内ヨリハ長門守高城之  
本城ニ被打入候、兄ノ大川方ハ東郷・誦分・執印ナトヲ頼水引ニ被居  
云々、其長門守コト即今給察長門守久俊コトナルベシ、御当家田案記  
ニ長州・信州是イツレモ無等大通之才孫也、又云、今給察殿ト申ハ長  
州郡類也當時ニモ文明二年ノ志ニ薩州ニテハ高城ナト 立久公御代御  
成候候テ御料所ト為リシコト見ヘ、又文明十七年二月朔日東郷重運・  
那答隆重等高城氏 水引ニ高城ヲ太師ト 下謀ヲ合セ、守護方ヨリ守レ  
ル水引城ヲ襲取タル事トモ文明正ニ見ヘ、又水引ノ外城立シハ寛永六  
年ノ事トナン地理志ニミアリテ昔ハ高城ノ内ナリシケニ見ヘレバ 節  
山公ノ時、彼今給察カ一族ヲシテ高城ノ水引ヲ成ラセ得ルル此ニ斯ハ  
戦ツラン、然シテ十七年ノ志ニ曰ク、高城氏ト東郷等謀テ取返シタル  
ナラン、今ノ齊入氏伝祖ハ若狭守忠弘、二世ハ津守篤久 後ハ 三代  
八三郎四郎 後ハ 忠善ニテ、忠弘ト篤久ハ 九代大岳公第七第八ノ  
公子ニテ皆 田家公ノ御叔父ナリ、是歲甲午ニハ忠弘ハ文安二年生ニ  
テ二十歳、忠善ハ應仁三年生ニテ六歳、篤久ハ宝徳三年生ニテ二十四  
歳ニ當テ時ハ齊合ヘリ、然ニ忠弘ハ給察ニ、篤久ハ揖宿ニ對セザレ、

忠弘ノ子忠善ヲ篤久ノ子ニシ、篤久ハ兄忠弘ノ弟トシ、而色ヲ辨セテ  
給察ニ居城スト謂ニアランド、下章ヲ按ニ給察ニ輩生・揖宿仁九郎不衛  
門尉久継ト別ニ領主ヲ被セ、又清生實清等カ給察ニ居タルハ長徳二年  
ヨリ明應四年迄三十七年ノ間ト地理志ナドニ見ヘレバ此文明中ノ専滿  
氏ノ給察ニ居レリ、然アレバ忠弘ノ給察ニ對セラレシハ明應四年清生  
氏ノ蒲生ニ還レル跡ナラン、篤久ノ揖宿ニ對セラレシニ其年ナルカ、  
久継ノ後ニ越後守忠康ト云ヘルニ明應四年忠康京良ノ地頭ト為タルコ  
トアレバ揖宿ヨリ移ラレ、篤久ハ其跡ナラン、且文明二年聖榮ノ書レ  
シ御系圖ニ、立久公御舍弟ノ内御借ト系レル次ニ立郎 其次キ  
ニ二郎、マタ次ニ宮二郎カこしえ居住ト記セリ、今按ニ宮二郎ハ湖月  
和隆ニテ二志トハ篤久ノ小字又二郎ヲ略シ、五郎トハ忠弘ノ幼字五郎  
三郎ノ略、見ヘタリ、左アレバ此文脈ノ始マデハ忠弘ハ向島 殿島ノ  
領主ナリシガ、殊ニ彼家ノ喜入ヲ家持ニセラシハ忠善ノ孫根津守季  
久ヨリトナン云ヘリ、左モ有テコソ常可入敷ト題セシ古書ニ島津若狹  
守若州島津根津守根津ナト見ヘタリ、忠弘モ篤久モ島津モテ終ラレ  
ツラン、又篤久ハ明志八年己未二月二十四日年四十九ニテ卒シ法舟芳  
嚴道普大居士ト諡ニアリ、此ニ不審ナルハ世文ニ  
真心顯明安大始文 島陰桂庵作  
維永正三年丙寅閏黃姑初七日壬子下先妣心鏡大姉無言三珠於鹿兒島之  
本宅即日奉子諡津守藤原篤久就事 都之增常湯若菴葉之鑿教祭于露  
輿之下訥曰  
嗚呼哀哉 平族某家由我母云々  
斯ナシ見ヘタリ、此篤久ハ齊入家二代頼久初名也、若然レバ 大岳公  
第八ノ公子ニテ松元入道方女ノ所生也、此ニ云フ、心鏡明安大姉ハ則其  
御生母松元氏ノ法名カ、貴鐘ハ十一月廿、永正三年十一月七日ニ卒去  
セラン、此等文ハ其時柩前 公子ノ篤久ニ代テ作レルモノナラン、平  
族某家云々ハ平族ナル松元氏ノ女 大岳公ノ御妾ト為テ篤久ノ母トナ  
リタルヲ云ヘルナラン、然在リテ篤久ノ卒タル明應八年ハ永正八年辛  
未ノ誤ナルカ、永正三年ニ此事見ヘ、且御当家ノ由來二十男篤久揖宿

三居住、十一男法燈禪師今ノ福昌寺住持是也トアリ、酒師ハ永正中ノ住持ナレハ永正迄ハ存在ナリシハ疑フラシ、御司母ノ翁主豊州ト大島家ニモ適玉ヘレバ此等ノ御師三此大姉ノ古牌トモハ無キカ、訪テ二ツト序ニ此ニ許オキヌ、安分依知親族ニテハ島津松元小次郎重之助ト付シ、三代ハ松元氏部少輔重隆、四代松元氏部少輔重隆五世松元氏部少輔重隆、大徳年間ハ文安ノ義ヨリ大永ノ頃マテニ当レハ此ニ云松元入道三年代モ合テ同族ノ者ニ歸シ、云レトテ録ニ年帖佐新藏ニテ重隆親死シ落成ニ及テ古系圖文古長亡シヌレバ以前三四代ノ系伝委カラス故考カダシ、今此ニ記シテ來哲ノ正ヲ竣、

### 撰撰仁九郎右衛門尉久繼

按ニ豊州季久ノ次男越後守忠貞ヲ初メ九郎右衛門尉久繼トモ云ケル、譜ニ見ヘレバ此ナラン、田室公登叔父ノ御嫡也、譜ニ成ハ右字ヲ左トモ作リ、文正元年手組ニ島津九郎左衛門尉ト云モ見ヘレバ執カ誤リ若クハ改タル乎、且忠貞ハ文明元年己丑八月卒、法号定山道安居士ト記セリ、左アレバ此越甲午ハ既ニ没シテ六年日ニ當レトモ明應四年四月田室公豊州忠朝ヲ申良ニ遣シ平田氏ヲ攻テコレヲ取ラレケン時、忠貞叔父忠康ヲシテ申良ニ地頭タラシムト地頭志ナトニ出レバ其時指箱ヨリ移ルカ、申良職訪廟ノ棟札ニ文龜二年七月十六日大比呂忠朝、地頭忠康トナン見ヘヌ、有早村ノ師宮社ニアル棟札ニ永正三年丙寅十二月廿八日造立大日耶当地頭島津越後守藤原忠康トナト見ヘ、皆文明以後ノ事ニ明驗ナレバ、家譜ハ誤ナルベシ、前ノ平山下註ニモ忠康ハ平山氏ノ別荘也ト云タレド此時ハ島津ナルベシ、凡ソ假名ヲサシツケ寄キテ氏ヲ書サル衆ハ多クハ島津家ニ誤リシ事ト見エタリ、既ニ前ニ詳叙セ見ヘタル別府仁薩摩守、平山仁豊後守ナド吉ケル類皆例シテ知ヘシ下常高橋仁藏人トアルモ例ナリ、此例上代ヨリ然アリツラシ、得私公ナドヲ始奉リ當時ニケ國ニテ書タルモノニ島津ト御稱号ヨリ書キタルハ少カラルベシ、凶田丁ナト地頭右衛門兵衛尉或ハ地頭右兵衛尉忠久ト見ヘ、応永末年奉加帳ナト藤原貴久ナドアリツバシ、他ノ家譜ハ多クハ見ユレトモ島津ト許御家号ヲ闕クハ本島津御庄ノ内ニシテアリ、ヨバシヨバシニヤ、然ニ寛永十九仁御家老ト守久元ナド御國ヨリ江戸ニ上ラレシ状ニ名字無キトテ評判アリケルトナン江戸ノ御一族モ皆名字

ハ書ケラルニ何ヤウノ子細ソト其年八月、寛陽公ヨリ上郎ノ阿考高津久通、川上久國等ヘ聖玉ヒケレバ市來ヨリ仕キタリト申上ラレシトナシ、此時始テ命アリ、以後ハ皆々書キ玉ヘトト社ニテ久通其間合ヨリ書レケルトソ、撰撰仁九郎名ニテ建久八年凶田丁ニ指那郡四十七町島津御庄寄那ト見ヘタリ、

### 市成仁山出

按ニ山田氏七世加賀守忠広ニテ六世白羽守忠尚入道聖榮ノ子ナリ、聖榮ハ応永五年生ニテ比歳甲午ハ七十七ノ時ニ當レリ、前註ニ引文昭二年ノ書ニ擬レハ賜ニ入道シテ忠広ノ家督ト見ヘタリ、別祖ハ式部少輔忠繼ト云ヘリ、二代道徳公ノ庶長子ニテ藤ノ牛屎院及ヒ谷山ノ山田村上野府村等頭職ニ柄セラレ山田ニ居レリ、因テ以テ氏ニセリ、四世加賀守忠経ノ時、道鑑公ヨリ一成六町ト六次ノ鞍山名ヲ、坂ヨリ上、福山ノ坂ニリ、御子醒キノ始トテ賜ケルヲ一成ハ當御代マテ頂戴シテ子孫繁ヌト文明十四年聖榮書オカレタリ當御代トハ、四常公ノ時ヲ云ハル也、一城大明神ノ神林ノ第ニ永正五年十二月廿三日山口河内守忠豊同藤原久親ト見ヘタリ、忠豊ハ忠広ノ子ニテ八世家督ナリ、世録記ニ天文十三年忠広市成ヲ貴久公ニ獻レルコトヲ記セシハ、貴久公記ノ文ニ先年式部少忠広ヨリ屋形様ニ獻リオケル市成ヲ其年ノ七月肝属ニ賜ヒタルコトアレハ其ヲ詭談タルト見ヘタリ、永正五年以來忠豊ガ久親ノ間ニ獻レルナラン、忠広トハ後人ノ追記ノ誤ナルニヤ、其年月ハイマダ見当ラス、謂所云ノ古書ニ小河院ノ内ニ市成六町トアリ、今曾於郡ノ内ナリ、

### 立房仁富里

按ニ立房モ亦小河院ノ内ニテ六丁ト見ヘタリ、今ハ并屬郡百引ニ親キテ村名ナリ、富里氏藤原ノ分チアリ、其藤原ナルハ公族ニテ、得私公第三ノ公子掃部介忠直ノ次ニ三郎左衛門尉泰忠、或ハ忠直ノ子太郎五郎、且ノ別祖ニテ一ノ孫久光マテ譜アリテ子孫見ヘストナン、又一流ハ山口元祖式部少輔忠繼ノ第四子四郎忠里モ富里ヲ号シ子孫知レスト見ヘ、又忠繼ノ子ヲ取榮ノ自記ニハ其子三人式部少輔、忠真ナリ、山田殿是

木イ

中村次郎 忠泰ヲ 忠秀ヲ 忠久三郎 忠秀ヲ云々、宮戸殿ハ庶子也ト見ヘ、文明記ニ宮尾茂作守宮里内膳ヲト見ヘ、又今平房村ノ鎮守石牟礼社ニ遺レル文明二十七年乙巳十一月十八日ノ棟札ニ大巨那藤原茂作守忠常ト見ヘ、又文明中平房ノ加世田城ニ新解左馬助、宮里道隆 或ハ宮里道永居ト名、在吾ノ時藤原茂作守忠常城ノ野野ニ普福寺ヲ開長シタル事トモ其

由來記ニアルトナン、又新納譜ニ近江守忠武 応仁三年生ニテ大永元年ニ

七年八十八歳、十九年長 時、樺北・百引・三城ヲ陥シテ領スト

見ヘタリ、今參テ考ルニ聖業ノ時山田殿、宮里殿ト云ヘルハ皆其時分ハ

別ニ居タル家督ヲ指セル詞ナラン、去レハ被棟札ニ藤原茂作守忠常ト

云ハ山田氏庶子四郎忠常ノ子孫ニテ姓ハ藤原氏ハ宮里ニテ嫡家、所ノ

隣ナル平房ニ居城セラレシナラン、福昌寺奉加帳山田忠豊ノ次キニ藤

原武久長門守ト云モ見ヘタリ、忠常ハ其子ニモ当リテ此甲午ノ頃居城

セラレシナラン、故此ニ書テ平房仁官庄ト載セ、文明記ニハ宮里業作

守ト書キ、棟札ハ館内ノコトナシバ苗字ヲ略シ藤原業作守忠常トカケ

ルナラン、然又文明ノ季ニモ新納忠武平房ヲ攻取リ其族人新納左馬助

ヲシテ成ラセツラン、其時忠常ニ新納氏ニ隨身シテ人遣名ヲバ宮里道

随トモ故テ守トモ既基シツラン、其事ヲ後人由來記ヲ作ルニ十七年ノ

棟札トモ附会シテ前ニ拾ハル語ヤナシケン、何レニモ此頃マデ公族ノ

宮里氏存セシコトハ疑アラシ、

高江仁河上十郎左衛門殿

按ニ川上氏五世上野守兼久ノ第五子義久入道道安ガ事也、永享九年ニ

生レテ是歲甲午ハ三十八歳ノ時ニ當リ、家族ヲ分立チ弓馬ノ達人ニ

テ二十八歳ニ成ケル、寛正六年三月五日、九代大岳公同々公室三伝マ

又弓馬ノ善ヲ悉ク義久ニ授テ御遊藝ヲ演玉ヒ、節山公、同室公ニモ依

授シ奉リ、文明中、幕府義満公モ徵テ射手ニ死セシメ、御感ノ余リ詩

ヲ作テ賞ヤラレ、御辭ノ藝ノ子ヲ賜テ義久ト改メ名譽ヲ顯ハンケルハ

節山公長幼ヲ褒美セラレ、薩州高江・寄田・宮里ノ五十町ヲ賜テ高江

ニ居城スト云ヘリ、前註ニ引シ文明二年三月聖業ノ書ニ、立久公当御代薩州ニハ市來・羽島・高江・高郷・高城、坂ミリ上ニハ財部領成族候、何モ御料所トナルト見ヘレバ此ヲ馬ツラン、大永元年並乙七月十四日年八十四歳ニテ卒セリ、聖翁道安ト法諡セリ、高江ハ薩摩郡也、寄田今ハ高江ニ属シテ牧アリ、道安ノ時ヨリ始ルカ、言テ訪録スヘシ、宮里ハ隴之城ニ属シ皆屬名ト為レリ、

高橋仁藏人

按ニ亦豐州垂久ノ第五男島津藏人幸久ナリ、前ニモ見ヘタル匠作忠兼

・加治天満久・九郎右衛門尉久経等ノ弟ニシテ、同室公ニ於テハ堂叔

父ノ御属ナリ、文明記ニ見ヘタリ、一説垂久ノ五男淡路守古久カ子ニ

郎也郎後ニ藏人ト云此ナラン、イマダ其詳ナルヲ知ラス、高橋ハ阿多

郡ニシテ、建久八年岡田丁ニ高橋五十丁没官御領地重佐女島四郎ト見

ヘタリ、今田布施ノ村名ナシ、

平和泉仁守宿左馬助

按ニ宇宿氏ハ知覽ト祖ヲ同シテ俱ニ越前高津ノ庶族ト云ヘリ、周防守

忠綱ノ第三子太夫判官忠景次男官隆介忠秀 忠綱ノ嫡孫ハ忠後守忠綱ト云

子トス、 宇宿氏ノ宗トス、嫡胤詳ナラストナン、忠綱ハ越前ニ守

護代ニテマシ、其子忠行ハ押保ノ下掛保ニ増頭シ玉ヘリ、知覽・宇

宿ノ同族抑何レノ地ニ因リ各氏トハ為シ、何レノ年代薩摩ニ帰リ来ニ

ケン、其詳ナルハ知ラネトモ其庶流トテ今ニ遺レリ、又山田氏ノ元祖

式部少輔忠繼ノ第三子三郎忠秀 或作 忠秀モ宇宿ヲ氏ニシテ子孫知レストナ

ン、按ニ忠繼ハ牛原院ニ地頭タルコトトモ見ヘ、此平泉ハ則牛原院ノ

内ナレハ三郎忠秀、始メハ父ノ谷山ノ任所ナル宇宿ニ族ヲ分計テ宇宿

ヲ家号トシ、後ニ又父ノ牛原院ノ任所ナル平和泉仁讓ヲ受テ移居テ其

子孫此ニ載リシ宇宿丸馬助ニハ非スヤ、又王ノ江迄ハ平和泉モ外城ニ

テ季安カ九世相伊地知民部少輔重康 後ハ備 ナド兩代地頭ニ居タル所ナ

ルニ後ニハ省カレ大口ニ隸キ今ハ村名ト為レリ、城ノ遺墟、町ノ迹ナ

ト残レリ、然ルニ慶長十一年八月一向宗御糾明ニツキ其頃表列表ニ居

タル彼重康ガ孫伊弉諾知民部重政後ハ左衛門下政メ山野・翌月等ニ地頭也、然ラ始トシテ四十  
八人大口地頭新納忠元ニ誓詞シタル衆ノ中ニ守備善右衛門久堅ト云ヘ  
ルアリ、又元和二年十二月大司守佐八幡棟札ニモ殿口奉行守備善右  
衛門ト見ヘタリ久堅ナルベシ、此左馬助ガ族裔ニ近キモノ也、左アソ  
トモイマタ謹丞ヲ見ザレバ考カタクシ、

靈遊雜記云卷上 終

一年頭御座配之儀者御氏族他家共ニ口米一所依領地ニ致在城、年頭ニ者  
嘉礼を以御祝儀申上、太守公ニ御嘉礼被成下候、其身御祝儀ニ致参上  
候節於御対面所御規式有之候得共其後在所持之田々御城下ニ移カ罷加年頭  
出仕候旨寛永年鑑五与之御座配被相定、其後今一紙相重、六組之  
御座配ニ被相定候、正徳四年大史引儀也

新春之御慶申候、隨而者就御所三方造作之儀谷之方々田々被越  
候、其内平山被返可祝成候、其外以上御談合ニ而極月二日御宰公之口  
付要候、恐惶謹言、

二月八日  
東郷殿参  
伊勢上総守貞武判

雲遊雜記傳中

雲遊雜記傳 中

雲遊雜記傳 中

潛隱 伊季安 纂述

一、御手持之御城柱

按ニ御手持トハ其頃御料所 御内ヨリ 山詞ナラン 又ハ守護領 國家ヨリ 云詞ナラン ナト云ヘ ル類ニテ今ノ諸郷ノ如ク諸家ノ私領ニ非ル外城ヲ云ヘルナラン、玄佐 自記ニ三持ノ所々多カラスナド云ヘルハ 大翁公御手持ノ地ヲ指ト見 ヘレハ此等ノ類ニヤ、城柱トハ城ニト云カ如クナラン、聖業自記ニ計宿 ノ城柱ナド又文明記ニ河田ノ城ニ押寄テ攻レトモ城柱ニ河田飛騨守ナ ド、見ヘ或ハ岩岐氏古記ニ鬼ヶ城ノ城柱木脇六郎兵衛尉又ハ目井ノ城 柱新納河内城衆ニ木出小城其外云々又新山城柱知寛大和守城衆ハ伊地 知三郎九郎云々トモ見ヘレバ例シ知ヘシ、此ニ御手持ノ御城柱ト見ヘ ルハ 因室公御直支配ノ外城ニテ其々御代官トシテ御一族ノ人ニ御内 衆ナドヲ差副ラレハ其所ニ遣ハシ守ラセ玉フ、今ノ移地頭ノ類ト見ヘタ リ、城柱ハ地頭ノ場城衆ハ談合役ニテ今ノ年寄ナトニモ準ヘルカ、抑地 頭ト云ハ 頼朝公六十余州ノ總地頭職ニ補セラレ玉ヒシヨリ尊氏ノ世

ト為テモ將軍家ヨリ時々交關ニ送セラレ進止アル職員ノ其一ト見ヘ、 建武元年二月廿一日 道鑑公ニ豊後國井田郷地頭職ヲ知行シ玉ヘトノ 御給旨外新納時久ノ新納院ニ地頭セラレ樟山資久ノ臼杵院ニ地頭セ ラル類ナト此ナリ、左アリテ國々ノ守護職ニハ守護代ト云屬官アリテ、 其レニ國ヲ預ラルコト郡郷ノ地頭ニハ代官ト云屬官アリテ、其ニ諸名 ノ御年貢以下ノコトヲ沙汰サセラルト見ヘタリ、其屬官ハ守護ヤ地頭 タル正員ヨリ各其内ノ者ニ云付ラル格ト見ヘ、大瀨口某カ種子局ニ地 頭タル時其身ハ鎌倉ニ在テ遙領シト妻氏ヲシテ就テ島ニ代官タラシム ノ類或ハ文和二年六月六日道鑑公ヨリ前件井田郷ノ内樂比名地頭代官 都城東条氏延武國道鑑公ヨリ大隅國箇羽野村ニ分地頭代官職ヲ東条義成郎入道 聯伊地知輝正忠宗隨カ跡ヲ其子伊地知彦七、此即 季原 二宛行ハレタル御判 通符ニ宛行延文五年八月廿二日道鑑公ヨリ薩摩國山門院内木口次郎左五門入道 物、或ハ宝治二年七月十九日薩摩國宮里郷益富名主新太夫正持カ田藤 兼阿カ跡成實地頭代官職ニ其孫子本山金太郎ヲ宛行ハル ノ事ヲ宛行所ノ下知狀ナトニ地頭御代官本山五郎兵衛ト宛ラレシ古書 建武二年三月十一日道鑑公ヨリ同シク山門院内本山左五門次郎親兼カ跡半分代 アリ、又建武四年八月交名注文ナトニ守護御代官瀨勾兵衛次郎下載レ 官職ニ本山孫次郎久兼ニ宛ラル ルコトトモ觸ツベシ、又文明七年島津稻荷ノ遷官ヲ記タル古書ニモ 武久公御代官宮丸殿ト見ヘ、此甲午ハ其前年ナルニコレヲ御手持ノ 御城柱ニ列シ末吉仁宮丸ト載セラレバ此頃迄ノ地頭ハ旧將軍家ヨリ 仰付ラレタル子孫トモニ非レバ守護ヨリ地頭トハ仰付ラレザリシ ニヤ、板令御一家御内ナドニ、城ヲ預ラル、モ御代官トカ御手持 ノ御城柱トカ云ヒタルト見ヘタリ、 代官ハ今モ同ク御藏入ノ官ヲ主宰シ 其屬吏ヲ下代ト云、時トシテ地頭ヨ リ代官ヲ兼ルモアリシニヤ、小槻古ノ橋氏日記ニ慶長四年六月小槻占・山本・田 代三ヶ所、二ヶ所五千五百石ノ下代被仰付、地頭兼代官役川上石原亮殿、同十二 年即月長谷場主膳正殿、水原七郎左衛門殿兩人親占ノ代官御當リ、同十三年十 月相長親山次官殿親占與地頭代官御當リ、同十六年十月小槻占・山本・田代、 佐多・辺津野四ヶ所ノ代官友野次郎右衛門殿御當リナト、見ヘタリ、 左アレトモ將軍家ヨリ仰付ラレタル地頭御家人ノ列ニ固ヨリ御一族モ

ラセラレ他家三代々附庸シ交リ、一統ニ守護ヲ敬重シ奉リ遂ニ質ヲ  
 委テ御内ニ臣事スル族ヲ漸ク多カリケリ、其時旧ト地頭ニテ御家人タ  
 ル者ノ子孫ハ其白籍ノ通ニ守護ヨリモ本ノ如ク地頭ト付テレシト  
 見ヘ、氏久公ノ時正平十二年五月朔日山田諸三郎忠経ニ上伊敷村ノ  
 地頭職ヲ賜フ、是ク公室ヨリ地頭ノ始ナルカ、又応永七年正  
 月廿五日、細翁公ヨリ鹿屋院内下村・中村ヲ木領タル上ハ地頭領  
 家職ノ事一由所被死行也ト鹿屋院防守ニ賜タル御判物、或ハ又其  
 八月七日同院ノ内下村地頭職ノ事依為由緒為給分所宛行也、任先例可  
 令領知之状如件ト詞人ニ賜ヒ、或ハ永享四年五月十九日守護代好久ミ  
 リ大瀬屋ノ瀬筒村地頭職ヲ富山氏ニ補セラレタル類ナド大瀬屋列ナリ  
 ケ様ニ御家人等モ其地頭所ヲ持テガラ御内ニナリ、応仁ノ乱ナドヨリ  
 一入足利ノ細紀モ素レ諸岡ノ家庶次第三層移ニハ成キキ、御内ト御家  
 人ト自然ニ同様相成ケル所ヨリ後々ハ守護ヨリ并領セシ御内等ノ一所  
 モ若クハ御手持外域ヲ一往ツ、預レシ御代官ナドモ鹿屋氏等方御内ニ  
 入テモ御家人時代ヨリ持テシタル地頭職ナドニヤ効ヒケン竟ニハ御  
 内者モ同ク地頭ト呼ル事ニ為リケルト見ヘ、延徳三年三月二十七日郡  
 山一之官再興ノ領札ニ地頭村田肥前守藤原経安 経安者ニハ東主  
 肥前守トアリ、ト載ヤ  
 或ハ新納越後守等ヲ高城地頭ト譜ニ記シタル類其外年代ノ降ルニツレ  
 御内ノミナラス、又内地頭ト云事マテ始リケリ、文龜三年白良叔説  
 ノ棟札ニ大旦那忠朝地頭忠康ナトノ類此ナリ、此又明六年ヨリ延徳マ  
 テハ十八年、文龜ハ三十年コソ後タレ、然ニ文明六年迄ハ経安ヲ一城  
 持ノ列ニ載セ、郡山仁河田云々越後守ヲ御手持城柱ノ列ニ載セ、三根  
 高城仁新納云々見ヘテイマタ地頭ノ字ハ兼カリシニハ交割、事ノ沿  
 革スル形勢ナド此等ヲ以テ概知スヘシ、左アレバ此頃ノ地頭ニハ一所  
 持ラシキモノ今ノ移地頭如キモノリケルカステ其地頭代官共ハ云ニ及ハ  
 ス、諸ノ郡村ニ領主タルモノヨリ一町二町持タル士ニ至マテ上代ヨリ  
 大水天文ノ頃迄ハ百々皆所領ノ地ニ居テ各坐陣 小城ナリ、其要隘ノ処ニ築  
 ナリ  
 テ此ニ拠有シ、分段ノ広狭ハ異ントモ 今ノ俗ニハ家言メル  
 者ヲの限者ト云此也 三州諸郡ニ在

カ一所持ノ風情ナルゾ多カリシトナン 文徳御年ヨリカ始リケン、高リハ考  
 ヘネ、諸子ノ給地ヲ文記セラルルニ近  
 中道、云ヒ、高領ヲ三割ニシテ一ハ近方一ハ中程、一ハ遠方ニ分セラレタル  
 事トモ寛永向御付等ニ見ヘタリ、然ニ三割、其等々、権目ノ移地頭等ハ格別  
 ニテ管其在所ニ賜ヒケルコト寛永十年因巻長官ノ書ニ見ヘタリ、辺領ノ特恩ナ  
 ルニヤ、  
 然アルニ、口新公仁ニシテ降者ハ懐ケ、勇ニシテ叛者ハ討玉、全縣人  
 ヲ殺スコトヲ誓ヒ玉ヒテ討ヲ治メラレ、遂ニ公室ヲ、大中公御中興アソ  
 バシ、此等ヲ領主トモ其一所々々ノ地ヲ以テ年月ヲ増シ服従シケレバ  
 賞賜公ノ御代トモハ此御手持イヨク々々盛ニ成立當三州ノミ然ルニ非ス  
 九州残り少ク勝ケ玉ヘレバ御代御内バカリニテハ薩方ノ領成ニ足リ  
 合ハス、其以前ノ戦國ニ弱キヲ掠メ轉ヲ長シ居タル伊東・戸属・藤原  
 藤原・北原・渋谷・菅生・豊州・薩州・新納・伊集院・伊地知・本田  
 等ノ如キ諸巨族ノ一族彫免トモ數十百人ツ、御直士ニ召出サン 諸家大  
 概記、  
 又ハ本吉士根元記等ニ出タリ、或ハ菅氏ハヨ記ニモ慶長十五年十月高橋孫興  
 小根吉ハ御光徳、其時名子ノ者トモ百十二人家中ニ召出サルトアリ、  
 抑ノ郡村ニ強ハラス、地ノ要所ヲノ広狭ニヨテ配屬ニ多少ヲ分ケ、某々  
 ノ郷村ニ築キアル堡障ハ地頭兼中ヲ差置テ守ラセラルコト皆此御手持  
 城柱ノ類ニ為シ玉下見ヘタリ所謂諸外城 諸外城ニハ御持タルモノナ  
 下ニ記ラレシヲ安永九年七月外城ヲ御ト次ラレシト也、  
 此ナリ、天文八年正月、大中公、梅岳公ノ御徒ニ諸軍衆中地頭領主ノ  
 免シテク其所ヲ還ルモノハ死罪タルヘシ、 元禄八年ノ令ニハ刻仁石上ヲ  
 レ御内ヲ放サルト見ヘタリ  
 藩府藩務後務ノ間ニハ二人家ノ子迄ミ早朝ヨリ農業セヨトノ律令ニテ  
 城ノ普請モ修メラレ來タルニ天下ノ新治ルニ隨テ元和元年閏六月十三  
 日安藤軍信、土井利勝等ノ奉書モテ諸岡居城ノ外諸ノ座城ハ悉ク毀テ  
 トノ台命アリテ三州ノ諸外城悉ク毀ンタリ 北郷忠能ノ城ヨリ下テ今ノ  
 宅地ヲ當レンハ是嶺ノ八月  
 トアレハ諸外城ニ多  
 タハ其頃ニシテ、  
 其ヨリ多クハ其城山ノ麓ニ地頭坂屋ト云フ別ニ建テ  
 地頭ヲ居ラシメ、其レニ給事セシ衆士ノ宅モ其隣ニ賜ヒ其一所ノ府本  
 ナル故ニヤ、其村ヲ村鎮トシテ俗ニ屋ノ屋、今ニ至テ其地頭坂屋ヲ  
 吏士ノ官邸トセリ、此ニ其麓ノ字ヲ用ルコトハ旧ハ止ニ築ケル城ヲバ



元和元年毀テ地頭ノ假屋ヲ燒ニ移レタルヨリ云ハル詞ナラン、寛永九年、家

光公御代終リテ翌十年任田上使少白安房守・城爲親監・能勢小十郎、テ三使  
本藩ニ遷禁ノ時此諸城ヲ異シテ一國ノ制アリテヨリ英國臣國領ヲ取テ、  
表十多クハ其城府ニテ差置ルニ、本藩ハ諸城ノ下ニ衆士ヲ置シテ今モスハ  
トテハハ城ニモ取替ヘキガ多ク見ヘタリ、是ハ如何ト判テアリシニ川上久國對  
テ吉平若伯九州ヲ取ラレ、六ヶ國ニ分ケテオケル小トモ、大國由征ノ後當ニテ  
ニ備米ケンバ城下ハ勿論、一町ニ管ルシ地ナクハ、其以前ヨリノ諸外城ニ差置  
面々懸業トテシテ維持サセシニ、元初城府ノ命アリシ時斯クハ、越前守  
其節城山迄ニ變テ任ケレトモ、其後ニテハ、甚多田冠ニ始メレバ、其後ニ  
タリト申上ラレニ依テ信段アリシトナリ、事ハ久國ノ日記ニ出タリ、

(以下題記) 一伊勢ノ南川神邊カ者國散來城、  
野中兼山ハ土佐候ノ上天元ニテ經濟地運ニ及ス、長谷部元親ノ遺至、モニ山  
地ヲ分テ与ヘ西乃々備コ、テ許シテ耕心トス、一箱ニ五ノ人トノ御士ノ住ス  
ル風アリ今ニ百年正月十日、日候ノ前ニ出テ下古ヲ若シ、思ヒ乘テ下古、春  
カ経路録ニ土州薩州ニ歸テ古ノ兵馬ノ取ニシテナハリトイフハ此事アリ、  
其ヨリ尚世モ跡業立ニ成リ、追々地頭モ掛持ニ仰付ラレ、ユル令ハ  
島・長島ニノミ移地頭ハ、浪リヲシ、道公ノ御代記ニ據聞諸所ノ地  
頭職ヲ家臣等ニ命スルハ或ハ忠節軍功ヲ賞シ、或ハ功多ク家做ナル者ニ  
ル者ノニ孫ナドヲ泊賞シテ稱軍功ヲ勵シメ、或ハ功多ク家做ナル者ニ  
ハ其小地ヲ扱ヒ、何レモ其所ノ城并ニ城下ノ士ト知行ノシ預世キ其始  
テ入部スルニハ必ス古法ヲ守テ、部下ノ士ヲ將トシ先ツ其城ノ官跡ヲ  
受取、其後トモ申付、今モ左様ノ地頭百十餘ヶ所コトナリ、頼朝公  
院岡ニ地頭ヲ置レシ古例トナシ伝ケルルルニ見ヘタリ、此等ニ拠レハ御  
手持ノ城柱モ只ニ城ヲ預ラル地頭代官ナド兼務ニテ、所下サレ切ノ城  
主ニハ非ルベシ、

三保高城ニ新納越後守

按ニ新納氏別族越後守忠泰ナラン、忠泰ノ父ヲ越前郎久頼ト云ヘリ、  
嫡家ニ、廿越後守実久ノ適子ナレトモ故アリ父ノ後ヲ留テ、忠泰ニ初メ  
僧タリシヲ永八年、越前公命シテ法俗ヤシメ、十郎忠泰ト号シ、三  
保院高城地頭職ヲ授ラレ、築地六十町ヲ賜テ文明元年己丑十二月六日  
享年八十一ニテ卒シ、子則部少輔忠親嗣キ、亦父ノ任ヲ襲テ高城ニ地  
頭タリト譜ニ見ヘタリ、左アレバ此口午ハ忠親ノ時ニシテ忠泰ハ則部

親、六年ノ後ニ當レリ、忠親父ノ稱ヲ襲キ、越後守ト改ルニ非レハ  
父子任ヨ直スルニヨテ伝聞ノ誤ナラン、此事ヲ山野安房守誠信ガ永正  
十六年九月書シテ新納越後守殿ニ進ラセシ文ニ庄内三保之内六十町  
御給儀云三保、高城東五百町之衆頭ニ御定候ナリ、是ハ誰モ々々御存  
知ノ前ニ候云々見ニタリ、然ラレバハ御手持ノ城柱ニ列セリ、夫ヲ譜  
ニ地頭ト言キシハ其ハ、職ニテ忠親ノ如シハ地頭、唱ハル事ハナカリ  
シカド、後人追テ書スルニ時ノ職名ニ從ヘルニソアラン、蓋此頃守護  
ヲ御内ニ抑ヨリ居タルモノマダ地頭職ト仰付ラレ事ハ無カリシト見  
ヘタリ、下章ノ宮丸氏ヲ御代官ト書ケル旨トモ併考ベシ、譜ハ御手持  
ノ詳ニ詳ナリ、三保ハ龍巻ニ注セリ、高城ハ諸郡ニ在リ、又此甲午

ヨリ四年日文明九年丁酉、岩坂重高年代記ハ、七月四日三保高城御請取  
八月六日、祐義様松園様、三保ニ御越候ト卷加賀守が年代記ニ見ヘ  
レバ、此時伊東領ト爲リシニヤ、去レド程ナク取返シケン、明應四  
年乙卯三保並家へ參テ同記ニ見タリ、此時又伊東ニ属ケルカ忠親此頃  
年ノ間ニハ別出ニ移レルナラン、伊東カ事ハ國衆ノ列ニ出タリ、

末吉ニ宮丸  
按ニ榊山氏ニ代安芸守教宗ノ第三子宮丸三郎太郎知教トテ七十五歳ニ  
テ歿シ法号直嚴久澄、云人見ヘレバ此ナラン、寛正六年二月、節山公  
孫貞祐翁ノ女ヲ娶ラセ三時ノ御役職ニ御廻ハ宮丸殿、御與寄ノ右ハ宮  
丸太郎三郎殿ト見ヘ、其ヨリ九年日比甲午ニテ其翌年ニハ又島津之禰  
荷之御邊宮、文明七年乙未八月二十一日、武久公御代官ニ宮丸殿孫子  
之鶴丸殿御警取トシテ類姓諸事取テサレ候ト見ヘタリ、此ニ末吉仁宮  
屋宮丸公局圖、享徳五年、軍糧以安

丸、職マシハ此御代官ニ設ニテ即ニ郡太郎知教ヲ指セルナルベシ、  
御舟載渡御船不出意花江津津是者船頭御舟知得月時時  
太郎三郎殿トハ其ニテ宮丸テヲ父ニモ当ルナラン、此甲午ニハ御  
手持ノ城柱ニ列シ、翌年ハ御代官ト記セシヲミテ當時イマダ地頭ノ僭  
号御内タル家ニハ非サリシコト觀ツベシ、説ハ御手持ノマニ云オキ  
メ、末吉ハ隅ノ噺帳那ニ在リ、宮丸ハ諸郡郡之城ノ今ハ村名ナリ、

旧ハ益丸ト云十二町ノ村トナシ、官丸譜ニ見ヘタリ、其先足利義康ヨ  
リ出ツ、義康三男義隆其次男山邊江守義純、其子守野守泰重、其  
男久木崎藏人國房テフモノ、徳公ノ封ニ就キマスニ從テ島津ノ御所  
ニ仕ヘ奉リ、栄城八町八段ヲ北郷院ノ益丸ニ賜ト云ヘリ、其子益丸六  
郎右衛門國盛ガ時益丸十二町ヲ知行シ改テ官丸ト号ス、其子益丸六郎  
右衛門道隆、其子六郎五郎道隆、其子官丸藏人彦理、幼字六郎一女子アリ、  
北郷資忠ニ嫁ス、相庭栖尾此ナリ、他男子無シ、因テ益丸十二町ヲ婿  
ノ資忠ニ界テ、是ニ於テ資忠城ヲ益丸ニ築キテ郡城ト号シ北ニ居リ、  
寺ヲ益丸ニ建テ道時ガ菩提所トス、今ニ官丸村ニ在ル熱金寺此トナシ  
見ヘタリ、彼官丸知教ハ樺山吉久ノ孫ナリ、吉久ハ乃テ資忠ノ次子ナ  
レバ道時ガ外孫ナラン、左アルニ因テ後岡ニモ為リ、家号ヲ官丸、  
抑又官丸官丸ニ食ムニ因テ別ニ北ヲ氏ニスルカ、其ヨリ後樺山長久ノ  
二男ニ官丸次郎太郎久形ト云野之三谷ニ散死シタル人ナド玄佐自記  
大文ニ年月一八日德氏官丸ト云公当小敏、之儀俱依高僧之  
ニ出タリ、永正十七年七月朔日、東尹執務岡ヲ改時カ、或ハ其弟中務少輔久任モ官丸ヲ氏ニシタ  
ルト譜ニ見ヘタリ、然トモ長久ハ康正二年ニ生シ此中ハ一九歳ナ  
高孫權高聞筆書歌歌出高孫權明神十九日佳節池采花飲酌付、五道樂ニルヘレハ  
レバ其三男ノ久形ニシテハ孫子ト云嗣ニ合ザルベシ、去リテ前ニ引ク  
藤氏中務久任ハ天文五年九月十八日死セシナラン、

寛正六年ノ役賦トハ斯ナシ、  
嶋津田政立久様從山東御前迎之御役人御運者官丸殿御輿寄左末弘十  
郎四郎殿石官丸太郎三郎殿、松明役左長野助五郎方右同下代松丸、  
御中間一人、御侍女房、新納十郎殿御内方ニ而候、御宿ニ而御返迎  
之時御酌新納十郎殿、御加同安丸、御包丁人中冬方秋原方、御視  
儀、御在所ハ鍋戸上御城ニ而候、  
島津忠國侍安ノ御聲也、島津立久様幾ノ御聲也、島津貞治侍治ノ御聲也、  
寛正六年二月廿九日  
三六如此、相良殿新納殿并祐ノ御聲也、  
按ニ伊賀譜天和守祐亮、応永十六年己丑生文昭、次女野村腹島津修理亮立  
十七年卒、年七十七歳

右家會通撰入道兼朝吉ニアリ、  
久室、修理亮忠昌母上ト見ヘ、又式引物於鍋戸島津殿江御參會之時務  
合河内守仕ラレ候、又島津雜形ノ向來院權衛五社大明神ノ上梁文ニ邦  
君母氏采甲謹敬言記云、伏希薩隅口三州太守藤原朝臣武久命冥々延云  
々、專祈信女藤原氏甲寅身官安泰云々、其六ニ文明十年龍興成戊十二  
月十一日再誕、母權原三郎太郎臥純女ト見ヘ、又御系圖ニ忠昌公ハ寛正四年癸  
未五月二日誕生、母權原三郎太郎臥純女ト見ヘ、又御系圖ニ立久公  
後御夫人梶原引納女茂山妙方大并文昭十七年乙巳十一月十七日御正格  
（赤）一又村山那守格安妹島津立久公ハ前志元年壬子五月十三日卒年四  
十六、法名官徳院嚴權薩往壽ト申ケルコト前記譜ニ見ヘ、又安正五年辰辰ノ生レテ  
守祐亮ノ女此度無御三ト見ヘタリ、又此鏡堂妙円大姉ハ立久公前御夫  
人ト見ヘシ、忠昌公生レシ三ヒシ頃ハ上志才ニ当ル、  
人ニテ御法号ノミ依リ、御三人日御夫人ハ法号モ知レザリシニ寛政三  
年辛亥四月命アリ酒口守宿田、六月芳雲慈光大始ト拜撰シ御前座トモ  
筆雲守ニ安置シニヘリ、今此等ヲ觀テ彼御役賦ヲ按ニ御前座トハ御前  
札ノ事ニテ今ノ俗ニ御前ケト云ハ却テ云ヨ約メタル謠リニテ情入ニ云  
ヘルハ舊ナリヘシ、寛正六年ハ、立久公既ニ權原氏ヲ御夫人ニシマシ  
（赤）「前在龜泉苑ニハ大日那御系隨殿哉引妙才大姉、文昭一八年丙午二月  
七日逝去、依之御養母尾山野并高五右、御三人奉附アリシニ元和五年丙上ラ  
明十年市采ノ上梁文ニ邦君母氏、或ハ信女曠氏、甲寅身官ナド見ヘル  
ルト云々」

ハ比寛正六年、立久公三十四ノ御時迎玉ヒシ伊東祐義女ノ御前様ヲ云  
ヘルナラン、甲寅身官トハ永享六年ニ甲寅アリテ御父祐義二十六歳ノ  
時ニ当レバ其年野村氏ノ腹ニ生シ玉ヒシ御女ニテ三十二ニ成マス、二  
月御婚嫁アリシナラン左アリテ十年自此文明六年ノ四月、立久公御近  
去ニテ御婚嫁ニ成セラレ、又其年日四十五ニ成マス、文明十年市采ノ産  
荷ヲ再興シ云ヒ其時既ニ武久公、馬目公御幼名御代ナレバ、邦君母氏トモ昔  
ツラン、又伊東ハ藤原ナレバ藤氏女トモ昔キ、其年四十五歳ハ甲寅ノ  
御生レナンバ甲寅身官トモ昔キナルヘシ、若此邦君母氏ト云ヘルヲ  
弘純ノ女ニ當レバ平式女トコソ昔クベキ趣リナレ、弘純ノ系ハ桓武ヨ

り出タル平姓ナリ、寢原景季が弟平次左衛門景高六世孫弥次郎滋純薩  
州日根郡二下向シテ北原氏ヲ号シ、其子帯刀助純、三男兵庫、其子經  
蓋其叔父北原輝正治純<sup>兵衛</sup>、ガ女ヲ娶テ弘純ヲ生メリ、弘純男二人、  
女ハ島津立久内室、男ハ純信ト見ヘ、聞フル平氏ナレバ梓庭何ゾ藤氏  
女ト書ンヤ、況既ニ堀原氏、忠昌公ヲ生セラレ御三ツニ成マヌ時伊東  
氏ハ御年モ三十ヲ踰テ迎ヘラレ玉マ、御前様ト見ヘレバ前後分テ中  
サバ是コソ必ス後ノ御夫人ニテ、堀原氏ハ初ノ御中ナラン、然ラ世  
ノ廟堂要覽ナドニ後御夫人堀原云々載セシハ恐クハ伝写ノ誤ナラン、  
去レド又初御中ニスレバ堀原氏ハ寛正四年、忠昌公ヲ生マセル以後  
兩三年ノ間ニ御卒去カ御離別カニ非レハ同六年マテ伊東ヨリノ御前  
様御夫人并ニ立マヌ理リナリ、且近レマシタモ寛正六年ヨリ二十  
年後ナル交明十七年ニ御卒去ニテ御行塔ハ市來龍雲寺、御法号ハ茂山  
妙方大姉ト申上ルヨシ、要覽ニ載セアレバ亦勿ノ御中トモ中ガタシ  
故忠義ニ考ヘルハ堀原氏ハ必ス御内証様ニテ伊東氏ハ本御前様ニ迎ラ  
レ、忠昌公御三ツノ時ヨリ御養ヒ遊バシ御嫡母様ノ御成キナレバ杜権  
モ棟札ニ、邦君母氏ト書キ、伊東譜ニ島津立久室忠昌母上ト載セ、堀  
原系ニ立久内室ト書キタルナルベシ、若シ近テ御前氏トモ御夫人ニス  
レバ堀原氏御蛋世カ御離別カアリテコソ伊東氏ヲモ迎玉ヘレ、左アレ  
バ彼交明十七年御卒去アリシ茂山妙方大姉ト中マヌハ伊東ヨリ来玉ヒ  
シ、忠昌公ノ御嫡母様ノ御事ヲ申上ルニ非スヤ、交明十年ニハ市來ニ  
稻荷社ヲ御再興アツバシ、其棟札ニ邦君母氏藤氏ノ女ト見ヘルニモ合  
ヒ、其ヨリ七八年ノ御卒去ニテ御石若市来ニ在ケル事トモ所縁アルガ  
如シ、何レカ疑ヒヲ免レザレバ該ニ淺瀬ノ隱説ニテ斯ク妄評ヲ為スコ  
ト甚恐モ多カレド、今宮丸ガ事ヲ引クニ付ケ為難慮ナル胸ニ浮ビヌレ  
バ筆ニ隨テ此ニ註シ始ケ難者ニ問ノ梯ニトセリ、本弘上郎四郎ハ都城  
衆ナリ、長身助五郎ハ谷山ニ居テ慶徳公ニ親シ見ベタリ、皆下京ニ詳  
ナリ、新納十郎トハ高城城様越後守忠泰ガ元服シタル時、内田十郎ガ  
敵シタル幼字トナシ聞ツレトモ、寛正六年ハ忠泰七十七ノ時ニ當レバ  
既ニ越後守ニモ改メ、其子忠義父ノ幼名ヲ護キ此頃十郎ト云ヘルニヤ  
而安万丸トハ新納是久ノ子伊勢守友義ノ幼名ナルカ、後ハ忠泰ノ婿ニ  
テ其曾孫武藏守忠元ノ小子ヲ安万丸ト云ヘルニ執レバ曾祖マズ斯ゾ云ヒ

タルカ姑ク註シテ考ニ備ルナリ、  
牛山仁伊集院三郎左衛門尉  
按ニ伊集院氏別族上野介経久ガ初ノ稱ガリ、継久ハ嫡家正少弼頼久  
ノ第三子ニシテ七世大隅方勝久ノ弟ナリ、頼久ハ頼岳公翁王ノ所生ニ  
テ、大岳公ノ翁王ヲ慕テ、田家公ノ御姑婿ナレトモイマタ、公ノ生レ  
マセン十四年前宝徳二年陰謀露レケレバ、大岳公御婚ナガラモ為三師  
ヲ起シテ取伐シ玉ヒ遂ニ伊集院ヲ委テ即後ニ出奔シ子大隅守経久孫筑  
前守久雄ニ至テ傳珍セリ、九世家督此ガリ、然ルニ頼久出奔ノ後ハ頼  
久庶兄讚岐守久教テウノアリシニ其子刑部少輔忠昌トテ経久トハ庶兄  
弟ナルモノ河辺ノ西城ニ居ケルヲバ、大岳公ノ命ニテ宗職ヲ授ラレシ  
トナシ其譜ニ見ヘレド、此文明六年ハ彼宝徳ヨリ二十五年許後ナレバ  
ニヤ、河辺ハ薩州家ノ御城上下草ニ見ヘ、巨緒久ホド頭ハレタル伊集  
院氏更ニ見ヘネバ此頃ハ継久宗職ヲ司レルカ、其子延久ト俱ニ極トシ  
テ文明記ニ山ナリ、今大隅ノ伊集院氏則其後ニテ外ニ継久ノ叔父大用  
伊予守久隆<sup>大隅ノ村名ニ大曰ト</sup>、ガ子孫或ハ丸日堀内等ノ族類大隅ニ多ク  
又頼久二男二郎左衛門尉成久ノ子忠与一段トテ継久ノ姪孫モ牛屎院ニ  
無キガ如ク居任セシコトトモ古書ニアルモ皆継久ガ所縁ナルカ併セ觀  
ツバシ、伊集院<sup>五右衛門久元モ大隅ニ</sup>、牛山トハ薩州大隅ノ旧名トナシ云  
ヘシト則牛屎ノ別名ナルカ、伊佐郡牛山、羽月、山野、平泉、入山  
今ハ市、五ヶ所ノ總名ヲ牛屎院ト云ヘルトゾ、当院ハ抑大桑氏ノ属公  
領シテ牛屎ヲ氏ニスルカ、然ルニ平族安芸羽官基盛ノ子薩摩守信元  
或作  
信基、保元ノ軍功ヲ以テ牛屎郎答而院ニ封セラレ、其弟四子薩摩四郎元  
衡保元三年八月牛屎院ニ入部シ、大隅ニ居城シテ世々院司タルトゾ、  
然アルニ備レノトカヤ夢想ヲ受シトテ平姓ヲ改メ大桑ヲ冒シケルトナ  
ン、蓋シ其以前ノ領三天養氏ニテ其祀ヲ嗣ケルナラン、保元ヨリ二十  
五年許後ナル赤永元年京乱ノ頃彼從臣赤山菜始テ牛山ニ築テ院外ノ寇  
ニ備ヘケルヲハ相良ト表知ト兵ヲ合セテ牛山ノ城ヲ攻陷シ、其ヨリ院ヲ  
分テ領ストモ云ヘリ、相良三郎長頼カ四叔求麻郡人吉庄三入部シタルハ延久  
年中、アレバ此ニ云考永元年ヨリ十年許以後ノコト也

其時ノ事ニヤ、小城八郎重通ヲフモノ松領ノ地タリト鎌倉ニ訴ヘケレバ、壽水ヨリ五年目ニ当ル文治二年、頼朝公ヨリ嶋津庄惣地頭佐宗忠久公ノ御取次ニテ彼重通ヲ牛屎院ノ郡司、弁濟使ニ御付ラレケルニ、大養元光牛屎元祖ハ元衡、二成元三府元包、三成元重、四成元夫判官元永、五代元臣部丞元光、此ナリ、一説元衡ハ元光祖父ノ弟トアリ、然レハ元光ノ弟ニ当レリ、誤分誤アルヘシ。

曰ヨリ相伝ヘタル証據ヲ陳シケルニヤ、翌二年五月二日、頼朝公御下文ヲ以テ遂ニ言通ハ差免サレ、元光ニ牛屎院ヲ本ノ如クニ安堵サセ玉ヘリ、建久八年園田丁ニモ牛屎院二百六十町内永松二百四十町、院司元光ト見ヘシハ此ナリ、其ヨリ此後扇ノヨリ繁茂シ花北・山野・羽月等ニモ族ヲ分ケ、各其邑ニ因テ氏ニセリ、又保元年藤原ノ御家人ニ牛屎院地頭御代官、屎二郎左衛門入道、羽月右衛門入道、牛糞五郎左衛門、同兵衛入道ト多ク出タリ、又貞治二年、定山公訴狀ニ牛屎

近監高元左近、換ナド見ヘタリ、此等ヲ牛屎一族ト云ヒ皆大養姓ニテ肥永ノ季頃迄ハ盛レルニヤ、福昌寺ノ寮加保ニ牛屎越後守久元・羽丹豊後守元忠・山野因幡守元元ナド出タルニ文明二年聖業ノ書レシ恋翁公御伝ニ難儀合戦ニハ牛山・花北ナド又、大臣公御伝ニ征伐セラレ方々牛山一族悉ク其等ノ跡ヲ御所トシテ御一家御内ニ御配分トナト見ヘレバ継久ノ移テ牛山ニ居城セシハ此持ニテ、亦御代官ト為テ一城ヲ預ラレ外ニ割内衆若野加治木三郎四郎チフ士ナド差副ラレ、此日牛ノ頭高此ニ居城セシナルヘシ、志岐賀州カ所謂城下城衆ハ此ナラン

斯テ大正十五年併地知備後守重広、入道重廣、安九代祖、が要右ニ寄進シタル鈔口サ下牛屎院平和泉村藤原鹿田山之時ト記セシヲ慶長十五年岩崎与右衛門尉秀之、入道猶在永十八年妻及院地頭職ノ列ニ引向ハ左工部入道知行久保河内守、重高名高橋門下見ヘタリ、其子孫ナルニヤ、

那人権現ヲ再興シタル棟札ニハ藤州牛山院平出水村トナド、又元和二年十二月牛屎八幡ノ棟札ニモ藤州伊佐郡護国牛山院鎮守トモアレバ、牛山モ牛屎モ共ニ同院異名ナルコト、以テ知ルベシ、屎ト云フ嫌ヒテ山ノ字ニ易ヘシナラン、抑又大養氏ノ由来ヲ延氏録等ニ按ニ山城諸蕃漢ノ部ニテ奈息子ノ下註ニ出タリ、大養公宿禰ト祖ヲ同セリ、皆養ノ始皇が後ナリ、物知三・弓月王チフモノ十六代、応神帝十四年ニ來朝シ

表ヲ上ケ、更ニ國ニ歸リ百二十七県ノ殆殆ヲ率ヒテ版化シ、金銀玉帛種々ノ宝物等ヲ献リケレバ、帝コレヲ嘉シテ朝津國版ノ上ノ池ヲ賜テ此ニ居ラシム、男四人アリ、真徳三・普海王、官記云、浦雲三、雲師王、武成王ナリ、十七代仁徳帝ノ時普海王ニ姪ヲ波陀下賜ヘシ、此即養ノ宇ノ訓也其男ヲ養公酒ト云ヘリ、父普海王ニイマダ姪ヲ賜ハサル前ニ其徒劫略セラレテ酒ガ時キ見ニ在ル者僅十二一ツモ存セザルニ、二十二代雄略帝ノ皇后ハ幡樓姫ト申奉リ女工ヲ習ハルニヤ、帝ノ六年春三月皇后及ヒ諸妃ニ詔アリテ桑葉ヲ執チ蚕業ヲ勸メマセト在リケレバ酒其猶族ヲ率ヒテ此業ヲ弘メントヤ思ヒケン、勅使ヲモテ其徒ヲ招集ソコトヲ

雄略帝ニ懇ヘケレバ帝乃チ小子部雷ヲ使ニ遣ハシ大隅阿多華人等ヲ率ヒテ搜サレシニ養氏九十二部一万八千六百七人ヲ集得ラレ、遂ニ此等ヲ皆彼ノ酒ニ賜ケレバ、按ニ云平康字三年ノ紀ニ天下ノ諸姓ニ世ノ子ヲ若タルレバイマタ養公ト云ベカラス、且其父ニハ仁徳ノ時姪ヲ賜ヒ、子ハ養氏ノ時ニ詔トアルハ尚ニ世五六王ヲ歷タリ、恐クハ皆追昔若クハ世間ノ誤也、

其以前當代ニハ雅日女ノ弟、生曰、倭、高麗段ニマシノ、神ノ御服ヲ給ラセ玉ヒシトナン伝ヘンド、倭、高麗神帝ノ十四年ニ物智王等ガ求婚シテ献レル種々玉帛ホドニ纏綿ノ道日本ハナホ明ケザルニヤ、同三十七年ノ春使ヲ兵衛ニ遣ラレテ其業ニ工テル女ヲ求玉ヘルニ兒媛・弟媛・吳織・穴織トテ四人ノ女ヲ献リケレド此難略ノ御世マデハ養氏ノ糸ナド尚キ之クシテイマダ遍ク世ニハ行ハレザリケンニ帝ノ十四年其國ヨリ使ヲヤリテ漢綿・吳織及ヒ衣織ノ女ヲマタ献リケレハ此等ヲ師ニシテヤ習ヒケ

ン、交公酒其數多ノ養氏ヲ率ヒテ蚕ヲ養ヒ絹ヲ織リ多ク産ニ盛テ調ニ贈リ丘ノ如ク山ノ如ク朝廷ニ積タテ、貢進シケレバ、帝大ニ嘉シテ特ニ寵号ヲ萬都万佐ト賜ヘリ、是豈積テ和益アルノ義也トゾ、是ニ於テ諸ノ養氏ニ役シテ宮ノ側ニハ丈ノ大蔵ヲ構ヘテ其寶物ヲ納玉ヘリ、故ニ其地ヲ長谷朝倉宮ト云ヒ、始テ大蔵員ヲ置テ長官トハ為シ玉ヒ、同十六年ノ七月遂ニ養二宜キ田原ニ詔アリテ養ヲ殖立タルコトニ為レリ

皆養氏等カ功ナラン、斯テ養氏本ト一祖ナレトモ子孫等ノ居所ニ依リ仕業ニツキテ歟版ニ別レケルニ、按ニ版トハ族類ノコトナリ、今言界區ナシ、ニテ規類ノコトヲ版内ト云ヘリ我朝ノ古言

也、家采ヲ殿原ト云モ家ノ三郎徒ノコトナルヘシ、

四十五代聖武帝ノ天平二十年京畿ニ在ル者ニハ成改テ伊美吉ノ姓ヲ賜  
トテシ見ヘタリ、彼大隅阿多隼人等が一万八千六百余人ノ秦族ヲ捜シ

得タルト云ニ概シハ多クハ秦氏薩隅ノ間ニ繁行セシニヤ、正嘉元元年丁  
巳十二月隅州台明寺ノ鐘銘ニ大工高藤行則、同助行ト見ヘシモ猶然

ノ族裔ヲラン、養老天平ノ頃薩隼隼人、大隅隼人等ノ入朝シテ謝物ヲ  
貢シ、或ハ天平十八年ナドニハ口内國風雨共滄雲云損傷仍免賦庸トモ

或ハ天平神護二年ニハ日向・大隅・薩摩三國大風・桑麻皆尽、詔勿以  
榘戸調庸トモ、或ハ外從五位下秦忌寸養守ガ生龜五年ニ日向守ト為リ

同六年ニハ又外從五位下大隅秦忌寸三行ガ隼人王ト為リタル事トモ統  
日本紀ニ見ヘ、又大隅國ニ桑原郡或ハ肝屬郡ニ桑原ト云地其形名抄ニ

見ヘ、或ハ令ノ同分・清水・跡・横川・日当山等ノアタリヲ桑東郷・  
桑西郷ト云ヘルコトヲ調所ガ古書ニ見ヘ、或ハ同分ニ隼人城、正長二年

據リ記シタル古書ニ西ハ隼人城ナド又ハ玄佐臣曰ニ大永五年九月木田三河守親  
安ガ宮家ノ隼人城ヲ取タルコト見ヘ、延喜ニ天文四年十月本出萬葉歌大月お

ニ隼人ノ羅羅領トテ建タルヲ社宮アリ、彼ガ領シ居ケル時、清水ノ水城ヲ  
ルニ対シテ新築ト改タルトゾ、因テ社ヲ新築ニ在ル也、

ト云遺墟、或ハ會於郡ニ隼人塚、薩ニモ伊集院ニ桑畑郷ナド在レバ此  
等ヲ以テ大隅隼人ナドカ復集メテ秦氏等ノ裔ヲ養ヒ稱シ織タルテ事

ト其後大隅・薩摩等ノ風ニ至ヤ桑麻ノ事ヲ段々減セラレ、或ハ其秦氏  
ヤ薩摩ノ女ヲ始テ來タル時ノ御門ナル、心神帝ヲ此桑原郡ノ内村

漢切カ内村三丁内山田村、ニ記リ、且其末社ノ若宮ニ彼等ガ先程  
五丁ト桑西郷ノ内ニ見ヘタリ、ニ被陀ノ姓ヲ稱シタル、仁德帝ヲ祀リ三之社ニ隼人命・大隅命・桑原

薩隅口曰ハ齊ノ空國ト云ヤウナル何ノ彩色モ無キ山田ナリシニ斯ル實  
物ヲ仕開キ日本都郡其方ニテヨラ衣ヲ身ヲ煖メル事ニ成リテ友群世ニ

功ヲ建タル故ニヤ、訖云云ヘルガゴト高都万從ト云謂テ其意ニ至  
宇豆川ナドト云ヘル止則ニ名ノ連ルハ田部乃佐ニ縁レム名ナラズ、

意美古ト云姓ナド勅ヒ日向守ヤ隼人正ナドニモ立身シテ莫大ノ待遇ヲ  
蒙ルニ至ツラン、然アルニ其根端ヲ尋レバ櫻鏡、心神帝ノ原キ御仁庶

ニ本ツク事ナレバ幸彼等ガ其業ヲシ桑原ニ初ヨリ始社ノ在ケルニ又此  
帝遷ヲ附祭シタルナラン、左アリテ此ヲ八幡宮ト崇メラルハ八ト云詞

ハ變語ニ八百・八重・八邊屋、八百扉、八幡酒、八一島、八千代ナド  
只歌ガ上ニモ多ク數ヲ定メス云詞ニテ漢語ノ若クニ意ナルカ、幡トハ

一ニ幡トモ云ヒ、或ハ織ニモ作リ、宇ハ異レド音モ異ニ同シテ布帛ヲ  
作ル總名ヲ織ト云ヘル故ニ字典ニモ見ヘ、又和名ニテ織ルコトモ幡ノ

コトモ其工ヲ弘メル秦氏等ノ姓ヲ共ニ同ク被陀ト訓スレハ八百乃ノ織  
物ヲ世ニ広メマス宮ト云意ニテ區隔若ハ八幡宮ナド、尊号ヲ整リ尋レ

ルカ、山城國長土記ニ八百扉・八幡酒ナド、弥ノ字意ニ等ケル、古ノ  
句例ナラン、然ヲ延宮式ノ神名帳ニハ桑原郡一庵大鹿見鳥神社ト載ラ

レタリ、此ハ同社ノ神号ナルヘシ、旧社ハ尚其ヨリ昔シ神武ノ時トカ  
ヤ、夫ノ無ニ幡ニ入ラレ海神ノ宮マテユキモヒシ彦火々出見萬ヲ斯ナ

ン此ニ祠ラキニヒケルニ、二十代欽明帝ノ五年ニ八流ノ幡此社ノ宝殿  
ニ顯座マシマケルトテ八幡宮トハ崇メテ會ヲ祭ラレタルトナン石清

水善法寺ニ伝ケルト云ヘリ、左アルニモ抑、心神帝ニ斯ル所由アル秦  
氏等ガ裔事ニヤ供ヘシ、此桑原ニ始テ斯ク顯レ玉コソ誠ニ神明ノ不測

皇ニテマシムツラント人官手ヲ白テ覺リタランハ、左モアルベシ、  
左ヤウノ村訃無カリシ間ハ諸州ノ垂跡アリシコトハ胆ナレトモ、  
應神ノ垂跡トハ悟リ得ザル理ナリ、神ハ本測ラレザル理トハ云ヘトモ、  
明ハ迹ニ顯ハルノ名トナン聞ケリ、万代ノ今ニ賤男賤女マデモ身ニ斯ク織  
タル物ヲ衣セマス程御徳ノ迹ニ顯ハシ玉フコト孰カ此ヨリ明ナラン、  
故ニ此閉ラケキ御迹ヲ迎キテ八幡宮ト号ミ祀ルミ人々衣ヲ着ル程ノ者  
皆其本ニ報ル理ノ当然ナレバ古ノ人モ心ハ今ニ替フデ左コソ崇メツラ  
ント漫リニ理ヲ測リテ此ニ大察ガ事ヲ引ニツレ聊カ臆テ述テ識者ニ  
問ヲ俟ノミ斯アリケレバ牛屎氏ガ夢想ニヨテ大察氏ノ記ヲ嗣キタル事  
トモモ亦必ス其所因アルコトナルヘシ、河野通古ノ大察記ニハ大察姓  
牛屎氏・井手籠氏・羽月氏・柳木原氏ナト一家ニテ大察姓ハ森松福カ  
蓬萊ニ不死ノ藥ヲ求ントテ日本ニ來タルト中伝トアリ、惣督ニラカ事  
ヲ云ヘルナラヘシ、

串木野上河上守監

按ニ川上氏別族ニ茫濤監忠業ナリ、出塞ハ楠宗五世上野介兼久ノ第三  
子ニテ族ヲ分共セリ、文明十五年八月、円宮公御不例ノ領顯ニ笠掛ヲ  
新口宮ニ講セラレケル御手ノ中ニ島八トアル註ニ河上左近將監殿一男  
又八郎殿後者被任ト見タリ、此ニハ左近ト云フ諸シタルナルベシ、古  
昔ニ其例尤多シ、牛屎氏元新納久吉、伊地知重春、川上久因等ノ將監ヲ  
ハ時トシテ左近ヨリ等キ、或ハ略シテモ書ク類比ナリ、向木野ハ薩ノ  
日置郡ニ在リ、初メ承久ノ頃ハ成枝薩摩六郎忠直ガ二男向木野三郎平  
忠延チフモノ此ニ居城セリ、邑ニ因テ氏ニシツラン、其ヨリ世々傳領  
シタルカ五世行郎忠秋ニ至テ傳見ヘストナン、前ニ引ク聖業ノ志ニ市  
來・羽鳥ナドハ、節山公ノ時御成敗アリテ御料所ト為リシコト見ヘ、  
其御計策ハ市來筑前守久家カ別族代々河上村ニ地頭セシ河上山城守守  
家其邑ヲ以テ寛正二年五月、立久公ノ願巨河ト又八郎出塞・大寺彦左  
エ門幸親ニ因テ猶ニ公ニ降リケレバ公先ツ志塞・幸朝ヲシテ守家等ト  
盟ハセ、十一月二十四日公モ亦賜勅ヲ賜テ、同三年遂ニ久家ヲ城シ玉  
ヒ、卯月十五日守家ニハ十五町三段ヲ安堵セ玉ヘリ、其間ニ缺ル岸

木野ナレバ其時何レヘモ諫キテ御手等トヤ為リ、此忠業ヲ亦御代官ニ  
移サレ、其任所ノ内ニ三十町ヲ私邑ニ賜ヒ、中木野一田三町ノ地ナラハ  
此時迄ハ私邑ニ非ルカ、実久

ノ時一所ニ居ヘタル、市來ニハ大寺幸朝カ姪業守守高幸ナト移テレシナラ  
ヲハ遺書スル誤カ、北大寺ハ下章ニ出タリ、左アリテ市來ト同ク陥レバ寛正三年ナル  
ベケレト其年月ヲ知ラス、忠業男ハ掃部介兼久・左衛門尉忠盛・信濃  
守忠興等ニテ忠盛ハ次子ナレトモ出テ宗職ヲ承ラレ、正統八世朝久此  
ナリ、兼久父ノ後ヲ嗣キ、子上野介忠亮ヲ生メリ、相續テ串木野ニ居  
城セリ、忠亮ノ時三州大乱、薩州実久ニ屬シ市來ニ地頭タリ、後其地  
頭ヲ致シ念シ向木野ヲ一所ニ食メリ、此ハ蓋シ実久ヨリ封スル所ニテ  
其ヨリ先キハ御手持ニ御代官タルコト前註ノ例ナラン、斯テ実久新納  
常陸介忠吉ヲシテ市來ヲ治ラセケルニ、天文八年六月、大中公親將ト  
シテ攻伐セラル、時八月、忠亮陰ニ福島某ヲ使トシテ、公ニ内應シ賜  
ハ叔父忠興ガ謀トシテ我が婿男虎徳丸左近將監久兼及ニ藤原某ヲ率ヒ  
中木野ヲ以テ、公ニ降ラシメ、二十八日ノ曉忠亮實久ト串木野ヲ  
委テ別城ニ出奔セリ、因テ二十九日忠吉モ亦市來ヲ委テ奔レリ、忠盛ノ  
始メ串木野ニ移レル何シノ年カハ詳ナラネト此文明六年ヨリ天文八年  
ニ至テ年ヲ得ルコト六十六年、若シ果シテ寛正三年ニ移ラハ七十七、八  
年ハ居城アリシナラン、忠亮後ハ入道シテ意釣ト改メ、子久郎ト俱ニ  
大中公ニ國相タリ、久郎方忠誠ニ忠戦シテ殺タルハ世ノ知ル所ナリ、

一國之面々

按ニ鎌倉ノ世ト為テヨリ諸國ニ國人トテ幕府ノ御家人公方置臣十  
一位ノ一也、多カ  
リケリ、我ニ州ノ如キモ、得仏公イマタ封ヲ受マセン以前ヨリ諸郡司  
等ノ所々領知シ來レル家々少カラス、此等ヲ當時國衆若クハ國方ト唱  
ヘケルトゾ、又、公ノ國ニ就キ玉ヒシ以後モ命ヲ幕府ニ聽テ諸所ノ地  
頭職等ニ補セラレ封内ノ諸郡ニ御家人ヲ布モノ亦雜レリ、此等ノ子孫  
モ後ハ同シク國人ト云ヘルナラン、然ルニ志仁ノ亂ナド日本戰國ト為  
リシヨリ國々守護ヲ始メ國人等ミ、公方ノ命ヲ斥ヒス、大ハ小ヲ兼ネ  
強キハ弱キヲ掠メル世ニ成ケンバ、得仏公三州ノ守護シ玉フ時ヨリ代  
々陪庸シ來レル御家人共モ懸テ將軍ニ昵近ハ調ハス次第ニ守護ノ御内

ニ為タルト見得たり、左アレド此日午ノ頃愛ニ國ノ面々ト書キシハ當時マデハ全ク御内家ニ混雜ザルモ在ケルニヤ、鎌倉以來ノ流風ニテ其故家遺俗ト謂フヘシ、

藤原清

按ニ藤原氏十一世由羽守忠清ノ法爲茂清道繁居ニト見ヘレバ此ニ茂清ノ事ヲ御崎野之馬ニ才黒藤原茂清ヨリ池辺之清阿給事文和七年乙未八月廿日載セシハ予シテ其之爲ナルカ、但シ忠清ハ左馬介 忠清廿四年河平三日爲以後又ナラツケ候トアリ

ノ子ニテ永享三年辛亥六月廿二日卒スト譜ニ見ヘ、此ノ甲午ハ勇ニ没シテ四十四年ノ後ニ当レリ、左アレド永享七年十二月六日公ヨリ鹿屋ノ内ニ居見八町ヲ遷居出羽守殿ト宛馬タル文券モ見タリ、此出羽守ナドモ忠清ニ当リテ亦歿後五年メナレバ皆合ハス 忠清故父ニモ野久然ニ又忠清ノ子山城守重清ノ重ト茂モ同訓ナレバ譜リタルカトモ清ヘレド重清ハ天文五年丙申四月ニ卒スト見ヘ、其ヨリ逆ニ數ヘ父忠清ノ歿セシ永享三年八百六年ニ當リ弟ニ見ヘレバ重清百有餘歳ノ長寿ヲ保ツニ非レハ其生ルヤ父ノ存生ニ及バズ、此ヲ以テ彼ヲ觀レハ永享三年忠清ノ卒ハ延徳三年辛亥ナドノ誤ナラスヤ、左アレバ忠清モ重清モ父守中寿ヲ得テ此ニ載リシ茂清モ垣見ヲ拝領セラレシ出羽守モ同ク忠清ニ當リテ徳アルガ如シ、何レカ誤アレバ重テ識者ニ訪ヘシ、禮殺ハ大小二分レ二邑ナリ、佐多、田代、辺津賀ニ併セ此ヲ禮殺院五ヶ所ト云ヒ皆大隅郡ニ載ケリ、初メ建仁三年七月日幕府頼家公清ニ抄

（奉行問書）「頼家公神別」  
大隅國禮殺院地頭職事  
右件職事延知行之延、死去之由申然者以清重法印所任也、但論人出来之持者、召問何方可有左右也、前左衛門將殿仰宜如此、  
建仁三年七月三日  
大隅國禮殺院入道源御下文令下向發也、可令存其旨給候謹言、  
七月廿二日  
邊江守在判  
梅津左衛門殿  
（以上旧記雜録ニヨリ補正也）

弥行西ヲ本院ニ封ヤラレ始テ此ニ入部セリ、清重本姓ハ平氏小松重感ノ曾孫ニテ父ハ妙覚律師高清、文治元年十二月父覺ノ請ニテ死セザルコトヲ得、建久五年六月十五日 頼朝公ニ謁スト云ヘリ、其ヨリ十年日建仁三年ナリ、祖ハ中将統虎ト云ヘリ、維盛ハ保元二年丁丑、守永二年癸卯七月出都入水、二十七歳、其ヨリ十五年ハ建久八年ナルニ其六月國出シニ彌行西保四ノ内郡本三十町、丁別廿疋、建部清重所知、又佐次十町、丁別廿疋、賜大禮殿御下文建部清重知行之下アリ、又同九年三月大隅國法進御家人交名等ノ内國方ニ佐多新太夫高清或ハ禮受郡司ト見ユ、禮受郡司ハ清重ニテ新太夫高清モ皆建部姓ナルモノ也、二十一年建仁三年ナリ、高清ヲ維盛十六ノ子ニスレバ承安四年甲午生レノ筋ナリ、其ヨリ十三年ニシテ文治元年女覺ヨリ幼ケラシ、其ヨリ十年、建久五年ニシテ 頼朝公ニ謁シタル時ハ二十二歳ノ筋ナリ、其後遷居シテ清重ヲ生タルニスレバ建仁三年ハ清重十歳許ニ當ル、若シ尚清ヲ五六ノ子ナレバ十七歳ニ當ルナリ、然アルニ其封ニ就ケル建仁ヨリ五十七年前ナル久安三年ノ古昔ニ頼朝、頼朝ナリ、ムヘル建部氏既ニ此アタリヲ領シ居タルコト見ヘルトナン 此ハ大隅國通古ト今改ニ建部氏モ本ト平族ナリ、清重ノ爲ニハ叔祖父少將實盛 曾孫ノ子ニテ祖父維盛ノ孫伊平房時盛 兵部頭 國職カ子ト云者アリケリ、同ク重盛ノ曾孫ニテ清重トハ再從兄弟ノ屬キナリ、此人源氏ノ書ヲ讀ケ西獨ニ徒レル時近江ノ建部從三新實シケルニ其冥嗣ニヤ建久五年ニ居城シ、其アタリヲ領知スルコトヲ得ルトナン、

（行問書）  
建久五年四月十一日三子故小松内府孫ニ治盛國男六代建部白京部參向、亦帶高城上人文章書依也、備後國化進命之問、於國東夏不存巨惡知に於遂出家通世前之止配因備前司元中云々、五月十四日甲戌六代建部事有抄云、是可令止在國東之白息立治進部之時、故小松内府孫家被施若言、依不思召忘如云々、六月十五日口辰將宣招六代建部對面給、無異心者可許一寺別當 兼之由被仰云々、  
因テ佐多ヲ氏ニシテ建部ヲ以テ姓ニスト云ヘリ、其男太郎存盛父ノ後

ヨ嗣キ次子田代次郎兼盛其次を嗣慶三郎兼盛トテ各ニ邑ニ云テ族ヲ分  
ケ共ニ建部ヲ姓ニスト云ヘリ 三應二年二月十日ノ古書ニ  
たげんへのうちの女トアリ 存盛ノ弟ナル  
カ依多太郎久秀ト云モノ宇治川ニ戦死シテ其後ヲシトナン、左アルニ  
清重ハ若盛ガ祖父兼盛ノ兄ナル維盛ノ嫡孫ナレバ平社トソ名ノラルベ  
キニ、其子孫等爾後建部臣沙厨丸 建部臣沙厨丸  
立清ノ次ニアリ、建部臣沙厨丸  
小親古蹟記  
タ 建部重長 旧代三所傳説  
棟札ニアリ、 ナド、抑底流ニ所キアル姓ヲ嫡家トシテ代々  
冒セシ故ニヤ、貞享ノ頃ヨリ博古ノ徒ヲマシ、疑ヲ立テ、河野道行  
寛文十年三月、貞享ノ頃ヨリ博古ノ徒ヲマシ、疑ヲ立テ、河野道行  
享四年為大史、八御ヨリ肩タル建部氏ノ養子ニ清重ヲ為ツラント云、按ニ  
此説  
ナラハ清重子ヤ孫共佐多太 伊地知重実、白田國則 亦並ニ  
大史等ハ小松トハ比  
耶久秀カ後ヲモ稱ケルナ  
姓ナラント疑ヒ、上持伯耆 長祿久遠ノ臣  
博古ニ名アリ ハ種慶三郎兼盛ガ後タルニ疑  
ナシトナド云ヘルモ皆斯ル所ニヤ説アリケン、今季安ナド其文書譜系  
モ觀ザレバ実ニ官窺ノ淺見執レカ是ナルモ考ガタシ、去レド清盛ノ裔  
族凡ソ西藩ニ居ル者己ガ平姓ヲ改メ他姓ニ易ヘタルゾ多カリキ、一定ハ  
鎌倉ヨリ滅サレシ平家ナレバ必ス其時ニ誰ムコトノ有ケルニヤ、種子  
ノ元祖信基牛麻ノ元祖元衡モ皆清重ノ為ニハ族曾祖父基盛 種子ノ孫  
信基ノ孫  
トモニテ族故父ノ属ナリシニ信基ノ父行盛ハ種浦ニ歿死シテ其事誠ニ  
天下ニ隠シ無ク元衡モ正ク其姪ニテ俱ニ其親族ト云フヨリ時嫌ヘルニヤ  
信基ノ種子島ニ就ヤ前地頭大浦口ガ藤原姓ニ易ヘ元衡ノ牛麻院ニ就ケ  
ルモ夢想ナリトテ此モ姓ヲ大葉ト易タリ、然ルニ時説ノ紙父實盛モ種  
浦ニ歿死シ其兄維盛モ清重ノ祖父ナルニ此ハ邪智浦ニ歿死シ、何レモ  
同ク天下ニ名高キ亡滅ノ余胤ナレバ各其本姓ニテ鎌倉朝ニ立リヤ諱ツ  
ラン、共ニ姓氏ヲ易ヘテ清盛跡ノタルヲ世ニ隠タセシモ自然ノ時勢ニ  
テ人情ノ常ナルカ 頭腹公ハ池ノ尊尼ト其子頼盛ノ力ニテ死セザルコ  
トヲ得テヒシ恩誼モ最深カシケル、頼盛ノ弟翁サハ清盛流ノ流レト云  
ヲ嫌ヘルカ此モ中原姓有川ノ易ヘタリ、左アルニ幸ヒ清重ハ尋從弟ナ  
ル時盛ノ既ニ建部社ノ冥助ニテ遠キ西隅ニ頭ヲ能ク冠タル位例モアリ  
彼此ニ傲ヒテ建部トハ易ヘタルカ、何レモ庶民ノ時盛ニ所由アル姓

部ヲ清重ノ嫡流ヨリ言セルハ謂レアルニヤ、吉利ニ今尚レ建部社ノ  
伝ニ昔年清重江州ノ本姓ヲ小畷ヨリ紀リオケル子孫ヲ徒スニ及テ今  
ノ池ニ邊宮スミナン見ヘタリ、左アルニ抛レバ始メ建部社ニ祈誓シタ  
ルハ御清重ノ事ナリシヲ時盛ノ事ニ後世伝聞ヲ誤ルガ、五ニ再從兄弟  
ノ事ナレバ其各采邑ニ就クモ手ヲ携ルニ非スバ左程マク年尾モ遠カラ  
シ、斯テ久安三年ノ古書ニ出タル頼親等既ニ建部氏タル明證アラバ清  
重モ時盛モ共ニ其以前領主ノ姓ニ易ヘタルナルベシ、左アレバ建部社  
ノ件モ前領主ノ事ヲ誤ルカ、通古ガ小松殿ノ孫清重ヲ建部氏ノ養子ニ  
シツラント云ヘルコトトモ是ニ近カラシ、大概種子島ノ藤原牛麻ノ大  
葉、有川ノ中原等モ皆此輩等ノ建部ニ改タルト謂シ例ナラン、重テ  
識者ニ訪テ研尋スヘシ、去テ種慶氏ノ古例ニ從レルハ清重ヨリ十七代  
安共守彦頼ノ時 世清コリ數ヘレ  
バ七代ニ當リ ニテ文祿四年九月ノ事トナン、建仁ヨ  
リ文祿ハ三十九四年、然シテ始テ大朝ノ命ニテ宗門ヲ去リ文祿ヨリ  
文政丙戌マテ二百三十二年前後通シテ六百二十五年初メ池ノ禪尼放ヒ  
テ頼盛ト小松三盛ト切ニ清盛ヲ諱テ 頼朝公ノ死罪ヲ救免タルニ因テ  
公表モ今斯ク日出タウ盛ヘマシニツノ國ヲモ知シメタリ、然ルニ重盛  
ノ名胤トテ斯ク永ク歷々トシテ滅白ヲ伝ヘテ數ニ小松ニ復シ、且頼盛  
ノ裔胤ニモ伊勢氏ナド同ク奉藩ニ感著スルコト云ニ華屋廟ノ彼等ガ陰  
徳ニ陽報シ玉ヘルニヤ、先史ノ疑ヒハ姑ク置ク、重盛等ノ斯ニ大夫ノ  
祭ヲ享ルモ亦天ナリト謂ヘシ、況此又明中ヨリ種慶ヲ國人ノ第一ニ列  
シタル對レアル事ニヤ、  
同日代、  
按ニ氏代ニ亦五ヶ所ノ、ニテ前註ニ云ヘル時盛ガ次子族ヲ此ニ分ケ、  
田代次郎兼盛ト云此ナリ、建治二年石築地ノ城ニ田代上町御家人七郎  
助友ト見ヘ旧ハ同業ナリシニ応永中頼慶清平 世タリ 田代ヲ併セタルコ  
ト見ヘレハ彼等ニヤ失ヒケン、同十七年三月頼親公ヨリ田代五世別部  
少輔久助 或ハ久  
和ニ作 二本領トテ賜ヘリ、此代ヨリ守護ノ御内ニ為ツラン、  
同二十四年九月河邊ノ役ニ在二十五ニテ陣歿セリ、法号賢良、其ヨリ  
福昌寺奉加帳ニ田代建部助信ト見ヘタリ、□代耶前守清定カ初名ナル



カ、又永享七年六月宇兼代好久藤守ヨリ田代一巴下佐多ノ川口ト

川久ナリ三菜ヲ木領トテ田代肥前守ニ賜ヘル又券モ見タリ、此亦清元ニ當リテ

代ヲ相繼シテ治藤ト改ケルコト禮察見ユ、其好勝ノ時ニモ當ルカ

下齊御内ノ列ニ田代肥前入道ト生山アタリニ載リシモ同シナナラン、

左アリテ此ニ田代、戦セ、トニ茂薄アルヲモテ考レバ、茂薄カ領分

ニ同シト云略交ナラン、田代ノ社太兵衛氏ノ古書ヲ按ルニ長祿三年

州安土ニテ浄土宗ヲ口進宗ト宗論ヲ起シ、日蓮宗ノ僧日典トカ云モノ

種子島ニ請居シテ法華ノ教ヲ弘メ神社ノ疎カナル時キ上古益敷・種下

ニ忍熊童子和泉前代ノ子トナン云ヘル持ノ天降マシ、鳥數ヲ水ヲ擁

護シマセントノ託宣ニテ二本権現、船渡権現ト各鳥ニ崇メ置ケルニ、

寛正三年辛巳十二月十八日出代ノ江若ノ嶽ニ飛移セ、同二十一日ヨリ

二十七八日マテサマノ奇怪ノ事トモ多カリケレハ、時ノ若ナル禰

重亮ヲ以聞シケルニ、車虎コレヲ神トシ、兵木左門之命シテ二十九日

ハ風雨ナリ、翌三年壬午正月元日中ニ南雅現河原村ニ籠シケルト

ナン、其多記シタル古書ニ蓋虎公儀、或ハ殿様ナド、見ヘ、其ヨリ十二

年日此甲午ノ年ナルニ、口代肥前入道ハ牛山今ノアタリニ見ヘレバ此

頃ハ禰重領ナリシニヤ斯アリテ其後田代氏マテ宗邑ニ遷レルカ、打別

族ノ此ニ遊リテ禰氏ニ属シタルカ其ハ詳ナラヌト、若官在ノ棟和ニ

文明十七年十一月大且那建部頼清、大朝主建部頼安ナド、或ハ法光寺

ノ年代記ニ永正十三年丙子正月三日田代殿浄慶死ト見ヘタリ、嫡家

清定ノ子七代別部少輔清元ガ時ニ大兵ハ山レトニ頼清、無レバ此ニモ

合ハス、又頼清ト浄慶モ一人ナルカ詳ナラス、其ヨリ三河権現ノ棟和

ニ永祿八年十月大且那建部重長ト見ヘレバ、館領ヨリハ復タ禰重領タ

ルコト明ケシ、彼ノ家數ナル野間武藏守カ此ニ地頭シタルモ長領ノ事

ナルベシ、

肝付河内守内州兼忠周防介兼連口波見

披ニ兼忠ハ二代兼元ノ長子ニテ肝付氏十二代ナリ、兼元ハ長次ニニテ

十二代ナリ、兼忠長男ヲ左衛門佐四郎ト云フ父ニ背ケルコト見出ル

三月、日弟兼忠ヨリ攻ラレテ穴城ヲ尚奔セリ、是ヲ以テ兼連ノ嗣ニ

立テ父子此處高直木城、富山、野條、宮下、柳龍沢ナド併領ナシニヤ

下章ニ此等ヲ肝付分ト載セタリ、文明十二年八月二十七日始皇若宮八

幡ノ棟丸ニ大且那河内守伴朝臣沙弥兼忠、大庭主周防守伴朝臣兼連並

金三郎丸ナリ見ヘタリ、其ヨリ兼忠何レノ年ニヤ、七十九歳ニテ歿シ

然考終兼忠ト譜ニ出タリ、肝付ハ大隅ノ郡名ニテ高直ノ内之浦・串

良・鹿屋・始良・大始良・高良・百引ハケ外城此ニ載ケリ、然ニ鹿屋

アタリニツキ居タル新城新水ヲバ買交七年島津又助忠清ノ一所ニ賜ヒ

大始良ノ木谷村ヲ保九年高直周防久備ノ一所ニ賜ヒ此ヲ兼貞本郡

付ラレ令ハ河内ヲ拾ケ郷ニ賜レリ、初メ長元九年九月九日元祖兼貞本郡

ニ封セラレ代々郡司ニテ一説少時善八代伴左衛門兼後肝付ハケ外城ヲ領

得仏公長ニ賜キマス文治ヨリ百五十年前ヨリ高山ノ本城ニ居城セリ、

令其遺遺トテ山ノ城ト唱ヘ新留村ニアリ、其河内ヲ本城ト云ハルトツ

兼連ガ子河内兼久三郎丸イマタ王業ノ時十族臣等級キテ守護方

ニ内応シ郡中イト記レケレバ文明十九年二月二十六日二月二十五日兼

久高直ヲ委テ新納忠政ノ臣ニ出奔セリ、去レド其年ノ九月二十二日忠

政遂ニ兼久ヲ本邑ニ復ス、其ヨリ永正三年八月、同室公自ら將トシテ

高山ヲ討玉ヘルニ忠政兵ヲ差シテ兼久ヲ援ケタルコトトモ前ニ見ヘタ

リ、其孫郎河内守兼連入道省鈞ニテ梅橋君ノ翁主於南君ヲ承セリ、

然ルニ省鈞、伊集院孤舟大自公、善カラス、嘗テ彼ガ事ヲ 公ニ議シ

シタルニ 公用ヒ玉ハス、孤舟因テ省鈞ヲ患ムニヤ 公等宴飲ノ時彼

ガ老臣藥丸領下鶴舞ノ戯レヨリ竹筒遂ニ事ヲ放リ、永祿四年其子左

馬頭良兼、邑ヲ以テ公ニ假キタリ、初メ省鈞ガ女ハ禰重領ノ近太夫良長

ニ嫁シ重長ノ姑一人ハ 大翁公ノ御夫人ニテ又三郎忠長若ヲ生セラレ

次モハ伊集院上總介重興ニ嫁シテ三郎九郎重臣入道ヲ生メリ、又伊東

修理亮義祐ノ女ハ良兼ガ妻ニテ其女ハ重昌ニ嫁シ其頭忠良ハ義祐ヲ頼

テ河州原ニ居玉ヒ、彼是ト縁アルニヤ、義祐・重良・重長等皆省鈞

ニ与党シ、各其臣兵ヲ合セテ牛根・廻・竹成・恒吉・安樂・松山・救

仁院・志有志・福島等ノ地ヲ奪食シテ大ニ寇ヲ公室ニ為セリ、左レド  
本ト天人ニ遇ヘル我カ若ノ御仁徳ニ敵シタル天罪ニヤ、省釣千良兼モ  
幾程ナク病死シ病ハ良兼勇子モ無レバ三郎四郎兼亮成作兼晴、元龜二年  
梁文音口三三三付三尾子上其三三三賦ノ錄  
野四郎伴善忠也、ヲ兵奴ニ妻ハ之家督ニシタレト 井日記

モ斬ク弱レルニヤ、元龜三年九月 公子歳久小浜ノ城 伊地 ヲ攻縮サレ  
翌ル天正元年正月ハ北郷時久大ニ肝履師ヲ住吉原ニ討取リ同二月ハ重  
長モ覺ヲ離レ色ヲ以テ降リ其明正二月ハ午祝誠モ新納忠元等ニ攻拔レ  
賊等此レニ降易シ二月ハ重興モ色ヲ以テ降リ子重昌ヲシテ寔府ニ貫タ  
ラシメ、兼輔モ孤立シ難ク遂ニ市城・佐古・廻等ノ侵地ヲ上ケテ 公  
ニ降レリ、去レド尚竊ニ伊東方ニヤ党シケン一度モ 公ニ朝謁セス竟  
ニ自奔キ、其ヨリマタ者臣等省釣ガ季ノ子ニ母一トテ三歳ノ時ヨリ  
於南君ノ養ヒソダテ、妻住王道誓ガ養ニシシヒケルヲバ立テ家督ト  
シ兼輔ガ妻ヲ取テ此レニ妻ハセ、此レヨシテマタ、同三年十一月、寛ニ  
公ニ降ラシム、左馬助兼道此ナリ、是ニ於テ而西行悉ク肝履ヲ収公セ  
ラレ兼道ヲ阿多ニ遷サレ采地十二町ヲ賜ヒケリ、然アルニ其妻伊東氏  
兼輔トモ不和ナリシガ亦兼道トモ和ヤス、六ノ遠征ニ糧ヲ給ス、邑政  
治ラテ邑モ程ナク石上ラレ兼道モ尋テ陣歿シ家口落ノト衰微セリ、  
初メ墨祖兼行安和年中薩摩ノ國司ニ任ヤラレ始テ仲食上ノ下リシヨ  
リ六十余年ニシテ長元九年所城ノ郡司ト為リ、其レヨリ五百四十四年  
前後通シテ六百余年ニ当ル天正四年、遂ニ宗氏ヲ失ヘリ、内室公彼カ  
滅亡百年ハ越ヘント仰セラレシヨリハ六十九年ナリ、亦通シテ九十二  
年ニ当ル時兼道モ陣歿セリ、公ノ憤激遺盟ノ咎メニヤ、凡ソ興廢ノ因  
ハ必ス一朝一夕ニ非ス、仁ニシテ道ニ順ヘバ興リ暴ニシテ道ニ逆ヘバ  
亡ブ、慎ザルベケンヤ、同波見トハ高山ニ獄キタル補ナレバ同日代ノ  
類ニテ肝付領ニ同シト云コトカ、ノマダ詳ナラス、

真幸仁北原兼向又九郎立兼

按ニ北原モ亦此屬ノ別族ナリ、貴兼ハ八世長門守ニテ小字ハ又五郎ト  
ヘ云リ、立兼ハ其次子ナレト三長男又五郎寛兼罪ヲ父ニ得テ殺サレ、

飯野ノ杉水流村ニ同カ、立兼嗣子ニ立テ、九世ノ家督此ナリ、此頃飯  
野ノ大明神ハ此トカヤ、吉田・吉松・野尻・栗野ノ七ヶ外城ヲ併セ領セシ  
ニヤ、下章ニ比等ヲ北原持城ト載セタリ、真幸院ハ延喜式日向國ノ歌  
ニ真祈ト載セ、建久八年又曰テ諸県郡ノ内ニ真幸院三百廿町ト見ヘタ  
ルモノ此ナラン、説ハ上卷ニ詳ナリ、天正十六年御采印ニハ五百五十  
町真幸院ト見ヘタリ、本院ハ上古ヨリ、所謂隼人氏ト祖ヲ同フセシ日  
下部氏ノ族胤等代々郡司ヲシテ所ナリ得仏公封ニ就キマス元曆、文治  
ノ頃ナドハ真幸次郎草ヶ部年貞テフノ後裔真幸十郎重兼テフモノ居城  
セシトゾ、前件日向國ノ惣圖曰ヲ注進シタル權介等ノ死ニ臣下部重直  
ト見ヘタルモ此重兼ガ族胤ナラン、二世貞頼・三世貞能・四世貞範・  
五世貞幸、皆名 六世左衛門三郎貞房、此マテ諸ニ見ヘ、皆真幸部氏ニテ  
貞房ハ元弘三年 道徳公ノ時ナリト云ヘリ北原氏此ニ代リテ本流ニ耶  
司タルカ、世系ヲ按ニ肝履元祖兼貞ノ三男右兵衛佐兼善法名ヲ北原ノ  
別祖トシ、采ヲ木津ニ食ミ、世々飯野ニ居城ストナン見ヘタリ、コレ  
ヲ肝付譜ニ稱レハ兼貞三男二兼幸ト云ナシ、後貞トテ安樂氏ノ別祖ヲ  
系レリ、兼貞長男兼俊ノ二男兼綱テフモノ救二郷又ハ北原氏ヲ母スト  
見ヘ、又古城志ニハ 得仏公ノ時北原又太郎延兼テフモノ貞良ニ居城  
ストモ見ヘ、山田助采自記ニ串良ノ内北原ト云在所ナトトモアレバ何  
レニモ始ハ族ヲ串良ノ北原ニ分テ氏ニシタルハ疑アラシ、兼幸二世左  
馬頭兼向・三世右馬頭玄兼・四世左馬頭玄幸法名天定・五世周防守範

兼法名久 比時応永三年僧明窓 柏村人俗 姓田部氏  
建シ、或云、上古草部氏 田百町ヲ寄附ス、同五年馬關田三之宮ニ水田二  
段 門 寄進セシ時当進頭沙弥玄昌ナト見ヘレバ範兼ヨリ真幸ニ居タ  
ルハ明驗多シ、範兼ガ時相良祐頼ニ党シ彼ト事ヲ徳壽城ニ論シ、終ニ  
既テ俱ニ死タルトゾ、故ヲ以テ其子居坊守久兼梅テ 怨翁公ニ降リ兵  
ヲ、公ニ乞テ相良カ徒ヲ追出セリ、仍テ 公久兼ニ本院ヲ賜ヘルコト  
本ノ如シ、福昌寺奉加帳ニ北原周防守久兼・北原藤原久能テフモノナ  
ド見ヘタリ、梶原北原ナラハ平氏ナラン、藤原トハ疑ハシキモノ也、

公ノ幕府ニ朝セル時キ久兼國方下云ヲ以テ從テ左馬頭ニ任セラレタリ  
其子兼興其子即貴兼ニテ寛正四年癸未六月十五日癸卯入御留孫熊野  
三所權現ノ經口銘ニモ大臣那伴貴兼敬白ト見ヘ、又文明五年癸巳十一  
月二十四日飯野一宮宝殿上梁文ニ大臣那伴長門守伴貴兼並立兼、木島兼  
行白坂伴兼豊トアリ、其明年ハ則此中午也、十世民部少輔兼珍、水正  
八年辛未三月吉日飯野一宮早 上梁文ニ大臣那伴兼珍并色壽丸ト見ヘ  
タリ、十一世民部少輔久兼、太永四年甲申三月二十三日戊子飯野一宮  
文珠造宮ノ文ニ大臣那伴久兼并龜丸トナト見ヘタリ、十二世又八郎祐  
兼、天文十一年壬寅八月二十三日東霧島ヘ今度弓箭兼行兼和地事御  
神領ニ相定候、仍如件、北原祐兼判ト見ヘタル此也、十三世又八郎兼  
守、弘治二年丙辰十一月五日癸卯、壬子日堂告興ノ時、大臣那伴兼守ト見  
ヘタル此ナリ、兼守ハ伊東義祐ノ女婦 忠岐實業日記ニハ北原兼守ニテ一女  
降ハ此方ノ御始トアリ、 十一代久 兼子ヲ嘗見弟  
ヲ生ミ歿シテ嗣子ナシ、遺言シテ叔父民部少輔 兼三男 カ子ヲ嘗見弟  
ナレバ後嗣ト爲リ、然ニ幾クアラス、一女三四歳ニテ夭亡シケレバ親  
祐兼守ガ寡婦 義祐ノ娘 ヲ取テ再ヒ馬廻田右衛門督 馬廻田川北原ノ大門  
守ニ在リ 兼守トシテ、同村ニ東福城、護城アリ、伝ヘテ昔年北原右衛門督カ  
居城ト云トシ、五世彌兼弟又九郎此 兼三男 兼子ヲ嘗見弟  
ニ分異ス、同族五ニ行ハレシナラン、ニ妻ハセタリ、斯リケレバ右衛門督  
ト三山城上平良中務大輔伴兼賢ト謀テ民部少輔及ヒ高崎城主白坂上總  
介等ガ首トシテ一向宗ヲ信スルヲ懲テ永祿五年三戊二月頃ノ事トナシ  
民部父子ヲ殺シテ義祐ヲ招キタルニ北原領大ニ騷動シ日向ニ奔リ政廢  
ニ走テ出亡スル者多カリシトゾ、義祐尚トヒトシテ子兼益ト高原ニ附  
入りケレバ高原・高崎ハ云ニ及ハス、栗野・横川・藤等ノ衆悉ク高原  
ニ出仕セリ、是ニ於テ又下總介ヲ殺シ、謀ラレケレバ下總介ヲ居城  
高崎ヲ委テ榊山玄佐ノ領内大進ニ來奔セリ、時ニ 言明公尚於郡ニマ  
シマセバ玄佐ニ因テ 公ニ謁シ巨タランコトヲ約セリ、蹤地頭口坂佐  
渡守モ其ヨリ前 松齡公又既肥ニ在シテ危カリシ時玄佐顯形ニ以聞レ  
テ私邑辺川ヲ依渡守ニ界ヘテ伊東ガ黨ヲ離レサセケルニ、今ヤ嫡男  
与一左衛門同姓助左衛門等モ高原ヲ去テ歸系ケレバ佐渡守モ遂ニ下總

介ト向ク曾於郡地頭三原遠江重秋入道昌庵ニ因テ公ニ降リ、兵ヲ乞  
テ俱ニ崩城ヲ成シテ、斯チ玄佐・重秋等ト謀テ 大中公ニ上聞シケル  
ハ白坂一族ハ皆北原カ譜代ナリ、前ニ民部カ書セラル時キ又太郎兼親  
北原守子祖父ノ時キ政摩ニ自奔トモナリ、ハ政摩ニ出奔セシト聞ケハ白坂  
兼タハ民部カ子ニテ死ヲ返レ居タルカ、 兼親ニ出奔セシト聞ケハ白坂  
等カ為ニ和シ政摩ニ求メ、俱ニ兼親ヲ飯野ニ復シテ北原ノ宗祀ヲ奉シ  
メント白坂一族ニ説キケレバ大ニ感佩腹セリ、ソコテ竹於郡士木田民  
部左衛門盛親ヲ佐渡カ嫡男与一左衛門尉ニ副ヘテ徑ヲ横川・養刈敵地  
ノ山路ニ取リ、政摩ニ如キ真幸ノ騷擾ヲ告ケ、件ノ旨ヲ相長ト兼親ニ  
説キ、政摩若シカヲ數セハ雖ヨリ此方ハ取持ント云セケレバ相長モ兼  
親モ此ニ同意セリトテ面使還テ反命ス、其時又佐渡カ二男左近允ヲ巴  
兄ノ与一左衛門ニ引テ遣ラレシニ与一左衛門政摩喪ヲ以テ俱ニ馬廻田  
ヲ襲取レリ、時キ備滿地頭北原八郎右衛門尉等ヲ始トシテ兼野・吉  
田・馬廻田・吉松等ノ衆悉ク仰テ兼親ヲ迎ヘ岩肌ノ援ヲ乞ケレバ、其  
年ノ五月十日遂ニ兼親ヲ飯野ニ復シ、薩兵政摩衆ト兵ヲ合ハセ俱ニ援  
テ飯野ヲ攻ラセラル、是ニ於テ又玄佐下總介ヲシテ兼親及ヒ八郎右衛  
門等ニ説キ皆其高ヲ以テ 公室ニ降ラセタリ、然ルニ横川城ニ北原伊  
勢介、栗野ノ高路某等服セス、皆伊東ニ兵完セリ、去レト白坂下總  
介ニ栗野ニ入テ此ニ地頭シタルト横川固ク守テ降ラザリケレハ、二十八  
日 松齡公兵ヲ得ヒテ栗野ヲ筭シ、六月三日其將伊勢介ヲ斬テ遂ニ横  
川ヲ陥シ兼親大和守宣隆ニ賜ヒケリ、時キ玄佐マタ佐渡下總等カ為ニ  
謀リケルハ屬ニハ今相長モ兼親ヲ援レドヤガテ伊東ニ与シ真幸ヲ吞  
ハ必定ナリ、其時汝等何ノ讓ニテ再ヒ伊東ニ事シヤ、早ク往テ兼親ニ  
説キ栗野ヲ 公ニ致シ其力ニ頼テ堅ク飯野ヲ保レンニハ如シト云含メ  
ケレハ下總乃チ飯野ニ如キ、先ツ八郎右衛門尉ト本村石見守ニ件ノ旨  
ヲ諭シタルバ兼親復等ト栗野ニ來テ 公ニ謁シ、遂ニ栗野ヲ 公ニ獻  
シタリ、然ルニ松齡公主北原左兵衛尉ハ兼親ノ伯父ナリシカ、陰ニ 公  
ニ級キテ相長ト与覺シケレバ、須木地頭兼良越前守彼ノ相長ヲシテ伊  
東ニ和セシメ、陰ニ政摩衆ヲ古松ニ入レ、一時ニ並起テ薩衆ヲ敗リ然  
シテ俱ニ兼親ヲ援ント謀リケルヲ地下人來テ反ヲ告タリ、ソコテ其事

御紀アリケンバ飯野ヲ成リシ政麻策モ古松ノ左兵衛尉モ悉ク出奔セリ  
其ヨリ薩摩バカリニテ堅ク飯野等ヲ成リテ義親ヲ援ケラレシニ同六年  
癸亥二月甲寅來テ真幸ニ應シ、同五月十日癸巳伊京ノ將長合越解由左  
衛門ト政麻ノ將藤原左衛門ト兵ヲ合シ我カ大目神城飯野大目神ヲ取メ  
同十月二十四日乙亥ニモマタ來テ飯野ニ應シ、何レニモ義親ニテハ真  
幸ヲ保レカタクアリケレバ、遂ニ義親ヲ伊集院ノ神藏村ニ遷サレ、宗  
廟三十町ヲ賜ヒ、同七年 松齡公ヲ真幸ニ封セラシ、癸卯將ヒテ飯野  
ニ御徒リアリテ其ヨリ堅固ニ鎮成シ玉ヘリ、兼親後ニ蒲部介ト更メ神  
殿ニ歿ス其子ニモ当ルガ、天正十二年正月、伊地知駿河守時ハ石カ御  
年男セシ日記ニ北原彦次郎殿行出候、三番ニテ三藏參候トアレバ、  
其頃迄ハ一所持ニ列セシニヤ、神威ハ天正二行義親氏ヲ封セラシト  
ナン見ヘレバ其ヨリ他邑ニ移レルナラン、左アリテ何レノ時ニヤ落  
シケン、元禄八年伊地知重宗ノ秩父本田調書ニ北原東郷ナドモ不幸ニ  
テ御親式ニ罷出ス、殊更北原ハ思ノ外只今ハ諷訓仲左衛門兼親ナ 陪衆  
中ニ罷成候ト見ヘタリ、世トノ盛衰以テ想像ルベシ、是レ位ナシ、白  
坂下總等ガ一向宗ヲ信シテ臣トシテハ忠ヲ君ニ竭スノ道ヲ知ザルヨリ  
遂ニ斯ク旧家ヲ破リタリ、左アル故ニヤ、大中公ナド向實僧ノ邪宗ト  
三特ニ禁ザラレ、世明公ノ時キ南密僧ニ庇宅マテ賜ヒタレド 先科ノ  
御宗アリトテ程ナク有馬ノ様ニ迫カヘラレシ事ト并氏天正十一年二月  
ノ日記ニ見ヘタリ、然ルニ 神垣ノ天下ヲ定メラル、ニ及テモ亦同ク  
耶蘇ノ邪宗ハ禁セラレ、一向ハ勿沙汰アリシヲ聞ス、左アレド我が薩  
ハ旧城ノ偏南ニテ真人ノ時ヨリ抑一向ナル僻俗ト見ヘレバ、其ノ三斯  
ル一向ナル宗ナド禁マセテハ必ス党徒ヲ与ミ其宗ニ入ラザル者ハ益人  
ト惡テ詔ヲ招キ留マシメ至ルコト北原等ガ如キ例トモマノアタリ知  
リ玉ヘレバ、果ハ下總等ガ一向宗ヲ信セシヨリ崩シテコソ真幸モ御手  
ニ入リタレド、今ニ至テ此宗ヲ御禁制アリシハ誠ニ明君ノ鑑ニテ所謂  
閻ハ利ヲ以テ利トセス、義ヲ以テ利トストナン云ヘルニモ適ヒ侍ラン  
貴明公ノ南密僧ヲ有志ニ逐ハレシヨリ六十年ナラスシテ亦有馬ト天章  
ニ遂ニ一揆ヲ起セリ、斯ク邪宗ヲ大禁ニ戒メテ社ノ君モ君ナリ、世ニ

菱刈仁氏重

臣タレバ下總等ガ當然ト服従シテ 公室ニ忠ニシモ亦實ナルカ、  
該ニ氏重ノ菱刈家十一代民部大輔ニテ幼字ハ孫三郎ト云、平世三河守  
元隆ノ第三子也、立テ父ノ後ヲ嗣ケリ、惣翁公ノ國名伊地知總兼介季  
豐入道カ女ヲ娶ニテ子ハ孫三郎忠氏ト云ヒ、父字文明三等ニ山タリ、菱刈  
ハ仁陽州ノ一為ナリシニ 四十六代孝謙帝ノ天平勝三七年五月、五大  
關國菱刈河津浮九百三十人言ス欲建邪家許之下見ヘレバ菱刈トハ益シ  
上右菱類ヲ生スル池ヤ沼ナドノ多カル地ナルニ由テ名ヲ得ツラン、新  
銅六年ノ紀ナド考併スヘシ、斯テ 建隆帝二ノ時大隅進人等ガ詔ノ  
奏氏、方八千六百七十人ヲ獲得タト云事トモ姓氏録ニモ見ヘ、又此述リ  
ヲ領シ居タル牛屎一族ヲガ野懸ナリトテ皆大養三ヲ冒シタルニ參ヘ觀  
ンバ、伎藝兵ヲガ類ノ狼入トモ寄々密殺リテ村ヲ為シ、是ニ至テ遂ニ  
斯ク一邪ニ願建タルト見ヘタリ、去レバ此ニ始テ郡司タルハ大養氏ニ  
疑ハシ、又古シ菱刈野ト云ヘル所モ在リシニヤ、繪摺集ニ斯クシ、  
大隅薩摩の中ニひしかりのいまハちかうとよみしに  
春の駒をうらちいで、みれハ秋さひしかりの今はちかく有じと  
また同じたいを  
たかろひしいへはいつくと道とひしかりのはちかくならずや  
左アリテ何ノ頃ヨリカ時部二郎藤原重能テソモ本陣ヲ領シタルニ菱  
刈氏ノ始祖進七判官重妙、保元元年丙子十一月朔日、後白河寺ノ院宣  
ヲ奉テ菱刈方面院七百余町ニ討セラレ、其ヨリ三十八年、建久四年癸  
丑十二月、賴朝公ノ御下文ニテ本領ヲ安堵シ、弟彦四郎重重ト京ヲ殆  
シ翌五年甲寅正月十二日始テ人部シ大口大目村ニ稱レル也此二月下總正對ヲハ保元元年ヨリ二  
年ノ事トシ、然シテ二年ノ八月宇佐宮ヲ此ニ崩ル、見ヘタリ、口中重明等ハ、  
建久四年トス、爾來世々菱刈、太長而翁ヲ領シテ太良院平トモ作  
今此ニ從サリ、爾來世々菱刈、太長而翁ヲ領シテ太良院ルトモ作  
城シ菱刈ヲ以テ氏トナリ、區テ今ニ菱刈ノ本城ト云、郷名トハ為リテ  
南津村ニ其遺墟アルトナン、而院トハ本城、岡越・湯尾・曾木ヲ太良  
院ト云、町菱刈郡比ナリ、大口・入山今ノ羽月・平泉・山野ヲ牛屎院ト  
止

云フ、此ハ薩州伊佐郡ノ内ニテ其餘ハ皆都答院ニ隸ケリ、重妙姓ハ藤原氏、高社ハ國臣大政大臣忠實公、曾祖ハ宇治左大臣賴長、公祖ハ左中將隆長、父ハ三位中將隆重ナリト云ヘリ、重妙ノ玄孫重信ノ子彦太郎篤重ハ尊氏ニ屬シ軍功アリ、建武四年卯月十八日菱刈院半分地頭職ニ補セララル、其孫安芸守久隆カ時始テ、公室ニ臣トシ事ルカ、応永六年十二月三日、惣翁公久隆ニ采邑十五町ヲ救仁郷ノ内ニ賜ヒ、同七年二月十日マタ横川ノ上村ヲ賜ヒ、同九年八月十六日、義天公亦久隆ニ横川院ヲ賜ヘリ、久隆ノ子ハ三河守元隆也、同十三年十月二十八日、惣翁公元隆ニ御書ヲ賜テ本領菱刈院ヲ安堵セリ、永享七年十月二十八日守義代好久モ亦コレニ書ヲ与ヘ、本院ヲ安堵セシム、元隆ノ子ハ即此氏重ナリ、福昌寺壽加銀ニ奉加馬一疋代五貫文、菱刈藤原久家、壽加馬一疋代三貫、菱刈之分藤原朝熊丸ト見ヘタルハ元隆・氏重ノ父子ニモ当ルカ詳ナラス氏重ノ玄孫相模守重勝入道天若此時相良ニ覺シテ公室ニ叛キ、享祿二年己丑九月大口城主島津出羽守忠明 公室ヲ久ノ孫ニテ大室也 代ナリ、明應八年、丹波公忠明ヲ梅北ヨリ大口ニ徙セリ、相良菱刈方ニ備ヘ城下ニ百年十町ヲ賜テ此ニ居城セシム、号シテ大口殿ト云ヘリ、蓋前ニ見ベシ伊集院氏ノノ子次郎四郎明久ヲ羽月大島村ニ斬レリ、翌三年七月二十七日天岩マタ相良ガ兵ト合セ諏訪ノ社事ニ紛レ入テ大口城ヲ襲ヒ、城主忠明ヲ殺シテ遂ニ大口城ヲ拔ケリ、其子大和守重猛、其子ナルカ左馬權頭重豊 十五代 浦生茂清ヲ援ケ、大中公ノ師ヲ拒キ、弘治三年四月蒲生ニ隨歿セリ、其ヨリ又肝胸ガ叛ケル頃重猛北原領ヲ公ニ請ヘルニヤ永祿四年十月二日、公ヨリ重猛ニ粟野除百二十町ヲ賜ヘリ、此ハ省鈔ニ覺セザラシメンガ為メナラン、然アルニ同五年五月北原兼親眞幸ヲ以テ公ニ降レル時、官路某粟野ニ抛テ横川ノ北原伊勢介ト伊東ニ覺シ降ラザリケレバ公其時同城ヲ定ラレ、粟野ハ公領トナシ、重猛ニハ横川ヲノミ賜ヒタルニ、此ヲヤ不足ト恨ケン、同九年十月、公前ヲ帥ヒテ三ノ山城ヲ攻ラル時、重猛陰ニ伊東ニ覺シ預シメ事ヲ三山ニ泄セリ、女佐兼兼ノ 故ニ、公ノ師敗績シテ、松輪公ヲ始メ御手ヲ負ハセラレ甚死傷スル者多カリケレバ、菱刈方ヨリ横川ノ町口ニテ竊ニ創キ

還ル者ヲ点檢セシトテ反状モハラ世ニ発覺セリ、斯ク、公ノ恩ニ負ケル故ニ、天岩及ヒ重猛モ幾クアラス疾死ニテ、重猛ノ子鶴千代、名ハ重広小字兼三郎長部少輔ト稱シ河八伴右衛門ト云ヘリ、トテ僅五歳ナリシヲ旁族左兵衛尉重住コレニ輔佐シテ菱刈ノ家督ニ立テ津山玄佐ニ因テ侵地ヲ致シ以テ、公室ニ降ランゴトヲ請ヘリ、折シモ他ノ老臣等一致セス、猶事ヲ三山 伊東ニ領也 謀リシニ、其嶽栗野ノ山徑ニ遣ケルトテ邑人取テ、公ニ聞ス、公因テ謀ヲ廻ラシ置ニ三山ヲ討テ中ニ声シ、同十年八月親ヲ飯野ニ如キ玉ヒ、十一月二十三日前却テ般若寺越ノ險路ヲ歴テ不意ニ菱刈方ノ馬越城ヲ攻伐セラレ、城將井手籠父ヲ始メ二百余級 百令戰ニハ五ノ斬テ 其口遂ニ城ヲ陷サレ、公等親ヲ兵ヲ將ヒテ成ラセ下フ、菱刈家此ヲ畏テ二十四日ノ夜曾木・平良 本城ナリ・湯尾・羽月・山野・平泉・吉木・一山ノ八城ヲ委テ皆大口城ニ圍リ、鶴千代ノ叔父菱刈大膳亮隆秋 或ハ彈正トモ作レリ ヲ成將トシテ此ヲ保テリ、時キ菱刈民部丞赤横川ヲ、公ニ殺シテ躬ハ大口ニ奔レリ、是ニ於テ二十五日、公等ハ馬越ヲ本營ニアソバシ、將卒ヲ分遣テ本城・曾木・湯尾・一山ヲ成ラシメ、山野・羽月・平泉ハ義虎ニ命ゼラレ、其兵ヲ分テ此ヲ成ラセラル、然ルニ降秋ハ急ヲ致麻草北・八代ノ師ヲ起シ義虎ノ成ラセラル山野・平泉ヲノ意レルニヤ、相良方ヨリ三百余兵大口城ニ馳加ツテ後援ヲ急セリ、斯リケル延二十二月二十九日、我が市山ノ戈卒他ノ屯ニ謀ラス出テ大口城ヲ窺ヒタルニ、城將兵ヲ殺シテ北ト戦ハシム、我師利アラス、成將市來備後守家利等戦歿ス、其ヨリ市山危カリケレバ、公乃チ新納忠元ヲシテ代テ成將タラシム、同十一年戊辰正月二十日、貫松ニ公馬越ヨリ偏師二百ヲ率ヒテ伏ヲ設ケ城ヲ伐ントシ玉ヘルニ大口城ヨリ兵四五千ヲ縱テ此ト戦ハシメ公帥敗績シテ、公等殆ト危險也時キ國老川上久朝返テ鴨口頼大口城ノ東花 家ニ頼リ頼スシテ 北城ニ在リ、二月三日遂ニ死セリ 其ヨリ、松公自ラ歿シ玉ヒ羽作頼ニテ又イト御危カリケレバ、財部伝内等拒戦ヒ、其外長野仲左衛門等死ヲ致シテ脱シ率リ、ヤウノ、曾木

城ニ入玉ヘリ同二月二十八日、公島津忠政・肝付兼寛ヲ市山ニ遣サレ  
志元ト攻戦ノ謀ヲ議セシメ、島長等遠ルニ志元送テ小菅代ニ別ル時キ  
賊兵突出シテ大ニ此ト戦ヒ、各勇功ヲ顯ハセリ、三月二十三日、渋谷  
覚モ亦後攻ニ來テ曾木城ヲ攻メタリ、去レド城守菅原景隆等堅  
ク城守シケレバ去テ市山城ヲ攻ム、志元坂ニ兵ヲ永福寺ニ遣リテ此ニ  
備シム、故ニ賊兵克ズシテ退キタリ、五月、日新公勳三ツレバ戰立  
ノ死ルヲ惻隱セラレ篤キ御言アリケレバ、公山野ヲ相良ニ昇ヘテ和ヲ  
成シ玉ヘリ、然ルニ又八月相良・妻刈盟ヲ負ヒテ伊東・渋谷ニ連和シ  
堡障ヲ堂崎ニ築キ大口ノ兵ヲ分テ此ヲ成ラシム、伊東義祐亦使ヲ取麻  
ニ遣リ我ハ田原ニ歸シテ加久藤ヲ攻メ、若候ハ兵ヲ大明寺ニ出シテ飯  
野ヲ破レト謀合セ、比月九日伊東新次郎ヲシテ兵ヲ帥ヒテ田原ニ隨セ  
シム、時キ政麻十曾孫六郎左衛門右ハ大河平 其妻大河豆安隆光ト陰ニ  
松齡公ニ服シ予メ其謀ヲ知テ、公ニ泄シケレバ、十二日、公乃チ中野  
越前守・伊尻神方坊ヲシテ先ツ大明寺ヲ攻テ秋藤ニ備サセ玉ヘリ、故  
ヲ以テ新次郎ニ謀ヲ失ヒ、兵ヲ引テ退キタリ、斯テ同二十日丁酉義祐  
又室ヲ桶比良此レニ築キ成士ヲ入レテ飯野ノ間ヲ竊ハシム、斯ル處  
ニ、日新公加世田ニテ御病ヒ重ラセ玉ヘレバ、十一月、公モ還リテ御  
看病マシメ、馬越ニハ、貴明公居マシテ諸軍ヲ指揮シ玉ヘリ、十二月  
十三日、日新公御卒去、新納忠元・樺山玄佐等、公子家久ヲ奉シテ平泉ヲ成レリ、  
同十二年己巳正月相良頼房・妻刈暨秋藤義虎ニ因リ藤原守シテ和ヲ乞  
大口ヲ、公ニ致ント説シム、二十日、或ハ二十日、和成テ鶴千代ハ都答院ニ  
去レリ、公モマタ山野ヲ相良ニ昇ラシタリ、左アレド幾クアラス、相  
良ノ將深水三河守頼兼等頼ヲ負ヒテ三月二十八日、或廿八日、浦沼越中守カ  
平泉ニ往クヲ伐テ十七人ヲ殺シ、羽月ノ郭ヲ破レリ、義虎長テ成ヲ致  
ス、故、公忠元・兼寛ヲシテ羽月ヲ成ラセ、家久ヲシテ忠元ニ代テ市  
山ニ成將タラシム、然ニ賊ナホ羽月ヲ侵スコト屢ナレバ、忠元・兼寛  
市山ニ退行シ、家久ト謀ヲ定メ、五月六日遠ニ伏ヲ止浦尾ニ設ケ、中  
ニ候シテ大ニ相良師ヲ敗リ、百三十六級ヲ得ラレタリ、聞者セシハ政麻孫

三ッ人殺ト、同二十五日ニハ又都答院ノ長野城ヲ攻ラレ、此ヲモ臨シ玉  
作レリ、妻刈方彼此ニ群易シタル折シモ七月十一日、伊東ノ世子義益岩崎  
等ニテ頼房ナリケレバ伊東方モ此謀ニ大ニ氣ヲ失ヒ、事ヲ相良ニモ  
謀ラス、同十四日相良自相良モ隨テ去ニケリ、此ヨリ相良モ伊東  
ト善カラズ、自然ト我、公時ヲ待テ五ヒ、八月十八日遂ニ師ヲ進メテ大口  
城ヲ攻出レ、城下四方ノ秋作ヲ括ハレケレバ、相良方モ人ヲ救トテ却  
テ多ク士ヲ死セ更ニ幾クカ殺サントテ竟ニハ隆秋ヲ殺メテ大口城ヲ降  
ラシメ、因テ、公室ニ頼ハレシハ相良カ三年籠城シタル驗シニ妻刈家  
ヲ平泉城ニ立オカケ給ヘカシトノ事ナリケレバ、公御評察マシメ、  
同二十六日、貴明公鶴千代ニ書ヲ賜テ本攝及ヒ曾木ヲ下サレケレバ、  
九月廿日相良ニ同姓帶刀等ヲ、公室ニ質タラシメ、同十四日ニハ遂ニ  
大口城ヲ去渡セリ、是ニ於テ同十八日戊子、公及ヒ、丹子等大口城  
ニ入テ凱歌ヲ唱ラレ、其ヨリ新納忠元ヲ大口ニ地頭タラシム、是ニ由  
テ重広、本城ニ居ルコト故ノ如シ、斯テ六年メ天正二年本城ヨリ封ヲ  
伊集院ノ神殿村ニ徙サレ、天正八年ノ始分ヲ記セシニ妻刈併右衛門 建久中妻刈  
二人部アリシヨリ三百八十二年ニシテ始テ宗臣ヲ離ラレ、保元中郡  
司ニ補ケラレシヨリ八百年十八年ナリ、今茲文政丙戌ニ至リ前後派シ  
テ六百七十余年、世々旧職ヲ伝ヘテ子孫今尚色主ニ列セラレ、実ニ歷  
々ノ名家ナリト謂ヘシ、

山野  
赤生屎流ノ内ニテ上古牛屎一族ノ分レテ此ニ邑シ、因テ山野ヲ氏ニシ  
タル所ト古書ニ五町ト見ケルトゾ、道鑑公ノ時山野孫二郎或作彌次郎 又  
永和三年十月二十八日ノ書ニ山野左衛門尉元詮、又応永ノ季福昌寺  
奉加帳ニ奉加鳥居元代五言文、山野因幡守頼元トナト見ヘ、又文明十七  
年五月妻刈孫三郎忠氏カ山野氏・羽月氏等ヲ以テ島津忠廉ニ從ヒ、俱  
ニ鹿兒島ニ朝シタルコトトモ文明記ニ見ヘレバ此甲午ノ頃迄ハ山野氏  
ナホ宗臣ヲ履ヘタルニハ疑ナケレド、大抵頼元ノ子ノ代ニモ当ルカ、  
時ノ家督ノマタ詳テラス、山野城ノ遺墟ハ今ニ山野村ニ在リ、何レノ時  
ニ城邑ヲ失ヒケン、後ハ妻刈氏ニ併セラレシニ永祿十年十二月、大中

公馬越ヲ陷カレシ時、公取テ出水ノ邊ニ成ラセオカレ、翌十一年五月、日新公ノ思召ニ相良ニ與ヘテ養別ト和平アソハシタルニ其八月又叛レタリ、同十二年正月相良方ヨリ和ヲ乞ハルニヨテ又山野ヲ界ヘラレシニ其三月亦叛ヨリ乱ヲ起シ、九月遂ニ大口城ヲ陷サレシ以後マタ初ノゴト義虎ニ賜ヒテ其臣稅所越前守篤隆此ニ地頭シ、義虎ノ守忠辰政島ノ後ヨリカ又、公領ト爲リ、大島出羽守忠家・伊地知民部少輔重盛等々地頭セリ、

羽月

亦牛屎院ノ内ニテ牛屎別族羽月氏ノ宗邑ナリ、古書二十町ト見ヘタルト也、文保元年七月國權國御家人牛屎院ノ内ニ羽月右衛門入道・同兵衛入道ナト見ユ、道義公ノ時ナリ、又徳武三年正月二十五日大宰少弐ノ嘗ニ羽月四郎右衛門尉元真、又、道徳公ノ時羽月太郎元鎮落城ストアリ、時キ、公室ニ百從スルカ、又文和ノ頃大隅ヨリ兵衛佐直冬ニ御方セシ列ニ羽月孫太郎ト見ヘ、又永利三年十月二十八日ノ書ニ羽月石見守元盛、又白木村觀音ノ後光長ニ応永十五年戊子二月牛屎院大寮元忠或ハ福昌寺奉加帳ニ奉加馬鹿足録三貫文羽月豊後守元忠トモ見ヘ又羽月彦次郎チフモアリ何レノ時ニヤ、又文和十七年五月義劉忠氏・羽月兼下慶府三朝シタル事トモ山野ノ註ニ云ヘルガ如クナレバ、此甲午ノ頃ナホ宗邑ヲ履ヘタルハ明ケン、左アリテ義劉重時ノ子也、國室公ノ時再ヒ此地ヲ領ストナンアレバ、其時キ羽月氏宗邑ヲ失ヒ、義劉氏ニ併セラレシナラン、斯テ永祿十年十一月、大中公馬越ヲ叛レシ時キ、公領ト爲リ、二十五日義虎ニ成ラセ玉ヘルニ同十二年三月義虎衆屢來テ寇シ、外郭ヲ破ケレバ義虎畏テ、公ニ致セリ、其ヨリ新納忠元・肝付兼寛ヲシテ羽月ヲ成ラセ玉フ左アルニ同年九月大口城ヲ陷サレシ時、忠元ヲ大口地頭ニ差カレ此ニ火口ニ兼ラレシトゾ、去レド幾ホト無ク外城ニ建ラレシニヤ、猿渡掃部助信光等此ニ地頭セリ、今羽月ノ遺墟トテ下殿村ニ在リ、高山城ト云ヘリ、

税所介別篇

按ニ税所氏ナリ、其先世々隅州ノ税所介ニテ霧島社ノ神領ヲ司リ曾於

郡ヲタリヲ領知シ、元弘、建武ノ頃ナド最盛ナルトゾ、本郡ハ上古三券四單人等ノ荒俗ヲバ都方ヨリ改メ國トテ編賦ニタトヘ龍巖國或ハ巖國ナド書レテ其レヲ約シテ只曾乃爾トモ云ヘル國ノ一區ニ此郡名ニ遺レルナラン、然レ雖曉ト二字ニ書クコトハ利綱神傳ノ頃詔命ニテ因テ郡領ノ名ニ一音ノ地名ナルヨバ其韻ノ音ノ字ヲ加テ必ス二字ツバニ書ル例ニ定リシヨリノ事ナラン、其ヲ和名抄ニモ載セシト見ヘタリ、然レ此際ノ字ヲ平ト書クヘキニ方言ニキト契仲ガ疑ヒタルヲ本居カノ和泉郷名ノ呼喚、日向郡名ノ都巖ナドヲ引テ巖ノ音コソ明証アレト彼カニ讀考ニ云オケリ、左アレド寛文四年七月、家綱公御判物ノ時ヨリ俗ニ從ヘセラレ、曾於郡ト改ケレシトナン、今モ其ニ奉御ハレケリト斯テ此ヲタリハ上古ヨリ華人ノ大族領知セシ所テ地名ニ百テ曾乃ト云姓モアリシト見ヘ、續紀三和銅三年春正月庚辰日向華人曾乃君細磨教職荒谷馴服聖化、詔授外從五位下ト出タリ、此ハ陽城郡ノイマダ臣向ヨリ大隅國ニ割レ讓ケル三四ヶ年前ケレバ斯クハ載ラレシナルベシ、又天平十三年閏三月乙卯、天皇臨朝授外正六位上曾乃君多利志佐外從五位下或ハ同十五年秋七月、天皇御石原宮賜饗於華人等、授外從五位下曾乃君多利志佐外正五位上、或ハ天平勝宝元年八月癸未、詔授外正五位上曾乃君多利志佐從五位下、神護景雲三年十一月庚寅曾公足磨外從五位下トサト載レリ、併考ヘシ、曾乃君ヲ此ニ曾公ト書ルハ天平宝寧二年十月天下ノ館姓ニ君ノ字ヲ著ル者ハ公ノ字ニ換ヘヨトノ、謂アレバナリ、亦以テ曾ハ即姓タルコトモ此ニテ知ヘキナリ、斯テ其地タルヤ則此アタリナルニ疑ヒカキハ延暦七年ノ紀ニ當大隅國贈於郡曾乃峯上、火災大燬ト載ラレ、今ノ曾於郡ニ霧島山且華人塚ト云ヘルノ遺ルヲ以テ証スヘキナリ、左アレバ曾乃峯トハ霧島山ノコトニテ華人塚ト云ヘタルハ必ス曾乃君細磨多利志佐足磨ヲガ古塚ナルベシ、然レ此族類何レノ時ニ衰ヘケシ、藤原朝所氏ノ元祖正五位下周防守篤姫、治安元年辛酉三月二十一日此曾於郡ニ入部シ曾於御領ト云ヒ、其子篤義ハ城上御領ト云ヒ、代々霧島社ノ福所職ニテ本邑ニ居城セシトゾ、斯テ三十七代孝德帝大化元年詔國々司并開所ヲ建ラル時カ若クハ曾乃君或ハ曾於御領ノ頃ヨリカ立ケン夕暮ノ腹ト云ヘル國ノ迹、松永村ニ

令遠リテ春門ト云ヘルトゾ、此ハ日本地名便覽ニモ載リテ大隅名所ノ一ナリ、我 爲公ハ後所兵衛尉祐満カ時封三三州ニ就キマスト云ヘリ、建久九年ノ記ニ青野郡可熊守、又建治二年八月石築地ノ賦ヲセシ言ニ大介兼稱所藤原ト守護代ノ次キニ見ヘレバ其格式モ櫻知スヘシ、又同書ノ中ニ餅田廿七町四反御家人所所介義祐トモアリ、所謂神領帖位ニモ在ケルニヤ、又交和ノ頃兵衛佐直冬ニ味方セシ列ニ稅所介一歳トアリ、一族トハ姫木・重久・川畑・堀切・妻屋・入水等カコトナラン、或ハ永和ニ 應安中、年トモアリ 稅所氏政麻ノ相良ニ党シ、諭岳公ニ寇ヲ為ケルニ社 徒、公ニ内志シ笑限ニ在陣セラレシ時、本田氏義始木ト清水ヲ攻落セリ、故氏親ニ賜トモ見ヘレハ其區迄ハ彼地モ侵セシニヤ、其ヨリ応永ノ季年福昌寺奉加帳ニ奉加馬登正代錢ニ貫文稅所左馬助致弘ト見ヘタリ、然アルニ文明十五年稅所新介チフ若島忠廉ノ帖佐城ヲ襲ヒ却テ忠廉ニ敗ラレ、遂ニ曾於郡ヲ取ラレケルコト西藩野史等ニ出レバ此甲午ノ頃ハ蓋新介カ時ニテ致弘ノ子ニモ當ルナラン、治安ヨリ四百六十五年ニシテ稅所氏始テ宗臣ヲ失ヘルカ、其後永正十一年ヨリ同十六年迄ノ手組ニ稅所左衛門尉ト云モ見ヘタリ時何レノ地ヲ食メルヤ詳ナラス、去リテ曾於郡ハ文明十八年十月忠廉紙詔ニ徒ラレシ頃ヨリモ、領トナルカ、明應四年幕府ノ上使一色兵部太輔ニモ、田室公此所ニテ御海面トナン聞ケリ、斯テ誰ニ守ラセ置レケン、永正十六年十一月二十七日伊集院尾張守此ニ城守シテ叛ケリ、其十二月八日新納近江守忠武モ志布志ヨリ來テ此ヲ侵ケレバ同十七年、大翁公親將トシテ清水ニ出陣マシ、七月二十四日宮田孫太郎正豊等新納聚ト婿木石騏ニ敗テ軍劣セリ、八月二十二日、二十 公進ンテ曾於郡ヲ致玉ヒ、其十一月二十七日尾張守城ヲ以テ降レリ、其ヨリノコトニヤ、本田次郎左衛門尉親滿此ニ地頭セシヲ大永六年十一月、公本田因幡守兼親ニ賜ヒタリ、左アレト程ナク親尚カ讒ニヤ召上ラレテ、マタ新納近江守忠勝ニ賜ヒ、其ヨリ本田紀伊守兼親、兼親 兼親、カ孫也 カ邑ニ併セテ北原三河守忠綱ヲバ地頭ニ差オケリ、天文十七年九月兼親清水没落ノ後ハ北細路岐守忠和ノ邑ニ併セラレ、財部筑前守盛住此ニ地頭タリ、永祿中飯肥口ノ危カリシ時忠

相此ヲ、公ニ致シ姑ク、公子歳久居城シ玉ヒ、其ヨリ三原遠江守重秋入道昌胤地頭タリ、  
吉田仁左衛門太夫金吾  
按ニ次郎四郎兼清カ子ニテ吉田氏十二代尾張守泰清カ中填ノ俗稱ナリ幼字ハ次郎四郎ト云ヘリ、永正二年十一月七日享年七十九歳ニテ没シ法身心闍了願ト見ヘレバ応永三十四年生レニテ此甲午ハ四十八歳ノ時ニ當リ、今津友守、旧名了 心寺ナリ、ノ 兼清ニ兼正ニ配丁丑林録十八日大樹越息長泰清ト見ヘ、或ハ寛正五年和犬手組ニ古田左衛門太輔ナト出タル者皆此ナリ、吉田ハ旧大隅始羅郡ノ内ナリシヲ文祿中細川翫齋本藩ヲ換地セラレシ時、一説天正 十五年トモ、ヨリ薩摩ノ鹿兒島郡ニ諱ラレシトゾ、上古ヨリ大蔵氏世々此ニ郡司セシトテ三位大蔵行忠テフ者ニ至テ沽却セシヲ大隅正八幡宮ノ執印行賢ナルモノ天仁三年正月十九日此ヲ買取リ、同二月二十五日國司ノ免許ヲ得テ始テ拍領トナシ鎮西八郎為朝ノ次子源為重ニ界ケルニ、為重又其外孫長太夫息長清道ニ界シヘトテ清道吉田ニ移リ代々正宮ノ御供所校校ヲ領シテ此ニ居城セリ、其先ハ日本尊ノ第六王子息長田別王ヨリ出タリ、父ハ助清ト云ヒ、モヨリ四十余世ノ裔胤ニテ正宮ノ神宮タリ、清道ノ子ハ長太夫吉清、此時建久八年七月、頼朝公ノ御下文ヲ賜テ吉田院ヲ安堵セリ、其孫ナル太郎清弘カ時、建治二年八月石築地ノ城ニ吉田院七丁九段云々、木名十丁二反一丈、正宮御供所清弘領、中納四丁八段、四尺 長大夫幸道領、宮浦四丁八段、四尺 二郎太夫清持領トナド見ヘタリ、幸道ハ清弘從弟幸直ノ子也、清持ハイマタ詳ナラス、又交和ノ頃兵衛佐直冬ノ御方ヨリ吉田左近藏人清忠ガ尊氏ノ御方ニ參リシ事トモ見ヘタレト宗譜ニ清忠ト云ハ見ヘス、清弘ヨリ七世孫若狭守清正ハ、義天公ニ事リテ觀奉行ヲ持セリ、今ノ御家者ナリ、公室ニ臣タルハ此ヨリカ去テ屢忠節ヲ竭ス、誓ハ聖業自記ニ応永記等ニ在リ、公清正ガ忠ヲ賞セラン、下田村六町若々ハ小山田村ヲ加賜ヘリ、下田ニハ其叔父山城守頼清ヲ差置キ下田ヲ以テ氏ト爲リ、清正嗣子次郎四郎兼清ト云ヘリ、福昌寺奉加帳ニ奉加馬登



正米三石三百疋古田興長兼清ト載レバ此ナリ、其子ハ却此兼清ニテ表  
薄ノ子ハ治部太輔兼清ナリ、小字ハ次郎四郎享徳二年生ニテ此甲午年ハ  
二十二歳ニ當レリ、父子共ニ一宮室ニ飯キ川田城ナド攻ケル事文  
記ニ見ヘタリ、孝清子次郎四郎位清ニテ伊作善久ノ女ヲ承ケ梅舟君ノ  
御姉嫁ナリ、永正十四年吉田城ニ櫻ヲ築反シケンバ、真景公被殺トシ  
テ二月十二日往テ城ヲ攻メテ入リ、從兵官孫太郎下豊等大馬場ニ戦カ  
功アリ、十四日戌時位清遂ニ城ヲ奪テ内門ヲ出奔セリ、十七日公  
兼清内城ニ唱ヘテ、村田越前守經定ヲ地頭ニ監レシトゾ、斯テ位  
清ハ梅舟君ノ御夫人出水城主島津忠興ノ妹ヲシテ、忠興ヲ承ケテ落ニキ  
ケンニ島津善左衛門安久走水兵ヲ阿久根城ニ伏セテ位清ヲ殺シケルト  
テ今ニ若宮ニ崇メテ其地ニ祠ルト云ヘリ、左アリテ、公ノ國老伊地知  
重府ガ二男伊地知筑前守重成ニ差置ルト見ヘタリ、經定ノ  
任ト何レカ前ナルヲ知ラス、又一説善成兵部少輔島津昌久ノ姓佐地頭ニ登  
ラル時吉田ニ地頭トアリ、大永七年十二月カ  
然ルニ享徳二年正月二十一日耶答院伊勢守重武兵ヲ帥ヒテ吉田ヲ攻ム  
官田孫九郎王勝等拒戦ヒテ武城ヲ陥スコト能ハス、二十二日進テ帖佐  
ノ本城新城ヲ攻テ西城ヲ陥セリ、時ニ伊地知國部少輔重成新城地頭ニ  
テ拒戦ニ此ニ死セリ、其子小次郎重常石ハ外記作守ト云ム此代志ハ  
松本トモモ名取レリ、垂安祖也、  
成卒五六人ヲ將ヒテ田ヲ潰シ吉田城ニ馳籠テ俱ニ城ヲ攻メテ、故ニ重  
武二十三日又山田城ヲ攻取テ帖佐ト併セテ侵領セリ、天文六年島津美  
久鹿尻島ニ侵居レル時吉田家第一ニ美久ヲ數キテ、大中公ニ内応セシ  
ニ因テ、公モ善ク鹿尻島ヲ復スルコトヲ得玉ヘリ、其後重成ハ高橋ニ  
封セラレ、重成ハ油須木ノ地頭ニ移サレ、經定此ニ地頭タリシニ同十八  
年既ニ渡谷覺カカメニ吉田ノ危ガリシ時新納刑部忠元・三原連江重秋  
・山田藏人有徳・長野兵部・吉田鎮前親等ヲ遣ラレテ處ラセラルトゾ、  
其ヨリ永祿六年吉田四ヶ村、公ニ滅久ノ食邑ト為テ阿多若狭守久銀  
此ニ地頭タリ、天正八年、公ヲ封テ耶答院ニ徙サレシ後マダ、公領ト  
為リ、本山下野守親貞入道就テ地頭セリ、城ノ名ハ松尾城ト云ヒ、消  
墟今ニ東佐多浦村ニ在リ、吉田元祖ノ築キシヨリ、代々ノ居城トシ此

ヲ本城トモ云ヘリ、天仁ヨリ四五十二年ニシテ吉田氏始テ赤邑ヲ失ハ  
リ、上世ハ知ラス消工コトニ慮ヲ、公室ニ退シ官モ閑者ニ至レリ、然  
ニ其子孫トシテ兼清・兼清・位清ニ世相繼テ築反シ遂ニ以テ滅ビタリ  
大正臣トシテ治レル世ニ如斯ナラバ白ヲ終ハスシテ滅フベキニ然ラ尚  
三世ノ久キヲ保ツハ誠ニ亂國ナレバニヤ、  
入來院  
按ニ入來院氏、世下野守重豊入道以心ナリ、父ハ出羽守重茂、其ハ兼  
谷輝正少輔重長ト云ヘリ、福昌寺善加帳ニ率加馬守建代ニ貫渡谷云々  
ト載ルル此ナリ、重豊文龜元年閏六月二日ヲ以テ卒シ古春定兼備伯ト  
法號セリ、補之名村慈光寺中興ノ棟札ニ大正那平朝臣豐州太守重豊并  
又五郎重聰子時延領一年龍興長成曆月二十四日トナト見ヘタルハ亦此  
父子ニテ后ニ重長ハ輝正少弼ト云ヘリ、今ノ入來院ハ種嗣入來アタリ  
ノ總名ニテ薩摩郡ニ隸ケリ、上古ハ藤原朝臣頼孝子ヲ本院ニ地頭セ  
シ重長和二年十二月廿一日水田ヲ新田宮ニ寄附セシ書ニ見ヘケルトナ  
シ、得公公封ニ就キマス頃ナドハ頼孝ガ裔胤ニヤ、入來院又五郎頼宗  
テフ者比ニ居城スト云ヘリ、去レテ建久八年國田丁ニ入來院九十二町  
二段没官御領地更ニ葉介云々、并將使分五十五町本地頭在行預期、郡  
名分二十町本郡司在行地及トモ見ヘタリ、其ヨリ五十余年シテ今ノ入  
來院氏治二年ノ春渡谷太郎光重ノ第五子曾五郎定心始テ公院ニ入  
部シ比レテ大社トシテニ孫世々御家人ニ列シ、業ヲ比ニ食メリ、因テ  
入來院若クハ消色ヲ以テ氏トシ所謂渡谷五家ノ其一ニテ俱ニ冠ラ  
寮ニ為ス事旧シ、語ハ重長自記・應衣記・文明記・貴久公記・越前日記  
等ノ古書ニ詳ナレト爰ニ其近世ヲ概記セン、大中公兼隆ノ女ヲ娶セラ  
レ、貫松ニ公心岳君等ヲ生玉ヒ、重聰ノ子石見守重朝ハ、公等ノ御弟  
弟ケンバ其威勢ヲヤ飯ラシケン、地ヲ川内ニ略シ勝ヲ恃テ餘驕リ後ニ  
ハ東郷・耶答院・薩生等ニ克シ、其テ、公ニ級ケルニ消谷・耶答院・  
北原等ノ如キモ御敵對シテ皆城ヒザルハ無ク、永祿十二年十二月渡谷  
方ニ既ニ御手ニ屬シ渡谷姓ヲ氣切キ折ニヤ、銀田寛經・吉原兼隆・發  
渡休覺等渡谷方ノ宗子東郷大和守重尚入道ハ、後ハ渡谷天石ノ實子ナレバ先

ツ重高ニ説キ、重朝ノ子石見守重嗣 或ハ加賀守ト俱ニ城邑ヲ致シテ

公室ニ降ルコトヲ勸ケルニ、重胤・重尚皆此專ヲ服セリ、二十八日寛

新等以テ公等ニ問ス、是ニ於テ爾元重元年正月五日入寮院重嗣ハ百

次・平佐・高江・宮里・天辰・範山ヲ致シ、東郷重尚ヨリハ高城郡水

引・中郷・湯出・西方ヲ致シテ、公ニ降レリ時キ、公ヨリ重尚ヘハ東

郷ヲ貶サレ、重嗣ニハ清敷ヲ下シ置レ、高尾ハ平田野介宗成ニ高

城・水引・中郷・西方・京泊ヲ出水ノ義虎ニ賜ラレ、隈城ニハ公

子家久ヲ地頭ニ移サレ、其ヨリ川内方モヨク治リシトナン、斯テ重嗣

子彈正少弼重胤男ニ無タ典既以久ノ次ニ又六重時ヲバ嗣トシ、其女ヲ

以テ此ニ妻ハセタリ、然ルニ文祿四年ノ秋幸佩ガ遂訴ニテ三州ノ豪族

遷易ノ時重時モ元祖入部ヨリ三百四十九年ニナル宗邑ノ清敷ヨリ封ヲ

賜州湯尾ニ移サレ、清敷姑クハ公孫ト爲リ、新統忠元・川上忠克・平

田僧宗等比ニ地頭タリシト云ヘリ 忠元ハ文祿三年ヨリ慶長元年迄ハ在京ト

リシナラン、左アリテ忠孝ノ重ニ下ルヤ、忠光ハ京ニ賀トシ翌二年ノ春忠元ハ

飯野地頭ニ徒サレシト也

其ヨリ重時ノ嗣子信守守重嗣ノ時ニ云テ慶長十八年マタ清敷地頭ニ補

セラレ、仁臣ノ内ヲ復シ賜ヒ、其子石見守重胤モ襲フ此ニ地頭シ、慈

眼公ノ翁王ヲ承シテ宮大日附ニ至レリ、左アリテ万治二年御引并シ楨

地ノ時萬ニ清敷ヲ副ラレ副曰ト清之名ニゲ村ヲバ重頼ノ一所ニ封セラ

レ、入来ノ旧号ヲ此ニノミ遺サレ制殘シノ塔之原・合野・尚比野・種

元・久住・中村ノ六村ヲ清敷ト唱テ故ノゴト外城ニ建ラレ、衆士ハ皆

此ニ移ラセ、重頼ヲシテ尚地頭タラシムト見ヘタリ、其後マタ重頼ノ

子隼人重治官ニ請ヘル旨アリテ延宝九年四月清敷ハ更メテ權脇ト唱ヘ

テレシトナン、因テ入来院氏夫宝治ノ旨シヨリ今茲文政丙戌迄五百八

十年歴及トシテ太祖以來征伐代々遺業アル宗邑ヲ領知セラレシハ誠ニ

世ノ別侯ニモ亦類ヒ多カラザルベシ抑波谷五家并ヒ盛テ旧ク公室ニ返

年、今其子孫東郷・郡答院・高城・鶴田ノ四家也其邑ヲ失ヒ時ヲ暇サ

レタル事トモ賜ニ久カリシニ唯リ入来院氏如此ナルハ幸格別ノ御外戚

且ハ度々、公族ヨリ嗣セラレタル由縁ナラン、左アルモ本是重嗣ノ速

ニ先非ヲ悔テ降リタレバコソ、左無カリセバ何ノ能ク又今日ノ榮ニ至

ランヤ、然レバ誰家ニテモ皆誓ク過ヲ改ルヨリ自出タキ誓ノ神ハ且上

ニ非ルト見ヘタリ、

郡答院

按ニ郡答院氏十代遠江守實慶ニテ古昔ニ渋谷左衛門尉重慶トモ見ヘタ

ル者此ナラン、父ハ播磨守徳重ト云ヘリ、郡答院ハ今ノ佐志・黒木・

鶴田・宮之城・山崎・大崎・阪岸出七邑ノ總名ニテ皆薩州伊先郡ニ隸

キ、牛屎院ノ片割レ也、下章ニ大村・波形・鶴田・山崎・久富木ヲ郡

答院分ト載セレバ此甲午ノ頃重慶居ニ邑シテ斯ク院内ヲ知行セシナ

ルベシ、本院ハ甲午康治ノ頃郡答院又太郎・大前道功此ニ郡司セシト

テ所領郡答院ノ内中津川名ヲ讓渡ストナン旧記ニ見ヘルトゾ、其子孫

ニヤ、得仙公ノ時キ郡答院又太郎大前道秀テフモノ比ニ居城スト云ヘ

リ、又寛久八年区田丁ニ郡答院百十二町内 津野 没官領地頭千葉介

富光五十四町本郡司熊同丸、倉丸三十町領間太郎道成、時吉十三町本

名主在庁道友ナド見ヘタリ 安ニ三葉介ハ平族ニテ常々孫傳胤ノ曾孫千葉

等ノ間、本郷ニ入部セシニヤ、時胤孫千葉太郎素胤ハ軍奉行セシ事也安ノ須御

一見松二見ヘルトゾ、又富光ハ永祿ノ頃湯田城ヲ以テレルモノニ、富光信濃守大前

道家トガト見ニ、藤同丸ガ子孫ニヤ、又清岡ハ天文十七年ノ頃遠州馬家湯田丸

郎右衛門、或ハ永祿ノ頃高岡越後守宗信、或ハ美作守ナド見ヘ、宗信后ニ氏

ヲ平田ト見ヘタリ、此族裔カ、又在庁道及ハ東郷在國司ニテ皆湯田城ニ居テ其族

位々氏ヲ皆湯田城ハ時吉、或ハ東郷トナド名ノル共此ナラン時吉ニ下章ニ云ヘリ、

又寛永ノ頃郡答院一分ノ地頭並目六郎 信濃 橋以広入道環惠テフ者出

羽ヨリ本院ニ入部シ、其二孫ニヤ、斑目兵衛尉泰基テフモノ同ク此ニ地

頭セシ事鎌倉ノ御下文二見ヘルトナン、斯テ建永ヨリ四十余年モ降リ

此重慶方太祖吉岡三郎重胤 軍保 渡谷太郎光重ノ第三ニテ宝治二

年ノ春鎌倉ヨリ米テ本院ニ地頭シ、世々虎居城ニ居テ郡答院ヲ以テ氏

ト爲シ亦渋谷五家ノ其一ナリ、重胤ガ曾孫平次郎行重ト云ヘリ、今ノ

佐志・広瀬村・松尾寺ノ笹文ニ当院地頭大前那平行重子孫繁昌之故也

カ、宝治ヨリ七十年此カタカ充冠ノ領時吉孫太郎入道同弟彦次郎テ  
者トモ時吉城ニ居ケルトナン、斯テ此等若クハ斑目等ガ子孫ニ後ハ漸  
ク谷部答院ニ隨身セシト見ヘタリ、去テ比族皆々、公室ニ叛ケル事  
ハ入来院ノ註ニ去ヘルガ如シ、此甲午ヨリ九年月文明十四年ノ春重慶  
北原立派下、同室公ハ御病オハスヲ幸ヒ勸セス、遂ニ入来院重慶、  
東郷重輝、吉田泰清、護別道秀ヲ語ラヒ叛キ、同十五年ノ頃慶  
佐ニ会シテ烏津忠廉ニモ反ヲ勸メルニ忠廉聽ス、重慶ソコテ北原・護  
別ト却テ、公ニ降り、忠廉ヲ護シ程ナク又皆叛テ、公ノ水引城ヲ攻  
レバ忠廉怒テ重慶、孝清ト重慶領ノ齒幸田城ヲ攻タル事トモ文閉記ニ  
出タリ、時キ城兵ニ叛自右京亮テ見ヘレバ既ニ重慶ニ歸ヘルハ則チ  
シ、重慶ノ孫伊勢守重武ガ時キ重慶ニ年正月、帖佐ノ本城・新城・山  
田城迄攻取テ本館ニ併領シ甚威ヲ振ヘリ、時キ新城地頭伊地知重辰  
等カ拒戦テ討死シタル事トモハ既ニ吉田ノ下ニ云ヒオケリ、其後天文  
四年四月、大翁公川上昌久ヲ誅セラレシ後、昌久ト共ニ末弘・忠兼ヲ  
殺セシ衆多クハ畏レテ莫久ニ党セシ時キ、公ノ妻臣小倉武敏守等重武  
ト北原祐兼ニ兵ヲ乞ヒ、重武及ヒ北原加賀介等ト衆ヲ帥ヒテ鹿兒島ヲ  
衛レリ、其年十月莫久谷山ヨリ乱入シ、滑川迄放火シケルヲ重武等追  
御ケ、神前城ノ下ニ至ル、折シモ谷山ノ本城ヨリ横撃シ、重武邑宰栗  
野越前等數十人此ニ死セリ、重武モ其ヨリ走テ帖佐ニ還リシニ莫久進  
テ池上ニ逼リ遂ニ十日公モ田ノ浦ヨリ細浦ニ召サレ重武ヲ頼テ帖佐ニ  
對ハセシ事トモアサシトゾ、重武ノ守河内守良重ガ時ニ至テ、大中公  
平松三彌オハセシ時キ弘治元年四月二日ノ夜良重党皆帖佐ノ本城・新  
城・山田城ヲ委テ那答院ニ引去レリ、翌三日ノ曉ニ、公彼三城ヲ取返  
サレ、同二十六日鎌田和部左衛門改年ヲ内城、本 城ノ地頭ニ笠置レ  
タリ、山田中區ニ在マス、永祿五年壬戌霜月五日若宮八幡ノ棟札ニ太  
皇孫藤原久井当地頭平氏景法トアリ、山田ニハ別ニ地頭ヲ置レシニ  
ヤ、サテ良重莫久ノ女ヲ娶テ親虎ノ姉婿ナリシニ田嶺ヲ好テ山ニノミ  
日ヲ暮シ、邑ノ政ヲ問ス、家立ノ朝ヲモ受サリシトテ永祿九年、或作正  
月十五日其妻ヨリ寢室ニ弑セラレタリ、時キ村尾魚三、斤八重侯 良重ノ  
入道実相

側ニ居ケル故置置キ難シク良重ヲ奪テ座ニ置レテ弑殺セリ  
其ヨリ那答院ノ宗祀絶ガシ、同二月二十八日入来院又五郎重豊當院ヲ  
併ラレシニ院衆服セス、多クハ謀テ、公ニ内成シケレバ、公兵ヲ遣  
テ此ヲ取正ヒ、田老村田健前守經定ヲ南幸田地頭トシ、院内ヲ鎮ラ  
レシニ、年月 同十一年三月良重ガ族人那答院新兵衛尉等長野城ニ拠テ、未考  
別方ニ応シ、曾木市山ノ南城ヲ攻テ後援ヲ為スニヨテ同十二年五月、  
公諸將ヲ遣リテ長野城ヲ攻テ、時キ經定ハ入テ国政ヲ聞レ身任所  
ニ兼テ軍行毎ニ出テ兵ヲ督サル事ニ叶ガクシトテ伊地知民部少輔重広  
重康、モ云ヘリ、帖佐新城ニテ、ヲ馬關ヨリ平河ノ地頭ニ召移サレ、  
武ト謀テ討死シタル區段ガ深也、經定ノ任ヲ長シテ部兵ヲ督シケルトゾ、其ヨリ天正五年十一月、松齡  
公貞幸、四百余ヨリ討ラ本院、四百六ニ転セラレ、其二十一日三六下之城  
今ノ、十町許ニ御移初ノ議定マテアリケルコトモ上并日記ニ見ヘシト、公  
ニ代リテ飯野ヲ鎮メマス程ノ矢將更ニ無カリシニヤ、同七年重広等ハ  
宮ノ城ヨリ平泉地頭ニ移サレ翌八年、心岳石ヲ平吉出ヨリ若本院、  
ニケ村ニ移サレ、后ノ城ニ居玉ヘリ、文祿元年七月、君内殺ノ後、宮ノ城  
皆召上ラレ、嫡孫常久等ハ滑川城ニ差置レ北郷時久ヲ同四年八月都城  
ヨリ封ラ此ニ移サレ、嫡孫北郷忠能ガ時ニ至テ慶長五年三月同邑都  
城ニ復セラレ、同十二月島津忠長ヲ東郷ヨリ此ニ封セラレタリ、今  
ノ宮ノ城一所此ナリ、夫那答院氏宝治ノ入部ヨリ永祿九年ニ至リ三百  
十八年ニシテ宗昌滅ビ、入来院ニ併セラレ、幾クアラス、公領ト為レ  
リ、蓋シニ歐ヲオフテ滅コト無キコレヲ荒ト謂ヒ酒ヲ樂テ厭コト無キ  
コレヲ亡ト謂フトカ見ヘタリ、莫久良重カ宗昌ヲ滅シタルハ荒亡ノ行  
ヨリ招キシト謂ヘシ、

東郷  
按ニ東郷氏十二世隱岐守重理入道一約ニテ文明十五年八月、円室公御  
不例ニヨテ新田宮ニ笠懸ヲ許セラレシ手組ニ東郷右馬允後ハ隱岐守ニ  
任セラルト見ヘタルモノ此ナリ、父ハ隱岐守重信ト云ヘリ、東郷ハ薩  
摩郡ニ隸ケリ、同初ニハ在国司小太郎大前道氏テ若者若瀬城ニ居テ或

ハ斧瀧或ハ時古ヲ氏ニスト云ヘリ、建久八年河田丁ニ東郷郷司名三在  
序道友テフモノ成ハ下司或ハ本郡司或ハ本城頭分トシテ東郷郡將ノ内  
ニ時吉三十五町七段、高城郡ニ時吉廿八町、薩摩郡ニ時吉六十九町、  
那答院ニ時吉十三町、伊集院ニ時吉二十五町、其外諸領合セテ二百十  
三町余ヲ領シ、其奥書ニモ権太前在判トナト見ヘレバ道氏方族ニヤ、  
同九年ノ頃東郷郡司時房トモ見ヘタリ、左アルニ渋谷莊司重國ノ長男  
太郎光重ノ次子早川次郎実重父光重ノ譲ヲ受テ其ヲ東郷ニ食メリ、其  
子太郎忠重承久ノ乱ニ功ヲ致シ、宝治元年七月二十三日、頼朝公御下  
文ニテ忠重ニ東郷地頭職ヲ襲シメ、翌二年ノ春父実重等ト此ニ入部シ  
鶴岡城ヲ築テ代々御家人ヲモテ居城シ、亦渋谷五家ノ其一ニテ西藩ニ  
テハ一族ノ長タリ、其ヨリ弘安ノ頃ニモ大前東郷ノ族東郷莊司三郎  
道嗣、元弘ノ頃ハ東郷藏人道義トモ見ヘレバ姑クハ並領セシニヤ、忠  
重ノ玄孫太郎左衛門尉氏重、其子次郎太郎祐重此可代ハ尊氏ニ屬シテ  
軍功アリ、其子薩摩守重加カ時文和二年五月、幕府發遣ヨリ、鶴岡公  
ニ在國司次郎入道道超カ遺領ヲ御賜アリシニ、公ヨリ又重元ニ賜ヒケ  
ルトナン、此時、公憲ニ臣事ルカ余ク東郷ヲ領セシモ此ヨリナルヘシ  
重元玄孫即此重理ナリ重理文明十五年、内室公御病氣立願ノ符懸ニナ  
ド加ハリタルニ疑ナク飯キテ那答院重慶等ト忠廉ニ叛ヲ勧メ、同十六  
年二月朔日重慶ト俱ニ、公領ノ水引城ヲ攻メ、同二十日忠廉等ノ重慶  
カ南牟田城ヲ攻ラルニハ重理却テ忠廉ヲ援テ重慶ヲ伐テ、同三月重慶  
カ海ニ出サレ帖佐ニ奔レル事トモ文明記ニ出タリ、其曾孫大和守重治  
男無ク變州天岩ノ三男ヲ嗣トス、大和守重治入道重俊此ナリ、重俊ガ  
時元龜元年正月皇ヲ以テ公ニ降レリ、事ハ人來院ノ伝ニ詳ナリ、時東  
郷一邑ヲ安堵シ居城故ノ如シ、重俊亦子ナク天正五年、公子家久ノ次  
男源七郎重虎ヲ嗣ニス、  
時十四歲 後二忠直ト云ム、歲相千二百六右ヲ  
錄德丸  
食メリ、同十五年大關西征ノ時權二十四歳ナレハ去テ佐上京ニ寓ス、  
室治ノ入部ヨリ此ニ至リ三百四十年ニシテ宗色ヲ離レ其ヨリ文祿四年  
九月本城ノ南浦村等ヲ拵シ慶長六年日州四所村ヨリ本城ニ移リ同十  
九年又隔ノ三軒堂村ニ移ラレケルトゾ、斯テ東郷ハ天正十六年冬、大  
關ヨリ島津忠長ヲ申良ニ賜ヘテ此ニ封セラル、其ヨリ慶長五年十二月

封ヲ宮ノ城ニ徒サレ、東郷十箇村ヲ兼領ナリシニ、同十九年野州久元  
ノ時ニ至テ東郷ハ召上ラレ敷浪三十郎頼國等此ニ地頭タリ、左アルニ  
寛永十年六月島津陣匠久慶ニ本邑三千石ヲ日置ニ加封セラレ、一万千  
九百斛等ヲ領セラルトゾ、  
日置山田神ノ川ハ文祿  
四年常久ノ時ニ拜領也 其後三郎右衛門忠朝ノ  
時ニ至リ三千石ノ加増ハ召上ラレ、日置・東郷兩邑七千七百石安堵ナ  
リシニ万治三年日置ハ召上ラレ東郷一所ヲ下置レタリ、然ニ忠朝ノ子  
丹波忠興ノ時キ東郷ヲ上テ日置ニ易シコトヲ請ハレ延宝八年八月三日  
御領易賜ハラセラル、其十二月十三日ヨリ東郷ハ又、公領ト為リ新統  
武左衛門始テ此ニ地頭セリ、

種島

按ニ左近將監時子ニテ種子島氏十一代左近將監時氏ナリ、永正元  
年七月十六日ヲ以テ卒シ年五十八、法号金山院日翁大居士ト云ヘリ、  
文安四年生レニテ比甲午ハ二十八歳ノ時ニ當レリ、種島ハ熊毛郡種ニ  
島也、武備志ナドニ種島ト作レリ、天武帝十一年閏八月多爾高ニ遣ラレ  
シ使人等ヨリ多爾高ノ國ヲ言セシコトモ書紀ニ見ヘ、又、文政帝二年  
四月藤原式文忠寸博士和郎判部真木等八人ヲ南島ニ遣テ國ヲ覽ラレ、  
同三年七月多爾・夜久・善美・度感等ノ人朝幸ニ從ヒ來テ方物ヲ貢進  
シ、位ヲ授ラレ差物ヲ賜ヒ其中度感島ハ此時始テ通セシト見ヘ、翌八  
月己丑其島々ノ貢物ヲ伊勢其外諸社ニ獻セラレタリ、  
按ニ多爾ハ口此種子  
島ナリ、夜久ハ鳳  
耶摩久島ナリ、奄美ハ天見ノ縣ナリ、大島ニ天見縣ト云アリテ今ノ俗語ニ久キ  
コトヲ天見時代ヨリト云ヒ、道ノ島海路ノ古語國ニ宝島ヨリ大島ニ渡ルコト  
ヲバ天見カ渡、點シアルト本庄親學ガ大島私考ニ出タリ、慶長十四年琉球ヲ討  
ル時ノコトヲ僧文之壽ニ作り天見親ノ句アリ、左アレバ奄美ハ大島ノ古名ナリ  
度感島ハ宝島ノ訛ナルカ、  
又大正二年八月薩摩ト多爾カ化ヲ獨テ命ニ遊ヘルトテ兵ヲ發シテ征討  
セラレ遂ニ口ヲ校ヘ吏ヲ置レ、又、元明帝ノ和銅二年六月大宰府以下  
品官ノ事力ヲ半減セラル時ナド薩摩多爾兩國司等ハ減セラル例ニ非ス  
ト見ヘ、同七年四月辛丑多爾國ニ印一國ヲ給ヒ、又、元正帝養老六年  
四月大宰管内ノ大隅・薩摩・多爾・善岐・對馬等司ノ關ヲランニハ府  
官人ヲ選テ擁補セヨトノ制ヲ定ラレ、又、聖武帝天智五年六月多爾島

熊毛郡ノ大領外從七位下安志託等十一人ニハ多嶺後國造ノ姓ヲ賜ヒ  
和臣秋口等ニ多嶺後國トアルヲ賜ヒ其後ハ多嶺ノ前從ニ從ヒ丹波丹後ノ列  
ニテ、益敷郡則其前國ナラント云ヘト正史イマタ註シテ見ス後ハ島ノ親モ知  
ヘカラス、

益敷郡人領外從六位下加理等百三十六人ニハ多嶺前ノ姓ナド賜ヒ、  
同十七年十月諸國正稅ヲ山拳ルズ數ヲ定ラレシ時モ多嶺對馬同島ハ限  
ニ入ラスト見ヘ、又天平宝字四年五月右大舍人大允正六位下大伴宿禰  
上尾多嶺島嶽ニ左遷セラレ、同五年三月茅原王ニ姓ヲ當田真人ト賜テ  
此ニ配流ヤラレ、又天平神護元年正月大宰大式從四位上佐伯宿禰毛人  
モ此ニ左遷セラレ、寬元元年八月從五位下中宣習官前臣阿曾麻呂多嶺  
島守ト爲リシ事トモ流紀ニ出テ、類聚國史・海東諸國記等ニモ載テ、  
今ノ吾般對馬ノ類ニテ救數モ併セ一同ニ建テ多嶺國トモ多嶺島トモ云  
ヒ、本島ニ益敷・熊毛二郡、夜久島ニ能瀨・敷設二郡合セ四郡ノ國ナ  
リケンニ、淳和帝ノ天長元年能瀨ハ敷設ニ合セテ一郡トシ、益敷ハ熊  
毛ニ合セテ一郡トシ、二郡共ニ大隅國ニ屬ラレタルト見ヘタリ、今種  
子島ニ野高村アリ、能瀨郡ノ遺名カ左アレバ能瀨ヲ熊毛ニ合セ、益敷  
ヲ敷設ニ合セラレケンヲ天長ノ説互ニ誤テルカ、去テ安志託等ニ姓ヲ  
賜フ時熊毛郡モ益敷郡モ能瀨郡モ皆多嶺島ニ係ラレタル書法トモ者親  
ツベシ、尤稱名抄ニモ敷設郡・熊毛郡ト大隅國ニ出タリ此也、左アリテ  
中古ニテハ高野入道・野間入道 能瀨人 熊毛入道テラ者ナド本島  
ニ主宰タリシニ鎌倉ノ御藏人下為シヨリ大泊口某地頭ニ此ニ補セラレ  
鎌倉在府ニテ此ニシテ進領シ上云氏ヲシテ就テ代官タラシメタリ、註  
多嶺島五百丁ト深河流百五十丁、財部院百丁ト合セ七百五十丁ハ島津御  
庄ノ新庄ト領家近衛殿賴朝尾張守トナト延治二年石築地ノ賦ニ見、  
按ニ時政ノ子北條江間小四郎義時ニ男名越邊江守朝時ト二男名越邊  
守時章ニ當レリ、時政ノ曾孫ナリ、泰時ニハ姪ナリ、時章ハ弘長三年  
十一月時頼入道ノ卒セシ時入道シテ見山ト云、其子左近將監公時モ尾  
張守公時入道見山ト鎌倉譜ニアリ、然ニ公時ハ文永九年十一月北條時  
頼カ謀反ニ与シ殺サル、父ノ法名ヲ領リシハ明ケン 一應醫院地頭名  
越邊張孫次郎ト云

モアリ、時章ノ孫ナ、左ア 斯テ多嶺島ノ内見和村ナドハ御家人見和半次  
レハ兵衛右時家ニモ當ラン、承久三年十二月守邊所ヨリ安格セシムル状ヲモテ下向シ、佐多  
孫四郎親政ガ家ニ重代右大將家ノ御下文ニ守護島津判官忠久施行状ヲ  
モテ伝信、名越邊張左近大夫高家カ代ニ關東ノ稱威ニテ肥後次郎入  
道淨心カ相領ト爲リ、五郎兵衛入道丸時迄主權ヲ領シタルニ延武四年  
六月親政養子彌隆次郎清種訴ル旨アリ、其八月一日源大將ノ判ニテ  
清種軍功ノ上御下文ナト持居レハトテ半分ヲ宛行ハレ、世戸山彦四郎  
ヲモテ護サレタリ、肥後次郎、或ハ五郎兵衛入道等ハ今ノ種ニ島一

族ナリ○其後今ノ種子島氏ノ太祖四後守時信ハ其父行盛等文治元年桓  
ノ浦ニ滅ヒタル年ニ生レ櫻椽ニ在テ難ヲ遁レ、後ニ北條遠江守時政ノ  
養子ト爲リ、其養子ニヨリ本島ニ封セラレ、始テ此ニ入郡セリ、其族  
系ト藤姓ニ易ランタル事トモハ前ニ爾後ノ伝ニ云オケリ、時信后ハ信  
基ト更メ、文永三年八十二歳ニテ自殺ストナン 此自殺ノコトヲニ代太郎  
右衛門信成ノ事、作ルモ  
ア信基ノ女孫中務時基迄ハ京都ノ幕府ニ屬シ軍功セリ、其孫對馬守頼  
時ヨリ始テ公室ニ從セシニヤ、貞治五年四月 給岳公師ヲ肥州ニ出  
サレシ時キ頼時其將ト爲リ、十六日猶地武光ト日ノ間ニ戰テ死タリ、  
其子左近將監清時ハ 越邊公ニ事ヘテ忠ヲ顯ハシ、應永十五年十月八  
日 公清時ニ屋久・惠良部兩島ヲ加封セラレ、義天公モ亦清時ニ疏  
黃・竹島・黒島ノ三島ヲ加賜ヘリ、去レド此三島ハ永享中其子善磨守  
時長ガ時 大橋公ヨリ召上ラレタリ、其子即時時ニテ永享八年八月十  
日守護代好久ヨリ備時ニ臥蛇・平二島 中七島 ヲ加賜トアレバ此甲午ノ  
頃ハ時氏本島ニ屋久・惠良部・臥蛇・平ヲ併セ、五島ヲ領シ居ラレシ  
ナラン、以テ其子武藏守忠時ニ至リ、永正九年 關憲公忠時ニ新填白  
野ヲ加賜トゾ、其ヨリカ臥蛇・平二島ハ召上ラレ、和子・屋久・永良  
部三島ヲ領シテ其子加賀守忠時ニ至ル、惠時ノ子左近大夫直時不孝  
ニシテ天文十一年二月父ニ叛キ、二十三口根占ニ奔テ此ニ克ス、故惠  
時援ヲ 大中公ニ乞フ、是ニ於テ出三月 公新納伊勢守康久ヲシテ兵  
百余人 十三 ヲ帥ヒ往テ比ヲ救ハレシム、六日坊津ヲ出船シテ琉黃島ニ

入ル、七日碓黄ヨリ屋久ニ渡ル、惠時屋久ニ米ヲ三島ヲ 公ニ獻ス、  
公愛以玉ハス、康久ヲシテ親テ父子ヲ和シシム、是ニ親時時遊ヲナ  
ホ三島ヲ安堵セリ、其曾孫左近大夫久時ニ至テ文禄四年六月起テ知察  
院ニ移サレ、本島 十四ヶヶ谷及  
永良部白石 ハ公族征久ニ賜ヘリ、歳租五千二百六  
石四斗零、然ハアレド六年日慶長四年六月久時ニ本高ヲ復セラレ、其  
時厚久・永良部ハ官ニ任ラレ、久時ヨリ代官ヲ置テ御用ヲ應カセケル  
ニ、同十七年ヨリ府中村与左衛門始テ此ニ代官タリ 一説厚久代官ハ  
永十九年ヨリ見ユ  
トモ 其ヨリ遂ニ凶上ラレシト云ヘリ、本島ノ内ニモ四千石ハ御藏入ナ  
アリシニ、久時ノ子左近大夫忠時ニ至テ府下ニ勤仕シ、慈公ノ翁主ヲ承  
シ名器ノ茶壺ヲ獻ス故寛永九年六月一巴拝領セリ、初メ信基何レノ仁  
間ニ入部シケン、時政ノ執奏トアレバ、時政ハ信基ノ二十一歳ナラレ  
シ建保二年正月七十八歳ニテ卒セリ、左アレバ建保ヨリ以前建仁三年  
龜養元祖ノ下ラレシ頃トモハ十九歳ノ時ニ当レバ其頃ハ既ニ入部アリ  
シナラン、何レニモ今茲文政丙戌迄六百有五年、歴タトシテ太社以來  
宗色ナル本島ヲ一巴領知シ家声ヲ著サルハ誠ニ本藩無双ニテ六十余  
州ニモ亦如此ハ罕ナルベシ、本島他ナシ、南海邊遠ノ孤島ニ遇有シ第  
一忠順ノ道ヲ守テ代々 公室ニ臣事ヘ世ノ亂レニモ反逆ニ与セズ、  
一忠順ノ道ヲ守テ代々 公室ニ臣事ヘ世ノ亂レニモ反逆ニ与セズ、  
族モ乱ニ乘テ掠ルユトヲ得ザレバナリ、宝ニ先君ノ古訓ニ遵ヒ治メバ  
尚百世ト云ヘトモ知ベキ所ナラズヤ、

### 龜島仁小川

按ニ小川氏十一世遠江守公季ナリ、高岡ノ海上氏文再ニ川上信濃守殿  
女子有リ、一番ノ舞ハ龜之島殿 梅嶺用水全  
字ノ親ナリ ト見ニシモ公季ナラン、信  
濃守トハ前章ノ串大野仁河上將監ト載レル忠義ノ子ニテ榮久ト見ヘ、  
海ヲ隔テテ接セシ所ナレバ縁母ニシナルヘシ、去リテ公季永正六年  
己巳二月七日ヲ以テ卒シ、物外忠公滿三下法證ナリ、今長神主トテ下  
龜島手打料ナル大徳寺ニ祀レルニ其ニ當寺時與大願主ト記シアルトナ  
シ、其子ハ伊勢守季安ト云ヘリ、姓ハ口番氏其先口野幸相宗頼ヨリ由タ  
リ、武州西小川ニ居テ小川ヲ氏ニスト云ヘリ、龜島ハ郡名ニテ薩州ニ隸  
キ上下二島アリ、上龜ノ串瀬戸ニ龜形ノ大岩アリ、里人祀テ龜島大明

神ト云ヘルニ由テ名ヲ得ルトナシ、建久八年六月ノ凶臣丁ニ龜島四十  
町 島津御  
主寄郡 渡官御領地頭千葉介内上村二十町本島頭佐道友、下村二十  
町本島頭兼師文ト見ヘタリ、千葉介ハ忠常カ玄孫胤綱ケラン、道友  
ハ東郷在道司ケラン、兼師ハ高城郡ノ内ニモ若三三十六町本郡司  
兼師丸ト見ヘ、嘉祥二年新田宮ノ社家ナル官里憲成ト云モノ新田官  
ヲ上龜ノ口村ニ祠ルトモ云ヘハ官里一族ノ姓トモニハ非ルカ詳ナ  
ラス、左アリテ此建久ヨリ二十五年此カタ承久三年六月公季カ祖小  
川太郎季能爾關東ニ屬シテ甲斐宰相範頼ヲ宅治ノ從ニ斬テ功ヲタテ本  
島ニ封セラレ、其子小太郎季直カ時キ此ニ入部シ、龜島城ヲ築テ代々  
地頭ヲ以テ居城ナリ、今其遺墟トテ早村ノ場園ニ名ヲ伝フトゾ、文保  
元年七月御家人交名ノ列ニ龜島小川小太郎武光トモ見ユ、同年同月十四日  
又建武四年八月ノ書ニ地頭小川小太郎武光トモ見ユ、同年同月十四日  
市來院内赤崎合戦ノ時延時又三郎入道法仏カ弟彦五郎忠義越ヲ移テ  
ヘルヲバ在國司又次郎彦五郎小河小太郎忠義カ見知レルコト法仏カ言上  
狀ニ見ヘタリ、其ヨリ大正ノ頃迄ハ龜島段下日記等ニモ出タルニ文保  
中季安ノ子小川越前守 山勢トモ  
アリ、 忠季カ時ニ至テ封ヲ高橋ニ徙サレ歳租  
五百石 原作  
千斛 食メリ、其ヨリ子孫彼地ト裁微セシトナシ、然ルニ龜島  
ハ其時キ 公領ニ召上ラン地頭トテモ無カリケルニ、慶長十六年頃ヨ  
リ本州伊賀守總政ヲ本島地頭ニ仰付置ン、又元和五年四月命シテ移地  
頭ニ遷タル、是親政カ律儀老功ノ稱ヲ還ハレテノ事ニテ 公案ヨリ此  
ニ地頭ヲ置レン始メト云ヘリ、横川酒匂平右衛門景親カ自記ニ云、慶  
長三年戊戌ノ年薩州龜島ヲ領セラレシ小川藤八郎致於高麗無奉公有ケ  
ルトテ田有施ニ屈居セラレテ切腹也、従夫酒匂平右衛門景信ト岩崎出  
羽守直人ニ龜島地頭代官ヲ被仰付、十一ヶ年致勤仕モノ也、其時節肥  
後ノ區主加藤三計頭高隱ニテ御器恨有トテ藤原ノ人ヲ仕玉下難説止ム  
コトナシ、折節龜島ノ監々余多人賣ニ皆被ハ被ハ玉也、然如ニ  
義弘様ヨリ直命ヲ蒙ル肥後諸日ノ島ニテアル間、別テ人念奉公申セト  
ノ御意也、其後龜島ハ肥後高御宗形方ニ遷セラレ後替セリ、其時地頭  
ヲ六田甲斐殿ニ給セ玉フ也、比ニ肥ノ八慶長十二年ヨリ親成地頭スル  
マ、又小川喜兵衛季實狀云、高麗歸陣ノ頃科ニヨテ出右施ノ高橋

ニ變易ラレシトモ伝ヘタレトモ左ニ非ス、中務代ニ世傳藤八ト自人荒  
き人ニテ殊ニ伊集院幸胤内儀ノ妹御ニテ諸事世評惡ニ付、高橋ニ干石  
被下召移サレ、藤八相果中務死去ノ跡無之斯レトス、其後有馬次右衛  
門先祖長次郎養子高五百石被下、漸々衰微ストアリ、伊勢内記貞朝カ  
妻ハ小川中務大輔有季女ニテ其二男長次郎ヲ養ニシタルニ有馬兵波守  
重頼ノ養子ト為ル故、貞朝三男ヲ有季ノ後ニ継ガテ小川高長衛尉清下  
云ヘル系ニ見ヘタリ、

山東七伊東次和守祐義同六郎祐國

按ニ祐義ハ伊東信濃守祐光カ八世孫ニテ大和守祐立ノ子也、祐光テ六  
年ヲ以テ生レ此甲午ハ六十六歳ノ時ニ當レリ、文明十七年乙巳四月二  
十八日年七十八歳ニテ卒シ、總昌院殿源徳本公ト法諡セリ、祐國ハ其  
子ニテ后ハ左衛門尉ト云ヘリ、文安五年ニ生レ亦比甲午ハ二十七歳ニ  
當レリ、寛正六年二月、節山公祐國ノ御婦君ヲ御夫人ニ娶ラセラレ、  
同七年二月薨白、公祐國ト稱シニ会シ俱ニ大退物ヲ譽セラレシ事トモ  
アリキ、文明十七年六月島津久遠ヲ援ケテ、日寇公ニ逐テ新野忠統ヲ  
伐ケレバ、公北歸讃州敏久ヲシテ兵ヲ帥ヒテ此ヲ敗リ、二百余級ヲ  
斬テ忠統ヲ救ハシム、時キ二十一日庚子祐國モ三十八歳ニテ申遊快肥  
ニ陣歿セリ、光原寺殿榮山欲公ト法諡セリ、山原ハ日州ノ内ニテ霧島  
出ヨリ東ニ方レル郡郷ノ總名ニテ或ハ此ヲ京日向トモ云ヘルトナシ、  
伊東氏ノ先ハ藤茂ヨリ出テ次郎祐義ノ孫大和守祐時、頼朝公ニ事ハ男  
數人アリ、其第四子出島七郎左衛門尉祐成ハ第七子門出九郎左衛門  
祐景等日州ニ業ヲ食ミ各因テ氏ニシ、第六子八郎左衛門祐光ト云アリ  
此レ日州今ノ伊東氏別荘ト見ヘタリ、其曾孫六郎左衛門祐時ト建武  
四年四月十四日山治部大輔同卿九州軍奉行トシテ日州移佐ニ下向セ  
シ時キ彼ト同ク下レルトナシ、左アリテ五年己酉四年四月二十二日  
ノ書ニ戸沢豊前太郎頼時ニ日向國垣頭職付東藤内左衛門祐忠跡ヲ承  
セラレシトカ見ヘタルミアリ、伊東譜ニ此名ヲ見アタラス、祐時ノ子  
大和守祐重ト云建武四年ニ生レ貞和五年行年十三歳夜又丸ト云カシ頃  
日向國ニ下着ト載セ、祐時ガ孫ニハ貞和五年ヨリ十年以後ナル延文三  
年宮方ヨリ肥州石塚ニ下レル事ハ見ヘレト日向ニ下リシコトハ無シ、

然アルニ伊東ノ口臣菅原氏カ古年代記ニモ伊東城御下向ノ事建武四年  
ト申候方モ候、又貞和年中ト申候人ニ御座候、建武之頃若祐持御下向  
候テ貞和ニハ祐重様御下向ニテ候カ後口ニ可然日記ニテ書寫候ハン事  
尤候トアレバ彼方ニテシラダカナラザル事ニヤ、斯テ祐重孫ハ祐立ニ  
テ曾孫ハ則此祐重ナリ、祐時ガ時ニ至テニ持兼綱ガ孫ト為テ千余町ヲ  
併セ、其女ハ我カ、節山公ニ妻ハシ被比下方ヲ得テ日州ノ國人佐土  
原・三宅・宮岡・平田等ノ十二族ヲ平ケ此甲午ノ頃ハ移佐・泡尻・曾  
井・宮崎・清武・田野・山之城・木之場・阿原・本城・都於郡・岡  
宮・財部・竹茶・八代・平賀・堤見・比知屋・門川・新田・田島ヲ併  
領シ、龍津・野村・垂水・落合・吉田ノ五家ヲ臣相ニスト下章ニ出タ  
リ、祐國ノ孫修型大夫義祐ニ至リ、肝屬・菱刈・洞見等ニ党シ、屢寇  
ヲ本藩ニ為シ、幾タヒモ和ヲ失ヒ、遂ニ天正五年十二月十一日居城佐  
土原ヲ委テ豊後ニ出奔シ、日向添ケ、公領ト為リ、公子家久佐土原ニ  
封セラレ、其外ノ馳城ニ垣頭領ニヲ移シテ續成ラシケルニ伊東ノ  
老臣長谷部解出左衛門ガ智略ニテ大友義銀ヲ頼合メ同六年十一月俱ニ  
大軍ヲ將ヒ來テ新納院高城ヲ攻圍メ却テ耳川ニ敗績シ是非ナク義祐モ  
豊後ニ寄公タリ、然ルニ同十五年、大關四征ノ時義祐ノ弟民部大輔祐  
兵復タ紙詔ニモセラレ、今ノ伊東侯此セリ、

佐原原

按ニ伊東祐義ノ弟ニ佐土原讚岐守祐賢又同ク經ニ佐土原豊前守祐成、  
或ハ文明記伊東ノ列傳ニ佐土原六郎次郎テフモ見ヘレバ此等ノ間ナル  
ベシ、佐土原ハ日州ノ地名ニテ建久八年因テ下向湯郡内ニ佐土原十五  
町、又柏杵郡内ニ田島庄九十町又那珂郡内ニ田島被四町ト見ヘ、此  
甲午ノ頃迄ハ佐土原氏佐土原ヲ領知シ、田島ハ伊東氏ノ持城タル事前  
段ニ云ヘルガ如シ、祐賢ノ曾祖七郎左衛門祐朝ニ見エ、ヨリ祖祐重曾  
氏ヲ出島ト号スルニ抛レバ何レノ田島ヲモ領シタルナラン、斯テ父祐  
孝ヨリ佐土原ノ氏ニヤシト見ヘレバ見湯郡ノ佐土原ニ移テノ事ナルベ  
シ、其ヨリ文明十三年十一月五日ニ伊東祐國佐土原ヲ知行ス、見ヘレバ  
此時伊東欲ト為リテ以テ其孫義祐ニ至リ、天正五年十二月佐土原ヲ没  
落シ、公領ト為リ、公子家久比ニ討ケラレタリ、又觀應一年二月尊氏

ヨリ横山元祖資久ヲ料院地頭職ニ補セラレ、其年ノ九月伊地知兼正  
季隨 勘兵衛公ノ御名代ニ令曠ニ戦死シ 道鑑公ヨリ辨正カ次男正貞ニ  
田島ヲ應命ノ地ニ賜ヒ、島津田島ヲ氏ニスト云ヘレバ資久ニ補セラレ  
シ料院ノ内田島庄丞頭代官職ニ補セラレ、彼祐明等ガ田島ト識別セ  
ン為ニ御養子ニ遊ハシ島津田島トハ名乗ラセ置レツラン、安國寺申状  
ニ題正カ事ヲ載セ、テヲ一人御養子ト言キシモ此ナルベシ、然ニ正貞十  
六ニテ早世シ、其後嗣ハ正貞ノ姪伊地知久安ガ次男ヲ為シ田島氏三入  
道忠忠ト云ヘレド早世跡始クハ年月モアリシナラン、久安入道ハ応永  
九年ノ撰 義夫公穆佐城ニ移マヌ時キ老名ニテ御供シヌレバ其須道忠  
主田島城ニ移居ツラン、伊東田島ノ初孝ガ氏ヲ佐土原ト易ヘシモ大抵  
其頃ニモ当ルカ、康応元年七月十七日大子組三田島室子丸、又志永州  
四年卯十三日都於郡ニテノ大子組伊東祐兵衛御側ニ佐土原殿ナド宍岐  
夫ガ年代記ニ採レルハ曾孫原ノ族人ナルベシ左アリテ天正十五年 大  
開西征ノ時家久ノ子豊久ヲ佐土原城下九百七十九町ニ封セラレ、諸侯  
ニ列セシニ慶長五年九月豊久薨ケ原ニ遷死ニテ、其後 幕府ヨリ台上  
ラレ始ク御番城ト為リタレトモ、同八年十月我カ公族以久ニ拝領セラ  
レ、亦諸侯ニ列セラレタリ、其ヨリ左京殿ノ時ニ至テ元禄中 公室ヨ  
リ城主ニ御懸立ノ書ニ佐土原ハ田下田島城ト云ヒ東日向ノ本城ニテ  
公室五六代ノ頃ヨリ家臣伊地知氏ヲ城代ニ差置キ、二三代工島ヲ氏ニ  
ス、子細アリテ佐土原城ト改ケル也見ヘ、又同頃ノ書ニ上田島村・  
下田島村ト那珂郡ニ見ヘ、今ノ武鑑ニモ那珂郡佐土原ト載セアルニ上  
古ノ佐土原ハ児湯郡ニ隸キ、那珂郡ニハ田島ト云アレバ所謂田島城  
ハ此内ニ築キタル城ニテ其ヘ児湯郡ノ佐土原城主移テコソ佐土原城ト  
モ政ツ、今其詳ナルヲ知ラス、重テ識者ニ訪ベシ、

土持

右之分ニ而下卷米取付候、然共此式冊表日當邸へ御写被為意、再撰方  
写方ニ茂相成、御用相立由伝承候事、



# 既刊史料名

刊行年次	史料名
三十四年	薩藩政要録
三十五年	丁丑日誌(下)
三十六年	◇ (上)
三十七年	薩摩国新州神社文書
三十八年	一向宗禁制關係史料
三十九年	薩摩国口日文書
四十年	諸家大概・職掌紀原
四十一年	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄日記
四十二年	御登道中日帳御下向・列馬制度
四十三年	明治元年戊辰戦役關係史料
四十四年	伊能忠敬の鹿兒島測量關係資料並に解説

## 鹿兒島県史料刊行委員会

(五十音順)

川 越 正 則	南 日 本 新 聞 社
芳 野 正 三	鹿兒島市立女子高等学校
北 川 鉄 三	鹿兒島女子短期大学
梶 野 利 彦	鹿兒島県教育センター
五 味 克 夫	鹿兒島大学法文学部
那 山 良 光	鹿兒島経済大学
小 西 四 郎	東京大学史料編纂所
原 川 稔 吉	鹿兒島県立岩川高等学校
竹 内 理 三	早 稲 田 大 学
原 口 虎 雄	鹿兒島大学法文学部
福 清 武 雄	南 日 本 放 送 K K
宮 下 清 郎	鹿兒島県立鶴丸高等学校
村 野 守 治	鹿兒島県立加治木高等学校
梶 原 真 真	鹿兒島大学法文学部

非  
売  
品

昭和四十六年三月三十一日

鹿児島市城山町一の一

発行所 鹿児島県立図書館

印刷所 鹿児島県教員互助会印刷部

